

大 湊 遺 跡

— 3 次 調 査 —

2 0 0 0

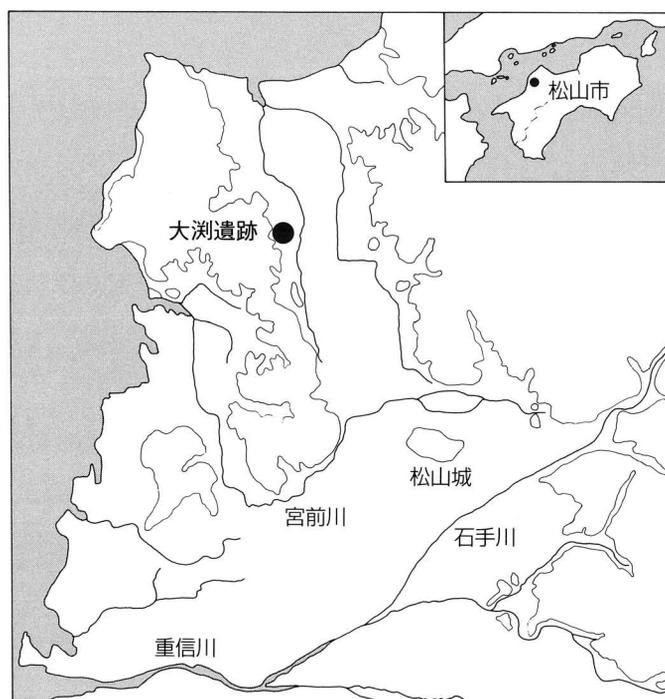
松 山 市 教 育 委 員 会

財 団 法 人 松 山 市 生 涯 学 習 振 興 財 団

埋 蔵 文 化 財 セ ン タ ー

大 湊 遺 跡

— 3 次 調 査 —



2 0 0 0

松 山 市 教 育 委 員 会

財 団 法 人 松 山 市 生 涯 学 習 振 興 財 団

埋 蔵 文 化 財 セ ン タ ー

巻頭図版 1



調査地（東より）



序

松山市の所在する松山平野は、西を瀬戸内海の斎灘・伊予灘に面し、古来より海上交通における要衝の地であったと考えられます。

特に松山平野北西部は、平野のなかでも最も早い段階に稲作が開始されたことが確認されている地域です。そこに位置する大渕遺跡では、これまでに2度の調査が実施され、縄文時代後期から晩期にかけての遺物が確認されています。

今回実施された調査で、縄文時代に関する遺物は数点を確認するにとどまりましたが、古墳時代前期及び古墳時代後期の集落跡、古代から中世にかけての自然流路および自然災害の痕跡(土石流)、中世後期の水田跡等を発見することができました。これらのことにより、当地域の古墳時代前期及び後期の集落構造、古代～中世期に発生した自然災害の実態、中世後期の水田構造をあきらかにすることができました。このことは縄文時代の様相しか判明していなかった大渕遺跡にとって大きな成果といえます。

このような成果をあげることができましたのも、関係者各位の皆様の埋蔵文化財に対する深いご理解とご協力のたまものであり、厚くお礼を申し上げます。あわせて、埋蔵文化財の保護ならびに発掘調査に対する一層のご協力とご指導を今後ともよろしくお願い申し上げます。

本書が埋蔵文化財の調査・研究の糧となり、ひいては文化財保護・教育文化の向上に寄与できることを願っています。

平成12年3月31日

財団法人 松山市生涯学習振興財団
理事長 中村時広

例 言

1. 本書は、松山市教育委員会、財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターが平成10年4月から同年9月にかけて実施した松山市太山寺町333-1に所在する大淵遺跡3次調査地の発掘調査報告書である。
2. 本書に使用した方位はすべて、国土座標を基準とした真北である。
3. 遺構は、呼称を略号で記述した。竪穴式住居址：SB、土坑：SK、溝：SD、自然流路：SR、性格不明遺構：SXである。
4. 遺構の実測は、岡崎政信、栗林和孝、保島秀幸、峯本幸代、広田美智子、矢鋪妙子が担当し、作図・製図は岡崎政信、保島秀幸、丹生谷道代、横田知子、矢野久子、多知川富美子、村上真由美が行った。
5. 遺物の実測・製図は丹生谷道代、横田知子、矢野久子、多知川富美子、村上真由美が行った。
6. 遺物の縮尺は土器を1/4、鉄器及び石鏃を1/1、その他の石器を1/2に統一した。
7. 遺構の撮影は栗田茂敏、大西朋子が行い、遺物撮影は大西朋子が行った。
8. 山陰系土器に関しては、平成12年3月9日、10日に松山市埋蔵文化財センターにて開催された山陰系土器検討会において、松本岩雄氏（鳥根県埋蔵文化財調査センター）、松井潔氏（鳥取県埋蔵文化財センター）、伊藤実氏（広島県立歴史民俗資料館）より貴重な意見をいただいた。“山陰地方の土器には金雲母が含まれない”とのことであり、記して感謝申し上げます。
9. 本書にかかわる遺物および記録類は、松山市立埋蔵文化財センターに収蔵、保管されている。
10. 本書の執筆・編集は、田城武志、栗田正芳、栗田茂敏、相原浩二の協力のもと、吉岡和哉が行った。

本文目次

第1章 はじめに

- 1. 調査に至る経緯 1
- 2. 調査・刊行組織 1

第2章 遺跡の位置と環境

- 1. 遺跡の立地 2
- 2. 周辺の歴史的環境 2

第3章 調査の概要

- 1. 調査の経過 6
- 2. 層位 7

第4章 遺構と遺物

- 1. 古墳時代前期 15
 - 自然流路 (SR 7) 土器溜まり 竪穴式住居址 (SB 1～SB 7)
 - 土坑 (SK 1・3) 溝状遺構 (SD 4～6・10～13)
 - ピット状遺構 (P62)
- 2. 古墳時代後期 78
 - 掘立柱建物 (掘立 1～6) 土坑 (SK 2) 溝状遺構 (SD 1～3・8・9)
 - 自然流路 (13・15・17) ピット状遺構 (P56)
- 3. 古代～中世 100
 - 溝状遺構 (SD 7) 自然流路 (SR 1～6・8・10～12・14・16・18～22)
 - 土坑 (SK 4～6) 水田遺構 性格不明遺構 (SX 1～5)
- 4. 第VI層出土遺物 115
- 5. トレンチ内出土遺物 119
 - T 1 内出土遺物 T 2 内出土遺物 T 3 内出土遺物 T 5 内出土遺物
- 6. 鉄器・石器 122

第5章 大淵遺跡3次調査地出土古式土師器について 127

第6章 調査の成果と課題 130

挿 図 目 次

第1図	周辺遺跡分布図（縮尺1/50,000）	3
第2図	調査地位置図（縮尺1/2,000）	7
第3図	調査区北壁・東壁土層図（縮尺1/80）	9
第4図	調査区南壁・西壁土層図（縮尺1/80）	11
第5図	遺構配置図（縮尺1/200）	13
第6図	S R 7 測量図（縮尺1/160）	17
第7図	S R 7 遺物出土状況(1)（縮尺1/40）	18
第8図	S R 7 遺物出土状況(2)（縮尺1/40）	19
第9図	S R 7 遺物出土状況(3)（縮尺1/40）	20
第10図	S R 7 遺物出土状況(4)（縮尺1/40）	21
第11図	S R 7 出土遺物実測図(1)（縮尺1/4）	23
第12図	S R 7 出土遺物実測図(2)（縮尺1/4）	24
第13図	S R 7 出土遺物実測図(3)（縮尺1/4）	25
第14図	S R 7 出土遺物実測図(4)（縮尺1/4）	27
第15図	S R 7 出土遺物実測図(5)（縮尺1/4）	29
第16図	S R 7 出土遺物実測図(6)（縮尺1/4）	31
第17図	S R 7 出土遺物実測図(7)（縮尺1/4）	33
第18図	S R 7 出土遺物実測図(8)（縮尺1/4）	35
第19図	S R 7 出土遺物実測図(9)（縮尺1/4）	37
第20図	S R 7 出土遺物実測図(10)（縮尺1/4）	38
第21図	S R 7 出土遺物実測図(11)（縮尺1/4）	41
第22図	S R 7 出土遺物実測図(12)（縮尺1/4）	43
第23図	S R 7 出土遺物実測図(13)（縮尺1/4）	45
第24図	S R 7 出土遺物実測図(14)（縮尺1/4）	47
第25図	S R 7 出土遺物実測図(15)（縮尺1/4）	49
第26図	S R 7 出土遺物実測図(16)（縮尺1/4）	51
第27図	S R 7 出土遺物実測図(17)（縮尺1/4）	53
第28図	S R 7 出土遺物実測図(18)（縮尺1/4）	55
第29図	S R 7 出土遺物実測図(19)（縮尺1/4）	57
第30図	S R 7 出土遺物実測図(20)（縮尺1/4）	59
第31図	S R 7, H 6 グリット, S R 7 側壁中出土遺物実測図（縮尺1/4）	61
第32図	土器溜まり測量図（縮尺1/40）	63
第33図	土器溜まり出土遺物実測図（縮尺1/4）	64
第34図	S B 1 測量図（縮尺1/40）	65
第35図	S B 1 出土遺物実測図（縮尺1/4）	66

第36図	S B 2 測量図 (縮尺 1/20)	68
第37図	S B 3 測量図 (縮尺 1/40)	69
第38図	S B 2, S B 3 出土遺物実測図 (縮尺 1/4)	70
第39図	S B 4 (S D10) 測量図 (縮尺 1/20)	71
第40図	S K 1 測量図 (縮尺 1/20)	73
第41図	S K 3 測量図 (縮尺 1/20)	74
第42図	S D 4 周辺遺構測量図 (縮尺 1/50)	75
第43図	S D 4, S B 4 (S D10), S K 1 出土遺物実測図 (縮尺 1/4)	76
第44図	P 62測量図及び出土遺物実測図 (縮尺 1/10・1/4)	78
第45図	掘立 1 測量図 (縮尺 1/80)	79
第46図	掘立 2 測量図 (縮尺 1/80)	80
第47図	掘立 3 測量図 (縮尺 1/80)	81
第48図	掘立 4 測量図 (縮尺 1/80)	82
第49図	掘立 5 測量図 (縮尺 1/80)	83
第50図	掘立 6 測量図 (縮尺 1/80)	84
第51図	掘立柱建物出土遺物実測図 (縮尺 1/4)	85
第52図	S K 2 測量図 (縮尺 1/20)	86
第53図	S K 2 出土遺物実測図 (縮尺 1/4)	87
第54図	調査区南東部遺構測量図 (縮尺 1/100)	88
第55図	S D 1, 2, 3 土層断面図 (縮尺 1/40)	89
第56図	S D 1, 2, 3 出土遺物実測図 (縮尺 1/4)	91
第57図	調査区南西部遺構測量図 (縮尺 1/100・1/50)	93
第58図	S D 8・9, S R 13, P 56出土遺物実測図 (縮尺 1/4)	94
第59図	S R 15測量図 (縮尺 1/100・1/50)	95
第60図	S R 15出土遺物実測図(1) (縮尺 1/4)	97
第61図	S R 15出土遺物実測図(2) (縮尺 1/4)	98
第62図	S R 15出土遺物実測図(3) (縮尺 1/4)	99
第63図	S R 5, S R 6, S R 22測量図 (縮尺 1/100・1/50)	103
第64図	S R 5, S R 6 出土遺物実測図 (縮尺 1/4)	105
第65図	S D 7, S R 2, S R 4, S R 14出土遺物実測図 (縮尺 1/4)	107
第66図	S K 4 測量図 (縮尺 1/20)	110
第67図	S K 4 出土遺物実測図 (縮尺 1/4)	111
第68図	水田測量図 (縮尺 1/100・1/40)	112
第69図	水田出土遺物実測図 (縮尺 1/4)	113
第70図	S X 出土遺物実測図 (縮尺 1/4)	115
第71図	第VI層出土遺物実測図(1) (縮尺 1/4)	117
第72図	第VI層出土遺物実測図(2) (縮尺 1/4)	119
第73図	トレンチ内出土遺物実測図 (縮尺 1/4)	121

第74図	鉄器実測図・石器実測図(1) (縮尺 1/1)	123
第75図	石器実測図(2) (縮尺 1/2)	124
第76図	石器実測図(3) (縮尺 1/2)	125

写真図版目次

巻頭図版 1	調査地 (東より)
巻頭図版 2	S R 7 出土遺物

図版 1	調査前近景 (南西より) 調査区完掘状況 (東より)
図版 2	S R 7 遺物出土状況(1) (北東より) S R 7 遺物出土状況(2) (北より)
図版 3	土器溜まり遺物出土状況 (北東より) S B 1 検出状況 (南より)
図版 4	S B 2 遺物出土状況 (北東より) S B 3 完掘状況 (西より)
図版 5	S B 4 (S D10) 完掘状況 (北西より) S K 1 遺物出土状況 (北東より)
図版 6	P 62遺物出土状況 (北東より) 掘立柱建物群完掘状況 (南より)
図版 7	S R 5 完掘状況 (北より) 水田完掘状況 (南より)
図版 8	S R 7 出土遺物(1)
図版 9	S R 7 出土遺物(2)
図版10	S R 7 出土遺物(3)
図版11	S R 7 出土遺物(4)
図版12	S R 7 出土遺物(5)
図版13	S R 7 出土遺物(6)
図版14	S R 7 出土遺物(7)
図版15	S R 7 出土遺物(8)
図版16	S R 7 出土遺物(9)
図版17	S R 7 出土遺物(10)
図版18	S R 7 出土遺物(11) (300・315)・S R 7 側壁中出土遺物 (321)
図版19	土器溜まり出土遺物 (331)・S B 1 出土遺物 (332・334~338) S B 3 出土遺物 (342・345・346)

- 図版20 S D 4 出土遺物 (347) ・ P 62出土遺物 (352) ・ S K 1 出土遺物 (350)
掘立柱建物出土遺物 (353 ・ 354 ・ 359 ・ 360) ・ S K 2 出土遺物 (362 ・ 364)
- 図版21 S D 1 出土遺物
S D 2 出土遺物
- 図版22 S D 9 出土遺物 P 56出土遺物
S R 15出土遺物 (1)
- 図版23 S R 15出土遺物 (2) (421~423) ・ S R 2 出土遺物 (450) ・ S R 4 出土遺物 (451)
S R 6 出土遺物 (434~440)
- 図版24 水田出土遺物
S X 出土遺物
- 図版25 第VI層出土遺物 (1)
- 図版26 第VI層出土遺物 (2)
トレンチ内出土遺物
- 図版27 調査地出土鉄器及び出土石器

第1章 はじめに

1. 調査に至る経緯

平成7（1995）年3月16日、松山市住宅課（現、松山市市営住宅課）より、松山市太山寺町333—1に所在する市営三光団地の老朽化に伴う建て替えにあたり、当該地における埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会文化教育課に提出された。

申請地は松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地の「16 船ヶ谷古墳群」内に所在する。

申請地の北側、約500m離れた位置には大洲遺跡及び大洲遺跡2次調査地、南側には三光遺跡、船ヶ谷遺跡等があり、松山平野のなかでも特に縄文時代後期から晩期、弥生時代前期にかけての遺跡が存在する地域である。また、周辺の丘陵上には古墳時代後期の群集墳をはじめ多くの古墳が分布することが知られている。

そのため、当該地における埋蔵文化財の有無、さらには遺跡の範囲およびその性格を確認することを目的に、松山市教育委員会は平成7年5月15日～26日、同年8月3日～7日に試掘調査を実施した。

その結果、柱穴・土坑などの遺構、および縄文土器・弥生土器・須恵器片を含む包含層の存在を確認し、そのため事前の発掘調査が必要であると判断された。よって、当該地における縄文時代から古墳時代を経て現代に至る各時代の集落構造解明を目的に、文化教育課の指導のもと埋蔵文化財センターが主体となり、平成10年4月1日より本格調査を開始した。

2. 調査・刊行組織

本調査の調査・刊行組織は以下の通りである。（平成12年3月31日現在）

松山市教育委員会	教育長	池田 尚郷
事務局	局長	團上 和敬
	次長	森脇 将
	次長	赤星 忠男
文化教育課	課長	松平 泰定
(財)松山市生涯学習振興財団	理事長	中村 時広
	事務局長	二宮 正昌
	事務局長	河口 雄三
埋蔵文化財センター	所長	河口 雄三
	次長	田所 延行
	調査係長	田城 武志
	調査主任	栗田 正芳（文化教育課職員）
	調査員	栗田 茂敏 吉岡 和哉

第2章 遺跡の位置と環境

1. 遺跡の立地

大淵遺跡3次調査地は、松山市太山寺町333-1に所在する。本遺跡は、西に瀬戸内海を望み、南東部を石鎚山系、北部を高縄山塊に囲まれた松山平野の北部に位置する。この松山平野北部地域は、西側を平野に散在する分離丘陵のひとつである太山寺山塊、東側を高縄山塊に挟まれた低地帯で、両山塊に降り注いだ雨が久万川を形成し、北流して堀江湾に至る。調査地は太山寺山塊の南東端部から東方に開けた小規模な谷の出口付近、標高7mに立地する。

2. 周辺の歴史的環境

本地域は、平安時代に成立した『和名類聚抄』にみえる古代伊予国14郡のうち和氣郡に属する。和氣郡は瀬戸内海の要衝の地にあり、古より海上交通の拠点で、伊予別君が大化前代以来存在していたことに由来する地域である。以下に旧和氣郡域に広がる遺跡のうち主要な遺跡について説明する。

旧石器時代に属する遺跡には祝谷丸山遺跡があり、楔形石器が採取されている。

縄文時代に属する遺跡としては船ヶ谷遺跡および大淵遺跡、大淵遺跡2次調査地が挙げられる。船ヶ谷遺跡では縄文時代晩期中頃～後半の沼沢的な河川が検出されており、護岸のために設けられた杭列および橋梁状遺構がそれに伴っている。さらに、河川の両岸（自然堤防上）からは、イチイガシの種子を多量に出土した貯蔵穴、および方形プランの竪穴式住居跡をそれぞれ1基ずつ検出している。大淵遺跡においては、晩期末の遺物包含層が安定した堆積状態で検出され、晩期末の土器群と共に、粘土痕の付着した土器片、結晶片岩製の磨製石庖丁、肩部に八ツ手の葉状に彩文が施された彩文壺などが出土している。両遺跡は愛媛県内の初期稲作を考えるうえで第1級の資料を供している遺跡である。また、隣接する大淵遺跡2次調査地においては縄文時代後期の土器が出土している。

弥生時代の遺跡としては、前期から後期にかけての土器が包含層より出土した三光遺跡、前期後半の土器・炭化米・リョクトウ等を内包する貯蔵穴を28基検出した鶴が峠遺跡、後期末の竪穴式住居跡を検出した金毘羅山遺跡、後期末の竪穴式住居跡を検出した谷町遺跡、後期の竪穴式住居跡および前期土器を出土した座拝坂遺跡、中期後半および後期後葉の円形周溝状遺構を検出した姫原遺跡、前期前半～中葉の溝状遺構から木製平鋏および柳葉形磨製石鏃を出土した山越遺跡2次調査地、壺棺墓内よりイモ貝製貝輪を2点出土した祝谷六丁目遺跡、平形銅剣の埋納遺構が発見された祝谷六丁場遺跡がある。また、未調査ではあるが、堀江昭和町の山際から前期前葉の壺形土器、吉藤ラドン温泉遺跡より前期後半～中期初頭の土器が出土しており注目される。

古墳時代に属する遺跡としては、集落関連遺跡として船ヶ谷遺跡2次調査地、墳墓遺跡として高月山古墳群、船ヶ谷向山古墳、船ヶ谷三ツ石古墳、鶴が峠古墳群、塚本古墳、蓮華寺舟形石棺、瀬戸風峠古墳群などがある。船ヶ谷遺跡2次調査地においては、4世紀末から6世紀前半にかけての土坑、溝状遺構および自然流路が検出されており、特にSR1からは5世紀前半の土器群が多量に出土して

周辺の歴史的環境



- | | | | | |
|-----------|----------|----------|-----------|-----------|
| ①大洲遺跡 3次 | ②高月山古墳群 | ③鶴が峠遺跡 | ④大洲遺跡 | ⑤大洲遺跡 2次 |
| ⑥三光遺跡 | ⑦船ヶ谷遺跡 | ⑧船ヶ谷向山古墳 | ⑨船ヶ谷遺跡 2次 | ⑩船ヶ谷遺跡 3次 |
| ⑪船ヶ谷三ツ石古墳 | ⑫金毘羅山遺跡 | ⑬塚本古墳 | ⑭谷町遺跡 | ⑮蓮華寺舟形石棺 |
| ⑯座拝坂遺跡 | ⑰山越遺跡 2次 | ⑱姫原遺跡 | ⑲祝谷六丁目遺跡 | ⑳祝谷六丁場遺跡 |
| ㉑祝谷丸山遺跡 | ㉒瀬戸風峠遺跡 | | | |

第1図 周辺遺跡分布図 (S = 1 : 50,000)

いる。高月山古墳群は箱式石棺を内部主体にもつ、4世紀末から5世紀初頭の古墳群である。なかでも2号墳からは布留式併行期の壺形土器や銅鏃などが出土しており注目される。船ヶ谷向山古墳は前方後円墳と推定される5世紀末の古墳で、全長不詳、後円部直径26m、くびれ部幅11.5mを測る。削平のため埋葬施設は確認されていないが、墳丘外施設として円筒埴輪列を一部検出している。出土遺物には蓋、馬、犬、鳥を象った形象埴輪が含まれる。船ヶ谷三ツ石古墳は5世紀末～6世紀初頭に比定できる円墳で、周溝が一部確認されている。特に周溝内からは、有蓋高坏を主体として須恵器がまとまって出土しており、周溝内祭祀の一端が窺える貴重な資料となっている。鶴が峠古墳群は5世紀後半から7世紀中葉にかけて築造された古墳群である。塚本古墳は7世紀の古墳群で、なかでも方墳の可能性の強い1号墳からは金銅装圭頭大刀および圭甲小札が出土している。蓮華寺所在の石棺は、現在迄のところ県内唯一の阿蘇熔結凝灰岩製舟形石棺であり、周辺に5世紀後半から6世紀前半に台頭した古墳の存在を予感させる。瀬戸風峠古墳群は、6世紀から8世紀に及ぶ時期の古墳5基・箱式石棺8基・石蓋土坑墓1基・木棺墓1基が調査された。特に、4号墳からは、玄室奥壁部分を区画し内部を木炭で敷き詰めた「木炭床」が見つかった。

古代以降に比定できる遺跡としては、古代の遺跡として船ヶ谷遺跡2次調査地や座拝坂遺跡が、中世の遺跡として船ヶ谷遺跡3次調査地および姫原遺跡などが挙げられる。船ヶ谷遺跡2次調査地においては、7世紀以降と推定される溝状遺構が数条検出されており、また座拝坂遺跡では7世紀～10世紀前半の掘立柱建物および、10世紀後半以降の土壌が確認されている。船ヶ谷遺跡3次調査地においては中世（14世紀前半）の集落遺構が検出され、数棟の掘立柱建物が溝状遺構によって区画され、掘立柱建物、井戸、柵列、土坑などが整然と配置されている様子が調査によって判明している。

[参考文献]

- 名古屋博物館 1992 『和名類聚抄』 名古屋博物館資料叢書 2
- 松山市教育委員会 1980 『松山市史料集 第1巻 考古編』
- 松山市教育委員会 1987 『松山市史料集 第2巻 考古編Ⅱ』
- 松山市史編集委員会 1992 『松山市史 第1巻 自然 原始 古代 中世』 松山市役所
- 愛媛県史編さん委員会 1984 『愛媛県史 古代Ⅱ・中世』
- 竹内理三 1981 「38 愛媛県」 『角川日本地名大辞典』 角川書店
- 下中直也 1980 「愛媛県の地名」 『日本歴史地名体系 第39巻』 平凡社
- 多田 仁 1992 「松山平野の石器文化」 『祝谷アイリ遺跡』 財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 阪本安光 1984 『松山市・船ヶ谷遺跡』 愛媛県教育委員会
- 栗田茂敏 1989 「大淵遺跡」 『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』 松山市教育委員会
- 武正良浩 1991 「大淵遺跡2次調査地」 『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅲ』 松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター
- 西尾幸則 1986 「鶴が峠遺跡」 『愛媛県史 資料編考古』 愛媛県史編さん委員会
- 松村淳・梅木謙一 1993 「座拝坂・金毘羅山・船ヶ谷三ツ石古墳」 『和気・堀江の遺跡』 松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 相原浩二・山本健一 1998 「姫原遺跡・谷町遺跡」 『和気・堀江の遺跡Ⅱ』 松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

周辺の歴史的環境

- 梅木謙一・武正良浩 1993 「山越遺跡2次調査」『山越・久万ノ台の遺跡』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 下條信行 1991 「松山平野と道後城北の弥生文化」『松山大学構内遺跡－第2次調査－』松山大学・松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター
- 宮崎泰好 1991 『祝谷六丁場遺跡』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 高尾和長 1999 『船ヶ谷遺跡－2次調査－』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 西尾幸則・宮崎泰好 1988 『高月山古墳群調査報告書』松山市教育委員会
- 池田学・宮崎泰好 1989 「船ヶ谷向山古墳」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』松山市教育委員会
- 栗田茂敏 1991 『北谷王神ノ木古墳・塚本古墳』松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター
- 木下尚子 1996 『南島貝文化の研究－貝の道の考古学』財団法人法政大学出版社
- 相原浩二 1998 『瀬戸風峠遺跡』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 加島次郎 1999 『船ヶ谷遺跡－3次調査地－』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

第3章 調査の概要

1. 調査の経過

平成10年

- 4月2日、発掘調査区「1区」(26×48m)を設定し、重機による掘削作業を開始する。試掘調査の結果を参考に掘削を進める。Ⅵ層(暗灰色粗砂)中に6世紀後半代の須恵器が包含されていることを確認し、Ⅵ層上面を検出することを目的に、重機による掘削作業を4月8日まで実施した。
- 4月7日、調査区の土層堆積状況を確認する事と、調査区内の水捌けを良くする事を兼ねて、調査区の周囲に計4本のトレンチ(T1～4)を設定、掘削した。その結果、遺構が第Ⅶ層(暗褐色粘質土)上面より掘り込まれていることを確認し、本格的に遺構の検出作業を開始する。またこの期間中、業者に委託した4級基準点およびメッシュ点の成果を用いて調査区内を5×5mグリッドで区画した。(～5月13日)
- 5月14日、「1区」遺構検出写真の撮影。その後、遺構の精査を進める。(～15日)
- 6月18日、遺構の完掘写真を撮影。(1区)SR7を除く遺構の完掘写真を終える。
- 6月22日、未だ明瞭に確認されていないSR7およびSR9(水田)の全体像をつかみ、さらに、南側に展開していくと考えられる掘立柱建物群の広がりを確認すべく、調査区の拡張作業を開始した。(～29日)また、これと併行して「1区」で検出した遺構の実測作業を本格的に始める。
- 6月30日、南側拡張部分「3区」、遺構検出作業開始。
- 7月8日、北側拡張部分「2区」、遺構検出作業開始。
- 7月14日、「3区」遺構検出状況、写真撮影。
- 7月23日、「1区」から「2区」にかけて存在していたSR9が水田であることが判明し、その検出状況を写真に収める。
- 8月3日、SR7の検出作業と併行して、その掘り下げ作業を開始する。
- 8月19日、セスナによる航空写真の撮影。「3区」遺構完掘状況の撮影。(～20日)
- 9月12日、現地説明会を開催する。
- 9月21日、「2区」遺構完掘状況を写真に収める。
- 9月28日、SR7を完掘し、測量を完了する。これにて野外調査を終了する。
- 9月28日、重機による調査区の埋め戻し作業。(～30日)

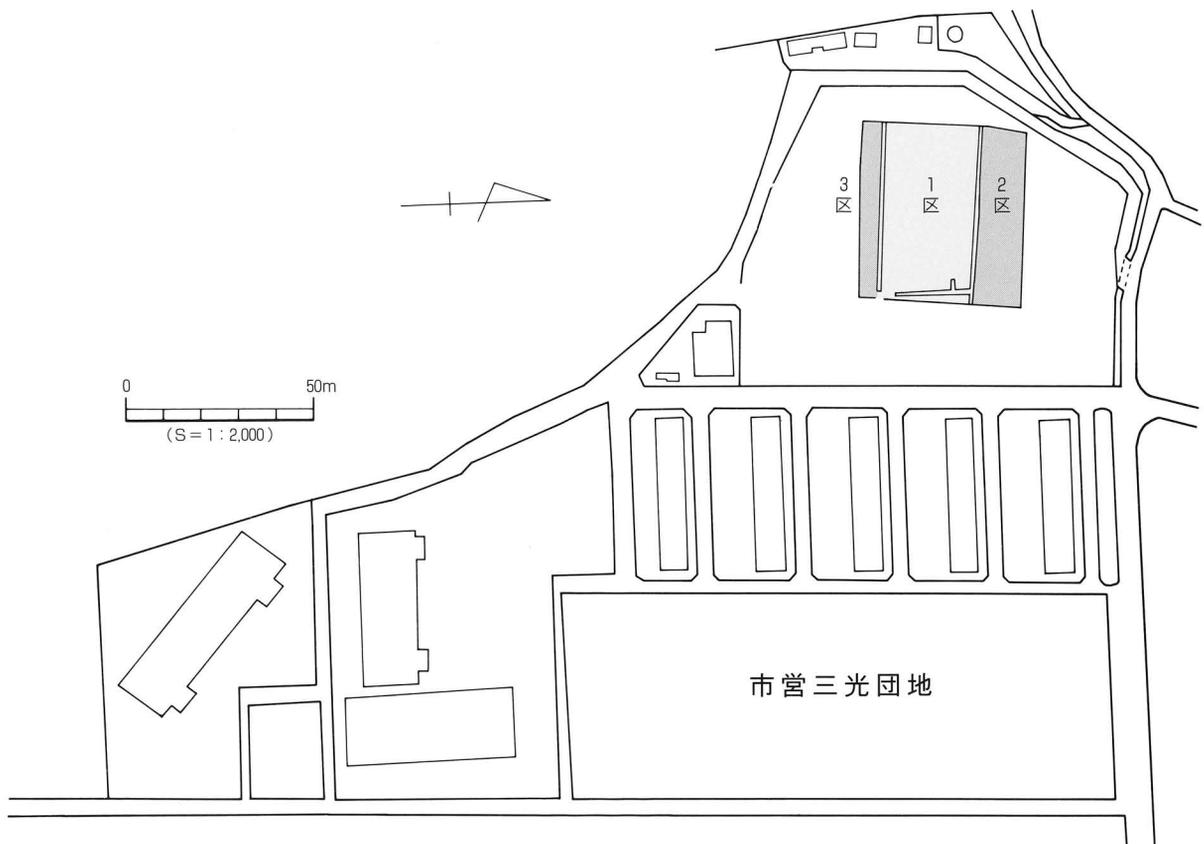
2. 層位

調査地の現況は宅地であり、造成土を用いて整地されている。標高7mを測る。

調査区内において基本層位を7層検出した。第Ⅰ層：造成土、第Ⅱ層：灰白色土（水田耕作土）、第Ⅲ層：褐色～黄灰色粗砂、第Ⅳ層：灰色シルト（褐色混）、第Ⅴ層：灰（白）色シルト、第Ⅵ層：暗灰色粗砂、Ⅶ層：褐色～暗褐色粘質粗砂である。

遺物包含層は第Ⅰ層から第Ⅶ層に及び、特に第Ⅵ層中における出土量が圧倒的に多い。出土遺物には縄文時代から中世に至る時期のものが含まれる。

遺構には、①第Ⅶ層上面にて検出した古墳時代前期初頭に属する竪穴式住居址・自然流路・溝・土坑・土器溜まり、古墳時代後期に属する掘立柱建物跡・自然流路・溝・土坑、古代～中世に属する溝および土坑 ②第Ⅶ層上面を覆い尽くすように流れ、堆積した第Ⅵ層＝古代～中世期の土石流 ③第Ⅵ層および第Ⅶ層を削平、造成した中世後期の水田がある。

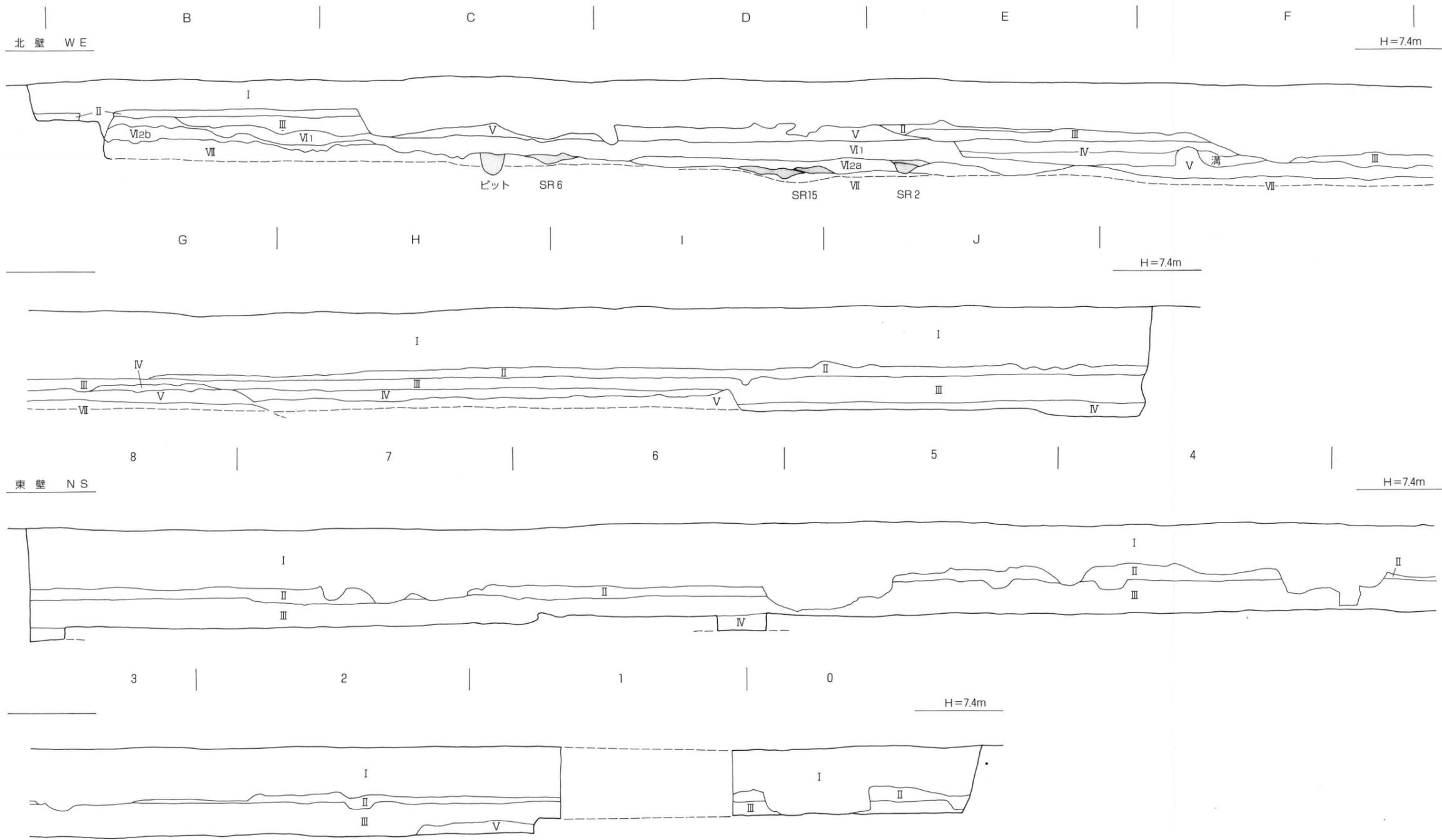


第2図 調査地位置図

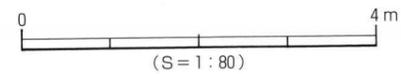
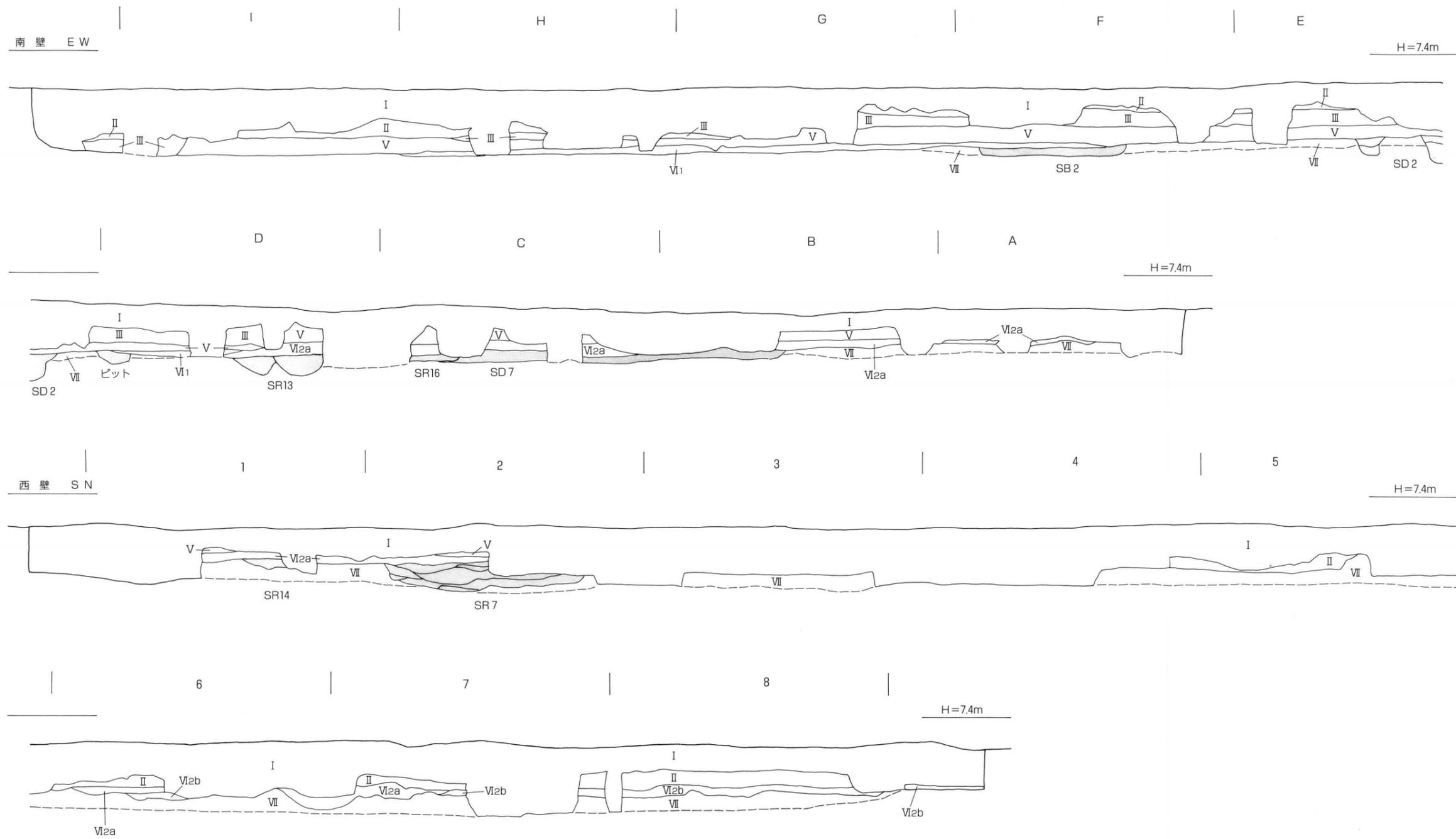
調査の概要

基本層位

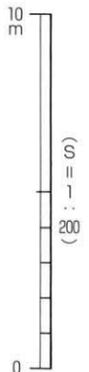
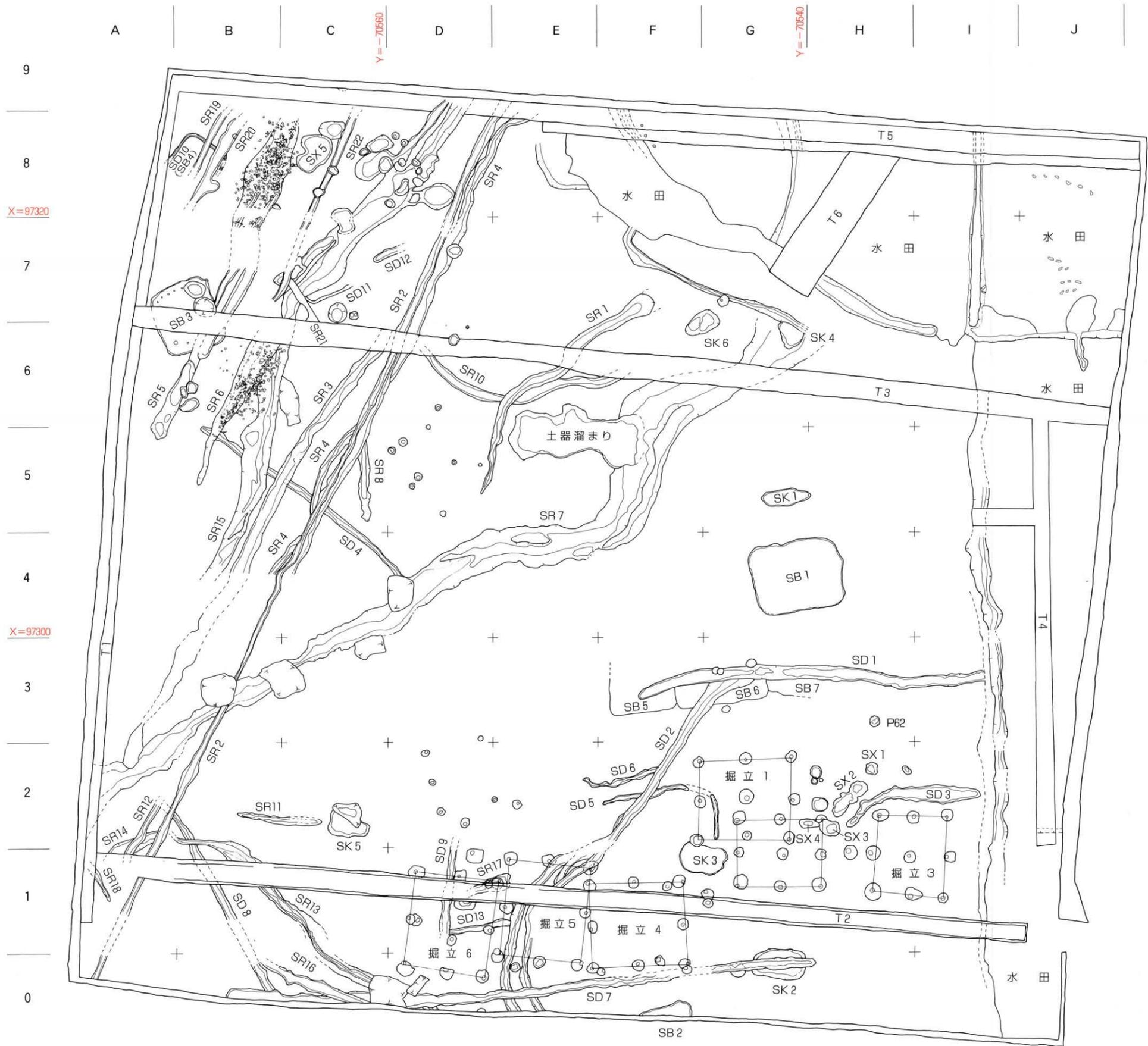
- 第 I 層 宅地造成土である。堆積厚50～110cmを測る。
- 第 II 層 灰(白)色～暗青灰色シルト。近現代水田耕作土。堆積厚2～40cm。
- 第 III 層 褐色粗砂～黄灰色粗砂。洪水堆積層で、互層堆積をなす。堆積厚2～60cm。
- 第 IV 層 灰色シルト(褐色混)。中世水田耕作土。堆積厚10～40cm。
- 第 V 層 灰(白)色シルト。中世水田床土。堆積厚8～36cm。
- 第VI1層 洪水(土石流)堆積層である。暗灰色粗砂。堆積厚2～40cm。
- 第VI2層 洪水(土石流)堆積層である。さらに大きく2層に分層可能で、上層が暗灰色粗砂＝第VI2a層、下層は黒色粘質土(褐色混)＝第VI2b層。堆積厚2～30cmを測る。
- 第 VII 層 褐色粘土～暗褐色粘質粗砂。



第3図 調査区北壁・東壁土層図



第4図 調査区南壁・西壁土層図



第5図 遺構配置図

第4章 遺構と遺物

今回の調査において、古墳時代前期から中世後期にかけての遺構を検出した。

検出した遺構には、竪穴式住居址（S B）7基、掘立柱建物跡（掘立）6棟、土坑（S K）6基、自然流路（S R）21条、溝（S D）13条、土器溜まり1基、不明遺構（S X）5基、掘立柱建物跡以外のピット44基がある。以下、時代別に説明を加える。

1. 古墳時代前期

古墳時代前期の遺構は、自然流路1条、土器溜まり1基、竪穴式住居址7基、土坑2基、溝状遺構7条、ピット1基である。

自然流路 S R 7（第6図～第10図）

この流路からは古墳時代前期初頭に比定される土器がまとまった状態で出土した。流路の規模は検出長34.3m、幅0.34～3m、深さ22～40cmを測る。調査区南西部に端を発し、蛇行しながら北東方向に流れている。断面形態は逆台形状あるいは皿状を呈する。切り合い関係から、S R 2、S R 3、土器溜まり、S K 4、水田遺構より古いと考えられる。また、土層は6層に分層可能で、1層；暗褐色硬質土、2層；灰(褐)色細砂、3層；暗灰色粗砂、4層；黒色粘質土、5層；暗灰色粗砂、6層；黒褐色粘質土である。

上述のように、本流路は6層に細分可能である。しかし、流路内に堆積する土層のほとんどが「砂」で構成されており、かなり不安定な土層であるといえる。実際に、「ほとんどの出土物が古式土師器で構成される流路にあって、数点の須恵器片が混入する」といった状況が生じている。

これは砂丘遺跡においては一般的にみられる事象であり、つまり、水などの自然的な浸食作用により須恵器片が長期間かけて徐々に砂層中に沈んでいった状況が想定できるのである。すなわち、層が比較的安定していない砂層においては遺物がある程度流動的である事実を指摘でき、その結果として、比較的安定した硬質土層をKey層とした分層方法が必要になってくることになる。

そこで本流路におけるKey層を考えるわけであるが、ほとんど砂層で構成されるなか1層および4層のみが比較的安定した土層であると言える（※6層は部分的にしか存在せず、面的な広がりを持たないので除外した）。従ってS R 7は第I層・1層、第II層・2・3・4層、第III層・5・6層といった3つの層に大きく分層するのが最も効果的な方法だと言える。以下、各層ごとに出土遺物について説明を加える。

第I層出土遺物（第11図1・2）

第I層から出土した遺物は非常に少なく、図化に耐え得る資料はわずか2点しかない。

1は須恵器の坏蓋で、残高2.75cm、復元口径15.4cmを測る。6世紀後半に属し、後世に流入したものと考える。2は土師器の広口壺である。短く直立気味の頸部から緩やかに外反する口縁部に至る。調整は摩滅が著しく不明である。胎土中に1mm前後の長石および砂粒を含み、色調は橙色を呈する。

第Ⅱ層出土遺物（第11図3～第29図300、第76図547・548）

第11図3～第14図46は壺形土器である。

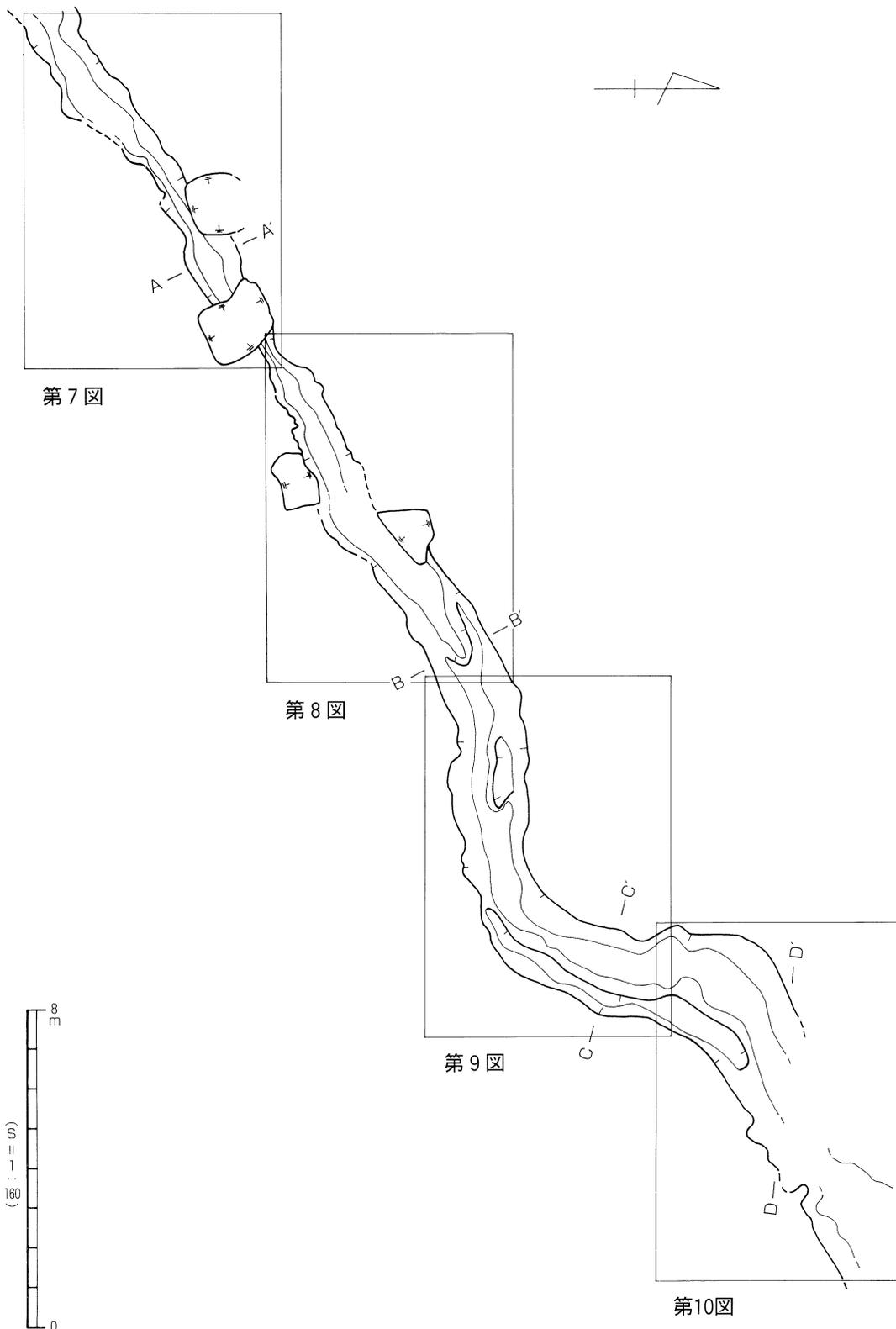
第11図4～6・12は広口壺で、緩やかに外反する短い口縁部を持つものである。6はやや球形化した胴部、12は肩部に最大径を持つ長胴の胴部を有すると考えられる。4・5は摩滅あるいはマンガン付着が原因で器面調整が確認できない。6は胴部内面をヘラ削り、12は外面調整および口縁部の内面をハケ目、胴部内面をヘラ削りによって整形している。いずれも色調が黄橙色～黄褐色を呈し、胎土中に4mm以下の石英および長石を多量に含む。第11図3は広口壺で、短く緩やかに外反する口縁端部内面に段を有するものである。胎土は密で、1mm以下の石英、長石、金雲母を含み堅固に焼成されている。色調は黄橙色～淡黄色を呈する。

第11図7は広口壺で、短く立上がる頸部から外反する口縁部を持つ。口縁端部外面に沈線を3条施すのが特徴である。胴部外面をハケ目調整の後ナデ調整、胴部内面をナデ調整、口縁部から頸部にかけてをナデ調整によって整形している。焼成は良好で淡黄色を呈し、胎土は緻密だが4mm前後の石英および金雲母を胎土中に少量含む。

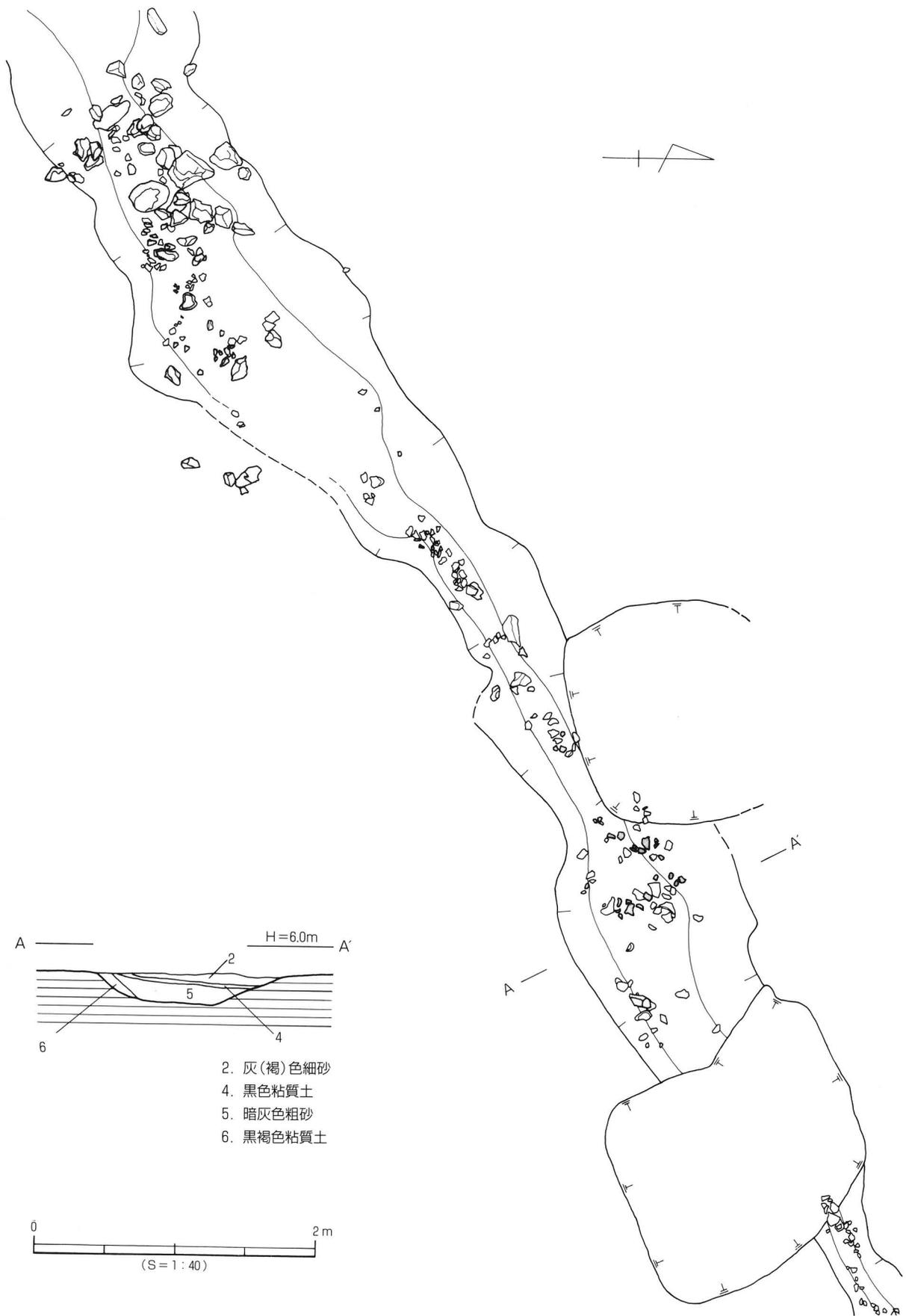
第11図8は広口壺で、直立気味の頸部から口縁部が外反して開く。口縁端部を上方に強くつまみあげ、肥厚させるものである。器面調整は頸部内面から胴部にかけては摩滅のため不明であるが、口縁部内面から胴部外面までナデ調整によって丁寧に仕上げられている。焼成は良好で淡黄色を呈し、胎土は緻密で3mm以下の石英、長石および金雲母を疎らに含む。

第11図9～11は直口壺である。9は口縁端部を大きく外反させるもので、11のような頸部を持つものであろう。器面調整は摩滅のため確認できなかった。色調は淡黄色を呈し、胎土は粗く2mm以下の石英、長石、金雲母を多量に含む。10は口縁端部が短く外反しわずかに肥厚するものである。2×4cm程度の小片であるが、焼成は良好、胎土は緻密で、器面調整は内外面とも丁寧にナデ調整が施される。色調は淡黄色～黄灰色を呈する。11は直口壺の頸部片で、胴部との境に断面三角形の貼付突帯を一条巡らすものである。胎土は粗く2mm以下の石英、長石、金雲母を多量に含む。色調は内外面とも黄橙色を呈する。

第12図13～第13図32は二重口縁壺である。第12図13～20は口縁部上段が大きく外反するものである。13は外反する口縁部外面に直径約5mmの円形浮文を配するものである。摩滅が激しく器面調整は不明であるが、焼成は良好で胎土中に2mm以下の石英を含んでいる。色調は淡黄色～黄褐色を呈する。14・16は外反する口縁部外面上に櫛描波状文を施すものである。14は波状文を上下二段に施文するもので、波状文は4本の沈線で構成されている。焼成は良好で緻密であるが、胎土中に4mm以下の石英、長石を疎らに含む。器面調整は内外面共にナデ調整が施される。色調は淡黄色を呈する。16は波状文を2段施すものであるが上下の間隔が狭く、外見上は1段の波状文が施されているように見えるものである。波状文は2～3本の沈線で構成されており計5本の沈線が確認できる。摩滅のために器面調整は不明であるが、焼成は良好、胎土は密で3mm以下の石英および長石を含む。色調は黄橙色～灰白色を呈する。15は口縁部上段の外面に羽状文を施すものである。全面が摩滅しており器面調整は確認できなかった。焼成は良好、胎土は緻密で中に1mm程度の長石を疎らに含む。色調は淡黄色を呈する。17は大きく外反する無文の口縁部を持ち、口唇部に面を有する。調整は摩滅のために不明であるが、焼成は良好で堅固、胎土は緻密である。色調は外面が橙色、内面が黄橙色を呈する。18は外反する無文の口縁部を有する。焼成は良好で堅固、胎土は緻密である。胎土中に1mm以下の石英および長石を

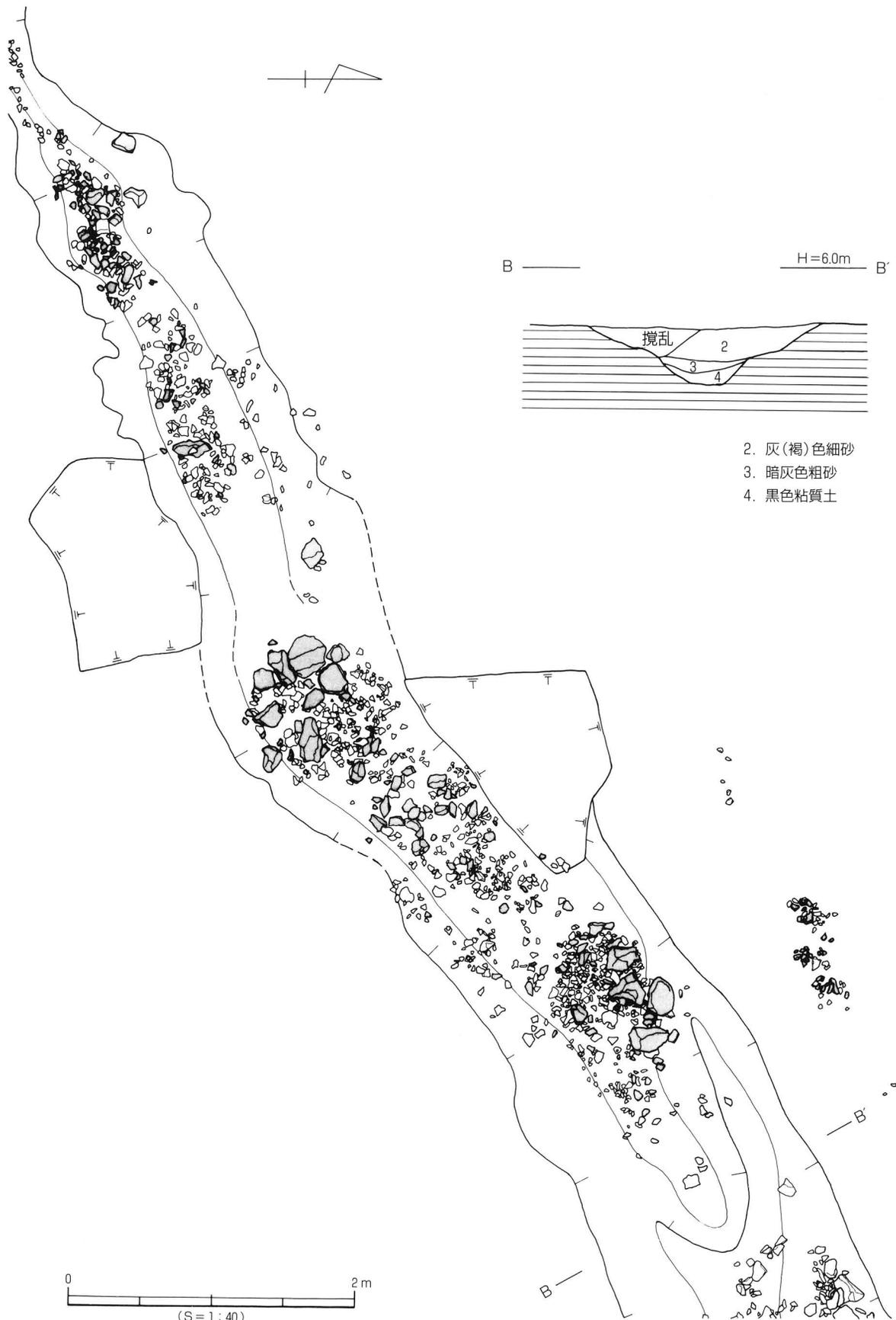


第6図 SR7測量図

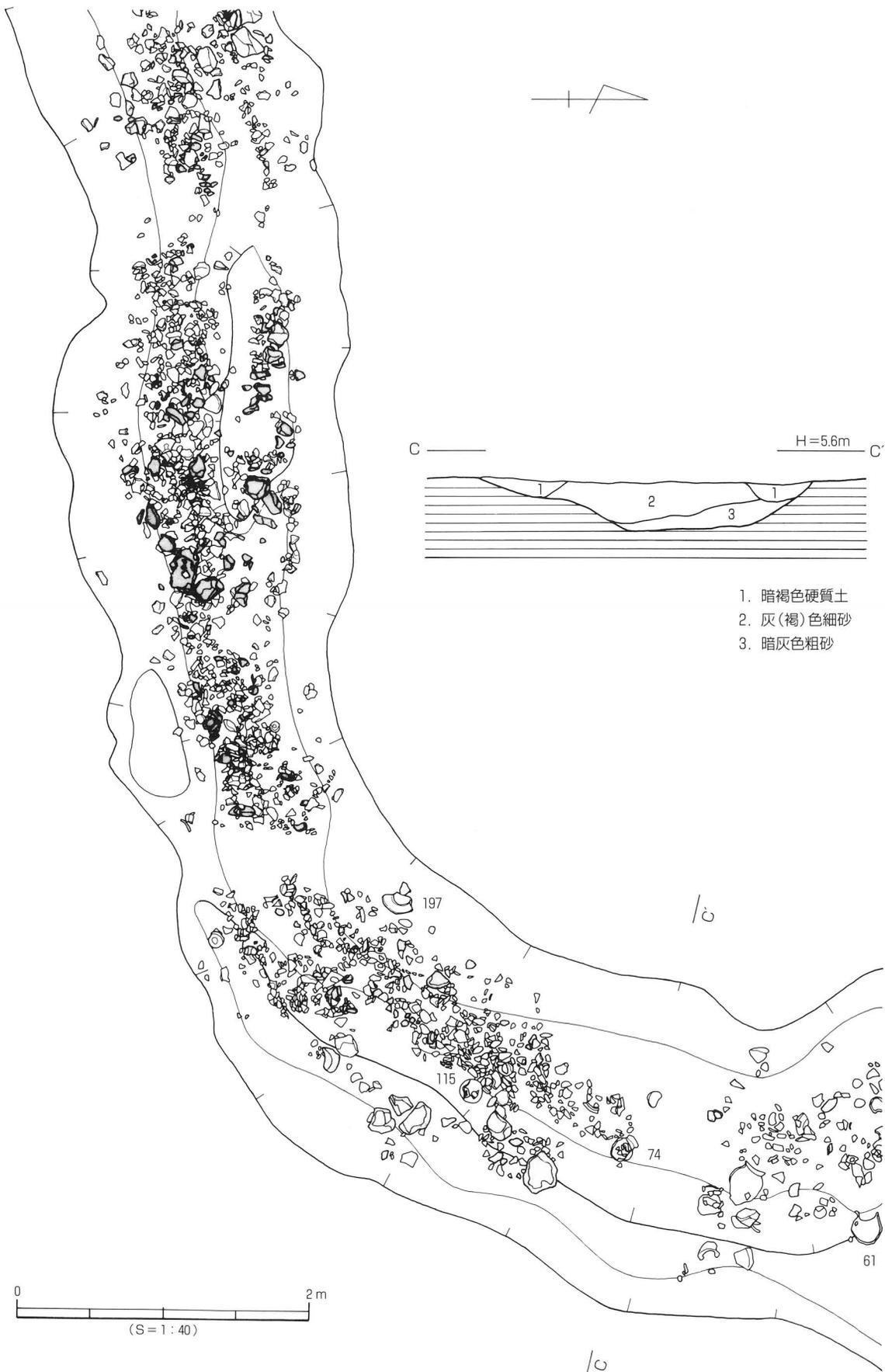


第7図 SR7 遺物出土状況(1)

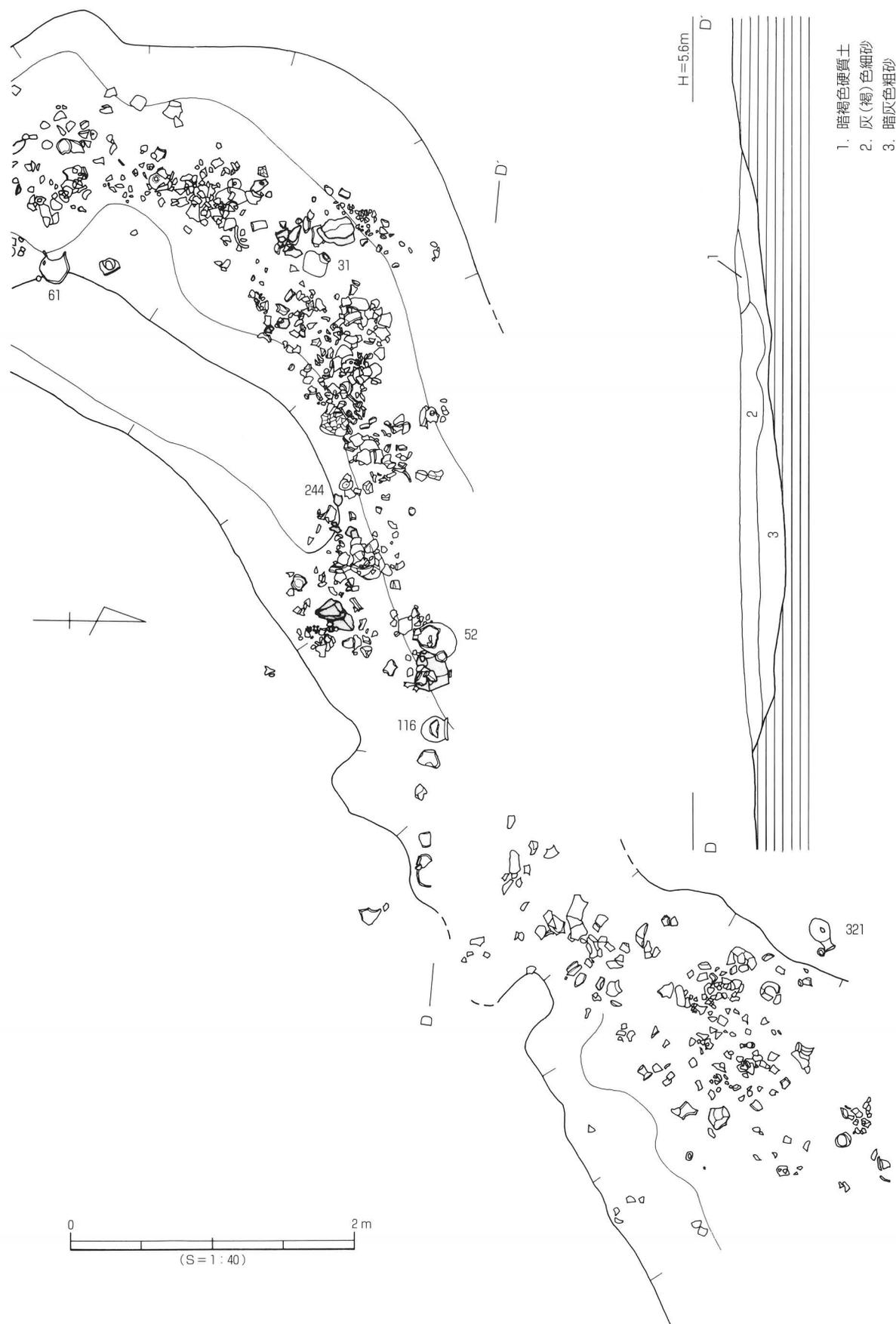
古墳時代前期



第8図 SR7遺物出土状況(2)



第9図 SR7遺物出土状況(3)



第10図 SR7 遺物出土状況(4)

疎らに含む。19は他と比べてやや口縁部上段の開きが小さく、外面に装飾を施さない。焼成は良好で胎土は密、胎土中に2 mm以下の石英を含む。色調は黄橙色～黄褐色を呈する。20は頸部片である。胴部から「く」の字に外反して立上がる頸部から水平気味に伸びる口縁部下段に繋がる。口縁部上段の外面に櫛描の波状文が施されており、おそらく16のような口縁部がつくと考えられる。器面調整は内外面とも丁寧にナデ調整が施される。焼成は良好で堅固、胎土は緻密で中に1 mm程度の石英および長石を含むに過ぎない。色調は灰白色～淡黄色を呈する。

第12図21・22は口縁部上半がやや内傾気味に立上がるものである。21は外面無文の口縁部上半が短く立上がる。口縁部下端が突出して口縁端部に平坦面を持つものである。焼成は良好であるが、胎土は粗く2 mm以下の石英および長石を多く含む。色調は外面橙色、内面黄橙色を呈する。22は外面に櫛描の波状文が施文されるものである。上下にそれぞれ2条、3条の櫛描文を近接する位置に施している。外面調整は摩滅のため不明であるが、内面はハケ目調整を施した後ナデ調整、口唇部は内面調整の後に強いナデによって整えられている。焼成は良好、胎土は密で、胎土中には2 mm以下の石英、長石が含まれる。色調は灰白色～黄灰色を呈する。

第12図23は口縁部上半がほぼ垂直に立上がるものである。器面調整は内外面ともに丁寧なナデ調整が施されている。焼成は良好で胎土中にほとんど砂粒を含まない。色調は外面が黄橙色、内面が灰白色を呈する。

第12図24・25は二重口縁壺の口縁部下段片である。いずれも上段部分が欠損しているが、24は口縁部上段が下段先端部より伸び、その内側に半裁竹管文を施すもの、25は口縁部下段先端内側に入った位置から口縁部上段が伸び、その外側の突出部上面に半裁竹管文を施すものである。24は摩滅のため外面調整は不明であるが、内面にミガキ調整を施した痕跡を残す。焼成は良好、胎土は密で1 mm以下の石英および長石、金雲母を含有する。色調は外面が黄褐色、内面が灰黄色を呈する。25は内面をハケ目調整した後にナデ調整を施すもので、赤色顔料が所々に残存する。外面は摩滅のため不詳であるがおそらく丁寧なナデ調整を施していたと考えられる。焼成は良好、胎土は密、胎土中に5 mm以下の石英および長石を多めに含んでいる。色調は内面が明褐色および黄橙色、外面が淡黄色を呈する。

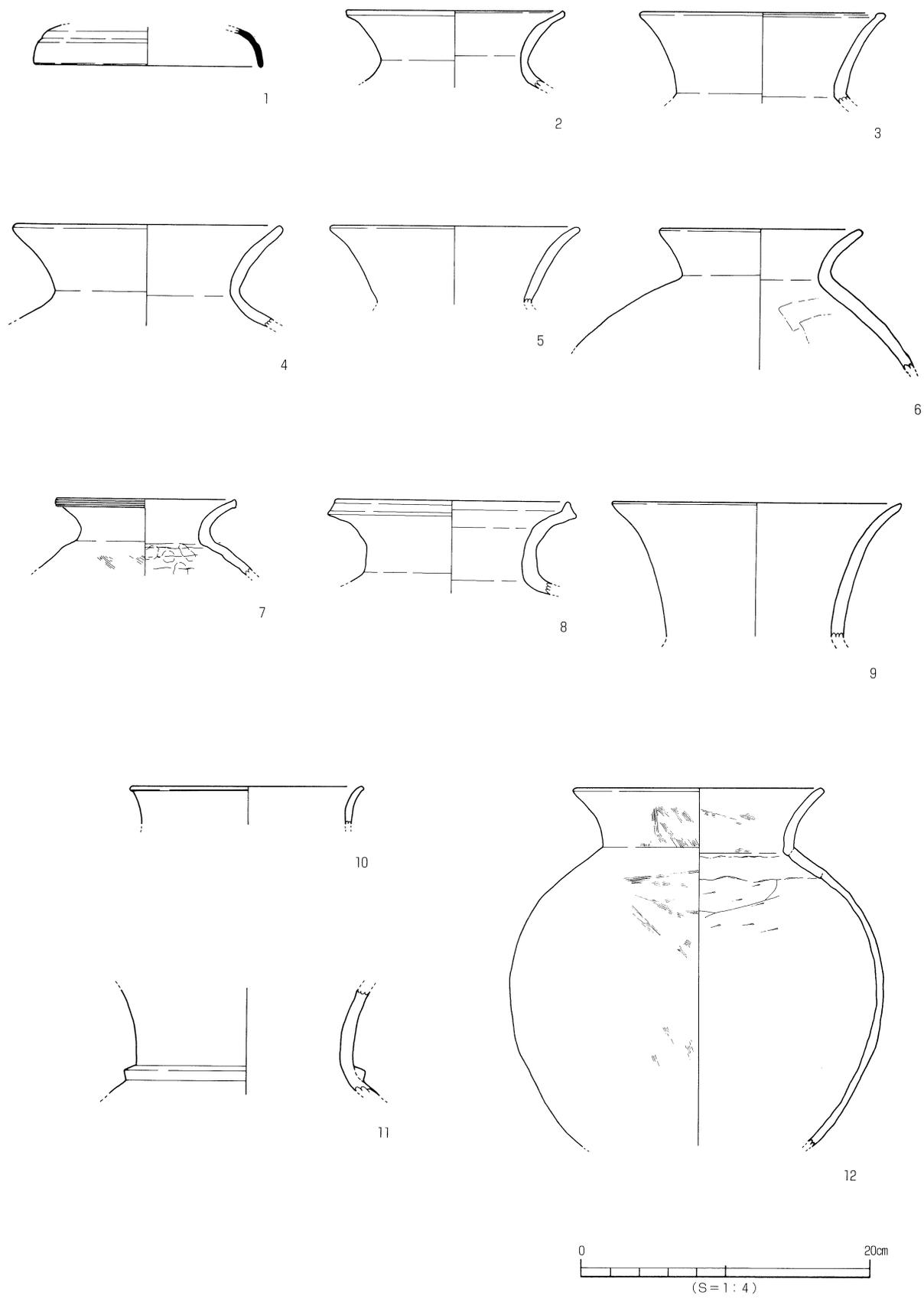
第13図26～32は山陰系の壺形土器である。26・27および29・30・32は口縁部上半が外反するものである。26・27は口縁下端部の突出が比較的シャープで、口縁部上半が大きく外反する。外面、内面共に丁寧にナデ調整を施し、頸部内面から胴部にかけて縦方向の指頭圧痕を残す。色調はそれぞれ淡黄色・淡黄色～黄褐色を呈する。焼成は良好、胎土は密で胎土中に1 mm以下の長石、石英および金雲母を包含する。

29・30・32は大型品である。口縁下端部の突出が非常に鈍く、口縁部の外反度も小さい。器面調整は30の口縁部上半に一部縦方向のハケ目痕を残すのみで、ほとんどが摩滅の為確認できない。特に32は円形あるいは楕円形状の焼成前穿孔を有するものである。3個体とも焼成は良好で、3 mm以下の石英および長石を多く含む。色調は外面が黄橙色、内面が灰白色を呈する。

28は直立する二重口縁を有するものである。口縁部下端の突出が鈍く、口縁端部に面を有する。焼成は良好、胎土は密で、胎土中に1 mm以下の長石、石英および金雲母を混入する。色調は淡黄色を呈する。

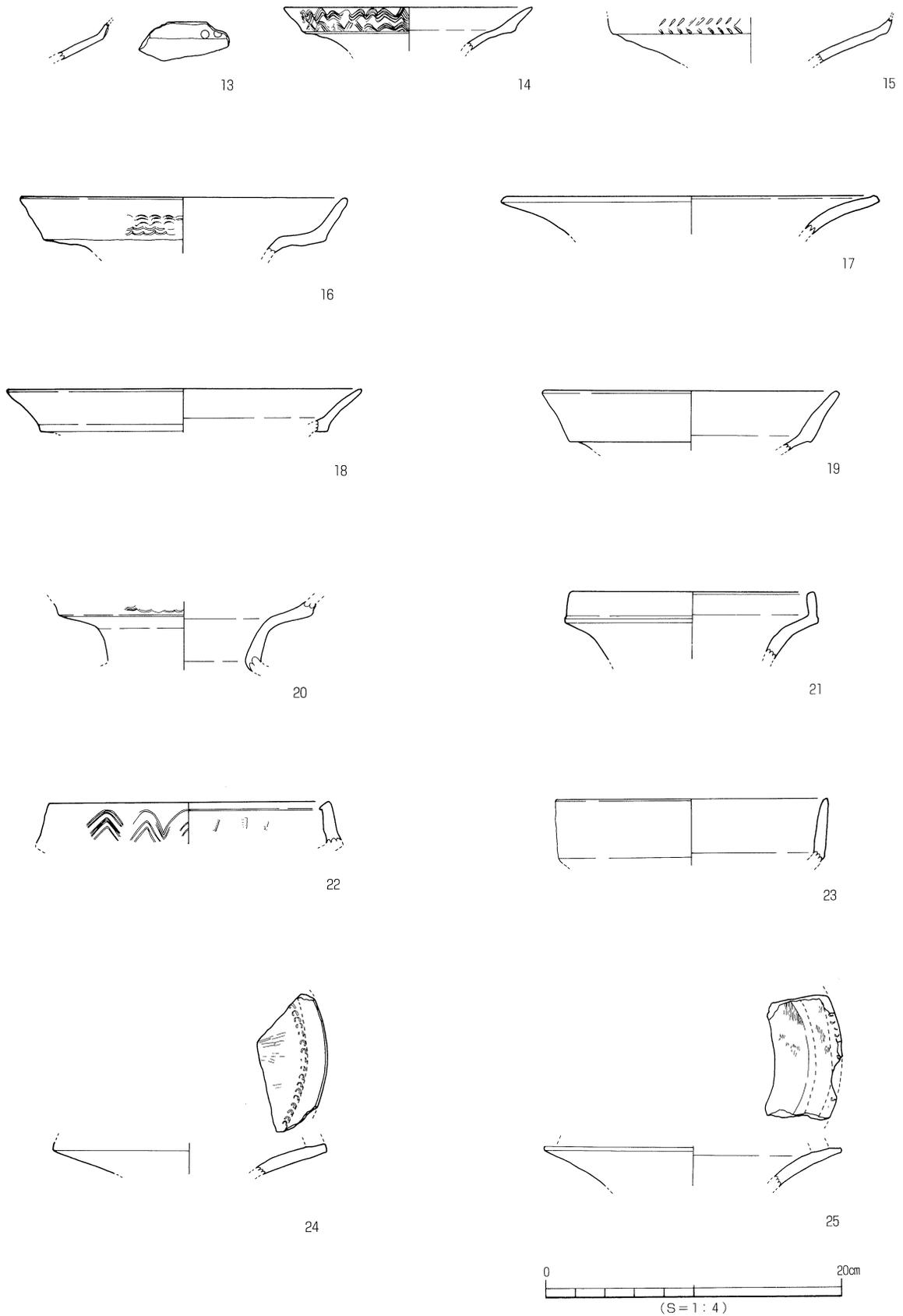
31は口縁部が二重口縁状を呈する直口壺、完形品である。口縁端部が外反し、球形に近い算盤状の胴部を有する。焼成は良好で、胎土中に5 mm以下の長石、石英および金雲母を含む。色調は外面が黄

古墳時代前期



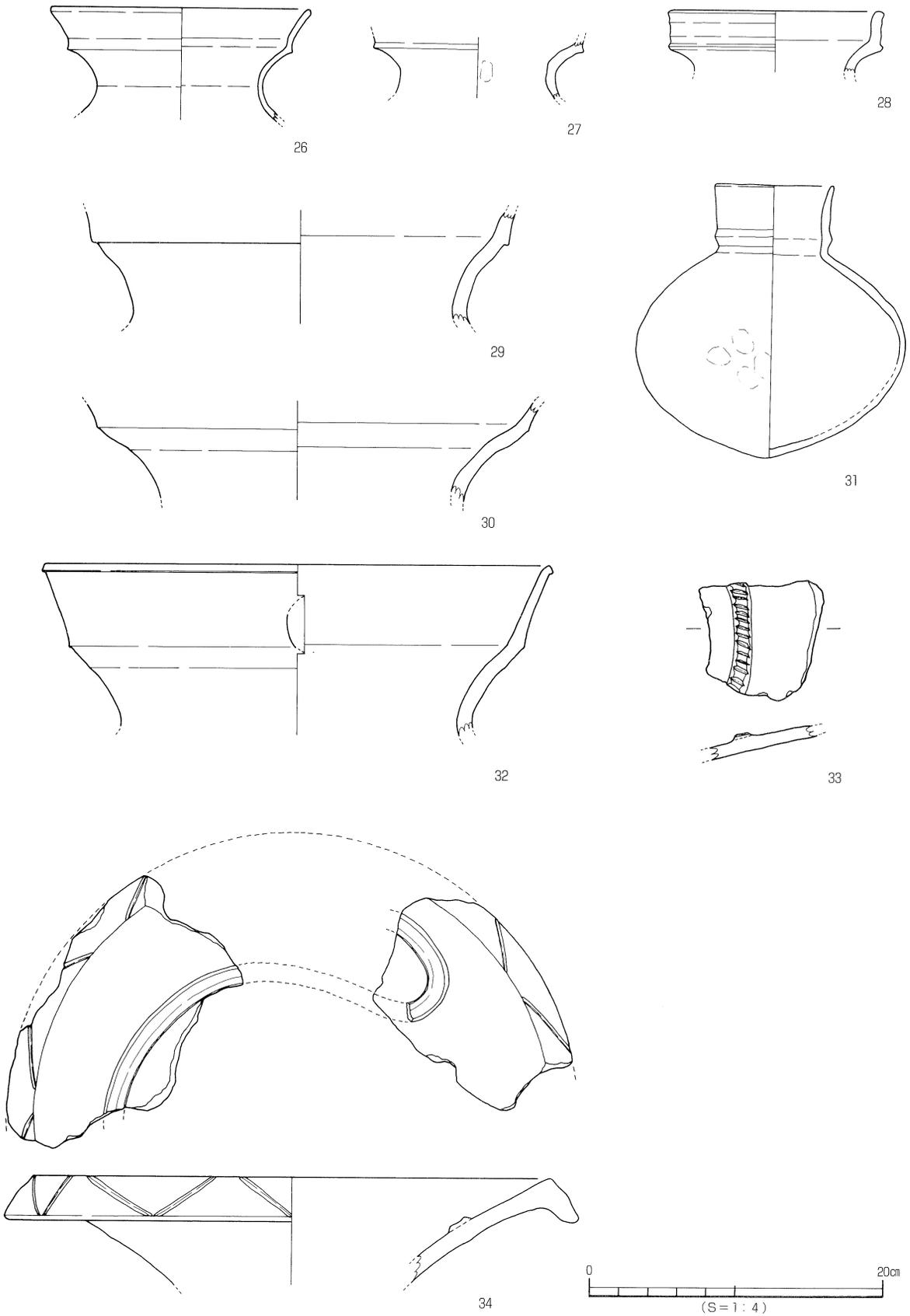
第11図 SR7出土遺物実測図(1)

遺構と遺物



第12図 S R 7 出土遺物実測図(2)

古墳時代前期



第13図 SR 7 出土遺物実測図(3)

橙色、内面が灰白色を呈する。調整は摩滅のため確認不可能である。

33・34は弥生土器である。大きく開く壺形土器の口縁部内面にミミズ腫れ状の隆帯を貼り付ける。33は隆帯に刻み目を施すものである。焼成は良好、胎土は粗く胎土中に3mm以下の石英および長石を包含する。色調は内面が黄橙色、外面が淡黄色を呈する。調整は摩滅のため不詳である。34は口縁端部を肥厚、下垂させ山形文を施すものである。焼成は良好、胎土は粗く胎土中に5mm以下の石英、長石を多く含む。器面調整は内外面ともナデ調整によって整形される。色調は橙色を呈する。

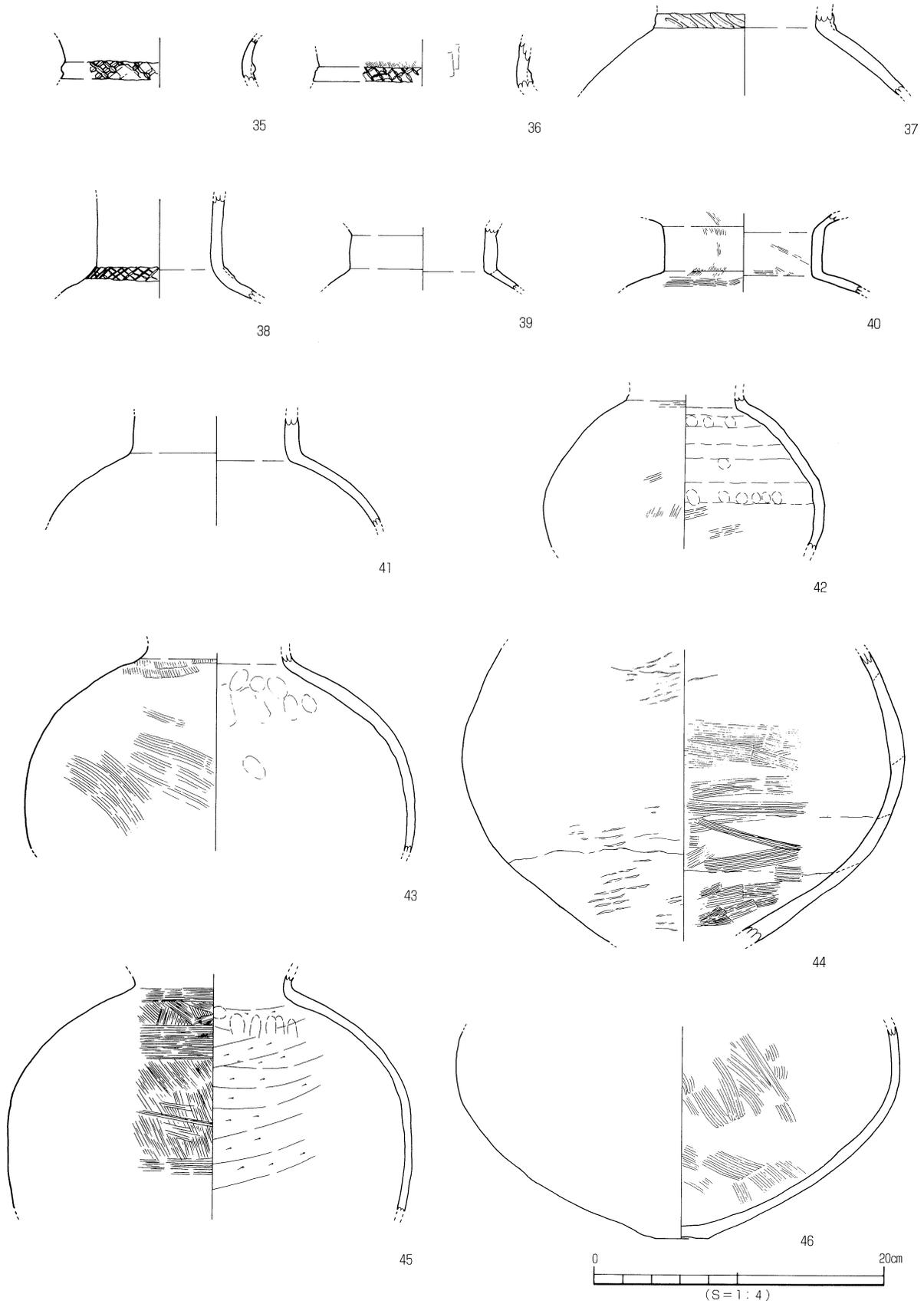
第14図35～43・45は壺形土器の頸部から胴部にかけての資料である。35～38は頸部に貼付突帯をめぐらし、突帯上に連続した格子目あるいは斜状の刻み目を施すものである。35は口縁部が外反して開くものである。胎土は密、焼成は良好であるが、胎土中に1mm前後の長石および石英を多く含む。色調は外面が黄橙色、内面が褐灰色を呈する。器面調整は不明である。36はやや直立した頸部から口縁部が緩やかに外反しながら開くものである。調整は外器面をハケ目調整、内器面をヘラ状工具によるナデ調整によって仕上げている。37は撫で肩気味の肩部より頸部が直立して立上がるものである。焼成は良好、胎土は密、胎土中に1mm前後の長石および砂粒を含む。色調は外面が灰白色、内面が黒褐色を呈する。器面調整は摩滅がひどく確認できなかった。38は長く直立する頸部から口縁部が外反しながら開く。焼成は良好、胎土は密で胎土中に1～2mm大の長石および石英を含む。色調は外面が黄褐色、内面が淡黄色および黄灰色を呈する。

39～41は頸部が直立するものである。口縁部が外方に広がり、単口縁もしくは二重口縁になると考えられる。39は頸部中央部に膨らみを有し、頸部と胴部の境界がシャープである。摩滅が酷く、調整を確認することは困難である。焼成は良好、胎土は緻密で、胎土中に1mm以下の砂粒をわずかに含む。色調は外面が黄橙色、外面が黄褐色を呈する。40は口縁部と頸部、頸部と胴部の境界がシャープなものである。頸部は丸みを帯びず直線的に立上がる。口縁部が厚みを増しながら外方に広がっており、二重口縁になる可能性が高い。焼成は良好で胎土は緻密、胎土中に1mm前後の長石および石英を含む。調整は、胴部内面を除きハケ目調整が丁寧に施されている。胴部内面は摩滅のため確認できなかった。色調は内外面とも、赤みを帯びた橙色を呈する。41は頸部が直立するものであるが、頸部と胴部の境界および、頸部内面がやや丸みを帯びて鈍いものである。焼成は良好、胎土は粗く、胎土中に1～3mm大の長石および石英を多く含む。摩滅の為、調整は確認できなかった。黄褐色を呈する。

42・43・45は壺形土器の頸部から胴部にかけての資料である。42および43は直立気味に立上がる頸部を有するものである。42は胴部中央に最大径を有し、43は胴部上位に最大径を有するものである。42の焼成は良好で胎土は緻密、胎土中に4mm以下の長石および石英を含む。器面調整は外面にハケ目調整の後ナデ調整、内面にハケ目調整あるいはナデ調整を施すものである。また、胴部内面上半に施されるナデ調整は非常に雑で、粘土紐の痕跡が顕著である。色調は淡黄色を呈する。43の焼成は良好であるが胎土は粗く、胎土中に1～3mm大の長石および石英を多く含む。外面をハケ目調整、内面を粗いヘラ削り、あるいは粗いナデ調整によって整形している。色調は外面が黄橙色、内面が灰白色～黄橙色を呈する。45は胴部との境が鈍く、外反して伸びる口縁部(頸部)を有するものである。焼成は良好、堅固で胎土は密である。淡黄色を呈し、胎土中に1～3mmの長石および石英を含む。外面は木目の細かいハケ目調整、内面はヘラ削り調整が施される。

44・46は壺形土器の胴部から底部にかけての資料である。胴部中央下位に最大径を有するもので、急激にすぼまる平底の底部を有する。内面調整は胴部中央付近から底部にかけてハケ目調整を施し、

古墳時代前期



第14図 SR 7 出土遺物実測図(4)

外面調整はタタキ成形の後ハケ目調整あるいはナデ調整を施す。44は内外面とも淡黄色を呈し、焼成は良好、胎土は緻密で胎土中に1mm前後の長石および石英を疎らに含む。46は外面が淡黄色、内面が褐灰色を呈する。焼成は良好、胎土は粗く、胎土中に1～4mm大の長石および石英を含む。

第15図47～第19図124は甕形土器である。

第15図47～50・52は口縁部が直立気味に外反して立上がるものである。47・50は外面にタタキ成形痕が顕著に残り、内面に粗い削り調整を施すものである。色調は黄橙色～黄褐色を呈する。47は焼成は良好で、胎土中に2mm前後の石英および長石を疎らに含む。50は焼成は良好、胎土は粗く胎土中に1～3mm大の長石および石英を含む。52は砲弾形の胴部、平底の底部を有するもので、口縁部約9分の8と胴部約3分の1を欠損する復元完形品である。調整は内外面共に、縦方向のハケ目調整を丁寧に施す。焼成は良好、胎土は粗く、4mm以下の長石および石英を多く包含する。色調は外面が淡黄～黄褐色、内面が黄灰色～黒褐色を呈する。また、外面に一部煤の付着が認められる。48・49に関しては摩滅のために器面調整が確認できなかった。48は口縁くびれ部内面に面を有するものである。焼成は良好、胎土は密で胎土中に1mm程度の砂粒をわずかに含む。色調は淡黄色を呈する。49は口縁部が直線的に伸びるものである。焼成は良好、胎土は密で胎土中に1～3mm大の長石および石英を含む。色調は外面が黄橙色、内面が灰白色を呈する。

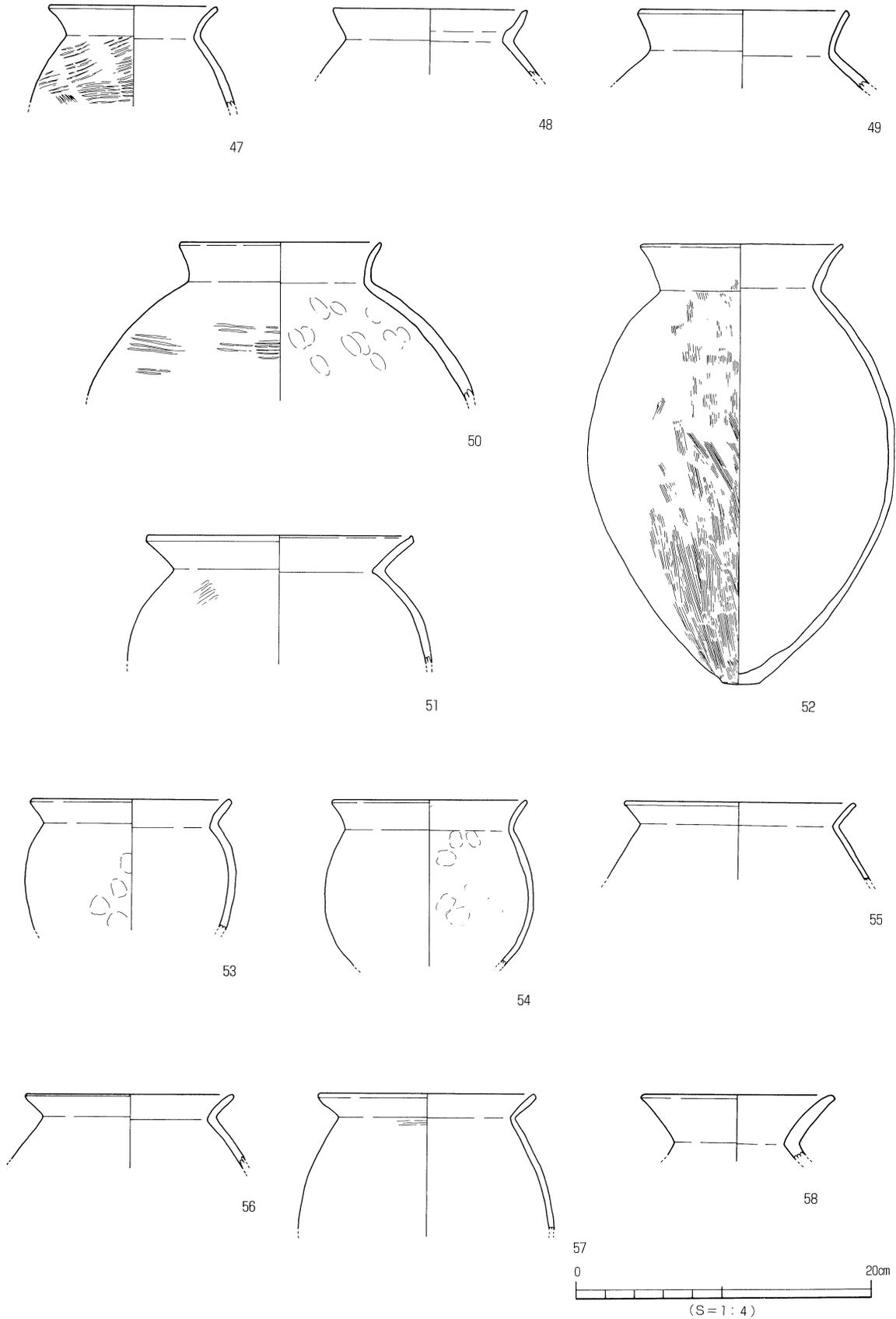
51～54は口縁部の立上がりがかきつく、口縁部最大径が胴部最大径とほとんど等しいものである。51は口縁部と胴部の境界が鋭く、球形に近い胴部を有する。また、口縁端部を内面にやや突出させるものである。調整は内器面をヘラ削り、外器面をタタキ成形によって仕上げる。焼成は良好、胎土は緻密、色調は淡黄色を呈する。53は口縁部の立上がりがかきつく、最大径が胴部中央より上位に位置する。調整は内面は摩滅により識別できないが、外面をナデ調整によって仕上げる。焼成は良好、胎土は密で、中に1mm前後の長石、石英を含んでいる。色調は外面が黒ずんだ橙色、内面が灰白色を呈する。54は口縁部と胴部の境界が緩やかなもので、最大径が胴部中央に位置する。外面調整は摩滅のため確認できないが、内面は雑なヘラ削り整形を行なった後、それを雑にナデ消している。焼成は良好、胎土は密で胎土中に2mm以下の石英および金雲母を少量含んでいる。色調は外面が橙色～黄褐色、内面が黄橙色を呈する。

55～58はやや直立した口縁部を有する長胴の甕である。摩滅のために器面調整は確認できない。55・57は焼成および胎土が同質で、焼成良好、胎土中に2mm以下の石英および長石を多く含んでいる。色調は灰白色～黄橙色を呈する。56は焼成が悪く表面剥離が著しい。胎土中に2mm大の長石および石英を疎らに含み、明褐色を呈する。58は外面が黄橙色、内面が灰白色を呈する。焼成は良好、胎土は密で胎土中に1～3mm大の長石および石英を含む。

第16図59～74は口縁部の立ち上がりがかきつく、口縁部と胴部との境界が比較的シャープなものである。概して胴部外面をハケ目調整、内面をヘラ削り調整するもので、口縁端部を肥厚させるといった傾向を有する。

59～62は頸部が狭く、口縁部の立上がりがかきつき。胴部は61のように胴部下位に最大径を持つものと、62のように胴部中央に最大径を有するものが存在する。59は摩滅が酷く詳細はわからないが、胴部内面をヘラ削り調整、口縁端部内面を突出させるものである。焼成はやや悪く、胎土は密で胎土中に1mm以下の石英を含む。黄橙色を呈する。60は胴部外面をハケ目調整、内面をヘラ削り調整し、

古墳時代前期



第15図 S R 7 出土遺物実測図(5)

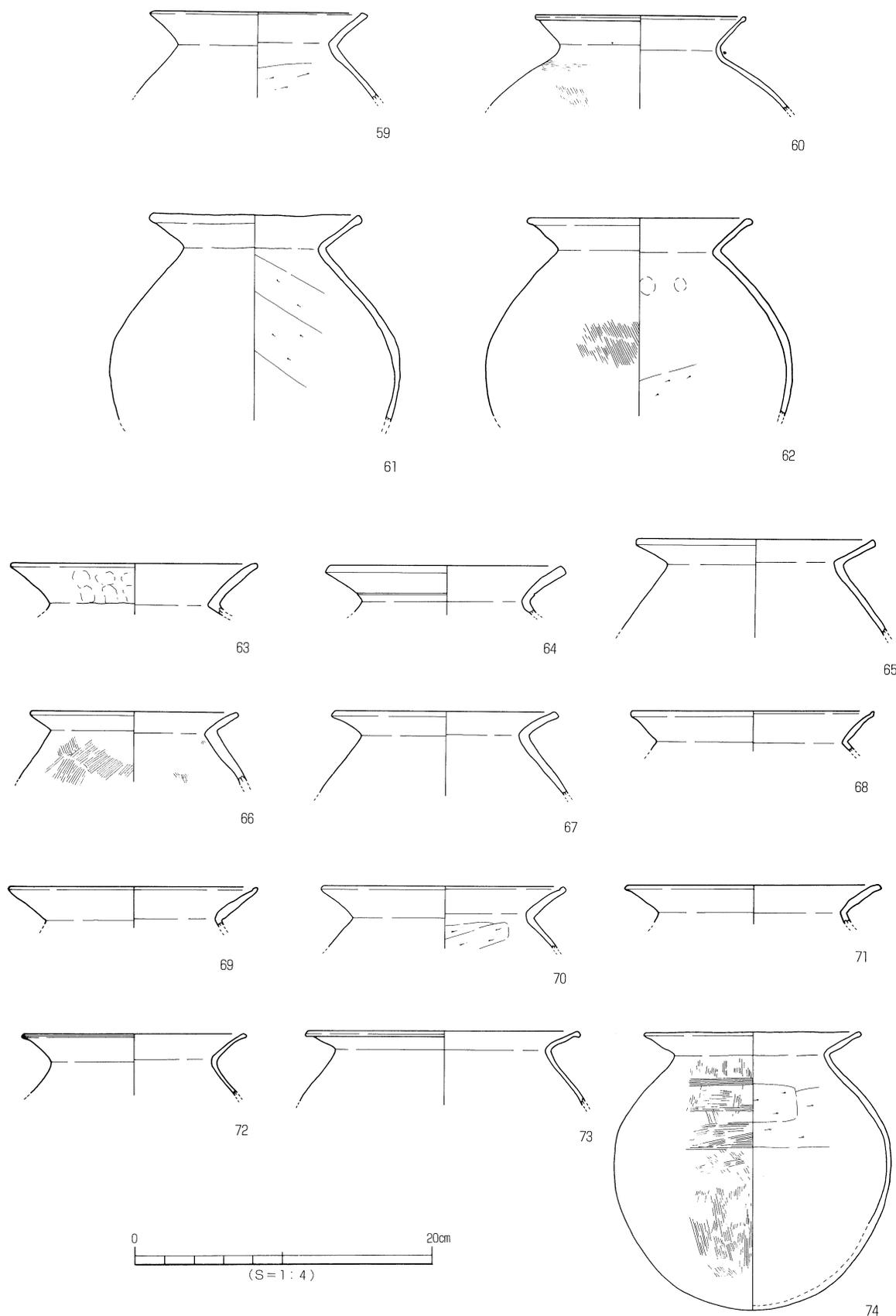
丁寧なナデ調整によって口縁端部を内外面とも肥厚させるものである。焼成は良好、胎土は緻密で、胎土中に2mm以下の長石および金雲母を若干含んでいる。色調は淡黄色を呈し、精製品である。61は胴部内面をヘラ削り調整し、ヨコナデにより口縁端部を肥厚させるものであるが摩滅のため詳細は不明である。焼成は悪く、胎土中に1mm前後の長石および石英を含む。色調は黄褐色を呈する。62は61同様、胴部外面をハケ目調整、内面をヘラ削り調整によって仕上げ、口縁端部を肥厚させるものであるが、摩滅のため詳細は不明である。焼成は悪く、胎土中には4mm以下の石英、長石および金雲母を含んでいる。色調は黄橙色～淡橙色を呈する。

63・64は口縁部が長く伸びるもので、特に63は口縁部外面を断続的にナデるもので指頭圧痕を顕著に残し、胴部内面にヘラ削りの痕跡を残す。焼成は良好、胎土は密、胎土中に3mm以下の石英および長石を含む。色調は黄橙色～淡橙色を呈する。64は口縁部外面に一条の沈線を施し、胴部内面にヘラ削りの痕跡を有する。焼成は良好、胎土は密で胎土中に1mm以下の石英、長石および金雲母を含んでいる。黄灰色を呈する。

65～74は口縁部がきつく立上がらないものである。66以外は内面ヘラ削りによって器壁を薄く仕上げ、口縁端部を肥厚させるといった特徴を有する。胴部は長胴あるいは74のような球形に近い長胴形を呈すると考えられる。65は胎土は密であるが焼きが甘い。黄橙色を呈し、胎土中に1mm以下の石英および金雲母を少量含む。66は内外面共にハケ目調整を施すもので他と比べて器壁が極端に厚い。焼成は良好、胎土は密で、中に2mm以下の石英、長石を含む。色調は外面が黄橙色、内面が淡黄色を呈する。67は焼成は良いが胎土が粗く、胎土中に2mm以下の石英、長石および金雲母を多く含む。淡黄色を呈する。68は灰白色～淡黄色を呈する。胎土は密で胎土中に1mm以下の石英および金雲母を少量含むのみである。焼成は悪く表面の剥落が激しい。69は焼成がやや悪く、明黄褐色を呈する。胎土は密で胎土中に2mm以下の石英および金雲母を少量含む。70は焼成が良好、胎土は密で胎土中に1mm以下の石英、長石および金雲母を疎らに含んでいる。外面が淡黄色～黄褐色、内面が灰白色～黄橙色を呈する。71は焼成が良好で、胎土は密で1mm以下の石英および金雲母をわずかに含む。色調は淡黄色である。72は焼成が良好で、明黄褐色～黄灰色を呈する。胎土中にほとんど砂粒を混入しない。73は焼成良好、胎土は緻密で胎土中に1mm前後の石英、長石および金雲母を疎らに含む。74は肩部外面に横方向のハケ目を特徴的に施すものである。口縁部の約1/4および体部の約1/2が欠損する復元完形品である。焼成は良好であるが胎土はやや粗く、胎土中に3mm以下の石英、長石および金雲母を多く混入する。色調は内面が暗褐色、外面が黄褐色を呈する。

第17図75～83は口縁部の立上がりが比較的きつく、口縁部と体部との境界が相対的に緩やかなものである。75以外はすべて、端部をつまみ上げ状に肥厚させる口縁部を有する。75は口縁部を上方に向かって緩やかに外反させるものである。焼成は良好、胎土は緻密で胎土中に1mm以下の石英を少量含む。浅黄橙色を呈する。76は焼成は良好、淡黄色を呈し、胎土は密で胎土中に3mm以下の長石および金雲母を若干含む。77は胎土が密である反面、焼成は甘い。淡黄色を呈し、胎土中に1mm以下の長石、石英を含む。78は焼成が悪いが、胎土は密で胎土中には2mm以下の石英が少量含まれている。黄橙色～橙色を呈する。79は焼成良好、淡黄色を呈し、胎土は緻密で胎土中に金雲母をわずかに含む。80は焼成良好で、外面が淡黄色～橙色、内面が淡黄色～黄灰色を呈する。胎土はやや粗く、1mm前後の石英、長石を多く含んでいる。81は焼成良好、胎土は密で胎土中には3mm以下の長石、石英および金雲母を疎らに含有する。色調は黄橙色～橙色を呈する。82は淡黄色～褐色を呈する。焼成は良好、胎土

古墳時代前期



第16図 S R 7 出土遺物実測図(6)

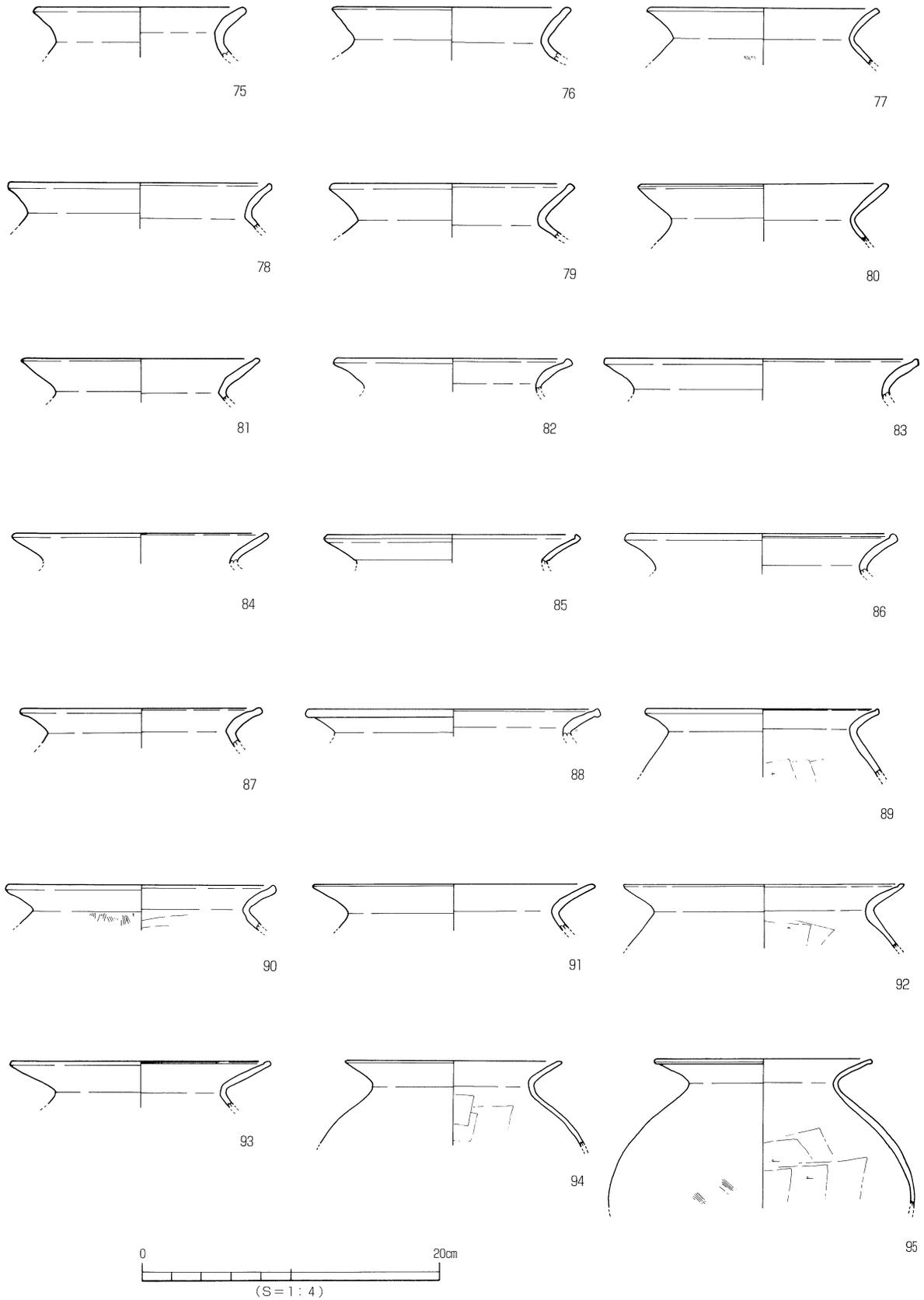
は緻密で胎土中に1mm以下の石英をわずかに混入する。83は焼成がやや甘く、黄橙色～明褐色を呈する。胎土は密で、胎土中には1mm前後の長石、石英を含む。

第17図81～95および第18図115は口縁部が強く折れ曲がり、口縁部と体部との境が丸みを帯びるものである。口縁端部をつまみ上げ状に肥厚させる。84は焼成良好、胎土が密で胎土中に3mm以下の石英、長石および金雲母を含んでいる。色調は淡黄色を呈する。85は淡黄色を呈し、胎土は緻密で胎土中に1mm以下の砂粒をわずかに含む。焼成は良好、堅固である。口縁部と体部との境界に一条の沈線を有する。86は焼成良好、胎土は緻密で胎土中に2mm以下の石英、長石をわずかに含む。淡黄色を呈する。87は胎土が緻密、胎土中に1mm以下の石英、長石および金雲母を少量含む。焼成良好で灰白色～淡黄色を呈する。88は口縁端部に面を有し、端部を内外面共に肥厚させるものである。焼成は良好、胎土は緻密で胎土中に1mm以下の砂粒をわずかに含む。灰白色～淡黄色を呈する。89は焼成は良好、胎土は緻密、胎土中に1mm前後の長石、石英を少量混入する。胴部内面にヘラ削りの痕跡が残る。色調は灰白色を呈する。90は焼成良好、胎土は緻密、胎土中に1mm以下の石英を少量含む。胴部外面をハケ目調整、内面をヘラ削り調整によって整形する。色調は内外面とも淡黄色を呈する。91は焼成がやや悪く、胎土は密、胎土中に2mm前後の長石、石英を少量含んでいる。色調は外面が黄橙色、内面が橙色を呈する。92は焼成良好、胎土は密、胎土中に1mm前後の長石、石英を疎らに含む。器面調整は外面をナデ調整、胴部内面をヘラ削り調整する。内外面共に淡黄色を呈する。93は焼成が甘く、胎土もやや粗い。胎土中に2mm以下の石英、長石および金雲母を混入する。色調は外面が橙色、内面が黄橙色を呈する。第18図115は口縁部の約1/5をわずかに欠損するもので復元完形品である。器面調整は大部分が摩滅の為確認できないが、肩部外面に横方向のハケ目調整、内面にヘラ削り調整を施している。胎土は密で、胎土中に1～2mmの長石、石英を含有する。焼成はやや甘く、色調は淡黄色～黄橙色を呈する。

94・95は他と比べて頸部が狭く、一見壺形土器と区別のつきづらいものである。プロポーシオンは第16図59～62とほとんど同じであるが、口縁端部の肥厚が薄く、口縁部と体部との稜が明瞭でないなど固有の特徴を有する。胴部外面はハケ目調整、内面はヘラ削り調整によって整形される。94は焼成良好、胎土は密で1mm前後の長石、石英および金雲母を含んでいる。色調は淡黄色を呈する。95は焼成良好、胎土がやや粗く、胎土中に1mm前後の長石、石英および金雲母を多く混入する。外面が淡黄色～黄橙色、内面が黄色～黄褐色を呈する。

第18図96～110および116は口縁部が強く折れ曲がり、口縁部と体部との境が丸みを帯びるもので、口縁端部をつまみ上げ状に肥厚させないものである。96は淡黄色～黄橙色を呈する。焼成は良好、胎土は密で胎土中に1mm以下の長石を含む。97は口縁端部に面を有するものである。焼成良好、胎土は緻密、胎土中に2mm以下の長石を少量混入する。色調は内外面共に淡黄色を呈する。98は焼成が悪く、胎土もやや粗い。胎土中に2mm以下の石英を多く包含する。胴部内面にヘラ削り調整を施した痕跡を残す。色調は内面が灰白色、外面が淡黄色～黄橙色を呈する。99は焼成が不良で胎土がやや粗く、胎土中に3mm以下の石英を混入する。色調は外面が黄橙色～黄褐色、内面が淡黄色を呈する。100は焼成は良く、胎土は緻密で胎土中に1mm以下の石英を少量含む。淡黄色を呈し、口縁端部に面を有する。101は焼成良好、胎土は緻密、胎土中に1mm前後の長石を若干混入する。胴部内面をヘラ削り整形するものである。色調は灰白色～淡黄色を呈する。102は焼成良好、胎土は緻密で堅固である。胎土中に1mm以下の長石、石英および金雲母を混入し、内外面共に赤橙色を呈する。口縁端部に面を有する

古墳時代前期



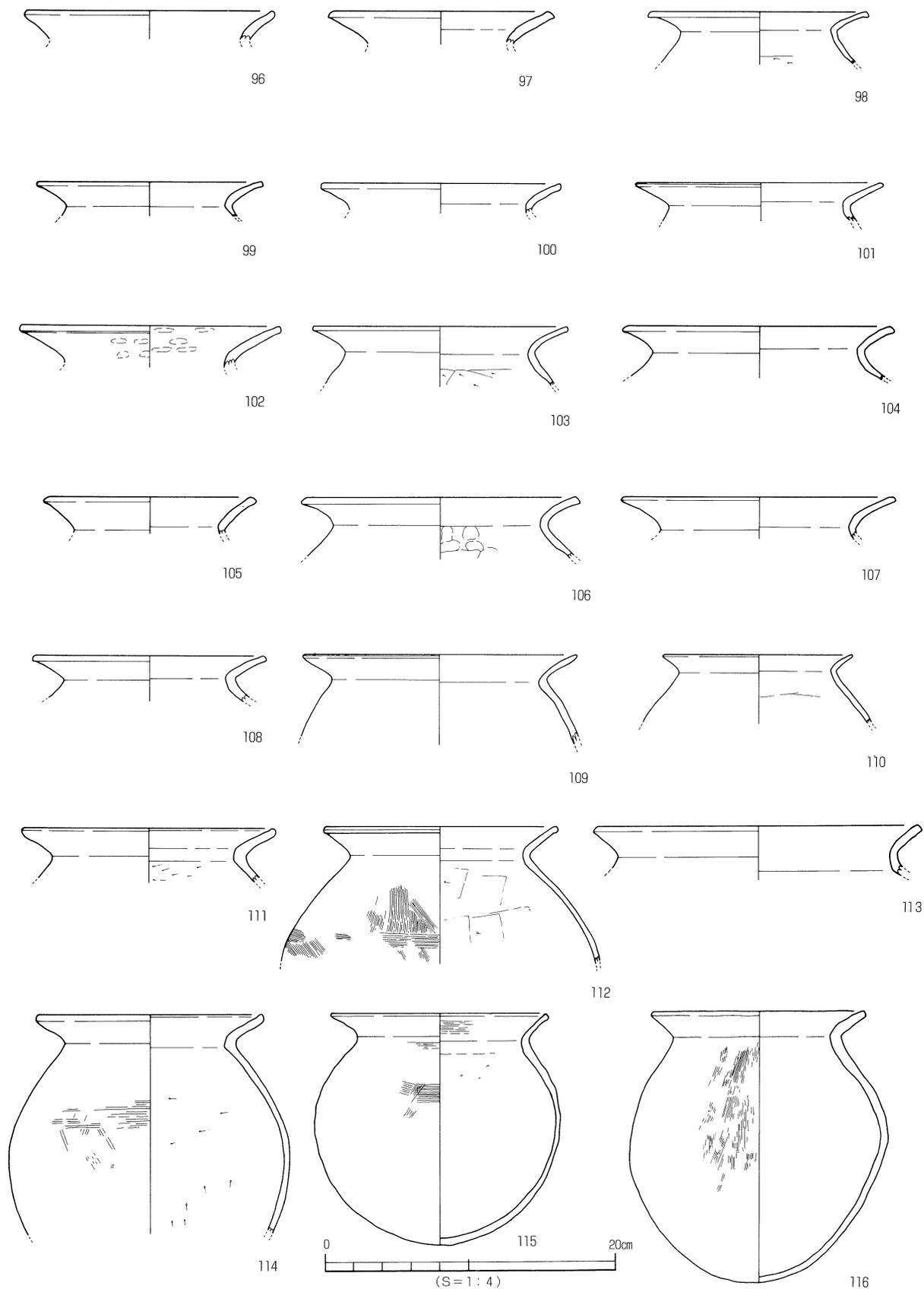
第17図 SR 7 出土遺物実測図(7)

ものである。器面調整はナデによるもので、所々に指頭痕を残す。103は胎土が密で胎土中に1mm以下の長石、石英を疎らに混入するものであるが、焼成は悪い。色調は黄橙色を呈する。胴部外面の調整は摩滅が酷く不明であるが、胴部内面にヘラ削り調整を施している。104は口縁端部に面を有するもので、黄橙色～黄褐色を呈する。焼成は良好で胎土は密、胎土中に1mm以下の石英および金雲母を少量含む。105は焼成良好、胎土は密で胎土中に1mm以下の石英および金雲母を少量混入するものである。色調は灰白色～淡黄色を呈する。106は口縁端部に面を有し、胴部内面にヘラ削り調整を施すものである。胎土は緻密で胎土中に1mm以下の石英、長石および金雲母を少量含有する。焼成は良好で、淡黄色を呈する。107は胎土が密で胎土中に1mm以下の石英、長石を疎らに含む。焼成は不良で色調は淡黄色～明黄褐色を呈する。108は焼成良好、胎土が緻密で、黄橙色を呈する。胎土中に1mm以下の長石、石英および金雲母を少量混入する。口縁部と体部との境界部分にヘラ状工具で強くなてた痕跡が残る。109は焼成良好、胎土は密で胎土中に2mm前後の石英、長石を含む。色調は内外面共に橙色を呈する。110は焼成が悪いため摩耗が激しいものである。胎土は密で1mm以下の長石、石英を多く混入し、淡黄色を呈する。116は口縁部の約1/2、体部の約1/3を欠損する土器で復元完形品である。マンガンの沈着が激しく、器面調整はほとんど確認できない状態であるが、胴部外面に縦方向のハケ目調整を施すものである。胴部最大径を中央より上位に持ち、やや長胴で器壁が厚い。焼成は良好で、胎土は密、胎土中に2mm以下の石英、長石を含む。色調は黄褐色～褐色を呈する。

第18図111～114は口縁部と体部との境界が緩やかで、くびれ部内面に面を有するものである。111は胴部内面をヘラ削り調整し、口縁端部をつまみ上げ状に肥厚させるものである。焼成は良好、胎土は密で胎土中に3mm以下の石英を疎らに含有する。色調は灰白色～淡黄色を呈する。112は胴部内面をヘラ削り、外面をハケ目によって整形するもので、口縁端部を外方に肥厚させる。焼成は良好で胎土は密である。胎土中には1～3mm大の長石、石英および金雲母が含まれる。色調は淡黄色～黄橙色を呈し、外面には煤の付着が認められる。113は口縁端部に面を有するものである。焼成は良好、胎土は密で胎土中に1mm以下の石英、長石を疎らに混入する。色調は赤橙色を呈する。114は口縁端部をつまみ上げ状に肥厚させるもので、胴部外面にハケ目調整、内面にヘラ削り調整を施す。胎土は緻密であるが、胎土中に3mm以下の石英を比較的多く含んでいる。焼成は良好で灰白色～淡黄色を呈する。

第19図117～122は特殊な口縁を有する甕形土器である。117は口縁端部を短く袋状に折り曲げるものである。器面調整は、頸部から口縁部にかけて内外面ともナデ調整を施す。胴部の調整は摩滅のため確認できない。焼成は良好で淡黄色を呈し、胎土は密で胎土中に1mm以下の石英および長石を疎らに含む。118は山陰土器風の二重口縁を有するものである。焼成は不良で胎土は密、胎土中に2mm以下の長石および金雲母を疎らに混入する。色調は内外面共に黄橙色を呈し、口縁部外面にナデ調整を施す。119は吉備系の二重口縁を有する甕形土器である。焼成は良好で色調が橙色～明赤褐色を呈し、胎土は密で胎土中に1mmに満たない砂粒および角閃石を多く混入する。器面調整は摩滅のため確認できないが、口縁部外面5条の沈線文を施すものである。120は口縁部が大きく外面に反り返るものである。焼成が甘いために摩滅が著しく器面調整は確認できない。胎土は密だが胎土中に4mm以下の石英および長石を疎らに含有する。色調は外面が黄橙色、内面が灰白色～淡黄色を呈する。121は口縁部が外反気味に広がり、口縁部と胴部の境に明瞭な稜線を有するものである。器面調整は胴部外面にハケ目調整、胴部内面にヘラ削り調整を施す。色調は淡橙色～黄橙色を呈する。122は口縁端部に刻

古墳時代前期



第18図 S R 7 出土遺物実測図(8)

み目を配する縄文の鉢形土器である。焼成は良好、胎土はやや粗く胎土中に1mm前後の長石、石英および金雲母を多く混入する。調整は摩滅のため不詳であるが、横方向にナデ調整を施すものと考えられる。色調は外面が浅黄色、内面が黄灰色を呈する。

第19図123・124は甕形土器の胴部である。内面はヘラ削り調整、外面はハケ目調整を施した後、肩部に3条の波状文を施文するものである。123の焼成は良好で胎土は密、胎土中に1mm前後の長石、石英および金雲母を含む。色調は灰白色～淡黄色を呈する。124は焼成良好、胎土は密で胎土中に1～4mmの長石、石英および金雲母を混入している。色調は本来123と同様であったと思われるが、マンガン付着のため淡黄色～黄褐色を呈する。

第19図125～第21図173は壺形土器あるいは甕形土器の底部である。

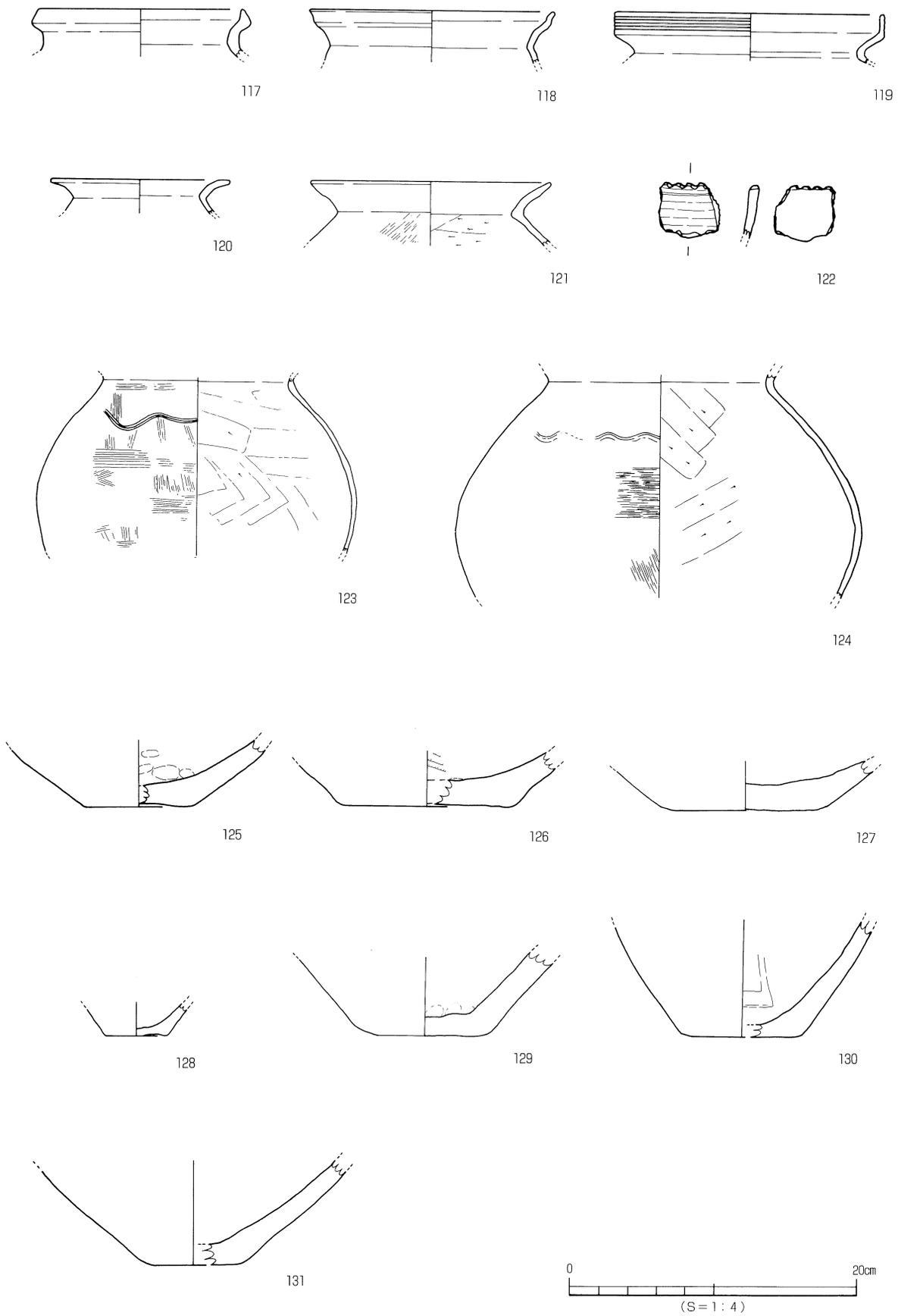
125～131は128を除き、平底で器壁が非常に厚いものである。大型壺形土器の底部である可能性が高い。底部から立上がる角度により125～127と128～131に分類可能である。125は焼成良好で胎土が粗く、胎土中に3mm前後の長石、石英を多く含む。色調は外面が灰黄色、内面が褐灰色を呈する。底部内面に指頭圧痕を多く残す。126は焼成良好、胎土は緻密で胎土中にほとんど砂粒を含まない。色調は外面が黄橙色～橙色を呈し、内面が灰黄色を呈する。底部内面に工具で掻き上げた痕跡を残す。127の焼成は良好であるが胎土が粗い。淡黄色～明黄褐色を呈し、胎土中に3mm大の長石、石英を多量に混入する。128は器壁が薄く、上げ底状の底部を有する。焼成は良好、胎土は密で胎土中に2mm以下の長石、石英を含む。摩滅のため器面調整は不詳であるが、内面をヘラ削り調整した痕跡が確認できる。甕形土器の可能性が高い。129は胴部外面をナデ調整、内面をハケ目調整し、底部内面に指頭圧痕を顕著に残すものである。胎土および色調は125と酷似する。130は胴部外面をナデ調整、内面をヘラ状工具によって掻き上げるものである。焼成は良好で、外面が黒褐色、内面が黄灰色を呈する。胎土は密で2mm以下の長石、石英を疎らに含んでいる。131は小さい平底を有するもので、摩滅のために詳細は不詳であるが、外面をハケ目調整、内面を指ナデ成形するものである。

第20図132・133は器壁が薄く体部が底部から直線的に立上がるもので、明瞭な平底を有する。132の焼成は良好であるが胎土は粗く、胎土中に3mm前後の長石、石英を多く含んでいる。色調は淡黄色～黄橙色を呈し、上げ底状の平底を有する。調整は摩滅のために不明である。133は胴部外面にハケ目調整を施すもので、淡黄色～灰黄色を呈する。焼成は良好で、胎土は密、胎土中に2mm以下の長石、石英および金雲母を混入する。

134～136は厚みのある平底を有し、胴部がきつく立上がるものである。底部と比べて相対的に薄い器壁を有する。134の焼成は悪く、表面の剥離が著しい。胎土は粗く、胎土中に1～2mm程度の長石、石英を多く含む。色調は黄褐色～褐色を呈する。135は焼成良好、胎土は密で胎土中に3mm以下の長石、石英を疎らに含有する。色調は淡黄色を呈する。底部内面に指頭圧痕が残る。136は大型の底部で、底部全体の10分の1程しか残っていない。焼成良好、胎土は密で胎土中に1～2mm程の長石、石英を多く含んでいる。色調は内外面とも淡黄色を呈する。

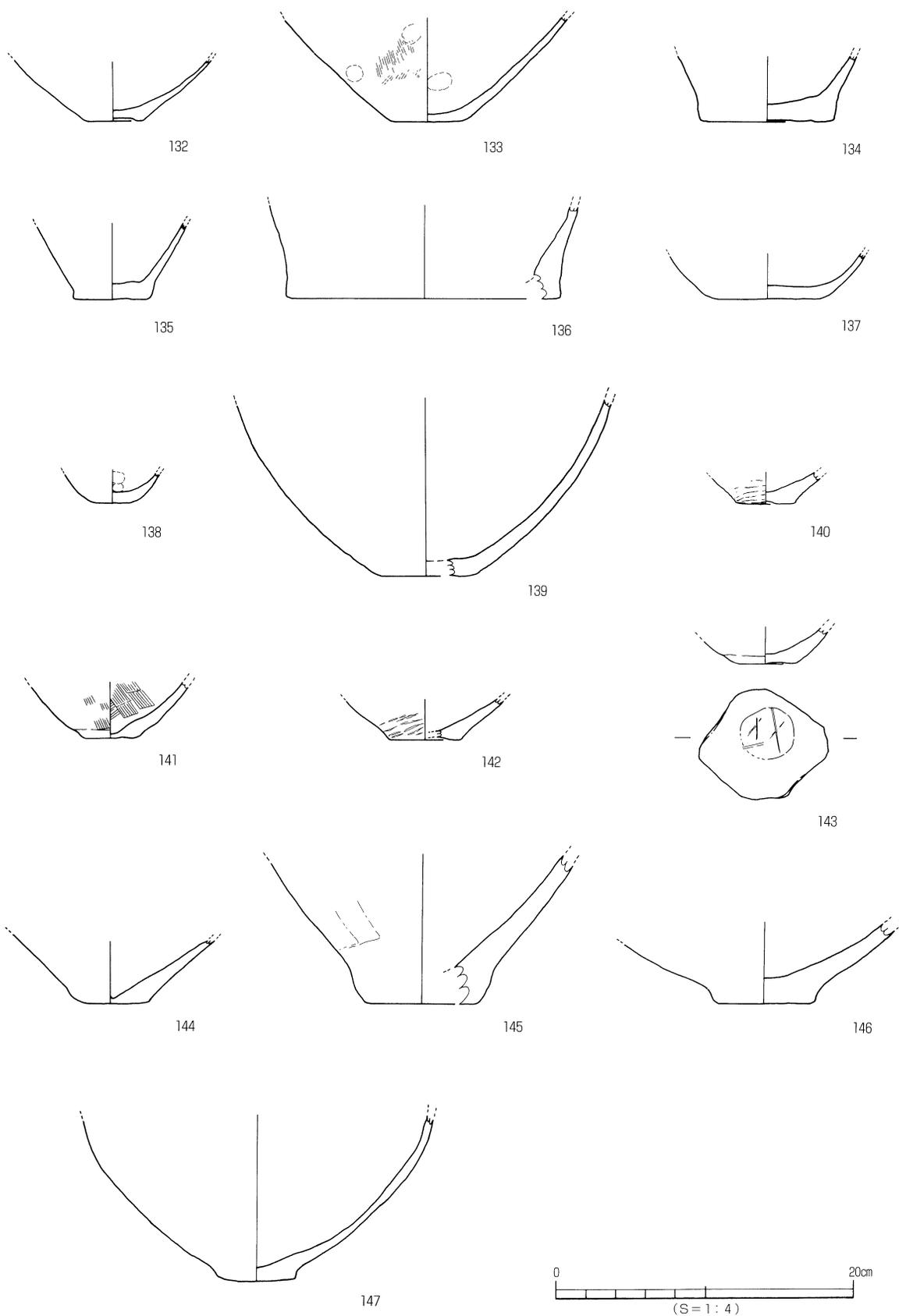
137～139は器壁が薄く、丸みを帯びた平底を有し、胴部が内湾しながら立上がるものである。137は摩滅のために調整は不明である。焼成は良好で外面が灰白色、内面が淡黄色を呈する。胎土は密で胎土中に3mm以下の長石、石英を少量混入する。138は内面に指頭圧痕を残すもので、小型の壺形土器もしくは鉢形土器であろう。焼成は良好で胎土は密、胎土中に砂粒を少量混入する。色調は灰白色

古墳時代前期



第19図 S R 7 出土遺物実測図(9)

遺構と遺物



第20図 S R 7 出土遺物実測図(10)

～淡黄色を呈する。139の焼成は良好であるが胎土は粗く、胎土中に1～3mm程度の長石、石英を多く含んでいる。器面調整は摩滅およびマンガン付着の為確認できない。色調は外面が淡黄色～明褐色、内面が褐色～暗褐色を呈する。

140～143は小さな平底を有し、胴部の立上がりややきついものである。甕形土器の底部である可能性が高い。140は胴部外面をタタキ成形するものである。焼成は良好、胎土は緻密で胎土中に1mm以下の石英をわずかに含む。色調は外面が橙色、内面が黄灰色を呈する。141は胴部内面および外面をハケ目調整によって仕上げるものである。色調は外面が黄橙色～黄褐色、内面が淡黄色を呈する。焼成良好、胎土は緻密で胎土中に2mm程度の長石、石英を少量含む。142は胴部外面をタタキ成形、内面をヘラ状工具を用いてナデ調整するものである。焼成は良好、胎土は密で胎土中に1mm前後の長石、石英および金雲母を混入する。外面が黄橙色、内面が黄灰色を呈する。143はボタン状に突出気味の底部外面にヘラ記号様の線刻を施したものである。線刻は「×」を2つ並べた状態で刻まれている。焼成は良好、胎土は密で胎土中に1～2mmの長石、石英を含む。色調は灰白色～黄橙色を呈する。144・145は小さく突き出る平底から、器壁の厚い胴部がきつく直線的に立上がるものである。144は摩滅が著しく器面調整は確認できない。焼成は良好で胎土は密、胎土中に1～2mm大の長石、石英を疎らに含有する。色調は黄橙色を呈する。145は焼成良好で外面が黄橙色～橙色、内面が黄灰色を呈する。胎土はやや粗く、胎土中に3mm以下の長石および石英を多量に混入する。

第20図146～第21図156はボタン状に突出する底部を有するものである。146～150は胴部が丸みをもって、きつく立上がるものである。146は焼成良好で器壁は厚いが、摩滅のため器面調整は確認できない。胎土は密で3mm以下の長石、石英を疎らに含有する。色調は外面が黄橙色～橙色、内面が黄橙色～黄灰色を呈する。147は外面が橙色～明赤褐色を呈し、内面が淡黄色を呈する。器面調整は摩滅のため不詳であるが、内面をタタキ成形した後ハケ目またはナデ調整していると思われる。148～150は摩滅あるいはマンガンの付着が著しく器面調整は不明である。148は焼成は良好で外面が淡黄色、内面が黄橙色を呈する。胎土はやや粗く、胎土中に3mm以下の長石、石英を多く含む。149は焼成良好、胎土は緻密で胎土中に1mm以下の石英を少量混入する。色調は淡黄色を呈する。150は焼成良好で外面が黒褐色～褐色、内面が灰白色～淡黄色を呈する。胎土は密で胎土中に2mm以下の石英、長石を疎らに含む。

151～156は胴部が大きな弧を描いて緩やかに立上がる壺形土器の底部である。151は小型のもので外面が橙色、内面が黄橙色を呈する。焼成良好、胎土は密で胎土中に1mm程度の石英、長石を少量含む。152は摩滅が著しいが外器面をナデ調整するものである。焼成は良好、胎土は密で胎土中に1～2mm大の長石、石英を混入する。色調は内外器面共に淡黄色を呈する。153は外面をナデ調整、内面をハケ目調整によって整形するものである。焼成は良好、胎土は密で胎土中に2mm前後の長石、石英を少量含む。色調は外面が黄橙色～橙色、内面が灰黄色を呈する。154は焼成良好、胎土は密で胎土中に3mm以下の長石および石英を含む。摩滅が著しく不詳であるが内面をハケ目調整するものである。色調は外面が淡黄色、内面が黄灰色を呈する。155は焼成不良で表面の剥離が著しい。胎土は密で胎土中に3mm以下の石英、長石を少量混入する。色調は外面が褐灰色、内面が黄褐色を呈する。156は外面をハケ目調整、内面をハケ目調整の後丁寧なナデ調整によって整形するものである。焼成良好、胎土は密で胎土中に1mm前後の長石および石英を疎らに混入する。色調は外面が灰白色～黄橙色、内面が淡黄色～灰黄色を呈する。

第21図157～160は長胴甕の底部である。157～159は突出しない小さな平底を有し胴部が直線的に立上がるもの、160は底部が尖底状のものである。157は外面にタタキ成形痕を残し、内面をナデ調整するものである。焼成は良好、胎土は緻密で胎土中に1mm以下の砂粒をわずかに含む。色調は外面が黄灰色、内面が淡黄色～灰黄色を呈する。158は焼成良好、胎土はやや粗く胎土中に1～2mm程の長石、石英を多く含んでいる。器面調整は摩滅のため不詳であるが、外器面にハケ目調整を施す。色調は外器面が淡黄色～灰黄色、内器面が黄橙色を呈する。159は内外面共に左上がりのハケ目調整を施すものである。焼成は良好であるが胎土は粗く、胎土中に1～4mm程度の長石、石英を多く含んでいる。色調は外面が赤橙色、内面が灰白色～淡黄色を呈する。160は外器面に粗いハケ目調整を施すものである。内器面は摩滅のため確認できない。焼成は良好、胎土は密で胎土中に2mm以下の長石および石英を混入する。色調は内外面共に淡黄色を呈する。

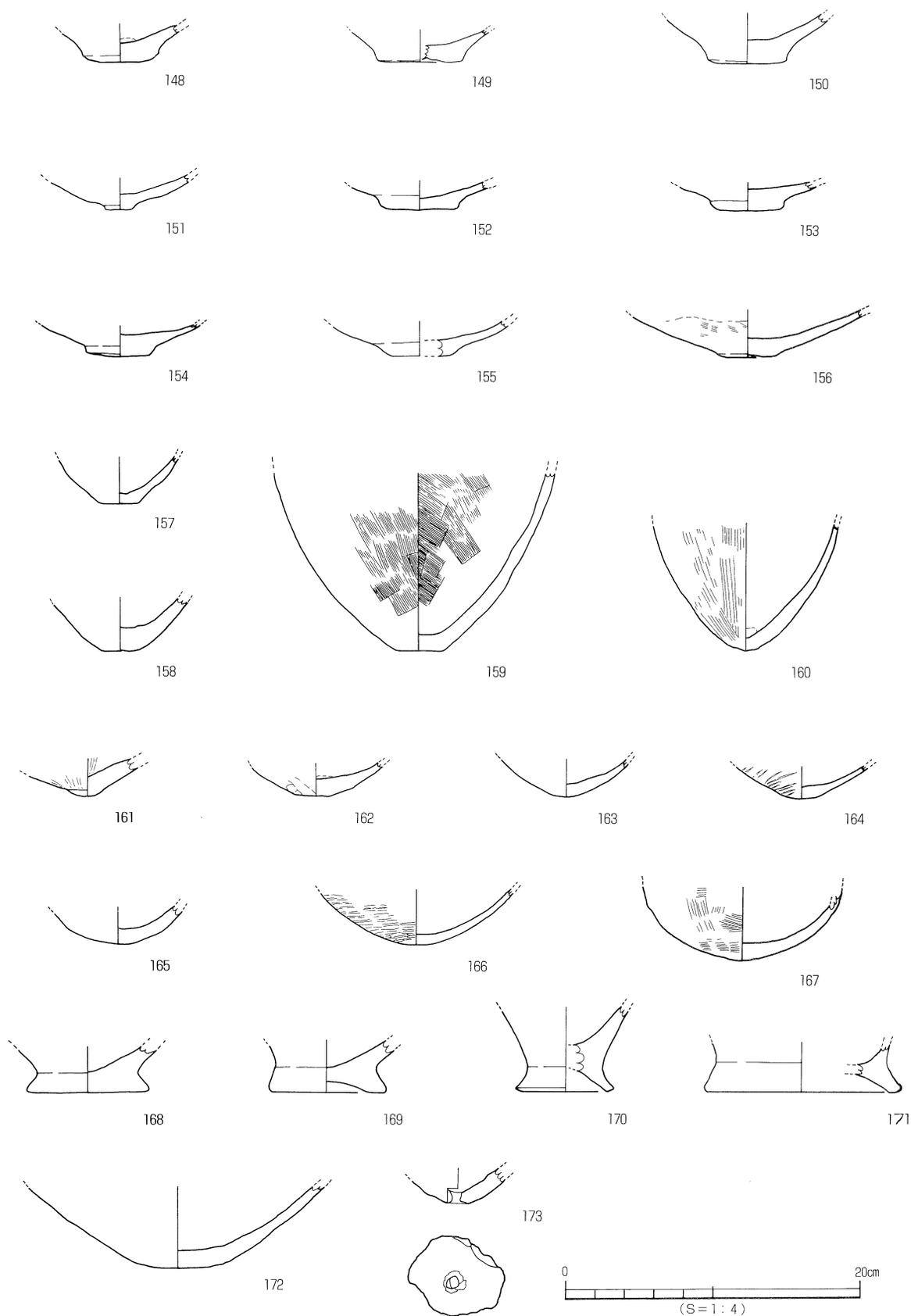
第21図161～167および172・173は甕形土器の底部で、丸底を呈する。なかでも、161～164・172はやや尖底気味の丸底である。161は底部外面に円形粘土板を貼り付けたものである。内外器面共に掻き上げるような粗いハケ目調整が施される。焼成は良好であるが胎土は粗く、胎土中に3mm以下の長石、石英を多く含む。162は底部外面をタタキ成形した後ナデ消すものである。焼成は良好で、灰白色～淡黄色を呈する。胎土はやや粗く、胎土中に1mm前後の長石および石英を多く混入する。163は摩滅のため内面調整は不明であるが、外面をタタキ成形するものである。焼成は良好で胎土は密、胎土中に1mm以下の長石を少量含む。172は焼成がやや悪く、胎土もやや粗い。胎土中に1～2mm程の石英、長石を多く含有する。摩滅およびマンガンの付着が著しく調整は不明である。色調は外面が黄橙色～黄褐色、内面が褐灰色を呈する。165は焼成良好、胎土は密で胎土中に3mm以下の長石および石英を混入する。色調は内外面共に淡黄色を呈する。166は外面をタタキ成形するものである。焼成は良好で胎土は緻密、胎土中に1mm以下の砂粒を少量混入する。色調は外面が黄橙色、内面が灰白色～褐灰色を呈する。167は内面をハケ目調整の後ナデ調整、外面をハケ目調整するものである。焼成は良好で、灰白色～淡黄色を呈する。胎土は緻密で胎土中に1mm以下の長石および石英をわずかに混入する。173は底部に焼成後穿孔を施すものである。外面は摩滅するが内面に指頭圧痕を顕著に残す。焼成は良好で胎土は緻密、胎土中に1mm前後の砂粒を少量含む。色調は黄橙色～橙色を呈する。

第21図168～171は高台状の底部を有するものである。168は円盤高台状の底部である。器面調整は摩滅あるいはマンガンの付着が著しく確認できない。焼成はやや悪く、淡黄色～黄橙色を呈する。胎土は粗く、胎土中に1～3mm程の長石、石英を多量に含む。169～171は上げ底状の底部である。169の焼成は良好、淡黄色を呈する。胎土は粗く、胎土中に3mm以下の石英および長石を多く含む。170は焼成良好、胎土は密で胎土中に2mm以下の長石および砂粒を少量混入する。色調は外面が淡黄色～淡橙色、内面が淡黄色を呈する。器面調整は摩滅のため不詳であるが、高台内面に丁寧なナデ調整を施す。171は焼成不良で表面の剥離が著しい。胎土はやや粗く、胎土中に2mm前後の長石、石英を多く含有する。色調は外面が淡橙色、内面が淡黄色を呈する。

第22図174～第26図241は高坏である。

174および175は坏部下半部が内反気味に伸び、上半部が短く外反するものである。坏部下半部の長さが上半部とほぼ同じ、あるいは上半部を凌ぐと考えられる。174は焼成良好、胎土は緻密で胎土中に1mm以下の砂粒をわずかに混入する。器面調整は外面をナデ調整、内面をミガキ調整するものであ

古墳時代前期



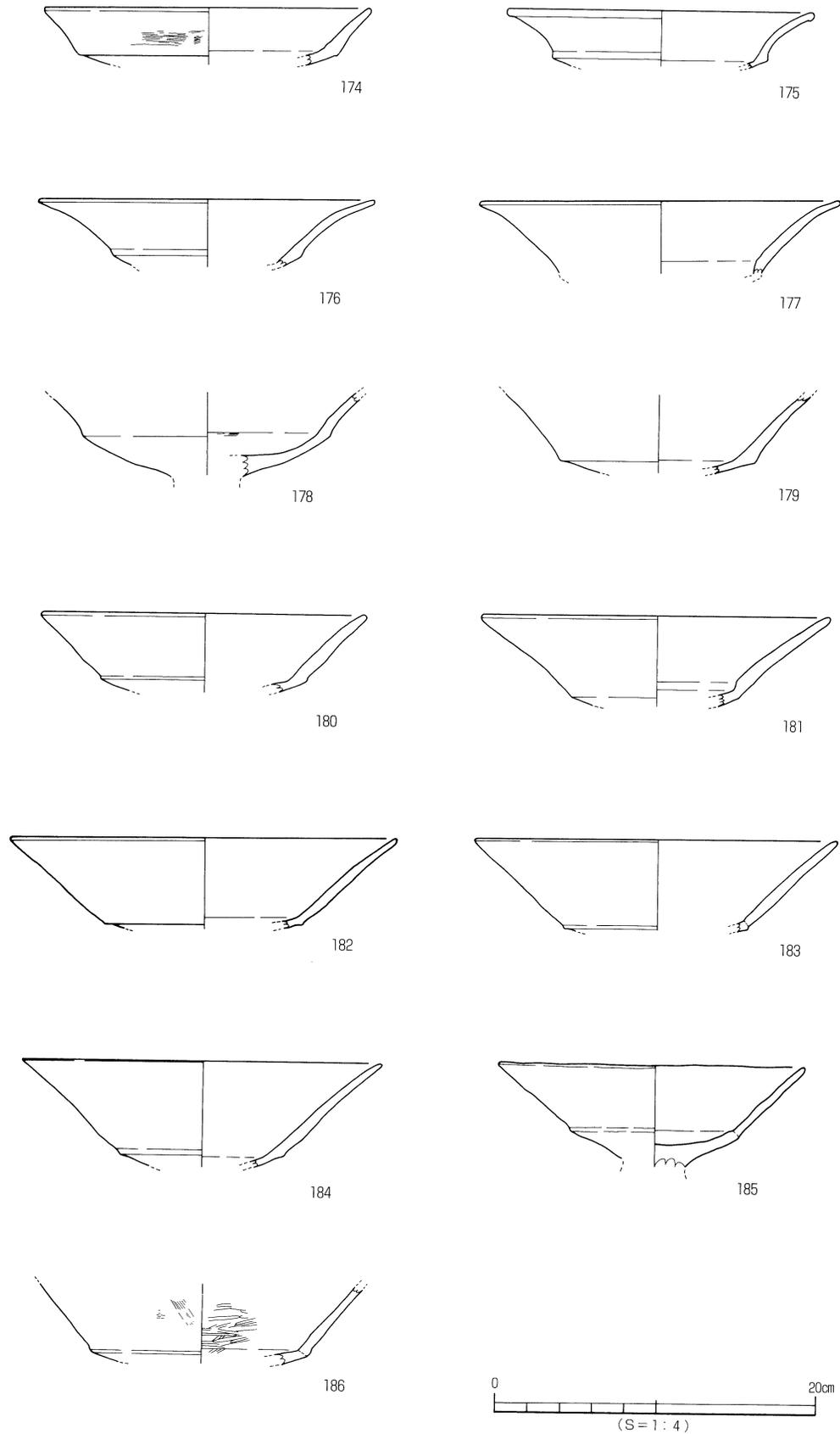
第21図 SR 7 出土遺物実測図 (11)

るが、坏部上半部外面に一部ハケ目調整の痕跡が残る。色調は灰白色～淡黄色を呈する。175は焼成が甘く、器面調整は摩滅のため不明である。胎土はやや粗く、胎土中に3 mm以下の石英を多く混入する。色調は内外面共に黄橙色を呈する。

第22図176～181は坏部下半部が内湾して伸び、上半部が大きく外反するものである。176は焼成がやや甘く、胎土は密で胎土中に2 mm以下の石英および砂粒を疎らに混入するものである。色調は外面が褐灰色、内面が灰白色を呈する。177は焼成が甘く、摩滅が著しい。胎土は密で胎土中に1 mm以下の長石、石英および金雲母を含む。色調は黄橙色を呈する。178の焼成は良好であるが摩滅およびマンガンの付着が著しく器面調整は不詳である。胎土は緻密で胎土中に1 mm以下の長石および金雲母を少量混入する。色調は内面が黄橙色、外面が灰白色～淡黄色を呈する。179は焼成が甘く、表面の剥離が著しい。胎土は密で胎土中に2 mm以下の石英、長石を疎らに含有する。色調は内面が黄橙色～黄褐色、外面が淡黄色～黄灰色を呈する。180は焼成良好、胎土は密で胎土中に2 mm以下の石英、長石および金雲母を疎らに混入する。器面調整は摩滅のため確認できない。色調は外面が橙色、内面が淡黄色～黄橙色を呈する。181は焼成良好、外面が黄橙色～淡黄色を呈し、内面が淡黄色を呈するものである。摩滅が著しく器面調整は不明である。胎土は密で胎土中に4 mm以下の石英、長石および金雲母をわずかに含む。

第22図182～第23図192は坏部下半部が短く伸び、上半部が直線的に大きく広がるものである。182は焼成良好で、内面が淡橙色～黄橙色、外面が黄橙色～淡黄色を呈する。胎土は緻密で1 mm前後の長石、石英をわずかに混入する。器面調整は摩滅のため不明である。183は焼成がやや甘く、摩滅が著しい。色調は内外面ともに黄橙色を呈する。胎土は緻密で胎土中に1 mm以下の長石をわずかに混入する。184は焼成良好、胎土は緻密、胎土中に1 mm前後の長石、石英をわずかに含む。色調は内面が黄橙色～淡黄色、外面が灰白色～黄橙色を呈する。器面調整は摩滅のため不明である。185は脚部と坏部の約5分の1を欠損するものである。焼成は甘く、胎土は緻密で胎土中に1 mm以下の砂粒をわずかに含むのみである。器面調整は摩滅のため不明である。色調は淡橙色～赤橙色を呈する。186は外面をハケ目調整、内面をミガキ調整するものである。焼成は良好、胎土は密で胎土中に砂粒をわずかに混入する。色調は内外面共に淡橙色を呈する。第23図187は小型の高坏である。脚部と口縁部の約1/3を欠損する。焼成は良好、胎土は緻密で胎土中に1 mm以下の石英および長石を少量含む。色調は内面が黄橙色、外面が淡橙色～黄橙色を呈する。調整は摩滅のため不詳であるが、外器面にハケ目調整の痕跡がわずかに認められる。188の焼成は良好で、胎土は緻密、胎土中に砂粒および金雲母を少量混入する。摩滅のため器面調整は不詳だが、内器面にハケ目調整の痕跡が認められる。色調は内外器面共に灰白色～淡黄色を呈する。189は焼成が甘く、摩滅のため表面の剥離が著しい。胎土は緻密で胎土中に1 mm以下の石英および長石を少量含む。色調は外面が淡黄色～黄橙色、内面が黄橙色～灰黄色を呈する。190は焼成がやや甘く、そのため表面の剥離が著しい。胎土は緻密で、胎土中にほとんど砂粒を含まない。色調は外面が淡黄色、内面が灰白色～淡黄色を呈する。191は口縁部の約1/3および脚部の裾を欠損するものである。中空の屈曲して大きく広がる脚部を有する。器面調整は摩滅およびマンガンの付着が著しく不明であるが、脚部外面に一部ミガキ調整の痕跡が認められる。焼成は良好で、胎土は密、胎土中に3 mm以下の石英および長石を疎らに含有する。色調は内面が淡黄色～黄褐色、外面が淡黄色～黄橙色を呈する。192は坏部の段が丸みを帯び、脚部が直線的に伸びて外側に大きく屈曲するものである。器面調整は摩滅が著しく確認できない。焼成は良好で、胎土は緻密、胎

古墳時代前期



第22図 S R 7 出土遺物実測図 (12)

土中に砂粒をほとんど混入しない。色調は内面が淡黄色～黄橙色、外面が淡黄色～橙色を呈する。

第23図193～195は椀形の坏部を持つものである。193は坏部の約3/4および脚部の約1/3を欠損するものである。器面調整は摩滅のため不詳であるが、坏部内面および脚部内面をナデ調整、脚部外面をハケ目調整した後ミガキ調整を加えるものと思われる。焼成は良好で、胎土は密、胎土中に5mm以下の長石、石英を疎らに混入する。色調は内面が灰白色～淡黄色、外面が淡黄色～黄褐色を呈する。194は焼成はやや甘く、摩滅が著しいため器面調整は不明である。胎土は密で、胎土中に1mm以下の長石および金雲母を少量含有する。色調は内外面とも橙色～明褐色を呈する。195は摩滅がひどくマンガンの付着も著しい。焼成は甘く、胎土は密で胎土中に1mm以下の石英を少量含む。色調は内外面共に橙色～明褐色を呈する。

第23図196・197は坏部に二段の屈曲を有する有段高坏である。196の外面調整は摩滅のため不明であるが、内面はハケ目調整した後に丁寧なミガキ調整を施すものである。焼成は良好で堅固、胎土は緻密で2mm以下の石英をわずかに混入する。色調は外面が淡橙色～黄橙色、内面が淡黄色～黄褐色を呈する。197は坏部の約1/3および裾部の大半を欠損するものである。坏部から直線的に伸び、屈曲して大きく広がる脚部を有する。器面調整はほとんどが摩滅により不詳であるが、脚部に一部ミガキ調整を施した痕跡が認められる。焼成は良好、胎土は緻密で胎土中に1mm前後の石英および長石をわずかに混入する。色調は内外面共に淡橙色～黄褐色を呈する。

第24図198～第25図230は坏接合部から脚部にかけての資料である。

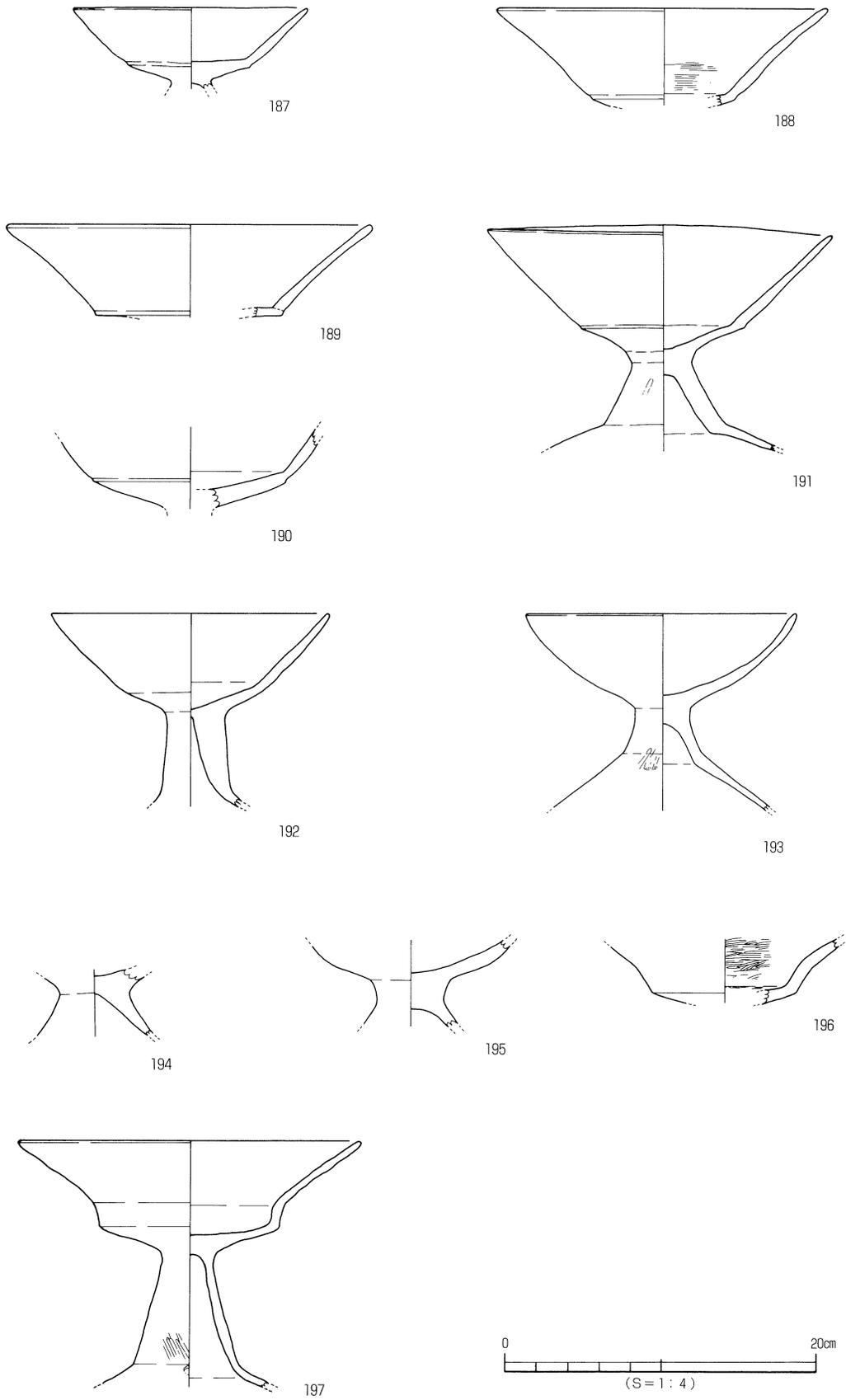
198～201は中空の脚部に水平気味に広がる坏部を有するものである。いずれも摩滅が著しく、器面調整は確認できない。198は焼成良好、胎土は密で胎土中に1mm以下の石英を疎らに混入する。色調は橙色を呈する。199は胎土は緻密であるが焼成は甘い。胎土中にはほとんど砂粒を混入しない。色調は外面が黄褐色、内面が淡黄色～黄褐色を呈する。200は焼成良好、胎土は緻密で胎土中に1mm以下の石英および長石を少量含む。色調は内外面共に淡褐色を呈する。201は焼成良好で胎土は密、胎土中に1mm以下の長石を少量含有する。色調は外面が黄褐色～褐色、内面が黄褐色を呈する。

第24図202および203は大型の高坏で中空の脚部を有するものである。202は他と比べて器壁が厚く胎土が粗い。焼成は良好で、胎土中に5mm以下の石英および長石を多く混入する。器面調整は摩滅およびマンガンの付着が著しいため確認できない。色調は褐色を呈する。203は接合部に貼付突帯をめぐらすものである。焼成は良好であるが胎土は粗く、胎土中に3mm以下の石英、長石を多く含んでいる。色調は淡黄色～褐色を呈する。

第24図204～206は短く太い中実の脚部から裾部が大きく広がるものである。204は脚部内面が三角錐状を呈しやや中空気味のものである。焼成は悪く、摩滅のため器面調整は不明である。胎土は密で、胎土中に2mm以下の石英および金雲母を疎らに混入する。色調は淡黄色を呈する。205は焼成良好で底部内面が黄灰色～黒褐色、その他の部分が淡黄色を呈するものである。胎土は密で、胎土中に2mm以下の石英、長石を少量含む。外面は摩滅のため確認できないが、脚部内面にハケ目調整を施す。また、裾部に3方向の焼成前穿孔を施す。206は摩滅およびマンガンの付着が著しく、器面調整は不明であるが、脚部に4方向の焼成前穿孔を施すものである。焼成は良好、胎土は密で胎土中に2mm以下の石英、長石を疎らに含む。色調は内外面共に淡黄色を呈する。

第24図207～212は垂直に伸びる中実の脚部を有するものである。210以外は裾部がくびれて外方に広がる。207は外面をミガキ調整するものである。焼成は良好で胎土は密、胎土中に1mm以下の石英

古墳時代前期



第23図 S R 7 出土遺物実測図 (13)

および長石を疎らに含む。色調は橙色～明褐色を呈する。208は焼成良好で、胎土はやや粗く胎土中に3mm以下の石英を多く混入する。器面調整は摩滅およびマンガンの付着が著しく不明である。色調は黄橙色～褐色を呈する。209はエンタシス状の脚部を有し、裾部に4方向の焼成前穿孔を施すものである。器面調整は脚部外面をミガキ調整、内面をハケ目調整の後ナデ調整する。焼成良好、胎土は密で胎土中に2mm以下の石英および長石を疎らに混入する。色調は外面が灰白色～淡黄色、内面が黄灰色～黒褐色を呈する。210は裾部が直線的に伸びるもので、3方向の焼成前穿孔を施す。器面調整は外面にカキメ状のハケ目調整およびミガキ調整、内面にナデ調整を施す。焼成は良好、胎土は密で胎土中に2mm以下の石英を少量含む。色調は黄橙色を呈する。211の焼成は良好で胎土は密、胎土中に1mm以下の長石を少量混入する。器面調整は摩滅により不詳であるが、外面をミガキ調整すると考えられる。色調は内外面共に淡橙色～黄橙色を呈する。212は焼成良好、胎土は緻密で堅固、胎土中にほとんど砂粒を混入しない。外器面に横方向のミガキ調整が認められ、裾部に4方向の焼成前穿孔が施される。色調は灰白色～淡黄色を呈する。

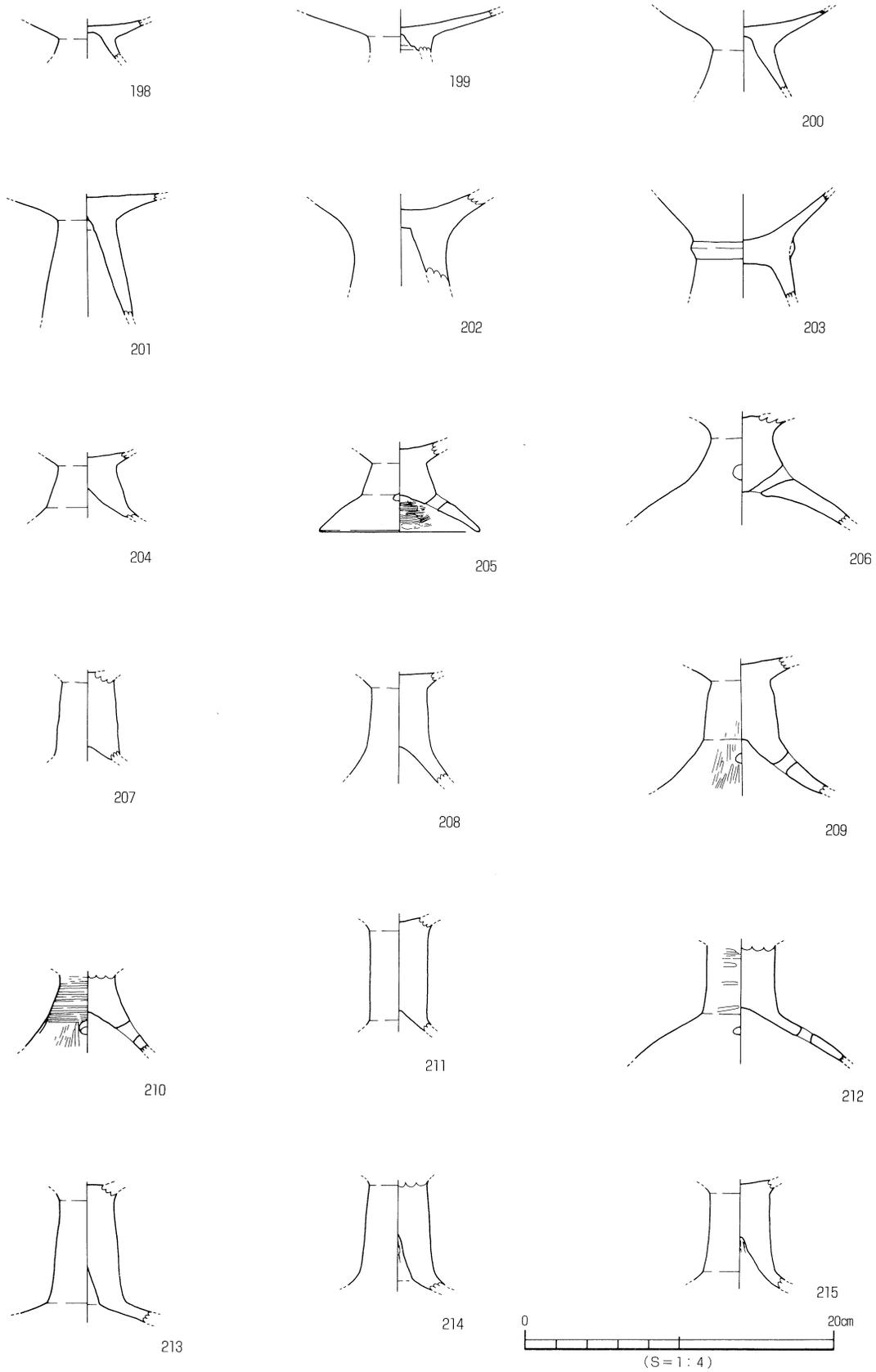
第24図213～215は垂直気味に伸びる中実の脚部を有し、そのほぼ中位まで抉りを加えるものである。213は焼成良好、胎土は粗く、胎土中に4mm以下の石英および長石を多く混入する。器面調整は摩滅が著しく不明である。色調は淡橙色～淡黄色を呈する。214は焼成が良好で胎土は密、胎土中に2mm以下の長石、石英を少量含む。調整は摩滅のため不詳であるが、脚部内面に成形時の絞り痕を残す。色調は灰白色～淡橙色を呈する。215は焼成良好で、灰白色～淡橙色を呈する。胎土はやや粗く、胎土中に5mm以下の石英を多く混入する。脚部内面に成形時に生じた絞り痕を残す。

第25図216～223は器壁が比較的厚く、脚部が中空のものである。216は小型もので、赤橙色～橙色を呈する。焼成は良好で胎土は緻密、胎土中に2mm以下の石英を少量混入する。調整は摩滅のため不明である。217は焼成がやや甘く、表面の剥離が著しい。胎土は緻密で胎土中に砂粒をわずかに混入する。内面に成形時に生じた絞り痕が残る。色調は外面が橙色、内面が黄橙色を呈する。218は焼成良好、胎土は緻密で堅固である。胎土中にほとんど砂粒を含まず、外器面に横方向のミガキ調整を施す。色調は内外面とも黄橙色を呈する。219の焼成は良好であるが摩滅のため器面調整は確認できない。胎土は緻密で胎土中にほとんど砂粒を含まない。色調は灰白色～淡橙色を呈する。220の焼成は良好であるが、胎土はやや粗く胎土中に2mm以下の長石、石英および金雲母を含む。外面をナデ調整、内面に絞り痕を残す。色調は淡黄色～黄橙色を呈する。221は焼成良好、胎土は緻密で胎土中に2mm以下の石英および金雲母をわずかに混入する。器面調整は摩滅のため不詳であるが、脚部内面に成形時の絞り痕を残す。色調は淡黄色～黄橙色を呈する。

第25図222・223は中空で、特に厚い脚部を有するものである。222は坏部内面をナデ調整、脚部外面をハケ目調整するものである。色調は淡黄色を呈し、裾部には4方向の焼成前穿孔が施される。焼成良好で胎土は緻密、胎土中に1mm以下の石英および長石を少量含有する。223の焼成は良好であるが胎土は粗く、胎土中に3mm以下の石英を多く混入する。摩滅およびマンガン付着の為器面調整は不詳であるが、脚部内面に成形時に生じた絞り痕を残す。色調は淡黄色～黄橙色を呈し、脚部裾に4方向の焼成前穿孔を施す。

第25図224～228は器壁が薄く、屈曲して広がる中空の脚部を有するものである。224は焼成がやや甘く表面の剥落が著しい。胎土は緻密で、胎土中にほとんど砂粒を混入しない。色調は赤橙色～橙色を呈する。225は摩滅のため器面調整が不明であるが、裾部に4方向の焼成前穿孔を施すものである。

古墳時代前期



第24図 S R 7 出土遺物実測図 (14)

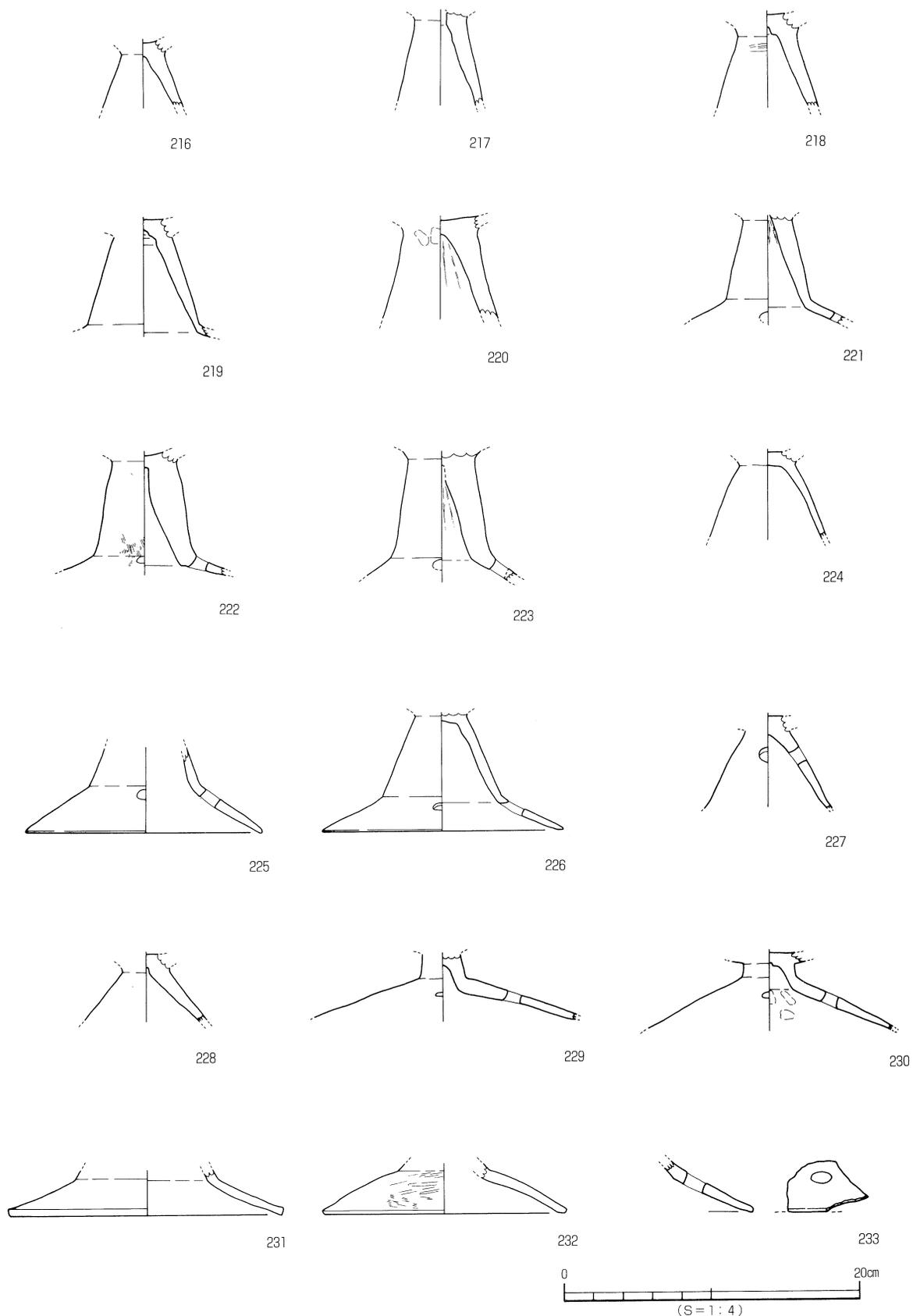
焼成は良好で胎土は密、胎土中に1mm以下の長石、石英および金雲母を少量混入する。色調は淡黄色を呈する。226は坏部と裾部の約2/3を欠損するものである。摩滅のため器面調整は確認できないが、裾部に4方向の焼成前穿孔を施す。焼成は良好で胎土は密、胎土中に1mm以下の長石を少量含んでいる。色調は内外面共に淡黄色～橙色を呈する。227は焼成不良、胎土は粗く胎土中に4mm以下の石英を多く含有する。器面調整は摩滅が著しく確認不能である。色調は内外面共に赤橙色および褐灰色を呈する。228は焼成がやや甘く表面の摩滅剥離が著しい。胎土は緻密で胎土中に1mm以下の長石および金雲母をわずかに混入する。色調は赤橙色を呈する。

第25図229・230は脚部が短く、屈曲して大きく広がる裾部を有するものである。小さな椀形の坏部を持つと考えられる。229は焼成がやや甘く、摩滅による表面の剥落が著しい。胎土は密で胎土中に2mm以下の石英および長石を疎らに含む。裾部に4方向の焼成前穿孔を施すものである。色調は内外面共に黄橙色～橙色を呈する。230は焼成良好、胎土は緻密で堅固、胎土中には砂粒をほとんど混入しない。色調は外面が灰白色～黄橙色、内面が淡黄色を呈する。器面調整は摩滅のため不詳であるが外面をミガキ調整、内面をナデ整形するものと思われる。裾部には4方向の焼成前穿孔を施す。

第25図231～第26図241は高坏脚部裾の資料である。231は器壁の薄い中空の脚裾部である。表面が摩滅剥落しており器面調整は確認できない。焼成は良好で胎土は緻密、胎土中に1mm以下の石英をわずかに混入する。色調は橙色～明赤褐色を呈する。232は焼成良好、胎土は緻密で堅固、胎土中に2mm以下の石英を疎らに混入するものである。色調は外面が淡黄色、内面が灰黄色を呈し、外器面をハケ目調整した後ミガキ調整するものである。233は裾部の小片で、端部に赤色顔料の付着が認められるものである。焼成は良好、胎土は緻密で胎土中にほとんど砂粒を混入しない。内面をハケ目調整した後ナデ調整する。色調は器表面が黄橙色、赤色顔料が赤橙色を呈する。234は有段の脚裾部で、器面調整は摩滅のため不明である。焼成は良好で胎土は密、胎土中に1mm以下の石英および長石を多く含有する。色調は外面が黄灰色、内面が橙色～明褐色を呈し、4方向の焼成前穿孔を施す。235は焼成良好、胎土は密で胎土中に3mm以下の石英を疎らに含有する。調整は摩滅のため確認できない。色調は内外面共に淡黄色～橙色を呈する。236は焼成は良好であるが表面剥落のため器面調整は確認できない。胎土は緻密で胎土中にはほとんど砂粒を混入しない。色調は外面が橙色、内面が淡黄色～橙色を呈し、4方向の焼成前穿孔を施す。237は焼成良好、胎土は緻密で胎土中に砂粒をほとんど含まない。器面調整は摩滅のため不詳であるが、内面に指頭圧痕が残存する。色調は黄橙色～橙色を呈する。238は焼成良好、胎土は緻密で堅固である。色調は灰白色～淡黄色を呈し、胎土中に3mm以下の石英および金雲母を少量含有する。調整は摩滅のため不明である。239は焼成良好、胎土は緻密で胎土中に1mm以下の石英、長石をわずかに混入する。器面調整は摩滅が著しく不詳であるが、外面をミガキ調整するものと思われる。色調は橙色～赤橙色を呈する。240は焼成良好、胎土は緻密で堅固、胎土中にほとんど砂粒を混入しない。器面調整は内面をナデ調整、外面をナデ調整の後ミガキ調整するものである。色調は内外面ともに灰白色を呈する。241は胎土が緻密、堅固で胎土中にほとんど砂粒を混入しない。焼成は良好で、色調は内外面共に灰白色～黄橙色を呈する。

第26図242～245は器台である。242～244は小型の中空器台で、皿形の受部からゆるやかに広がる脚部を持つ。摩滅のために詳細は不明であるが、器面調整は受部の内面および外面を丁寧なナデ調整、脚部外面をミガキ調整し、脚部内面をナデ調整するものと思われる。242は焼成良好、胎土はやや粗

古墳時代前期



第25図 S R 7 出土遺物実測図 (15)

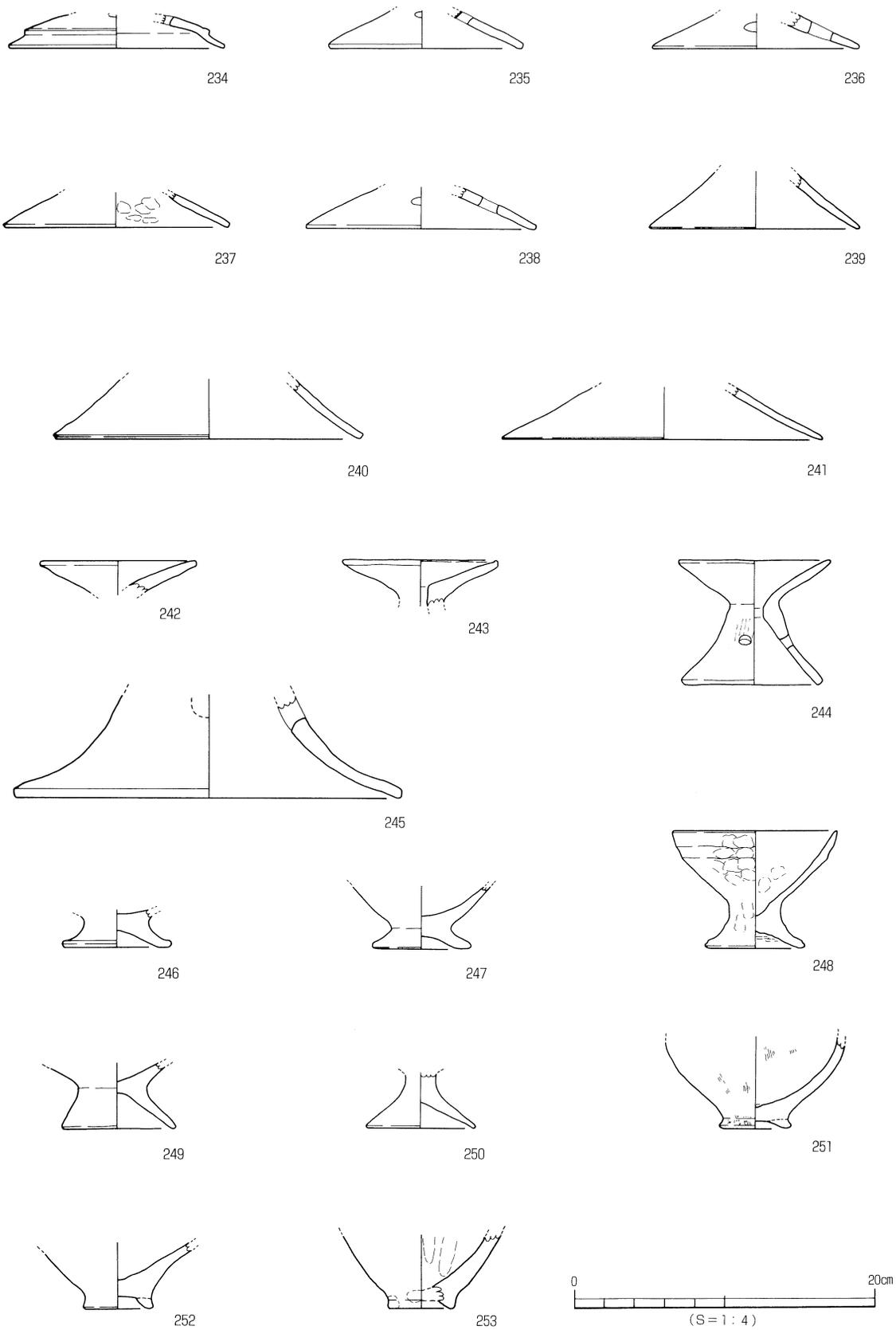
く、胎土中に2 mm以下の石英および長石を多く混入する。色調は内外面共に淡黄色を呈し、外面に一部黒斑を残す。243は受部をほとんど完全に残すものである。焼成は良好、胎土は密であるが胎土中に2 mm以下の石英、長石を疎らに混入する。色調は内面が灰白色、外面が灰白色～淡橙色を呈する。244は脚部の約1/2を欠損するもので復元完形品である。焼成は良好であるが胎土は粗く、胎土中に2 mm以下の石英および長石を多く含む。色調は脚部内面が淡黄色、その他が黄橙色を呈する。245は大型器台の脚裾部片である。焼成は良好で、胎土はやや粗く胎土中に3 mm以下の石英および長石を多く混入する。調整は摩滅のため不詳であるが、色調は橙色を呈し、円形の焼成前穿孔を施すものである。

第26図246は山陰系の低脚坏である。焼成はやや甘く、胎土は密で胎土中に5 mm以下の石英、長石および金雲母を疎らに含有する。色調は黄橙色を呈し、表面の摩滅が著しいため器面調整は不詳である。

第26図247～253は脚台付の坏および鉢類である。247は緩やかに「ハ」の字状に開く脚台部を有し、胴部がきつく立上がる鉢である。焼成は甘く、摩滅により表面の剥落が著しい。胎土は緻密で胎土中に1 mm以下の石英をわずかに含む。色調は灰白色～淡黄色を呈する。248・250はわずかに脚柱部を有する低脚坏である。248は口縁部の約1/2を欠損するもので復元完形品である。器面を手捏ね成形した後ナデ調整するもので、内外面に指頭圧痕を顕著に残す。焼成は良好、胎土は緻密で胎土中に2 mm以下の石英、長石を疎らに混入する。色調は灰白色～淡黄色を呈する。250は灰白色～灰黄色を呈し、摩滅が著しく器面調整は確認できない。焼成は良好、胎土は緻密で胎土中に1 mm以下の石英をわずかに含む。249は直線的に広がる脚台を有するもので、色調は灰白色～黄橙色を呈する。焼成は良好で胎土は緻密、胎土中に砂粒をほとんど含まない。251～253は短く上げ底状の脚台を有するものである。251は摩滅のため詳細は不明であるが、内外面共にハケ目調整を施すもので壺形土器の底部である可能性を残す。焼成は良好で、色調は内外面共に淡黄色を呈する。胎土は密で、胎土中に4 mm以下の長石および石英を疎らに混入する。252は焼成良好、胎土は密で胎土中に2 mm以下の石英および長石を多く含む。器面調整は内外面共にナデ調整を施すもので、色調は灰白色～淡黄色を呈する。253の器面調整は摩滅のため不詳であるが、内面をナデ上げるものである。焼成は良好であるが胎土は粗く、胎土中に1～3 mm程度の長石、石英を多く含有する。色調は内面が淡黄色、外面が淡黄色～橙色を呈する。

第27図254～259は器高が口径の2分の1以下、口縁部が斜め上方に伸びる坏である。特に254～256は器高が低く、器高が口径の1/3以下である。254は口縁部の約2/3を欠損する復元完形品である。器面を手捏ね成形するもので、内外器面共に指頭圧痕を顕著に残す。焼成は良好で、色調は内外器面共に淡黄色を呈する。胎土はやや粗く、胎土中に4 mm以下の石英および長石を多く混入する。255および256は摩滅のため調整が不詳であるが、内面を手捏ね成形した後ナデ調整を施すものと考えられる。255の焼成は良好で胎土は緻密、胎土中にほとんど砂粒を含まない。色調は内面が淡黄色～灰黄色、外面が黄橙色を呈する。256は口縁部の約1/4を欠損する復元完形品である。焼成は良好、胎土は密で胎土中に2 mm以下の石英および金雲母を疎らに含有する。色調は内面が淡黄色～黄灰色、外面が灰白色を呈し、底部に一部黒斑を有する。257の器面調整は摩滅が著しく不詳である。焼成は良好、胎土は緻密で胎土中にほとんど砂粒を混入しない。色調は内外面共に淡黄色～黄橙色を呈する。258

古墳時代前期



第26図 S R 7 出土遺物実測図 (16)

は焼成良好であるが、摩滅が著しく表面の剥落が著しい。色調は内外面共に黄橙色を呈し、器面調整は外面にハケ目調整を施す。259は焼成良好、胎土は緻密で胎土中に1mm以下の石英および長石を少量含有するものである。外面調整は摩滅のため不明であるが、内面にハケ目調整を施す。色調は外面が淡黄色および淡橙色、内面が淡黄色を呈する。

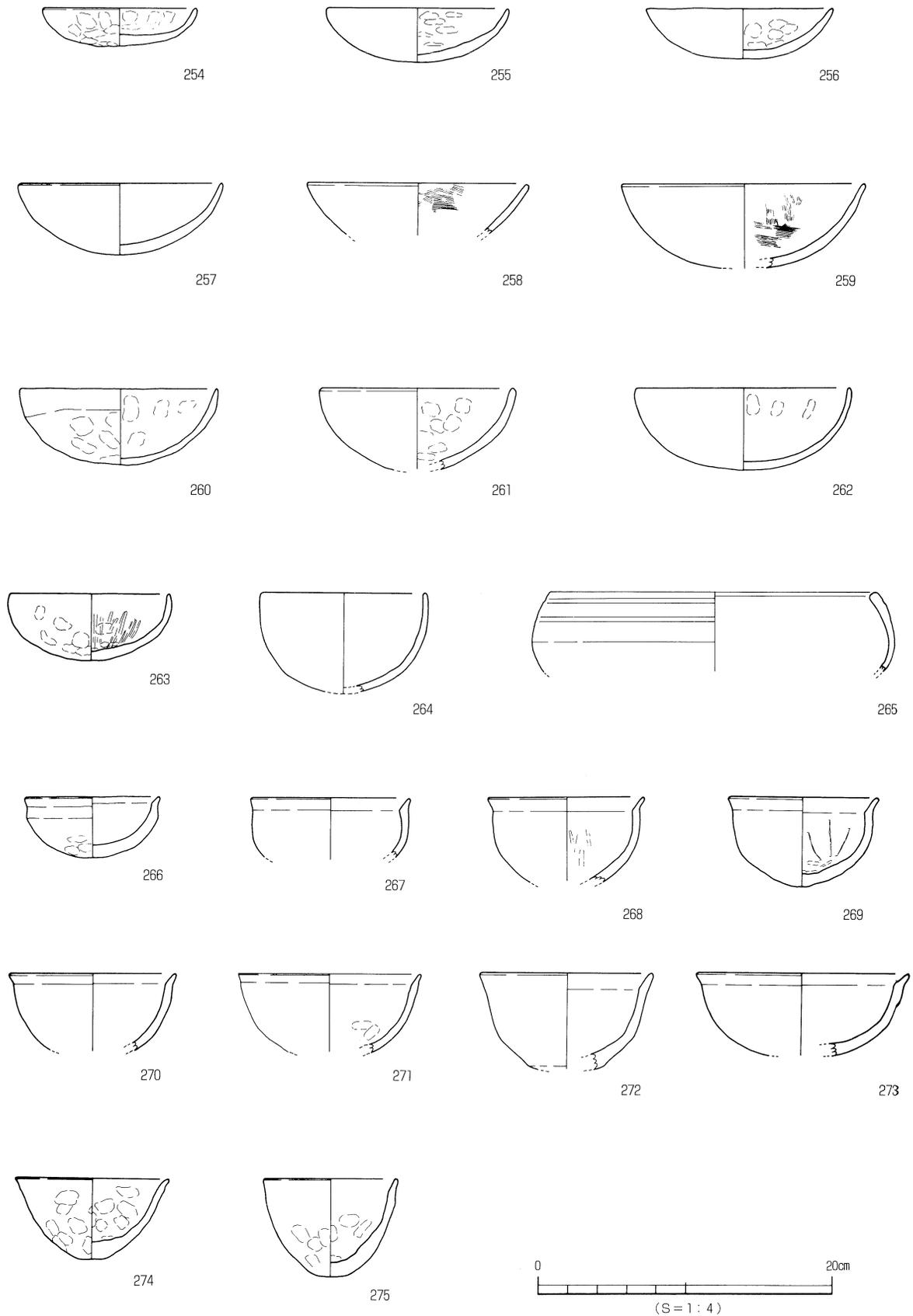
第27図260～262は器高が口径の2分の1以下、口縁端部が内湾し垂直気味に立上がる鉢形土器である。260は全体の約1/2を欠損する復元完形品である。焼成は良好で胎土は緻密、胎土中にほとんど砂粒を混入しない。器面調整は内外面共に丁寧なナデ調整を施す。色調は外面が淡黄色～黄橙色、内面が淡黄色～橙色を呈する。261は内外面共にナデ調整を施すものである。焼成は良好で胎土は緻密、胎土中にほとんど砂粒を混入しない。色調は外面が淡黄色～橙色、内面が黄橙色を呈する。全体の約1/2を欠損する復元完形品である。262は口縁部の約2/3を欠損するものである。焼成は良好、胎土は緻密で胎土中に2mm以下の石英を若干含む。器面調整は摩滅が著しいが、内面にナデ調整、外面にハケ目調整およびナデ調整の痕跡をわずかに残す。色調は内外面共に淡黄色あるいは黄橙色を呈する。

第27図263および264は口縁端部が垂直に立上がる鉢形土器である。263は口縁部の約1/5を欠損するものである。器面調整は内面をミガキ調整、外面をハケ目調整の後ミガキ調整を施す。焼成は良好で胎土は緻密、胎土中に3mm以下の石英を少量混入する。色調は内外面共に橙色および淡黄色～黄灰色を呈する。264は器高が口径の1/2以上を示すもので、全体の約1/2を欠損する復元完形品である。焼成は良好、胎土は緻密で、胎土中に2mm以下の石英を混入する。色調は外面が淡黄色、内面が黄橙色～黄褐色を呈し、器面調整は内外面共に丁寧なナデ調整を施す。

第27図265は口縁部が胴部最大径より内側に入り込む鉢形土器である。焼成は良好だが胎土は粗く、胎土中に3mm以下の長石および石英を疎らに混入する。器面調整は摩滅がひどく不詳であるが、口唇部に面を有し、口縁部外面に凹線を2条施す。色調は淡黄色を呈する。

第27図266～275は鉢形土器で、口縁端部を外側に軽くつまみ出すものである。266は焼成良好で堅固、胎土は緻密で胎土中に2mm以下の長石、石英および金雲母を混入するものである。全体の約3分の1を欠損する復元完形品で、器面調整は内外面共に丁寧なナデ調整を施す。色調は灰白色～淡黄色を呈する。267は胎土が密で1mm以下の石英を少量混入する。焼成は不良で表面の剥落が著しく器面調整は確認できない。色調は内面が橙色～明赤褐色、外面が黄橙色～明黄褐色を呈する。268は焼成良好、胎土は密で胎土中に2mm以下の石英および長石を疎らに混入する。器面調整は摩滅のため不詳であるが、内面に一部ミガキ調整した痕跡が認められる。色調は内外面共に淡黄色～黄橙色を呈する。269は口縁部の約3/4を欠損するもので復元完形品である。器面調整はマンガンの付着が著しいため確認できないが、内器面に指頭圧痕およびヘラ状工具痕を残す。焼成は良好、胎土は密で胎土中に4mm以下の石英および長石を疎らに含む。色調は淡黄色～褐色を呈する。270の焼成は良好、胎土はやや粗く色調は内面が淡橙色～黄橙色、外面が淡黄色～黄橙色を呈する。器面調整は摩滅のため確認できない。271は焼成良好、胎土は密で胎土中に3mm以下の長石および石英を疎らに混入する。器面調整は摩滅のため不詳であるが、内面に指頭圧痕、外面にハケ目痕を確認できる。色調は内外面共に橙色を呈する。272は内器面にハケ目痕が一部認められる程度で器面調整は不詳である。焼成は不良で表面の剥落が著しい。色調は外面が黄橙色～橙色、内面が淡黄色を呈し、胎土は密で胎土中に2mm以下の石英、長石を含む。273の焼成は良好で、色調は外面が淡黄色および黄橙色、内面が橙色を呈す

古墳時代前期



第27図 SR 7 出土遺物実測図(17)

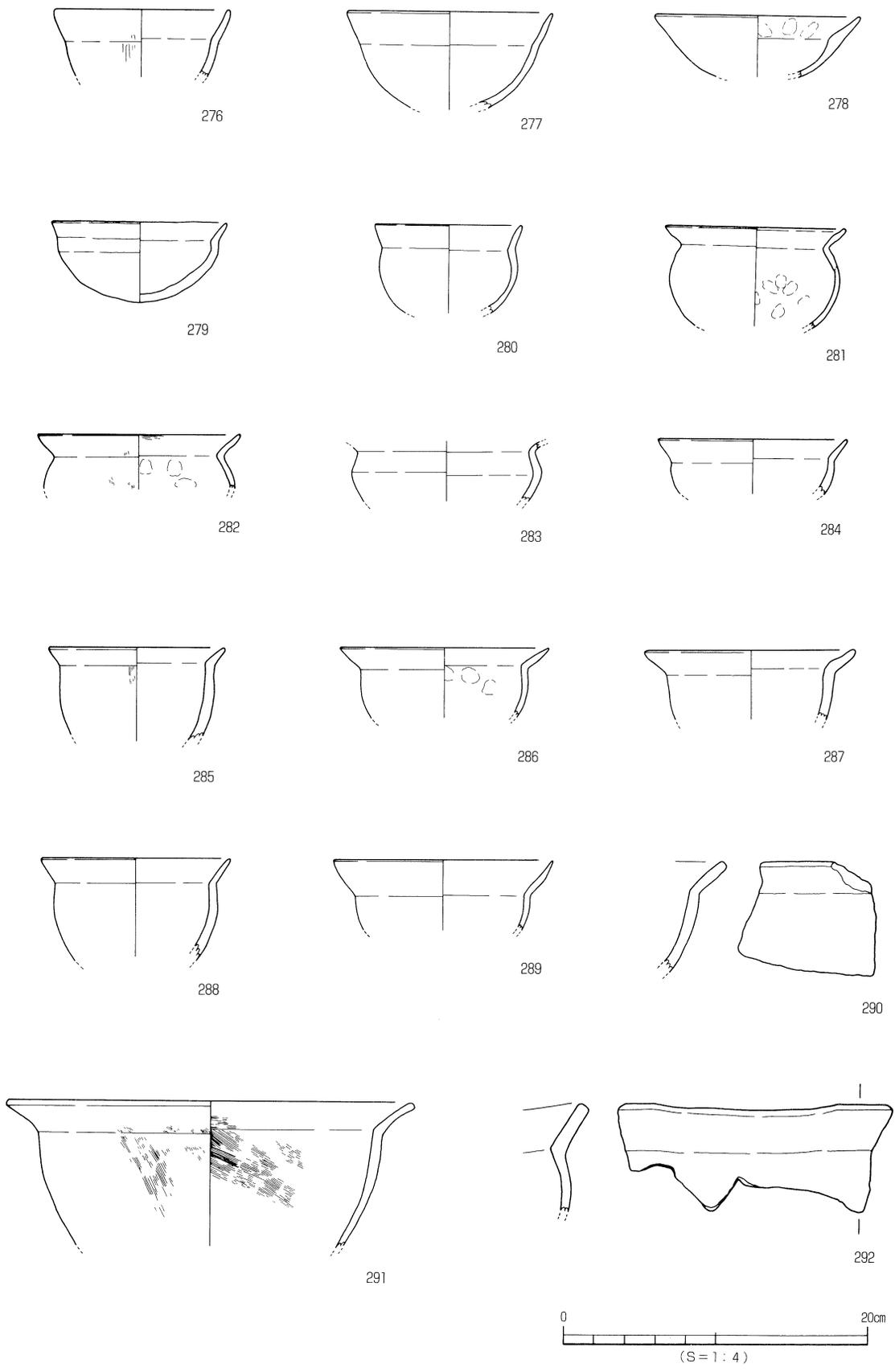
る。胎土は密であるが、胎土中に4 mm以下の石英、長石を疎らに混入する。器面調整は摩滅のため不詳であるが、外面をハケ目調整した後丁寧なナデ調整を施すと思われる。274・275は胴部の立上がり直線的で、底部が尖底気味になるものである。274は小さい平底を有し、全体を手捏ね成形するものである。全体の約7分の6を欠損する復元完形品である。焼成良好、胎土は緻密で胎土中に2 mm以下の石英、長石を疎らに混入する。色調は内面が灰白色～淡橙色、外面が淡黄色～黄橙色を呈する。275は全体の約1/2を欠損する復元完形品である。焼成は良好、胎土は緻密で堅固、色調は灰白色を呈する。器面調整は手捏ね成形後、内外面共にナデ調整を施すものである。胎土中に2 mm以下の石英および長石をわずかに混入する。

第28図276・277は胴部上半を軽く折り曲げることによって口縁部を形成する鉢形土器である。276の焼成はやや甘く、摩滅による表面の剥落が著しい。器面調整は不詳であるが、口縁部内面をナデ調整、胴部内面をハケ目調整、外面をミガキ調整した痕跡が認められる。胎土は密で、胎土中に1 mm以下の長石および金雲母を少量含む。色調は内面が淡黄色～黄灰色、外面が淡黄色～黄橙色を呈する。277は焼成良好、胎土は緻密で胎土中にほとんど砂粒を含有しない。器面調整は摩滅のため確認できない。色調は外面が淡黄色～黄橙色、内面が灰白色～淡黄色を呈する。

第28図278は内器面に段を作りだすことによって胴部と口縁部を区別する鉢形土器である。焼成は良好で胎土は緻密、胎土中にほとんど砂粒を混入しない。器面調整は摩滅のため不詳であるが、口縁部内面に一部、成形時に生じた指頭圧痕を残す。色調は内外面共に橙色を呈する。

第28図279～289は口縁部を大きく「く」の字に折り曲げる中型の鉢形土器である。279は完形品である。焼成良好で胎土は緻密、胎土中にほとんど砂粒を混入しない。器面調整は摩滅およびマンガン付着のため不詳であるが、内外面共にナデ調整を施す。色調は外面に一部黒斑が見られるが、それ以外は橙色～明赤褐色を呈する。280は胴部の約4/5と底部を欠損するものである。焼成良好、胎土は緻密で胎土中に金雲母を少量含む。色調は灰白色～淡黄色を呈し、器面調整は摩滅のため不明である。281は胴部の約1/5を遺存する。焼成は良好で胎土は密、胎土中に2 mm以下の石英および長石を多く混入する。調整は内外面共にナデ調整するもので、外器面は丁寧なナデ調整が施されるが内器面には指頭痕が顕著に残る。色調は外面が灰白色～淡橙色、内面が黄橙色～橙色を呈する。282は焼成良好、胎土は密で胎土中に1 mm以下の石英、長石を少量含む。器面調整は口縁部および胴部外面をハケ目調整の後ナデ調整、胴部内面をナデ調整する。色調は黄橙色を呈する。283は焼成が不良で摩滅のため表面剥落が著しい。色調は橙色を呈し、胎土は緻密で胎土中にほとんど砂粒を混入しない。284は焼成良好で胎土は緻密、胎土中に1 mm以下の石英および長石をわずかに混入する。色調は淡黄色を呈し、器面調整は摩滅のため不明である。285は焼成良好で胎土は密、胎土中に1 mm以下の石英、長石を疎らに含有する。色調は内外面共に淡橙色～淡黄色を呈し、器面調整はナデ調整およびハケ目調整を施す。286は焼成良好で外面が淡黄色～黒褐色、内面が黄灰色を呈する。胎土は緻密で胎土中に1 mm以下の石英を少量混入する。胴部内面をナデ調整、口縁部および胴部外面をハケ目調整の後ナデ調整するものである。287は焼成良好で堅固、胎土は緻密で胎土中に金雲母をわずかに含む。色調は外面がにぶい橙色、内面がにぶい黄橙色を呈する。器面調整は内外面ともハケ目調整の後ナデ調整を施す。288は焼成良好、胎土はやや粗く胎土中に2 mm以下の石英および金雲母を含む。摩滅のため不詳であるが、器面調整は内外面共にハケ目調整の後ナデ調整するものである。色調は外面が淡橙色～淡黄色、内面が灰白色～淡橙色を呈する。289は焼成不良、摩滅のため表面の剥落が著しい。胎土は密で、胎

古墳時代前期



第28図 S R 7 出土遺物実測図 (18)

土中にほとんど砂粒を混入しない。色調は内外面ともに黄橙色～橙色を呈する。

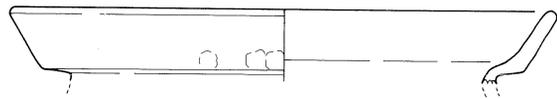
第28図290～292は口縁部を大きく「く」の字に折り曲げる大型の鉢形土器である。摩滅およびマンガ
ン付着のため詳細は不明であるが、内外面共にハケ目調整を施すものである。290は焼成良好、胎土
は粗く胎土中に3mm以下の石英および長石を多く混入する。色調は外面が淡黄色、内面が淡黄色およ
び褐灰色を呈する。291は焼成良好、胎土は粗く胎土中に3mm以下の石英、長石を多く含有する。色
調は外面が黄橙色～黄褐色、内面が淡黄色を呈する。292は焼成良好、胎土は緻密で堅固、胎土中に
ほとんど砂粒を混入しない。色調は黄橙色～淡黄色を呈する。

第29図293～296は山陰系の鉢(甕)形土器である。293～295は口縁部下端の突出が小さく、明らか
に山陰地方の土器とは異なるが、いずれも山陰地方の土器の影響を受けた土器として認識できるもの
である。293は小片で、口縁部の約1/13を遺存する。焼成良好、胎土は緻密で堅固、胎土中に1mm以
下の石英および金雲母を少量混入する。器面調整は外面にナデ調整、内面にハケ目工具を用いたナデ
調整を施す。色調は外面が灰白色～灰黄色、内面がにぶい黄橙色～灰黄褐色を呈する。294は口縁部
の1/21程しか残っていない小破片である。焼成良好、胎土は緻密で胎土中に1mm以下の長石および
金雲母を少量混入する。色調は淡黄色～黄橙色を呈し、器面調整は摩滅のため不明である。295は口
縁部の約15/16を欠損する。焼成は良好、胎土は密で胎土中に1mm前後の長石、石英および金雲母を
疎らに含有する。色調は内外面共に淡黄色～黄橙色を呈する。器面調整は摩滅のため不詳であるが、
内外面共にナデ調整を施すものと考えられる。296は鉢形土器で、口縁部および胴部の約4/5を欠損
するものである。焼成は良好、胎土は密で胎土中に2mm以下の石英、長石および金雲母を疎らに混入
する。摩滅のため不詳であるが、器面調整は胴部外面をハケ目調整、口縁部をナデ調整、胴部外面を
ヘラ削り調整するものである。胴部内面のヘラ削り調整は口縁部との境界付近まで及ぶものであるが、
削りの単位、方向などは摩滅のため確認できない。色調は外面が淡黄色～黄橙色、内面が淡橙色～黄
橙色を呈する。

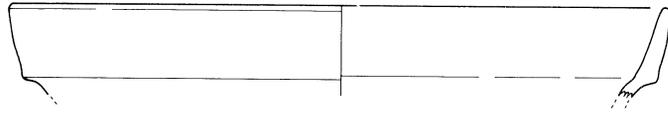
第29図297～299はミニチュア土器である。297は甕形土器で口縁部の約2/3を欠損する。手捏ね成
形したもので、器壁が厚く内外器面に指頭圧痕を顕著に残す。焼成は良好で胎土はやや粗く、胎土中
に1mm以下の石英および長石を多く混入する。色調は外面が淡黄色～暗灰黄色、内面が淡黄色～明黄
褐色を呈する。298・299はミニチュア土器の脚部でそれぞれ高坏および鉢形土器の脚部であると考え
られる。298は手捏ね成形したのちナデ調整を施す。焼成は良好で胎土は緻密、胎土中に砂粒をほと
んど混入しない。色調は内外面とも灰白色～淡黄色を呈する。299は摩滅および表面剥落のため器面
調整は不明である。焼成は甘く、胎土は密で胎土中に2mm以下の長石および石英を疎らに混入する。
色調は灰白色～淡黄色を呈する。

第29図300は手焙形土器である。「く」の字を呈する鉢部口縁から覆部にかけての小片で、覆部外面
および端部に波状文を施す。焼成は良好、胎土は緻密で堅固、胎土中に2mm以下の石英、長石を疎ら
に含む。器面調整は内外面ともにナデ調整を施すもので、色調は灰白色～淡黄色を呈する。

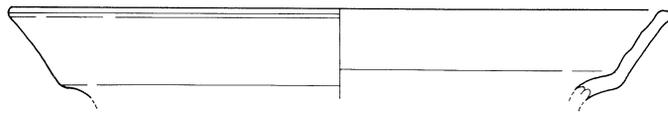
古墳時代前期



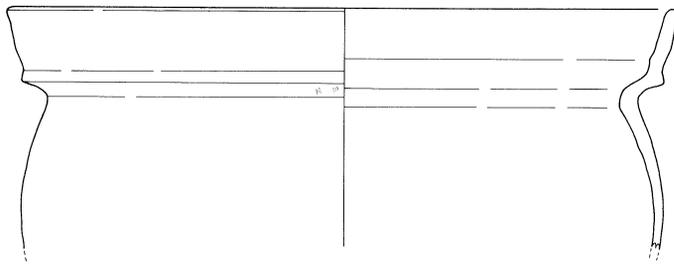
293



294



295



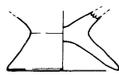
296



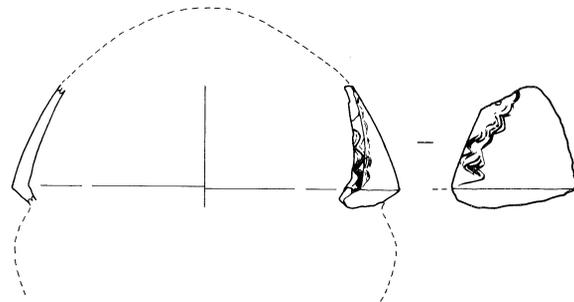
297



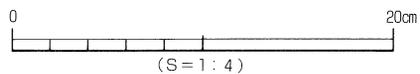
298



299



300



第29図 S R 7 出土遺物実測図 (19)

第Ⅲ層出土遺物（第30図～第31図316）

第30図301・303は壺形土器である。301は壺形土器の頸部片である。頸部に貼付突帯をめぐらし、突帯上に連続した格子目状の刻み目を施す。焼成は良好、胎土はやや粗く胎土中に2mm以下の石英、長石を多く含む。色調は外面が黄橙色、内面が褐灰色を呈する。摩滅が著しく、小片のため器面調整は確認できない。303は壺形土器の口縁部片である。大きくラッパ状に開く口縁部から直立気味の頸部を経て胴部に繋がるものと考えられる。焼成は良好で堅固、胎土はやや粗く、胎土中に1～3mm程の長石、石英を多く混入する。内外面とも灰白色～淡黄色を呈し、ナデ調整を施す。

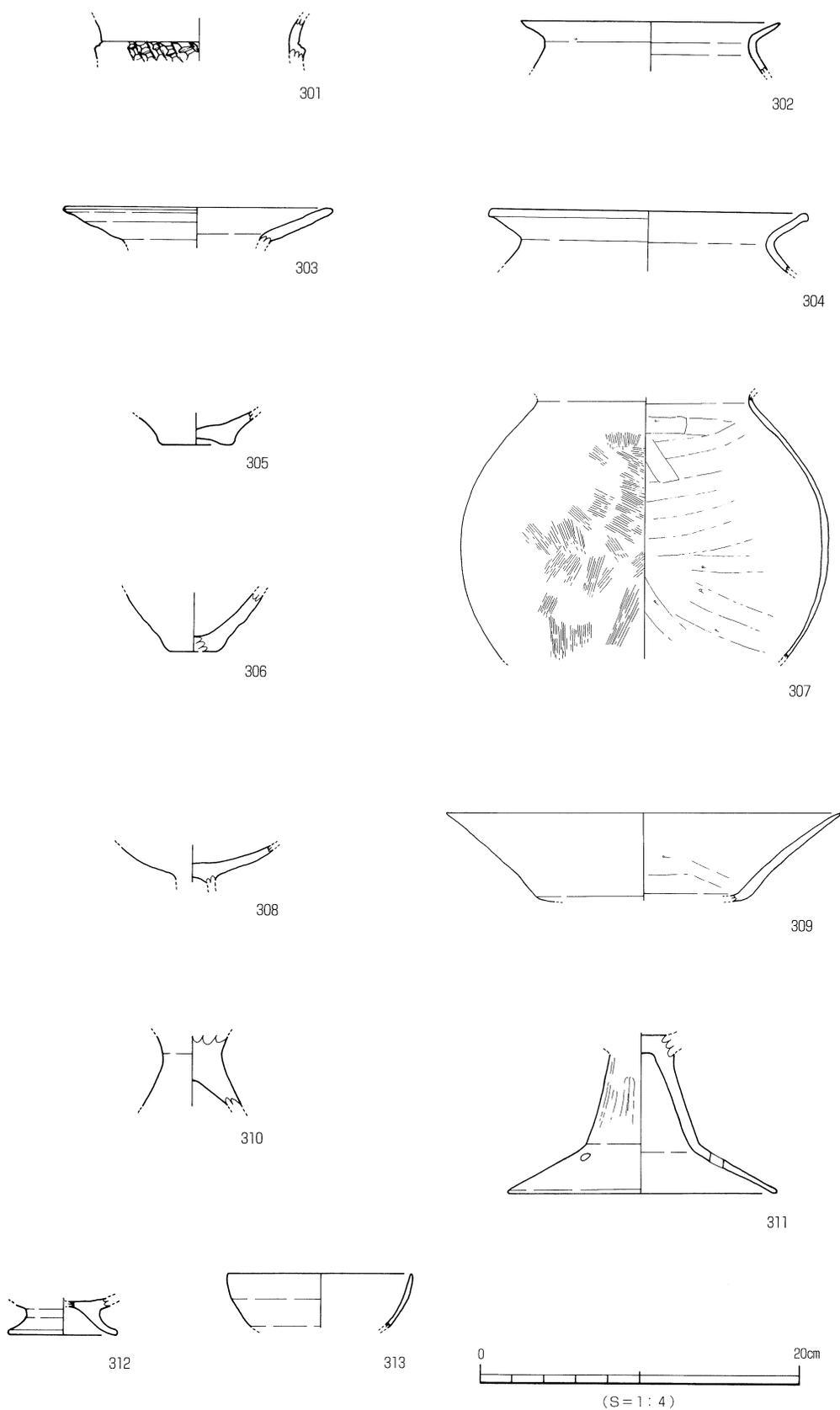
第30図302および304～307は甕形土器である。

302・304は甕形土器の口縁部片である。302の器面調整は摩滅が著しく不詳であるが、胴部内面をヘラ削り調整するものである。焼成は良好、胎土は密で胎土中に1mm前後の長石、石英および金雲母をわずかに混入する。色調は内外面とも黄橙色を呈する。304は胴部内面にヘラ削り調整、口縁部に丁寧なナデ調整を施し、口縁端部を上下に肥厚させるものである。焼成は良好、胎土は緻密で堅固、胎土中に1mm以下の石英を少量混入する。色調は内外面共に淡黄色を呈する。305および306は甕形土器の底部片である。305は底部の約1/3を欠損する。焼成良好、胎土は緻密で胎土中に1mm以下の長石を疎らに含む。器面調整は摩滅のため不詳であるが、外面をナデ調整、内面をハケ目調整するものと考えられる。色調は外面が橙色、内面が灰白色～淡黄色を呈する。306は底部の約1/2を欠損するもので、胎土が粗く胎土中に1mm前後の長石および石英を多く混入する。焼成は良好で、色調は外面が灰黄色、内面が黒褐色を呈する。器面調整は摩滅のため確認できない。307は約3/4を欠損する甕形土器の頸部から胴部にかけての破片である。器面調整は外面をハケ目調整、内面をヘラ削り調整したのち頸部にナデ調整を施すものである。焼成は良好、胎土は密で胎土中に3mm以下の長石および石英を疎らに含む。色調は外面が淡黄色～灰黄色、内面が淡黄色～明黄褐色を呈する。

第30図308～311は高坏である。308は坏部下半部が内湾して伸びるもので、大きく外反する上半部に続くと考えられる。器面調整は内外面ともナデ調整によって仕上げる。焼成は良好、胎土は密で胎土中に1～3mm程の長石および石英を疎らに含む。色調は内外面共に灰白色～淡黄色を呈する。309は坏部上半部がやや外反しながら直線的に広がるものである。短く伸びる坏下半部を経て311のような脚部に繋がると考えられる。焼成は良好で堅固、色調が灰白色を呈する。胎土は緻密で胎土中に1mm前後の長石および石英を疎らに混入する。器面調整は摩滅のため不詳であるが、外面にナデ調整、内面にミガキ調整した痕跡がわずかに認められる。310・311は脚部である。310は短く太い中実の脚部から裾部が大きく広がるもの、311は器壁が薄く、中空の脚部から裾部が屈曲して広がるものである。310の焼成は良好、胎土は粗く胎土中に1～2mm程の長石、石英および金雲母を多く含む。色調は内外面とも明褐色～黄橙色を呈し、器面調整は摩滅のため確認できない。311は脚裾部の約7/8を欠損し、裾部に5方向の焼成前穿孔を施すものである。焼成は良好で、色調は内外面とも橙色を呈する。胎土は緻密で胎土中に1mm以下の長石をわずかに含む。器面調整は外面にミガキ調整、内面にナデ調整を施す。

第30図312は山陰系の低脚坏で、脚および底部の約2/3を欠損する資料である。焼成は良好で胎土は緻密、胎土中に1mm前後の長石、石英を疎らに混入する。坏部内面および脚部内面は摩滅のため調整不明であるが、脚部外面にナデ調整を施した痕跡が確認できる。色調は脚部内面が褐灰色、それ以外が淡黄色～黄橙色を呈する。

古墳時代前期



第30図 S R 7 出土遺物実測図 (20)

第30図313および第31図314・315は鉢形土器である。313は垂直気味に立上がる口縁部を有する鉢形土器の破片資料である。器面調整は摩滅のため確認できない。焼成は良好で胎土は緻密、胎土中にはほとんど砂粒を混入しない。色調は内外面共に黄橙色～灰黄褐色を呈する。314は口縁部を大きく「く」の字に折り曲げる大型の鉢形土器である。摩滅のために器面調整は不明であるが、焼成は良好、胎土は緻密で胎土中に1mm前後の長石および石英を疎らに混入する。色調は外面が黄橙色および灰褐色、内面が灰褐色～にぶい橙色を呈する。315は山陰系の鉢形土器である。約7/8を欠損する口縁部から胴部にかけての破片資料である。焼成は良好で胎土は緻密、胎土中に2mm以下の長石、石英および金雲母を疎らに混入する。器面調整は胴部外面にハケ目調整、胴部内面にヘラ削り調整、口縁部にナデ調整を施す。色調は内外面ともに淡橙色～黄橙色を呈する。

第31図316は須恵器の坏蓋である。内面に当て具痕を残すもので、焼成は良好、胎土は緻密で胎土中に1mm前後の長石を疎らに含む。色調は内外面とも灰白色を呈する。

H 6 グリット出土遺物 (第31図317～320)

以下の遺物はSR7より直接出土したものではないが、本来SR7に伴っていた可能性が非常に高いため参考までに掲載するものである。

第31図317は壺形土器の頸部片である。焼成は良好で胎土は密、胎土中に1～2mm程の長石、石英を疎らに含む。色調は内外面ともに淡黄色を呈し、器面調整は摩滅のため不明である。

318は全体の約5/6を欠損する鉢形土器である。焼成は良好、胎土は密だが胎土中に1～3mm程の長石および石英を多く混入する。色調は外面が淡黄色～灰黄色、内面が淡黄色を呈し、器面調整は摩滅のため不明である。

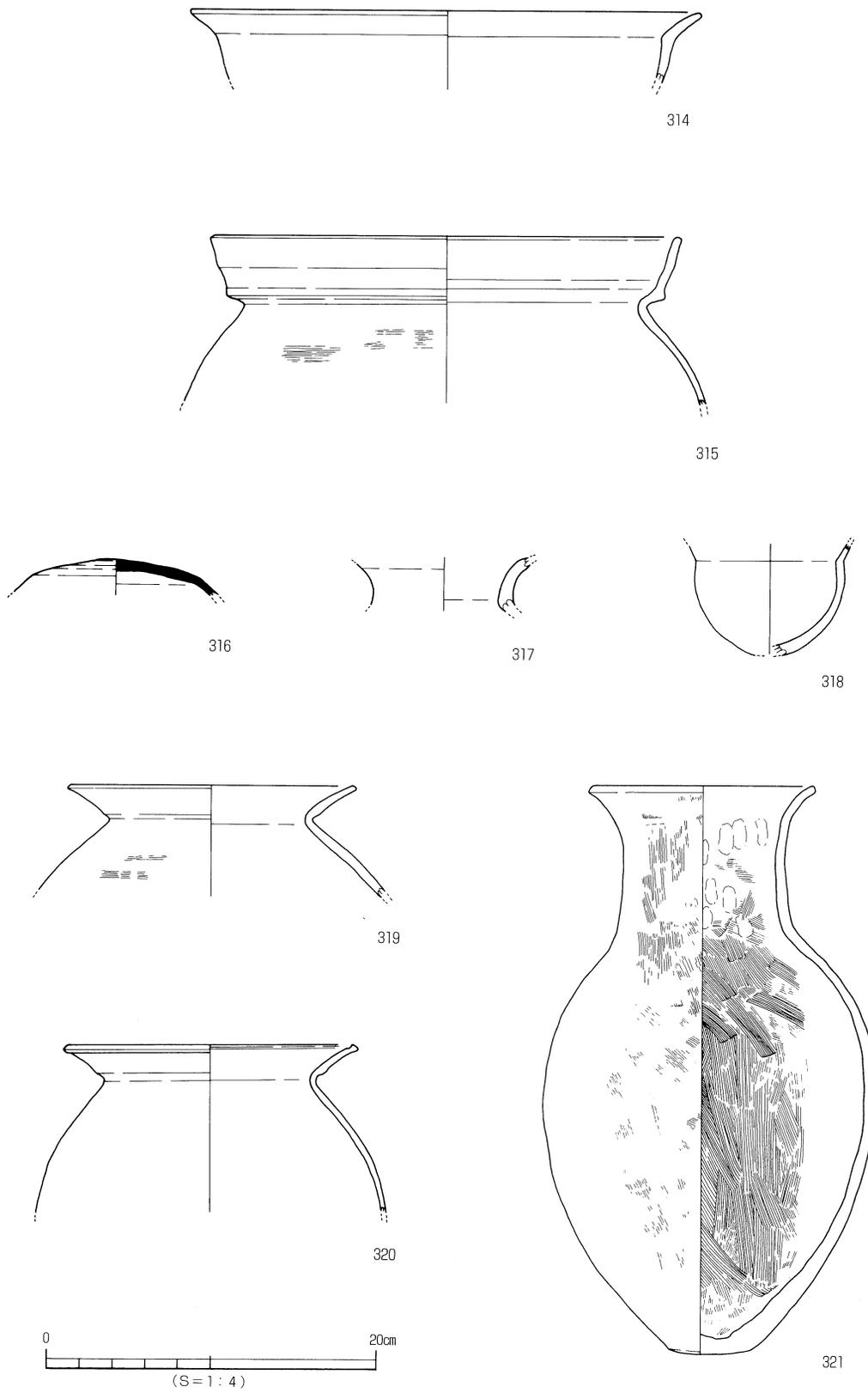
319および320は甕形土器である。器面調整は摩滅およびマンガン付着のため不詳であるが胴部内面にヘラ削り調整、胴部外面にハケ目調整を施すものである。319は口縁端部に面を有する。焼成は良好、胎土は粗く、胎土中に1mm前後の長石、石英および金雲母を多く含む。色調は外面が黄灰色～黒褐色、内面が淡黄色～橙色を呈する。320は口縁端部を上下に肥厚させるものである。焼成は良好で色調は外面が橙色、内面が淡黄色を呈する。胎土は粗く、胎土中に1mm前後の長石、石英および金雲母を多く含む。

SR 7 側壁(第Ⅶ層)中出土遺物 (第31図321)

第31図321はSR7の調査過程において、SR7の側壁中より出土した直口壺である。口縁部が垂直気味に立上がり、口縁端部が緩やかに外反するものである。土器がかなり軟化した状態であったため、現在は口縁部から底部にかけて約3分の1を欠損するが、本来は完形品として出土したものである。器面調整は、内面にハケ目調整を施した後、頸部から口縁部にかけてナデ調整し、外器面にハケ目調整を施した後ナデ調整を施す。焼成は良好で胎土は密、胎土中に1mm以下の石英、長石および金雲母を少量混入する。色調は外面が淡黄色～黄橙色、内面が淡黄色～黄灰色を呈する。

時期：第Ⅰ層から第Ⅲ層まで分層した結果、明確な時期差は抽出できなかった。従って、SR7は古墳時代前期初頭段階の短期間中に機能し廃絶した流路であると考えられる。[第5章参照]

古墳時代前期



第31図 SR 7, H 6 グリット, SR 7 側壁中出土遺物実測図

土器溜まり（第32図）

調査区の中央部からやや北よりの地点にて検出された。平面形態は不定形、規模は東西長約6.0m、南北長約2.4mを測る。深さは4～22cmを測り、断面形態は皿状を呈する。埋土は暗褐色粘質粗砂の単一層である。SR7の上に堆積していることから、SR7よりもやや新しい時期に形成されたものである。SR7検出面（第Ⅶ層）が後世にかなり削平されていることを考慮すると、本来はSR7に伴う遺構（SR7の一部）であった可能性がある。

出土遺物（第33図）

322～324は甕形土器の口縁部から肩部にかけての破片である。322の器面調整は摩滅およびマンガン付着のため不詳であるが、口縁端部をつまみ上げ状に肥厚させ、胴部内面にヘラ削り調整、胴部外面にハケ目調整を施すものである。焼成は良好で胎土は密、胎土中に1mm前後の長石、石英および金雲母を混入する。色調は内外面ともに淡橙色～淡黄色を呈する。323は器壁が厚く、胴部内面にハケ目調整の後ナデ調整を施すものである。焼成は良好、胎土はやや粗く、胎土中に1～3mmの長石および石英を多く含有する。色調は外面が黄橙色～明黄褐色、内面が灰白色～淡黄色を呈する。324は口縁部の約4分の3を欠損するもので、摩滅のため表面剥落が著しい。焼成は良好、胎土はやや粗く、胎土中に1mm前後の石英および長石を多く含む。色調は内外面ともに灰白色を呈する。

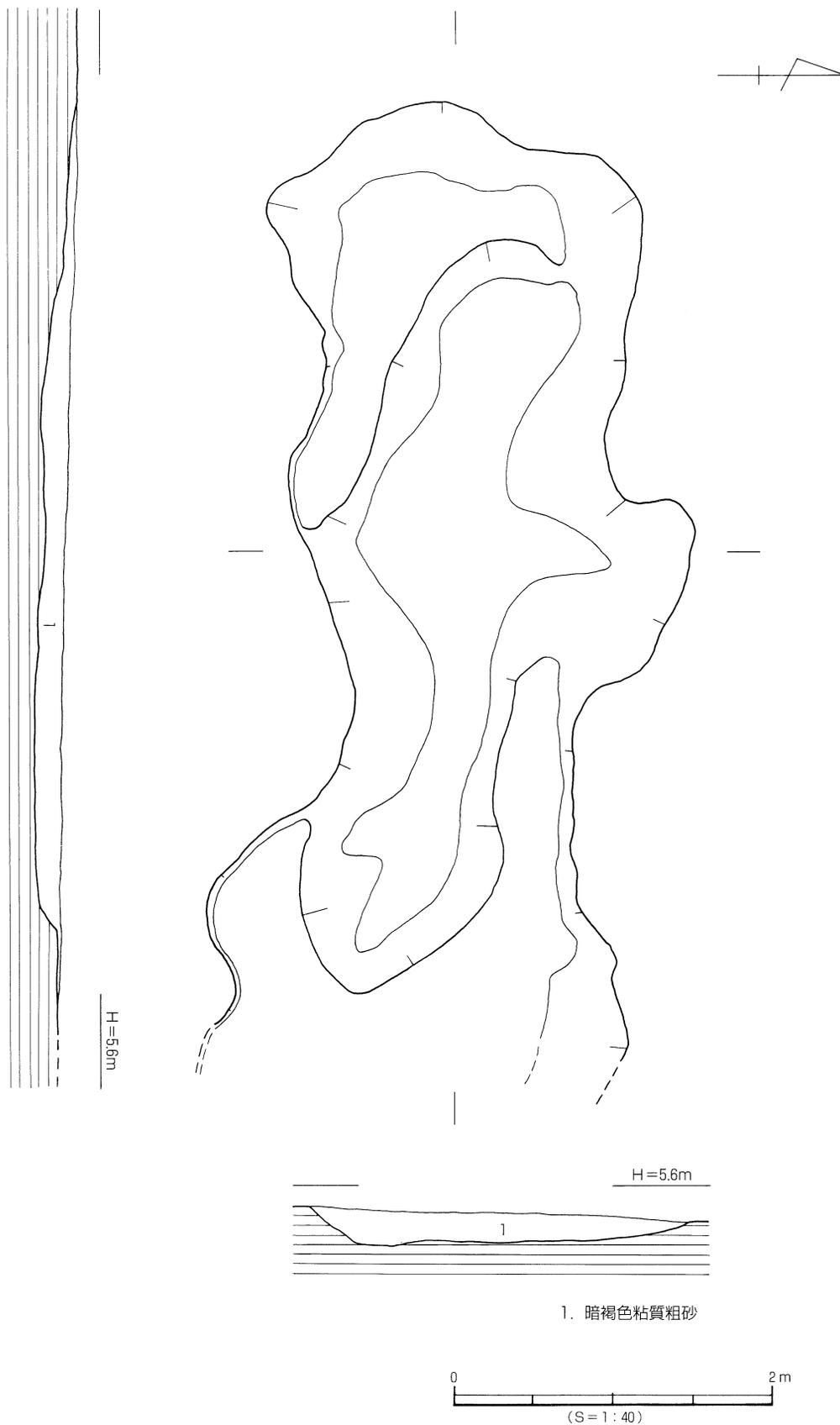
325～328は甕形土器の底部である。325はくびれ上げ底状、326および327は平底、328は平底気味の丸底を呈する。325は底部の約3/4を欠損する破片資料である。焼成は良好で、色調は外面が赤橙色、内面が淡黄色を呈する。胎土は密で、胎土中に1～4mm程の石英、長石をわずかに混入する。326は焼成不良、胎土は粗く胎土中に1～2mm程の長石、石英を疎らに含有する。摩滅による表面剥落が著しく、内面に指頭圧痕以外は確認できない。色調は外面が橙色および黄灰色、内面が淡黄色～黄灰色を呈する。327の焼成は良好、胎土はやや粗く、胎土中に1～3mm程の長石および石英を多く混入する。器面調整は外面にハケ目調整、内面にナデ調整を施すもので、特に底部内面には指頭圧痕が顕著に残る。色調は外面が灰白色～淡黄色、内面が黄灰色を呈する。328は焼成良好、胎土はやや粗く、胎土中に1～3mm程の長石、石英および金雲母を多く混入する。器面調整は内外面ともハケ目調整を施し、色調は外面が淡黄色～黄橙色、内面が黄灰色を呈する。

329は弥生土器である。壺形土器の口縁部であるが摩滅が著しく器面調整は不明である。焼成は良好、胎土はやや粗く胎土中に2mm以下の長石および石英を多く含む。色調は外面が黄橙色～橙色、内面が黄橙色を呈する。330は底径15.8cmを測る大型壺形土器の底部片である。焼成は良好で胎土は粗く、胎土中に1～3mm程の長石および石英を多く含有する。色調は外面が黄橙色～橙色、内面が灰黄色～褐灰色を呈する。調整は摩滅が著しく不詳であるが、内面をハケ目工具を用いてナデつけるものと考えられる。

331は鉢形土器で、全体の約1/2を欠損する復元完形品である。平底の底部および大きく「く」の字に折れ曲がる口縁部を有する。器面調整は底部をナデ調整、その他を内外面ともにハケ目調整を施す。焼成は良好で胎土はやや粗く、胎土中に3mm以下の石英、長石を多く含む。色調は内外面ともに淡黄色を呈する。

時期：出土遺物よりSR7と同時期、すなわち古墳時代前期初頭であると考えられる。

古墳時代前期

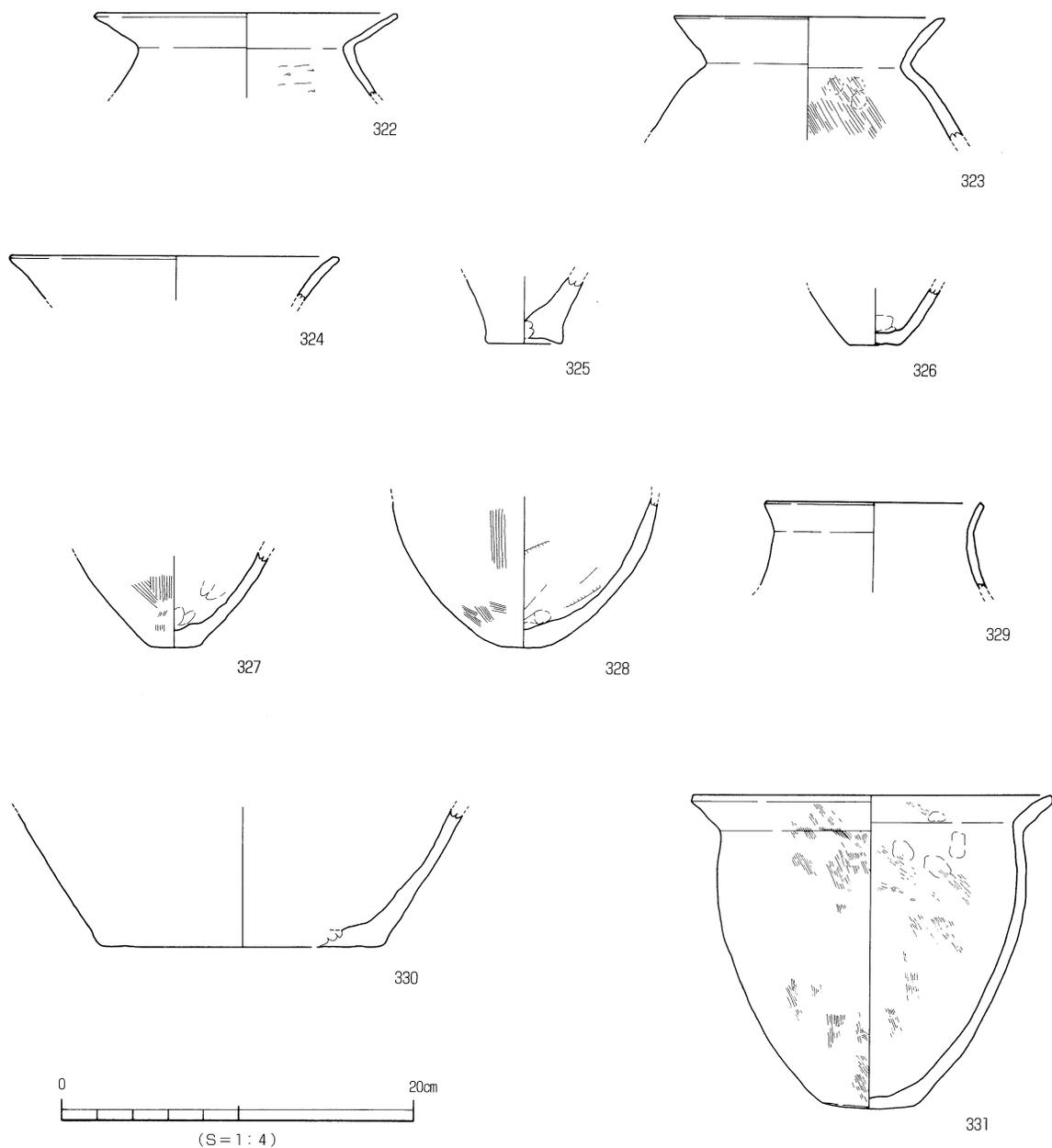


第32図 土器溜まり測量図

竪穴式住居址

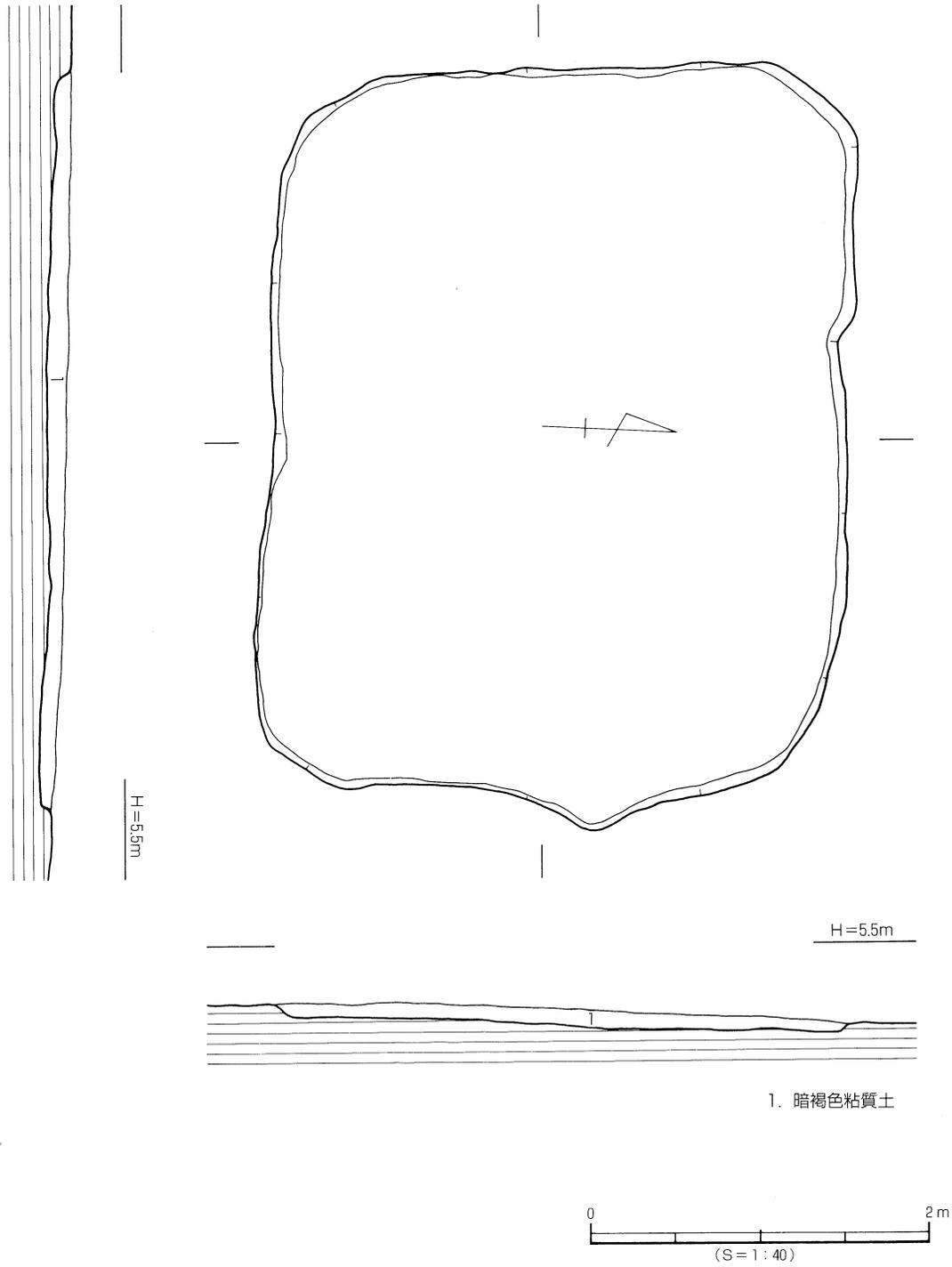
S B 1 (第34図)

本住居址は調査区中央東部に位置し、ほぼ同時期の土坑であるSK1と並ぶような状態で検出された。平面形態は隅丸長方形で、規模は長辺4.40m、短辺3.30m、深さ1.6~5.0cmを測る。また、埋土は暗褐色粘質土の単一層である。住居址の内部及びその周囲から柱穴は検出されておらず、焼土などの炉址に関連する遺構も検出されていない。



第33図 土器溜まり出土遺物実測図

古墳時代前期



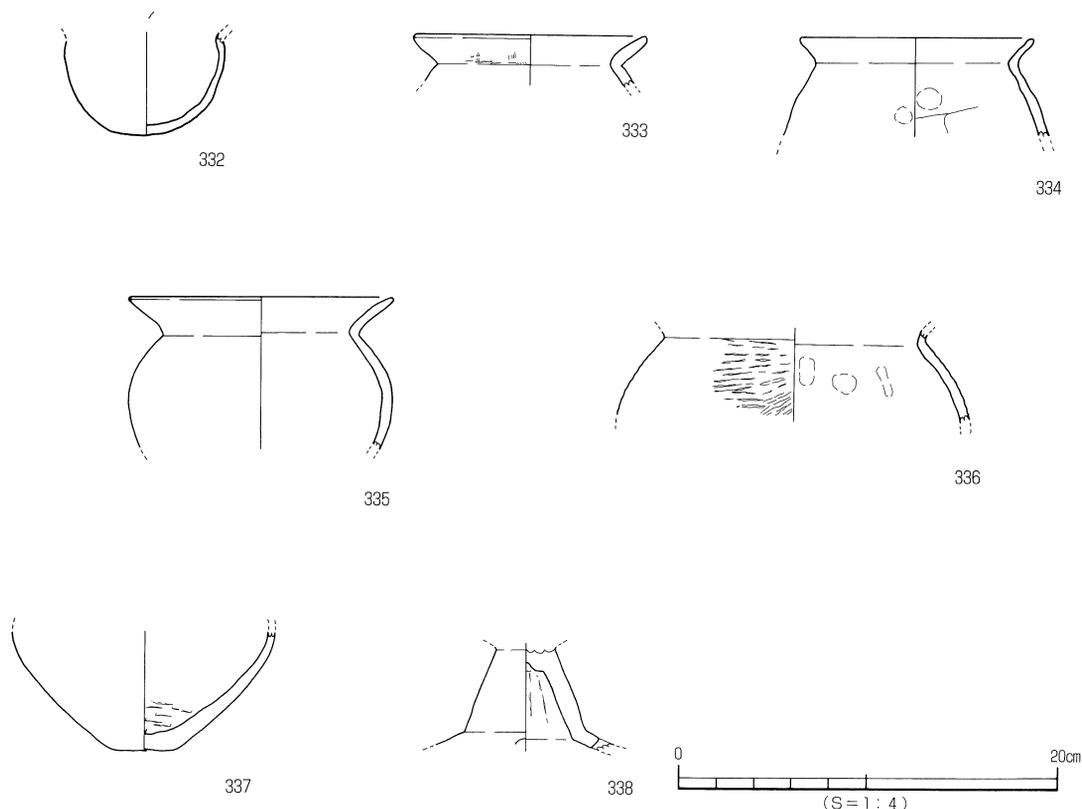
第34図 SB 1 測量図

出土遺物（第35図、第76図549）

第35図332は小型丸底鉢の体部である。口縁部のほとんどを欠損するが、胴部の遺存状態は比較的に良好である。焼成はやや甘く、摩滅のため表面の剥落が著しい。器面調整は不詳であるが、内外面ともにナデ調整を施した痕跡が認められる。胎土は密で胎土中に1～3mm程度の石英を疎らに含む。色調は外面が黄橙色～灰白色、内面が淡黄色～灰白色を呈する。

333～336は甕形土器である。333は小型の甕形土器で口縁部の約2/3を欠損する。焼成は良好で胎土は緻密であるが、摩滅のため表面の剥落が著しい。色調は内外面ともに黄橙色を呈し、胎土中にほとんど砂粒を混入しない。334は焼成良好、胎土は緻密で胎土中に1～2mm程の石英、長石を疎らに混入する。器面調整は摩滅が著しく不詳であるが、胴部内面にヘラ削り調整、胴部外面にタタキ成形の痕跡が認められる。色調は外面が黄橙色～橙色、内面が淡橙色を呈する。335は約4/5を欠損する口縁部から胴部にかけての破片である。焼成良好、胎土は緻密で胎土中に3mm以下の長石、石英を少量含む。器面調整は摩滅のため確認できない。色調は内外面ともに淡橙色～橙色を呈する。336は約5分の4を欠損する胴部小片である。外面にタタキ成形の痕跡を顕著に残し、内面にはナデ調整が施される。焼成は良好で胎土は緻密、胎土中に2mm以下の石英を少量含む。色調は内外面ともに灰白色を呈する。

337は壺形土器の底部片である。器面調整は摩滅、表面剥落が著しいため不詳であるが、底部内面にハケ目工具の痕跡を顕著に残す。焼成は良好、胎土は密で胎土中に1mm以下の石英、長石を少量含む。色調は外面が淡黄色～黄橙色、内面が灰白色～淡黄色を呈す。



第35図 S B 1 出土遺物実測図

338は高坏で、坏部および脚部の約1/2を欠損する。屈曲して広がる中空の脚部を有し、裾部に焼成前穿孔を施す。焼成良好で胎土は緻密、胎土中に1mm以下の石英および長石を疎らに混入する。摩滅のため器面調整は不明であるが、脚部内面に絞り痕が認められる。色調は外面が淡黄色、内面が黄橙色を呈する。

時期：出土遺物のほとんどが破片であり完形品が1点もないことから、これらの出土遺物は住居址の廃絶に伴って廃棄されたものであると考えられる。甕形土器(334・336)より古墳時代前期初頭に属すると考えられる。

S B 2 (第36図)

本住居址は、調査区南壁にかかる形で検出された。住居址の北東隅と北辺の一部を検出したに過ぎず正確な規模は不明であるが、検出長は東西が2.5m、南北0.7mで、深さ4～10cmを測る。埋土は暗褐色粘質土の単一層である。また、検出した範囲内に柱穴や炉址などは確認されていない。

出土遺物 (第38図339～341)

339は甕形土器の口縁部小片である。焼成はやや甘く、胎土は密で胎土中に1mm以下の石英、長石および金雲母を少量含む。器面調整は摩滅のため表面剥落が著しく不詳だが、口縁部外面にナデ調整を施す。色調は内外面ともに淡黄色を呈する。

340は甕形土器の底部である。底部はしっかりと安定する平底で、外面にタタキ成形痕、内面にハケ目工具痕を残す。焼成は良好、胎土は緻密、胎土中に1mm以下の石英、長石をわずかに混入する。色調は外面が淡黄色および明黄褐色、内面が淡黄色を呈する。

341は尖底気味の丸底状を呈する底部である。摩滅およびマンガンの付着が著しいが、内外面ともハケ目調整の痕跡が認められる。焼成は良好、胎土は緻密で1mm前後の長石、石英をわずかに混入する。色調は外面が淡橙色～黄橙色および褐色、内面が灰白色～淡黄色を呈する。

時期：出土遺物の特徴および埋土の色調から、S B 1と同時期、すなわち古墳時代前期初頭に属すると考えられる。

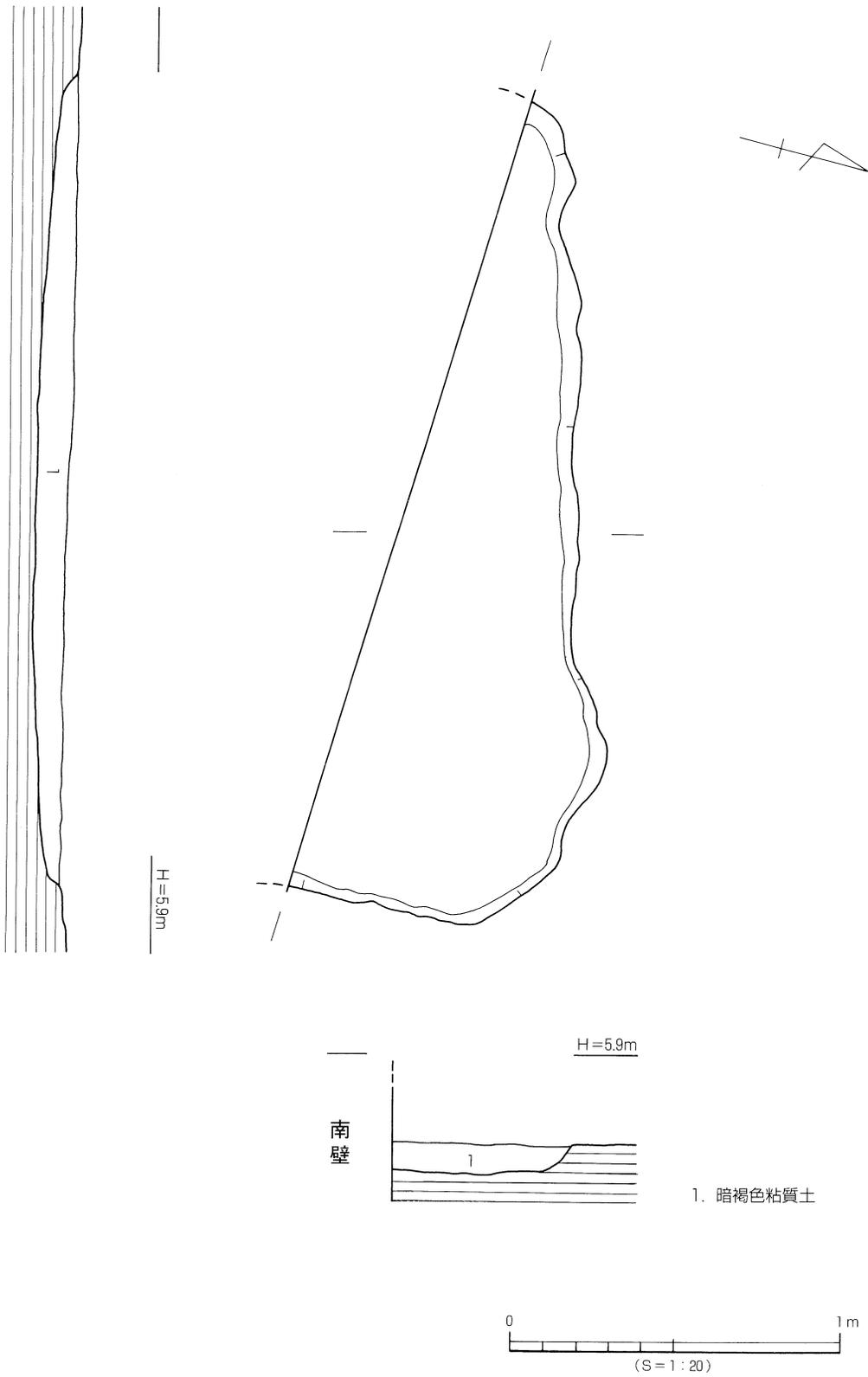
S B 3 (第37図)

本住居址は、調査区北西部の「1区」と「2区」に跨がる位置に検出された。S R 5の調査終了後、トレンチ(T 3)に切られる状態での検出である。住居址の規模は長辺3.2m、短辺3.0m、深さ6～10cmを測り、平面形態は隅丸方形を呈する。埋土は黒(褐)色粘質土の単一層である。

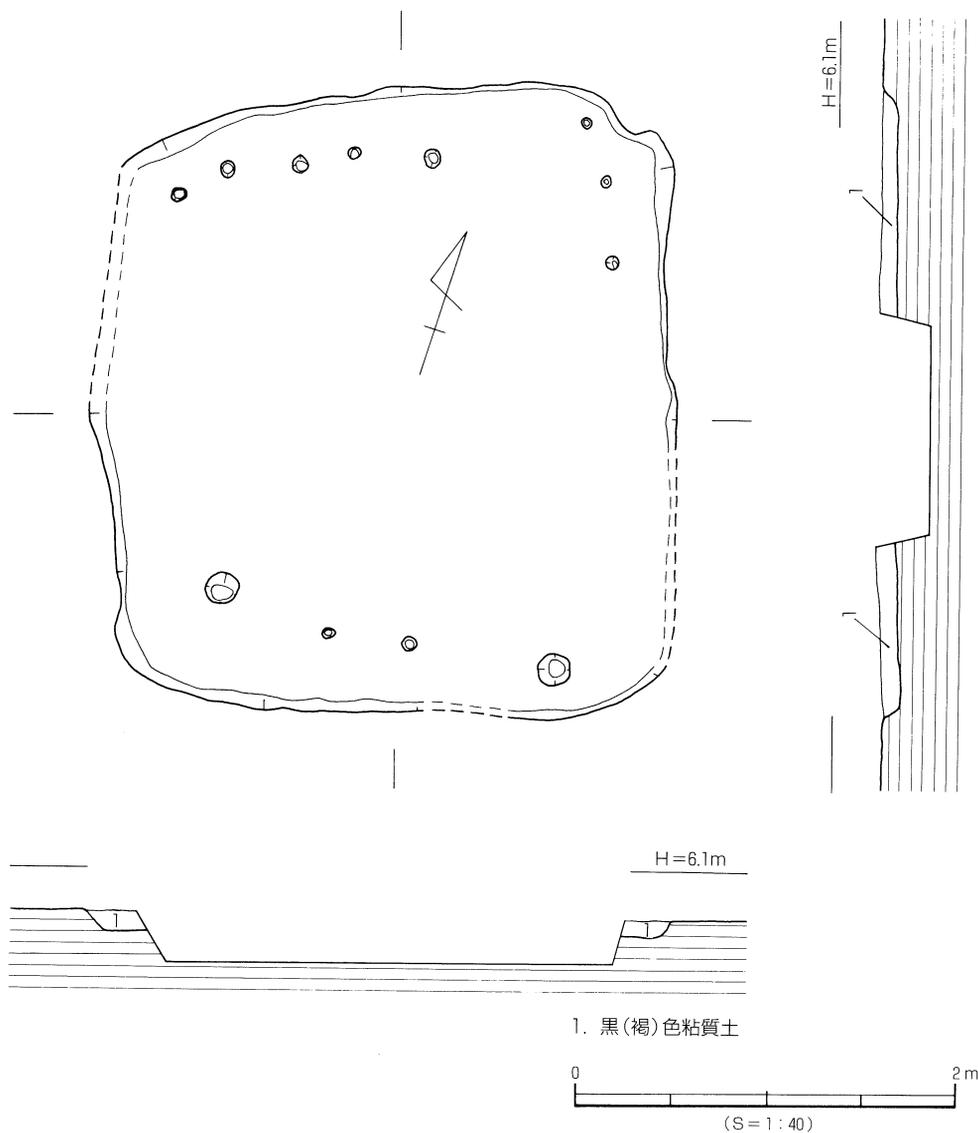
特筆すべきこととしては、住居址の床面から壁沿いに直径10～32cm、深さ2～10cm程度の小ピットがほぼ等間隔に並んで検出された。これらのピットは、本住居址の壁体あるいは上屋構造に深く関わっていた可能性がある。

出土遺物 (第38図342～346)

342および346は壺形土器である。342は約1/3を欠損する頸部から胴部にかけての破片である。焼成は良好、胎土は密で胎土中に1mm程の石英を疎らに混入する。器面調整は外面にハケ目調整を加えた後ナデ調整、内面にナデ調整を施す。色調は外面が淡橙色～淡黄色、内面が灰白色～黄橙色を呈する。346は壺形土器の底部であり、小さいボタン状の底部から緩やかに立ち上がる。器面調整は内面は摩滅のため不明であるが、外面にハケ目調整を施す。色調は内外面ともに淡黄色を呈する。



第36図 S B 2 測量図



第37図 SB 3 測量図

343～345は甕形土器である。343は口縁部片で口縁端部を内側につまみ上げ状に肥厚させるものである。内外面とも丁寧なナデ調整を施し、色調は淡黄色を呈する。焼成良好、胎土は緻密で胎土中に1mm以下の石英および金雲母をわずかに混入する。344は焼成不良で摩滅のため器面調整は確認できない。胎土は密で、胎土中に1mm以下の石英を少量含む。色調は淡黄色～黄橙色を呈する。345は焼成良好で胎土はやや粗く、胎土中に1～2mm程の石英、長石を多く含む。器面調整は外面にハケ目調整、内面にハケ目調整の後ナデ調整を施す。色調は外面が淡黄色、内面が淡黄色～黄灰色を呈する。

時期：出土遺物の特徴より古墳時代前期初頭に属すると考えられる。

SB4 (SD10) (第39図)

調査区北西端部において、SR19およびSR20の調査終了後に検出された。周壁溝(SD10)のみの検出である。また、溝自体の遺存状態は悪く、南半分が削平されているために正確な規模は不明だが恐らく、一辺が2.2m前後の隅丸方形もしくは、隅丸長方形になるものと考えられる。溝の深さは4cmから20cmで、埋土は黒(褐)色粘質土である。

出土遺物 (第43図349)

本住居址の出土遺物は少なく、さらに破片資料が多いため図化可能なものは349だけである。

349は甕形土器の口縁部片である。口縁部にナデ調整、胴部外面にハケ目調整、胴部内面にヘラ削り調整を施す。焼成は良好で胎土は密、胎土中に1mm以下の石英を疎らに含む。色調は淡黄色を呈する。

時期：埋土および349の特徴より、古墳時代前期初頭に属すると考えられる。

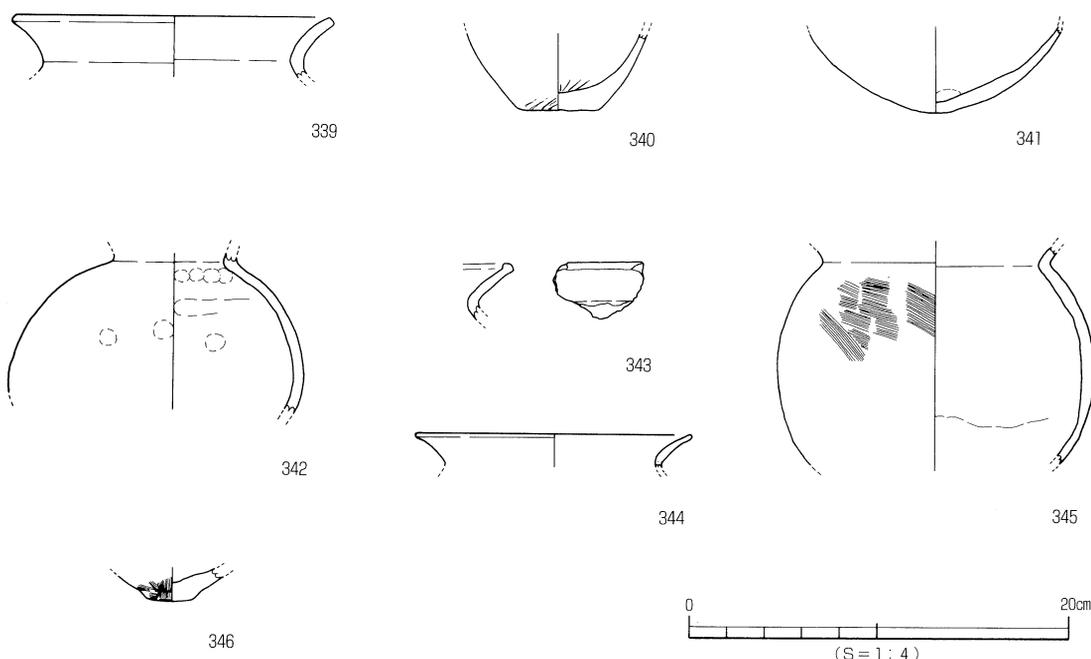
SB5・SB6・SB7 (第5図・第54図)

調査区中央部から南東よりの地点において、3基が互いに重なり合う状態で検出した。3基共、痕跡のみの検出で、辛うじて南半部の平面規模が分かるにすぎない。

SB5は一辺が約3.2m、SB6は約4.4mの隅丸方形、あるいは隅丸長方形をしていたと考えられる。SB7は3基中最も残りが悪く、規模は不明であるが、平面プランに関しては隅丸(長)方形を呈していた可能性が高い。また、埋土の色調は3基共黒～暗褐色粘質土である。

出土遺物

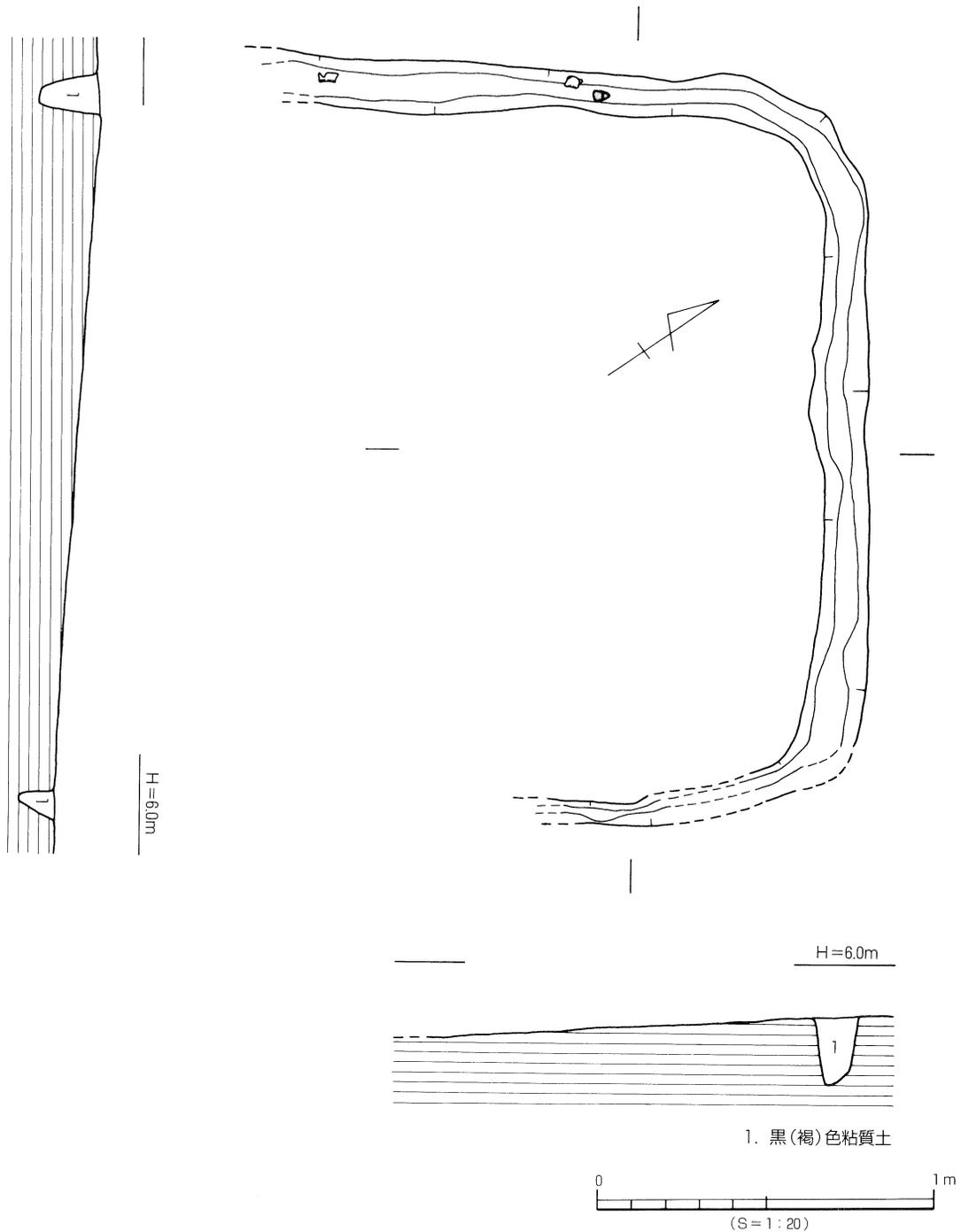
本住居址から遺物は出土していない。



第38図 SB2, SB3 出土遺物実測図

古墳時代前期

時期：古墳時代後期に属するSD 1 およびSD 2 に切られていることより、古墳時代後期を下限とする時期に属する。埋土の色調より古墳時代前期初頭に属する可能性が高い。また、3基の切り合い関係よりSB 5が最も古く、SB 6、SB 7の順に新しい時期の住居址であると考えられる。3基がほとんど同じ場所に存在すること、さらに埋土の色調に若干の違いがあるものの3基共ほとんど同様であることより、短期間中に建て替えが行なわれた可能性を想定しておく。



第39図 SB 4 (SD 10) 測量図

土 坑

S K 1 (第40図)

調査区中央部東よりの位置において、S B 1 と並ぶ様な状態で検出された。平面形態は長楕円形を呈し、長径2.46m、短径0.8m、深さ6 cmを測る。埋土はS B 1 と同様、暗褐色粘質土の単一層である。遺物は主に床面に着いた状態で出土した。

出土遺物 (第43図350・351)

350は二重口縁を有する山陰系の鉢形土器である。口縁部にナデ調整を施すもので、強いナデにより口縁部下端の突出が顕著である。口縁部が外方に大きく広がり、口縁端部に平坦面を有する。胴部の調整は外面がハケ目調整、内面をヘラ削りしており、削りが頸部から胴部下半にまで及んでいる。色調は灰白色～淡橙色、淡黄色を呈し、胎土中に5 mm以下の石英、長石をわずかに含む。

351は約2/3を欠損する大型壺形土器の底部片である。大きなボタン状の底部から緩やかに立上がるもので、外面にナデ調整、内面にハケ目調整を施す。焼成は良好、胎土は緻密で胎土中にほとんど砂粒を混入しない。色調は内外面ともに淡黄色～黄橙色を呈する。

時期：出土遺物の特徴および埋土の色調より、古墳時代前期初頭に属すると考えられる。

S K 3 (第41図)

調査区の南東部、古墳時代後期の掘立柱建物(掘立1)に切られる形で検出された。平面プランは楕円形状を呈し、規模が長軸2.3m、短軸1.3m、深さ3～4 cmを測る。埋土は、暗褐色粘質土である。

出土遺物

数点の土師器の破片が出土したが、摩滅が激しく凶化に耐え得る遺物はない。

時期：出土遺物および埋土の色、掘立1との切り合い関係などより、古墳時代前期初頭に属する。

溝状遺構

S D 4 (第42図)

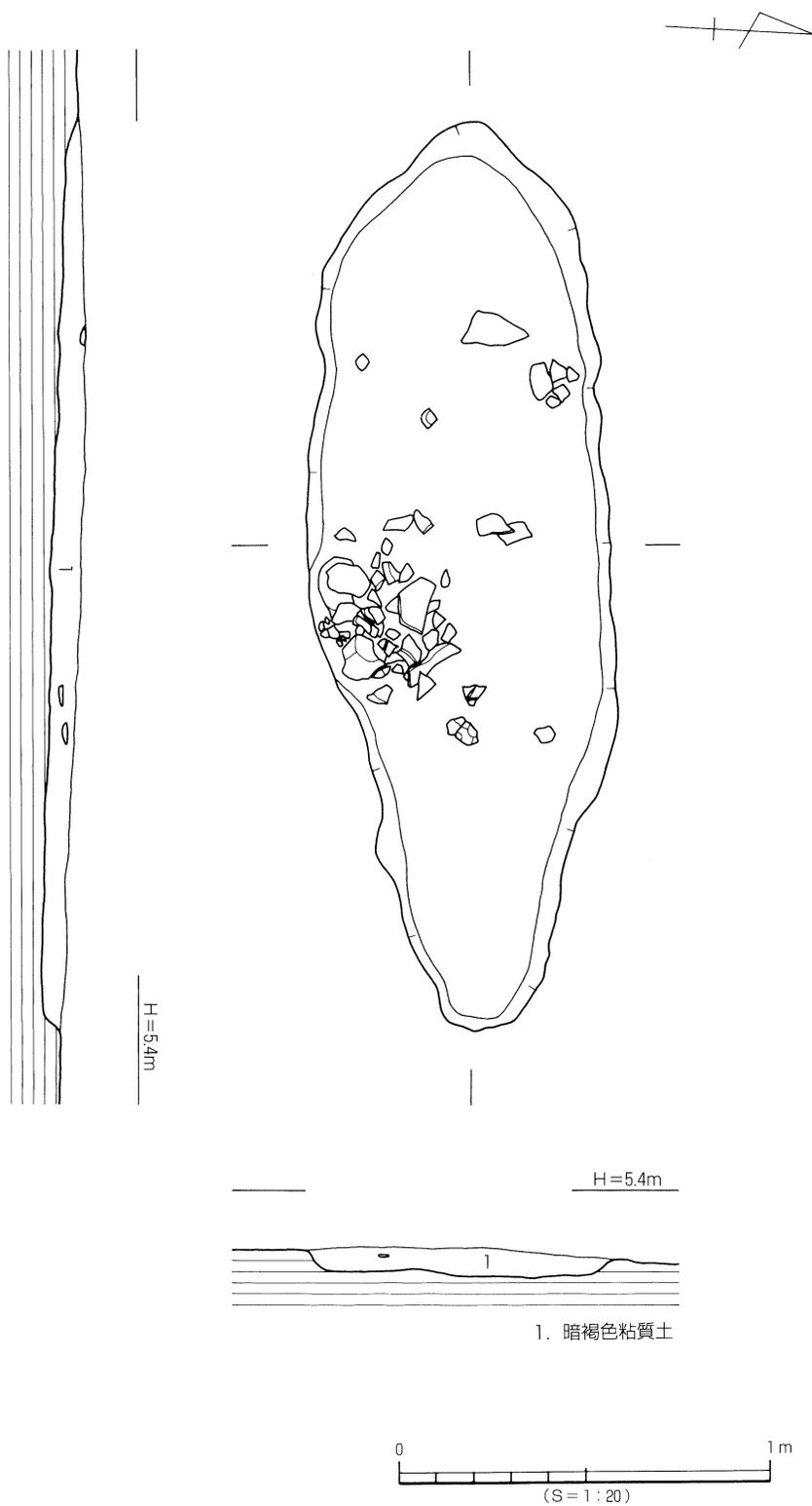
調査区の中央部西よりに位置し、北西部から南東部に向かって延びる。埋土は暗褐色粘質土の単一層で、幅20～42cm、検出長約12mを測る。また、S R 2・S R 3・S R 4・S R 6・S R 15と切り合い関係を有し、そのいずれにも切られる状態で検出した。

出土遺物 (第43図347・348)

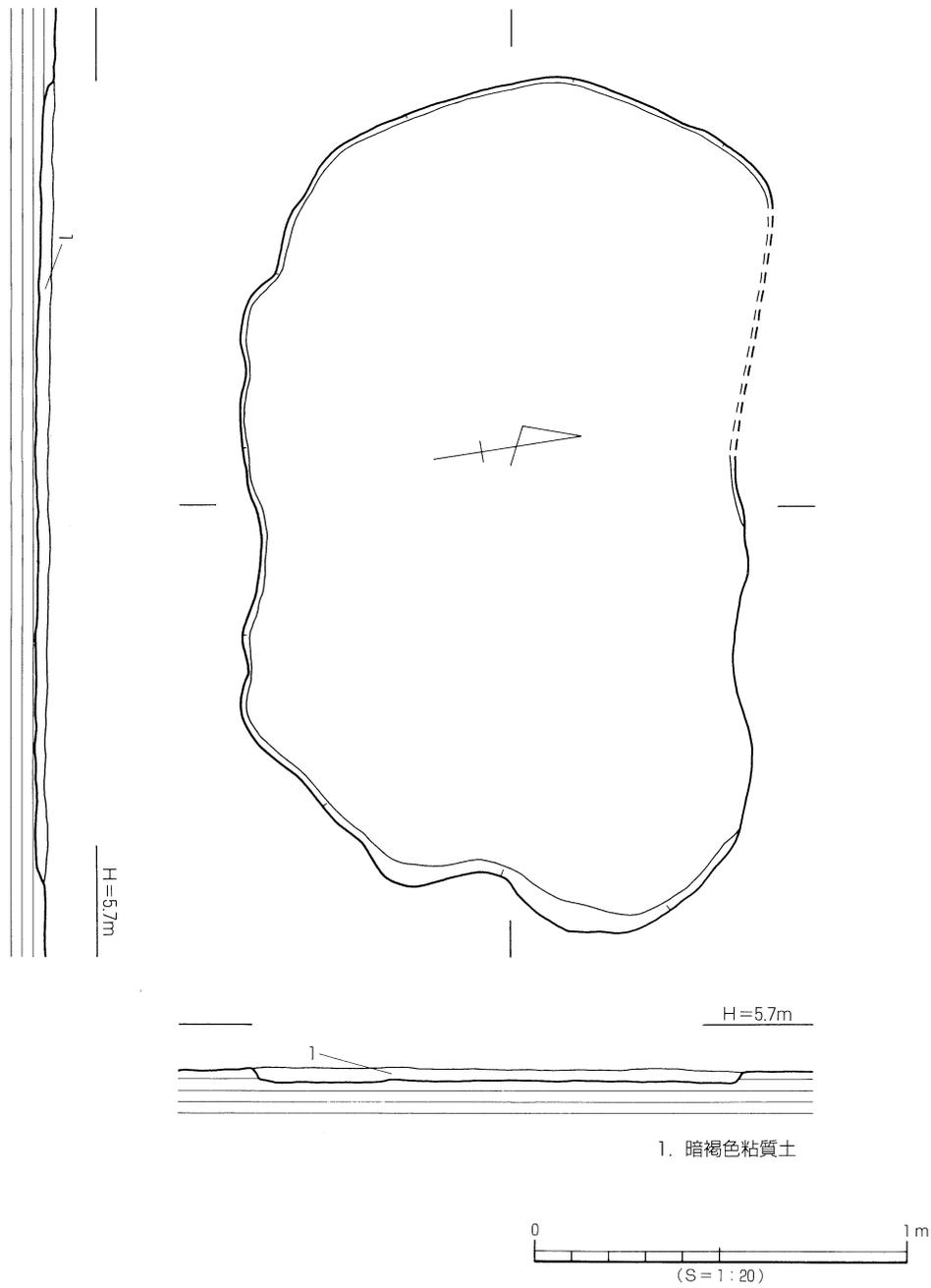
347は小型丸底鉢で、短い口縁部を緩やかに外方に折り曲げる。器面調整は内面、外面とも摩滅のために不詳だが、外面にハケ目調整の痕跡を確認できる。破片資料であり、全体の約3分の1が遺存するにすぎない。焼成は良好で胎土は緻密、胎土中に1 mm以下の石英、長石および金雲母をわずかに含む。色調は内外面ともに淡黄色～黄灰色を呈する。

348は甕形土器の口縁部片である。口縁部に強いナデ調整を施し、その結果口縁端部を上下に肥厚させる。焼成は良好、胎土は緻密で胎土中にほとんど砂粒を混入しない。胴部外面にナデ調整、胴部内面にヘラ削り調整を施し、色調は黄橙色～淡黄色を呈する。

時期：出土遺物の特徴、埋土の色調より、古墳時代前期初頭に属する。



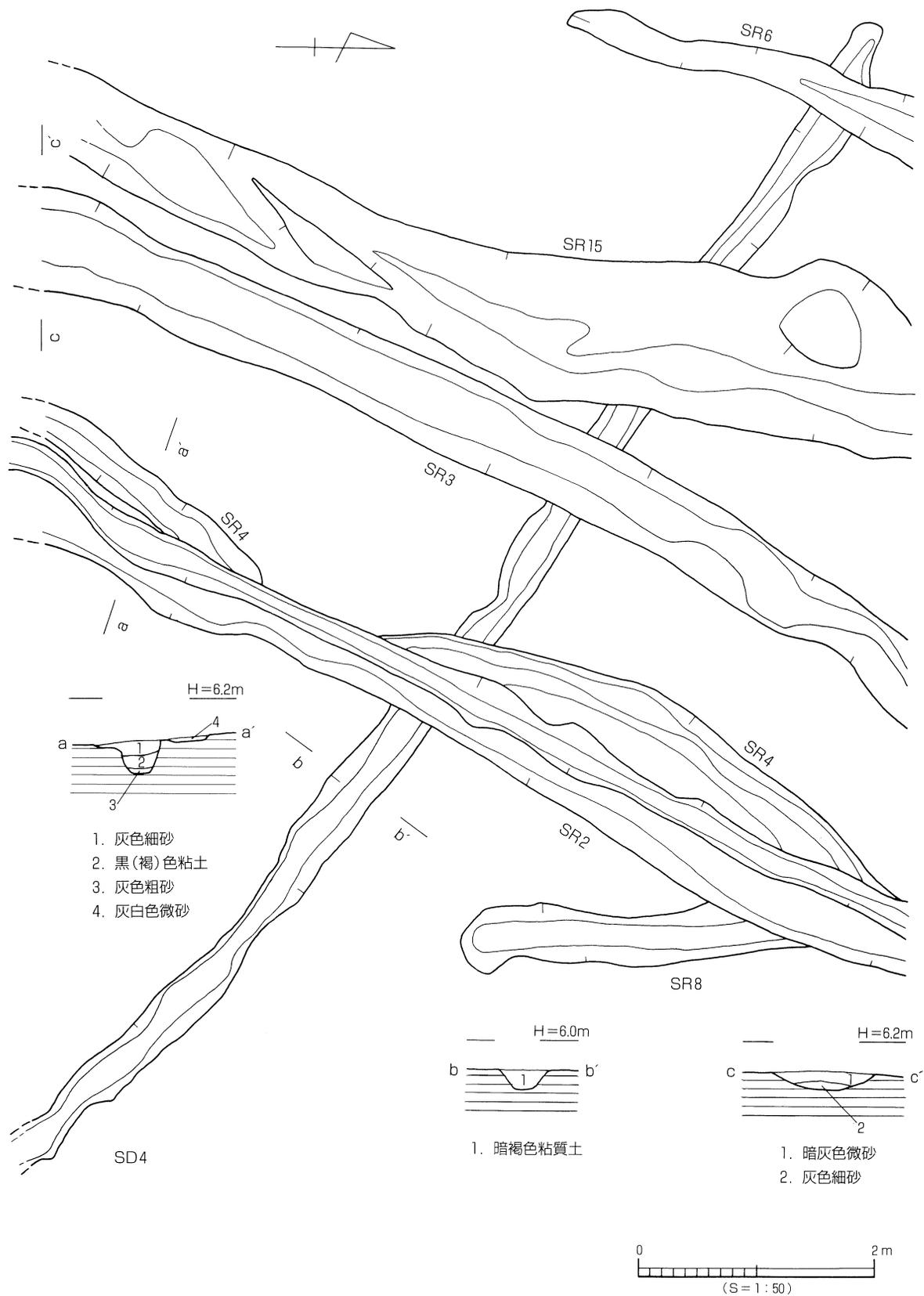
第40図 SK 1 測量図



第41図 SK 3 測量図

SD 5 (第54図)

調査区南東部において、古墳時代後期のSD 2に切られる状態で検出した。溝の遺存状況は悪く、深さ1～7cm程度の痕跡を検出したにすぎない。一部不連続な箇所が存在するが、本来は逆L字状を呈していたと考えられ、復元長6.2mである。竪穴式住居址の周壁溝、北東側を一部検出した可能性も考えられる。埋土は、暗褐色粘質土である。



第42図 SD 4 周辺遺構測量図

出土遺物

土師器の小片が出土しているが、摩滅が酷く図化できない。

時期：古墳時代後期の溝(S D 2)との切り合い関係より、古墳時代後期以前である。

S D 6 (第54図)

調査区南東部において、S D 6 に北接する状況で検出した。古墳時代後期に属する溝(S D 2)に切られる。幅10~30cm、検出長3.6m、深さ3~4cmを測り、埋土は暗褐色粘質土の単一層である。

溝の西端部が北側を指向しており、そのまま北側に向かって折れ曲がる可能性がある。おそらくS D 6 と同機能を有する溝だと考えられる。

出土遺物

遺物の出土はみられない。

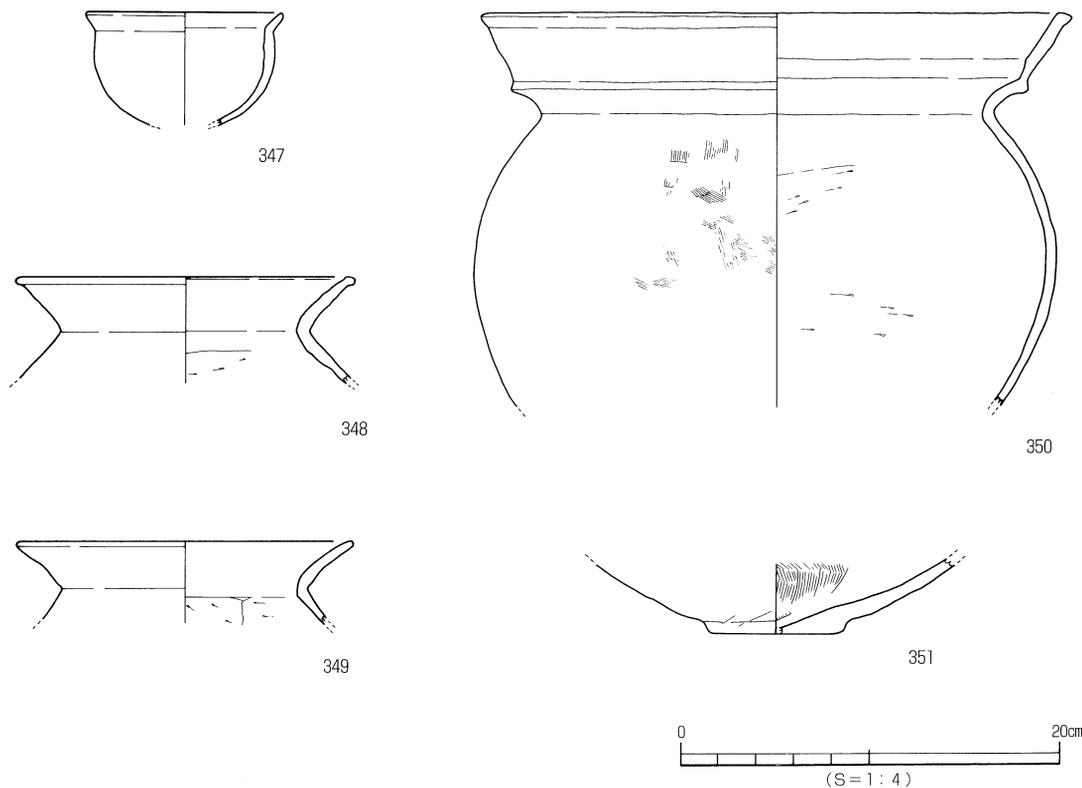
時期：S D 2 との切り合い関係より、古墳時代後期以前である。

S D 10 (S B 4) (第39図)

S B 4 の項目で説明したので割愛する。

S D 11 (第5図)

調査区北西部にて、S R 21 および S D 15 に切られた状態で検出した。規模は検出長2.5m、幅10~



第43図 S D 4, S B 4 (S D 10), S K 1 出土遺物実測図

15cm、深さ1～3cmである。西端部が緩やかに曲がっており、住居址の周壁溝である可能性を残す。埋土は、暗褐色粘質土である。

出土遺物

土師器の小片が僅かに出土しているが、図化に耐えられるものではない。

時期：古墳時代後期の溝(S R 15)に切られることより、古墳時代後期以前である。

S D 12 (第5図)

調査区北西部、S D 11の東側において検出した。検出長1.2m、幅30cm、深さ4～5cmを測り、埋土の色調は暗褐色を呈する。

出土遺物

本遺構より遺物は出土していない。

時期：隣接するS D 11と埋土の色調が共通することから判断して、古墳時代後期以前に属すると考えられる。

S D 13 (第57図)

調査区南部中央部分において、掘立6・S D 2・S D 9に切られた状態で検出した。規模は検出長3m、幅20～35cm、深さ1～5cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は暗褐色粘質土である。

出土遺物

土師器の小片が数点出土している。

時期：古墳時代後期に属する遺構(掘立6・S D 2・S D 9)に切られることより、古墳時代後期以前である。

ピット状遺構

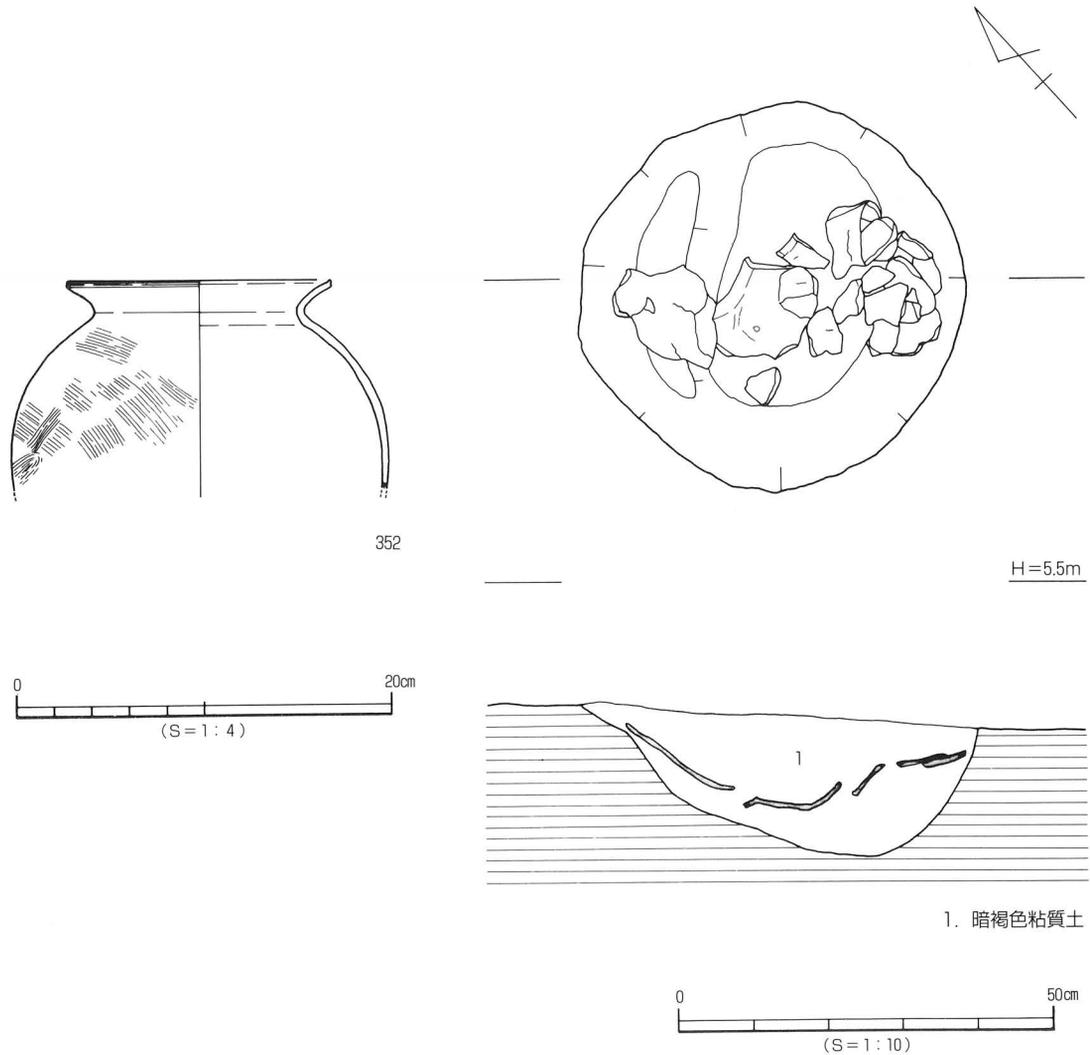
P 62 (第44図)

調査区南西部において検出された浅い凹地状のピットで、内部から甕形土器が1個体出土した。埋納の為に安置されたものなのか、凹地にたまたま流れこんだものなのかどうかは不明である。だが、埋土が暗褐色粘質土の単一層であることや、出土状況がS K 1と良く似ていることを考慮に入れるならば、人工的な遺構である可能性が高い。直径51cmの円形状を呈し、一部二段掘りで最深部18cmを測る。

出土遺物 (第44図352)

352は甕形土器である。全体のほぼ1/2が出土したが、摩滅による表面剥落が著しい為、復元不可能である。焼成は良好、胎土は緻密で胎土中に1mm前後の長石、石英および金雲母を疎らに含む。口縁端部をつまみ上げ状に肥厚させるもので、内面に一条の稜線が走る。また、外面にハケ目調整、内面にヘラ削りを施す。色調は内外面ともに淡黄色～黄橙色を呈し、底部は丸底を呈すると思われる。

時期：出土遺物より、古墳時代前期初頭に属すると考えられる。



第44図 P 62測量図及び出土遺物実測図

2. 古墳時代後期

古墳時代後期の遺構は、掘立柱建物6棟、土坑1基、溝状遺構5条、自然流路3条、ピット状遺構1基である。

掘立柱建物

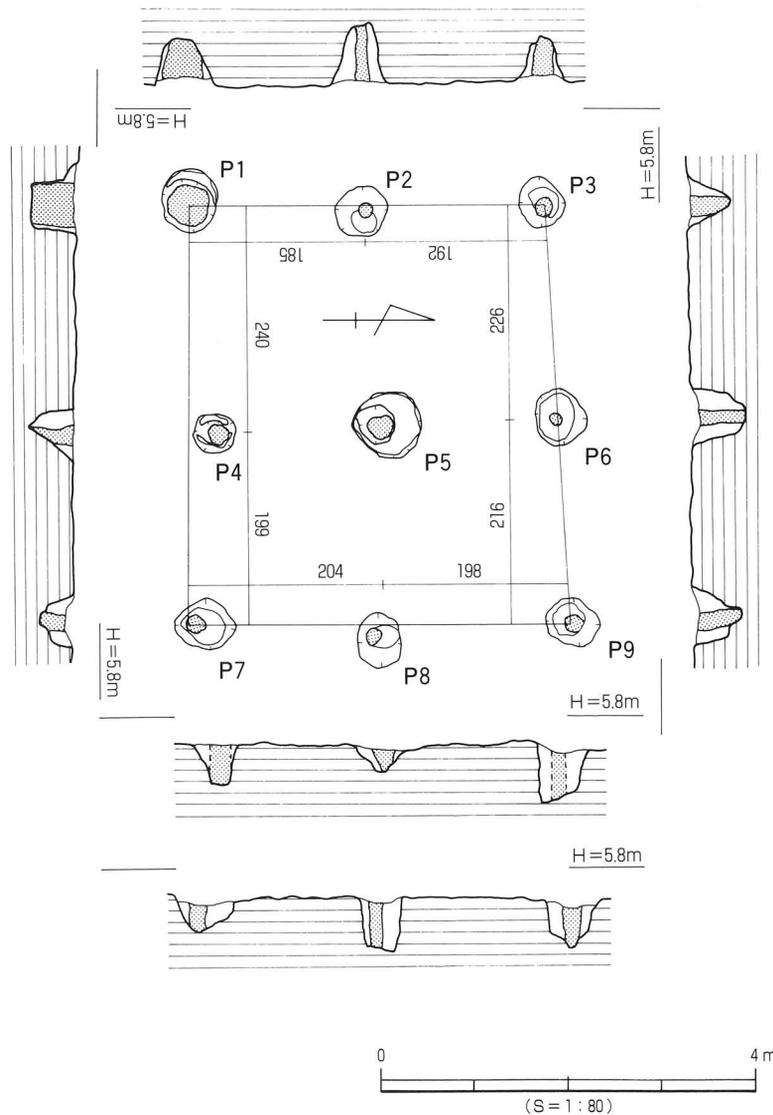
掘立1 (第45図)

2×2間の総柱建物で、主軸をN-39°-Wにとる東西棟の建物である。規模は桁行約4.4m、梁行約4.0mを測る。柱穴は直径42~75cmの円形プランで、深さ35~63cmを測る。埋土は暗褐色(褐色混)土、柱痕部分が黒色土である。SK3と切り合い関係を有し、SK3よりも新しい。

出土遺物 (第51図353・354)

353はP 2埋土中より出土した吉備系甕形土器の口縁部片で、垂直に立ち上がる二重口縁の外面に数条の沈線文を施す。焼成は良好で胎土は密、胎土中に1mm前後の長石、石英および角閃石を多く含む。灰白色および橙色を呈し、内外面ともナデ調整を施す。354はP 3埋土中より出土した須恵器蓋坏である。復元口径17cmを測り、肩部に形骸化した凹線を一条めぐらし、口縁端部内面に沈線状の段を有する。焼成は良好、胎土は緻密で長石をわずかに混入する。色調は内外面ともに灰色を呈する。

時期：354の特徴より、6世紀後半に属すると考えられる。



第45図 掘立1 測量図

掘立2 (第46図)

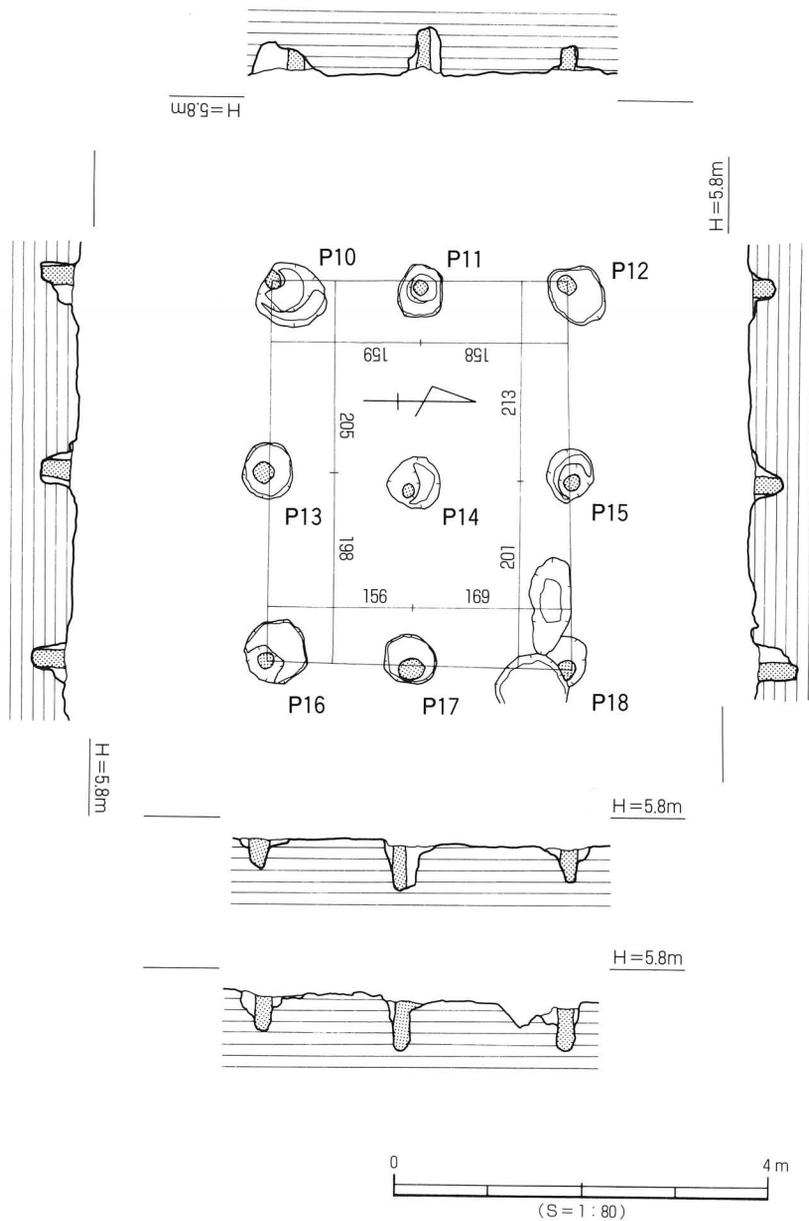
2×2間の総柱建物で、主軸をN-39°-Wにとる東西棟の建物である。主軸方位は掘立1とほと

んど同じであるが、掘立1と平面プラン上で切り合い関係をもつ。規模は桁行約4.1m、梁行約3.3mを測る。柱穴は直径47～72cm、プランは円形を呈し、深さ26～55cmを測る。柱穴埋土は暗褐色(灰色混)土、柱痕部分が黒色(灰色混)土である。

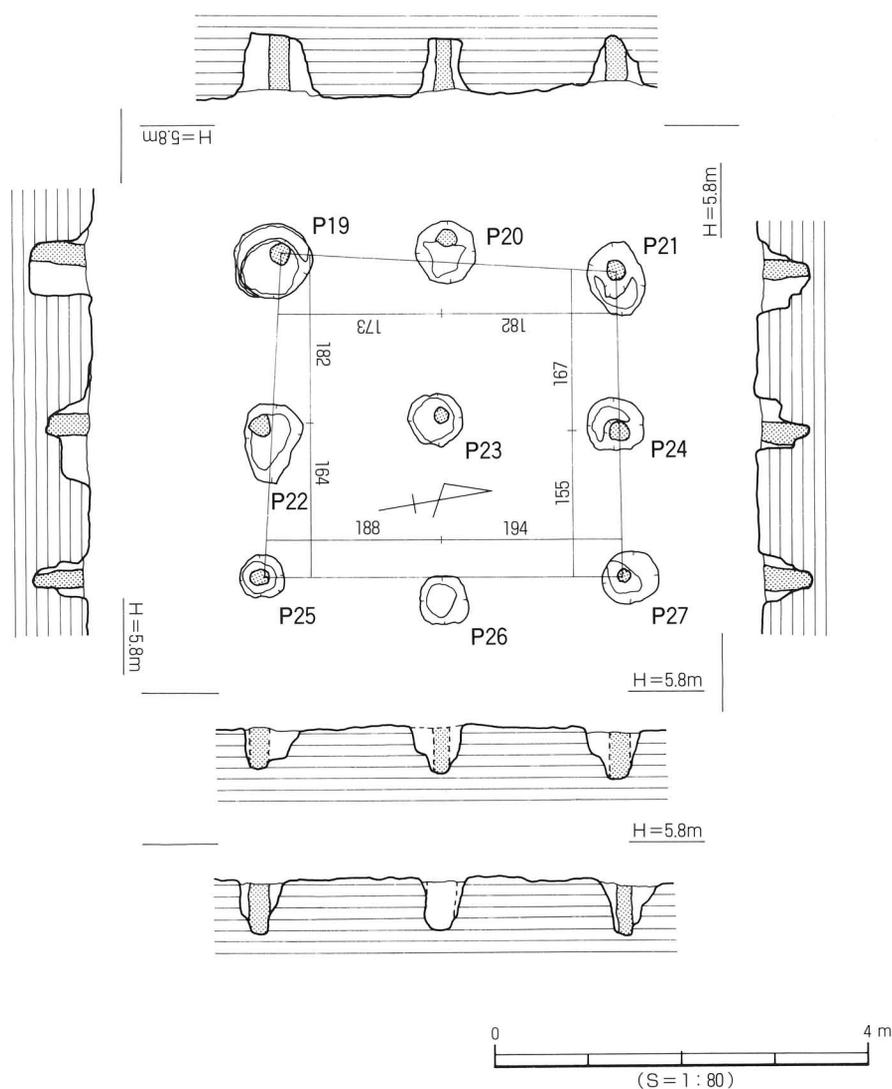
出土遺物 (第51図355)

355はP14の埋土中から出土した壺形土器の頸部の破片である。かなりの小片で、摩滅が著しいため器面調整は確認できない。焼成は良好で胎土は緻密、胎土中にほとんど砂粒を混入しない。色調は内外面ともに淡橙色～黄橙色を呈する。

時期：埋土の色より掘立4と同時期、6世紀後半に属すると考えられる。



第46図 掘立2 測量図



第47図 掘立3測量図

掘立3 (第47図)

主軸をN-9°-Eにとる2×2間の総柱建物である。規模は、南北方向に約3.8m、東西方向に約3.5mを測るが、他の掘立柱建物と比べてやや歪なプランを呈する。柱穴は直径45~82cm、深さ45~65cmを測り、柱穴の平面プランは円形~楕円形を呈する。柱穴埋土は暗褐色(灰色混)土、柱痕は黒色土を呈する。また、北側に隣接してほぼ同時期の溝(SD3)がある。

出土遺物 (第51図356~358)

356は鉢形土器の口縁部から胴部にかけての破片である。約9/10を欠損する口縁部から胴部にかけての破片で、P20の埋土中より出土した。焼成は良好、胎土は緻密で胎土中にほとんど砂粒を含まない。色調は外面が橙色、内面が黄橙色~淡黄色を呈し、内面にナデ調整を施した痕跡が確認できる。

357は壺形土器の頸部片で、P23の埋土中より出土した。外面にハケ目調整、内面に雑なナデ調整を施す。焼成は良好で、胎土はやや粗く、胎土中に1~2mm程度の長石および石英を疎らに含む。色

調は外面が淡黄色、内面が灰黄色を呈する。

358は高坏の脚部片である。脚部の約1/2を欠損するもので、P19の埋土中より出土した。焼成は良好、胎土は緻密で胎土中に1mm前後の長石を少量含む。色調は内外面ともに淡黄色～黄橙色を呈し、器面調整は摩滅のため確認できない。

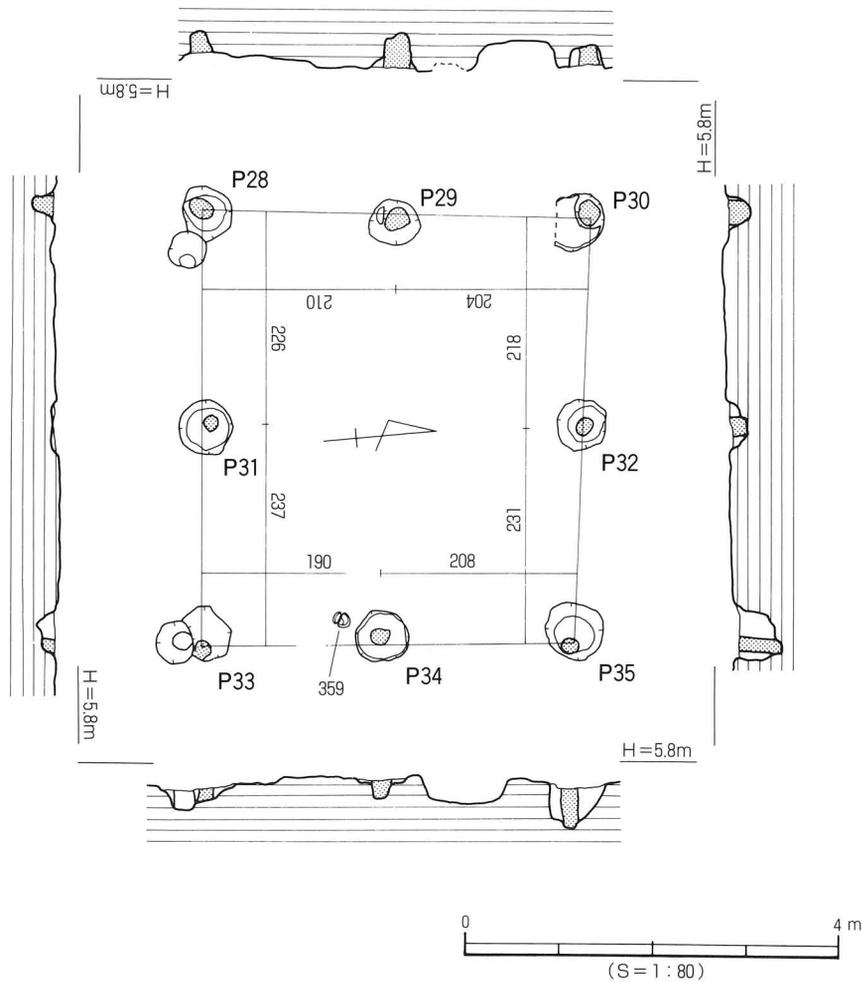
時期：埋土の色より掘立2および掘立4と同時期、6世紀後半に属すると考えられる。

掘立4（第48図）

主軸をN-41°-Wにとる2×2間の側柱建物で、柱間から東西棟の建物であると考えられる。規模は桁行約4.6m、梁行約4.1mを測る。直径45～62cmの円形プランを呈する柱穴で構成されており、深さ8～50cmの遺存状態である。埋土は褐色（灰色混）土、柱痕は暗褐色（灰色混）土である。

出土遺物（第51図359）

359は掘立柱建物内部の床面上から、天井部を下に向けた状態で出土した。ほとんど完形だが口縁部の約5分の4を欠損する。焼成は甘く、色調は内外面とも灰白色を呈する。胎土は密で胎土中に1



第48図 掘立4 測量図

mm前後の長石および石英を疎らに混入する。肩部に凹線状の段を有し、口縁端部内面には段を形成しない。復元口径15.6cmを測る。

時期：359の特徴より6世紀後半に属する。

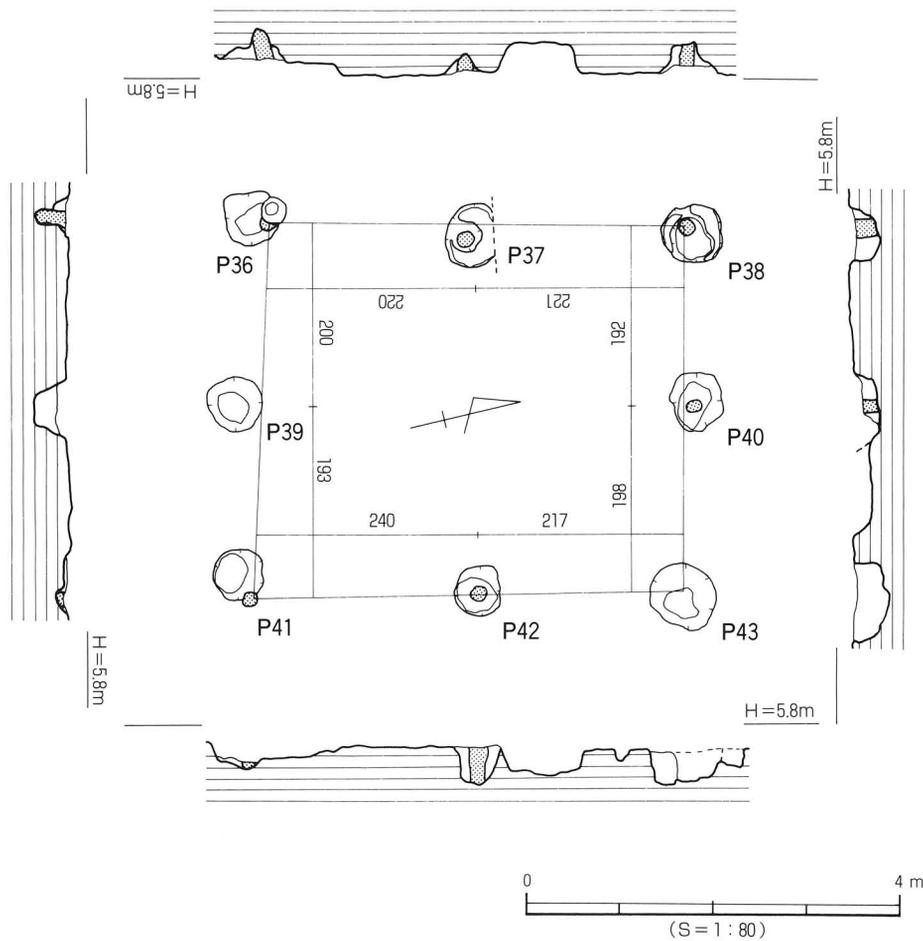
掘立5 (第49図)

主軸をN-12°-Eにとる2×2間の側柱建物で、柱間から南北棟の建物であると考えられる。建物の規模は桁行が約4.6m、梁行が約3.9mである。柱穴は直径50~76cm、深さ22~40cmを測り、円形に掘り込まれる。柱穴の埋土は暗褐色(褐色混)土、柱痕は黒色土である。また、古墳時代後期の溝(SD2)に切られることから、SD2よりも新しい時期に属すると考えられる。さらに掘立4と重なる部分が存在することや、東接する掘立6との間隔が非常に狭いことから判断するに、これらとの同時存在性は考えられない。

出土遺物

本遺構より遺物の出土は確認されていない。

時期：埋土の色調より掘立1および掘立6と同時期、6世紀後半代に属すると考えられる。



第49図 掘立5 測量図

掘立 6 (第50図)

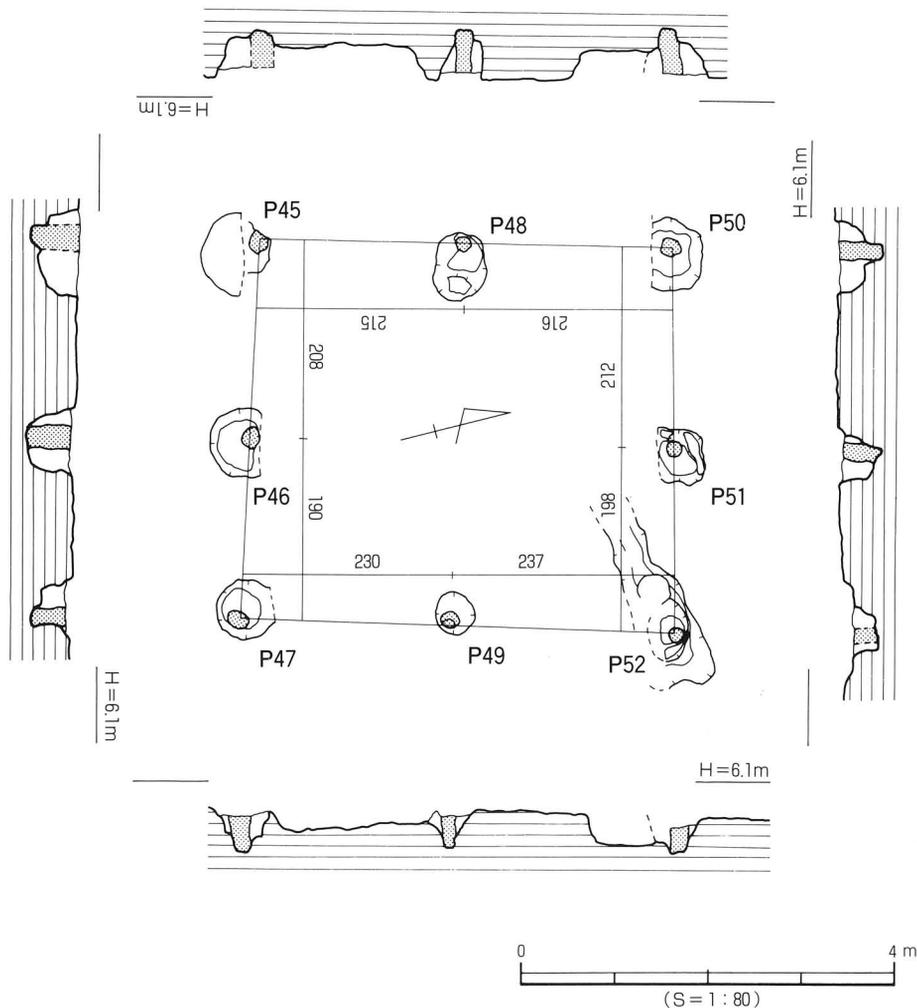
主軸をN—13°—Eにとる2×2間の側柱建物である。掘立5とほとんど平行し、隣接する位置において検出した。柱間から南北棟の建物であると考えられる。規模は桁行約4.7m、梁行約4.0mを測る。柱穴は直径42~72cmの円形プランを呈し、深さは35~53cmの遺存状態である。また、埋土は暗褐色(褐色混)土、柱痕は黒色土である。

出土遺物 (第51図360・361)

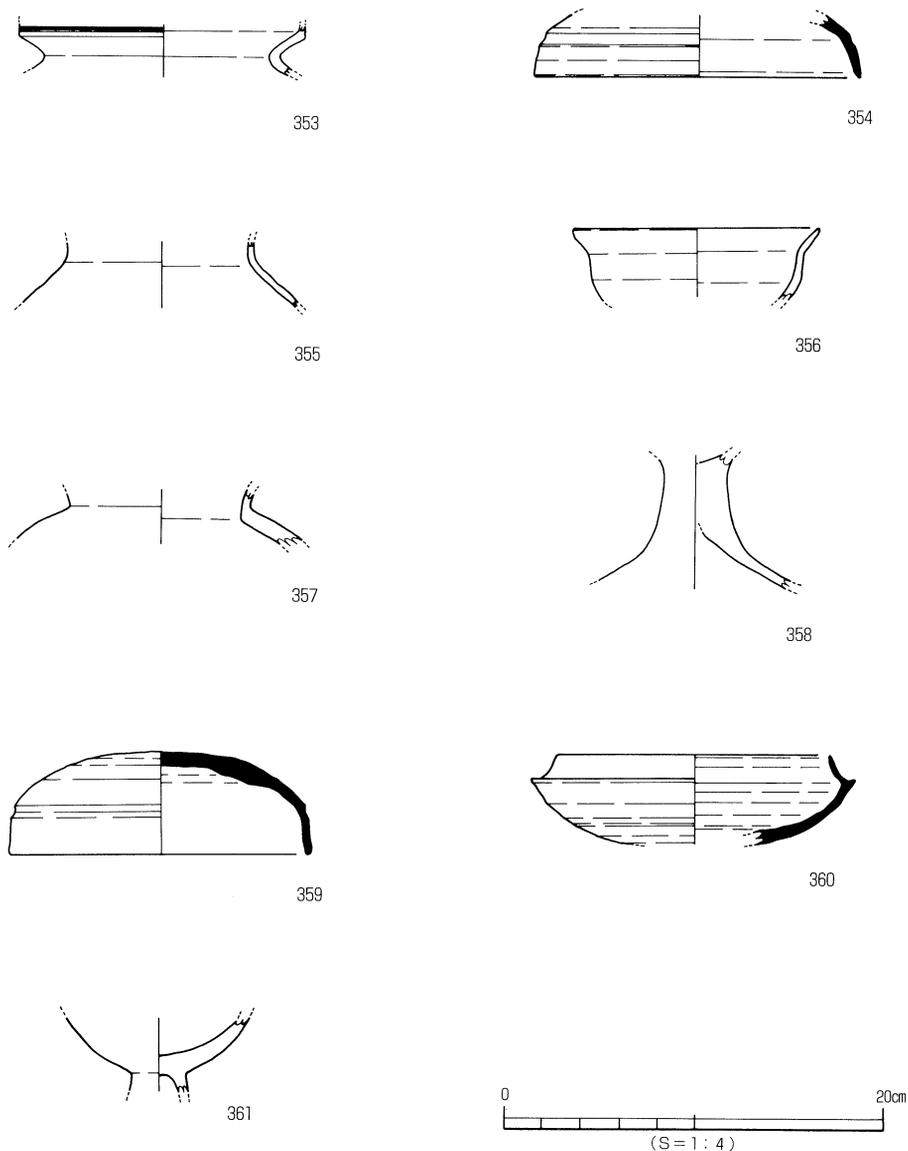
360は須恵器坏身の破片で、P46の埋土中より出土した。復元口径14.2cmを測り、口縁部立上がり端部内面には段を持たない。焼成良好、胎土は緻密で胎土中に1mm前後の長石をわずかに混入する。色調は内外面とも灰色を呈する。

361はP47埋土中から出土した土師器高坏の接合部片である。椀形の坏部、大きく広がる中空の脚部を有すると考えられる。色調は外面が淡黄色~黄橙色内面が淡黄色を呈し、器面調整は摩滅のため確認できない。焼成良好、胎土は緻密で胎土中にほとんど砂粒を混入しない。

時期：360の特徴より、6世紀後半に属する。



第50図 掘立 6 測量図



第51図 掘立柱建物出土遺物実測図

土 坑

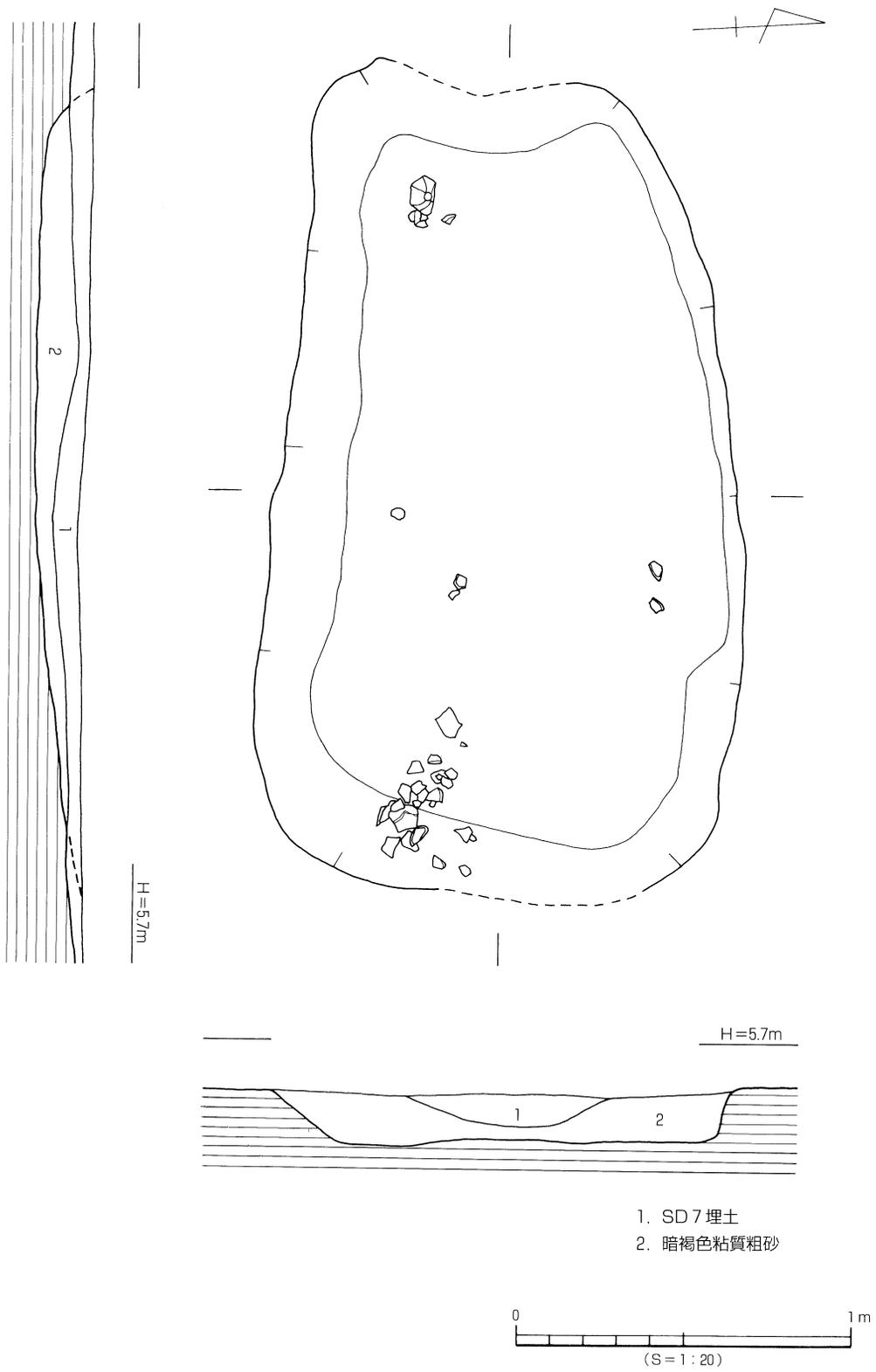
SK 2 (第52図)

調査区南東部、掘立2の南側においてSD7に切られる状態で検出した。平面形態は不整長方形状、断面形態は皿状を呈する。規模は、推定長径2.5m、短径1.4m、深さ5～15cmを測る。埋土は暗褐色粘質粗砂の単一層である。

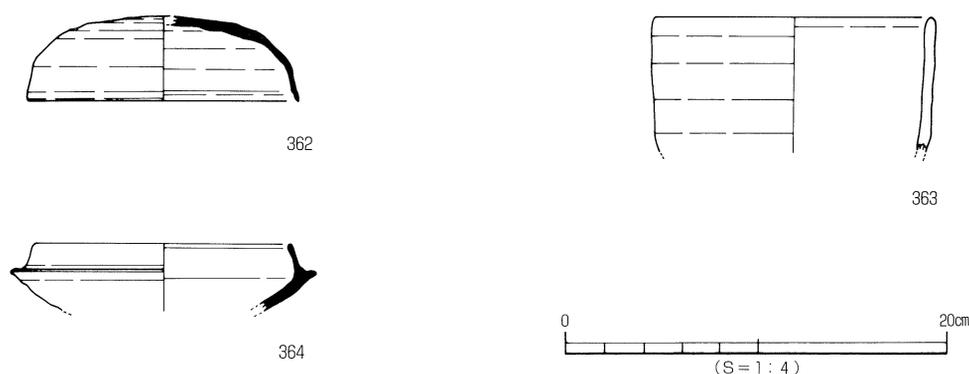
出土遺物 (第53図)

362・364は須恵器蓋坏の破片である。362は坏蓋で全体の約1/2を欠損する。口縁端部内面に段を有し、復元口径約14cmを測る。焼成良好で胎土は緻密、胎土中にほとんど砂粒を混入しない。色調は内外面ともに灰白色を呈する。364は約4/5を欠損する坏身の破片である。復元口径が約13.0cmを測

遺構と遺物



第52図 SK 2 測量図



第53図 SK 2 出土遺物実測図

り、口縁立上がり端部内面がやや肥厚する。焼成は良好で胎土は緻密、胎土中に1mm以下の長石をわずかに混入する。色調は灰白色～灰色を呈する。

363は土師器鉢形土器の口縁部片である。復元口径が約14.6cmを測り、長く直立気味に立上がる口縁部を有する。焼成は不良、胎土は粗く胎土中に1mm前後の長石、石英を多く含む。色調は黄橙色～橙色を呈し、器面調整は内外面ともにナデ調整を施す。

時期：362・364の特徴より、6世紀後半に属する。

溝状遺構

SD 1 (第54図・第55図)

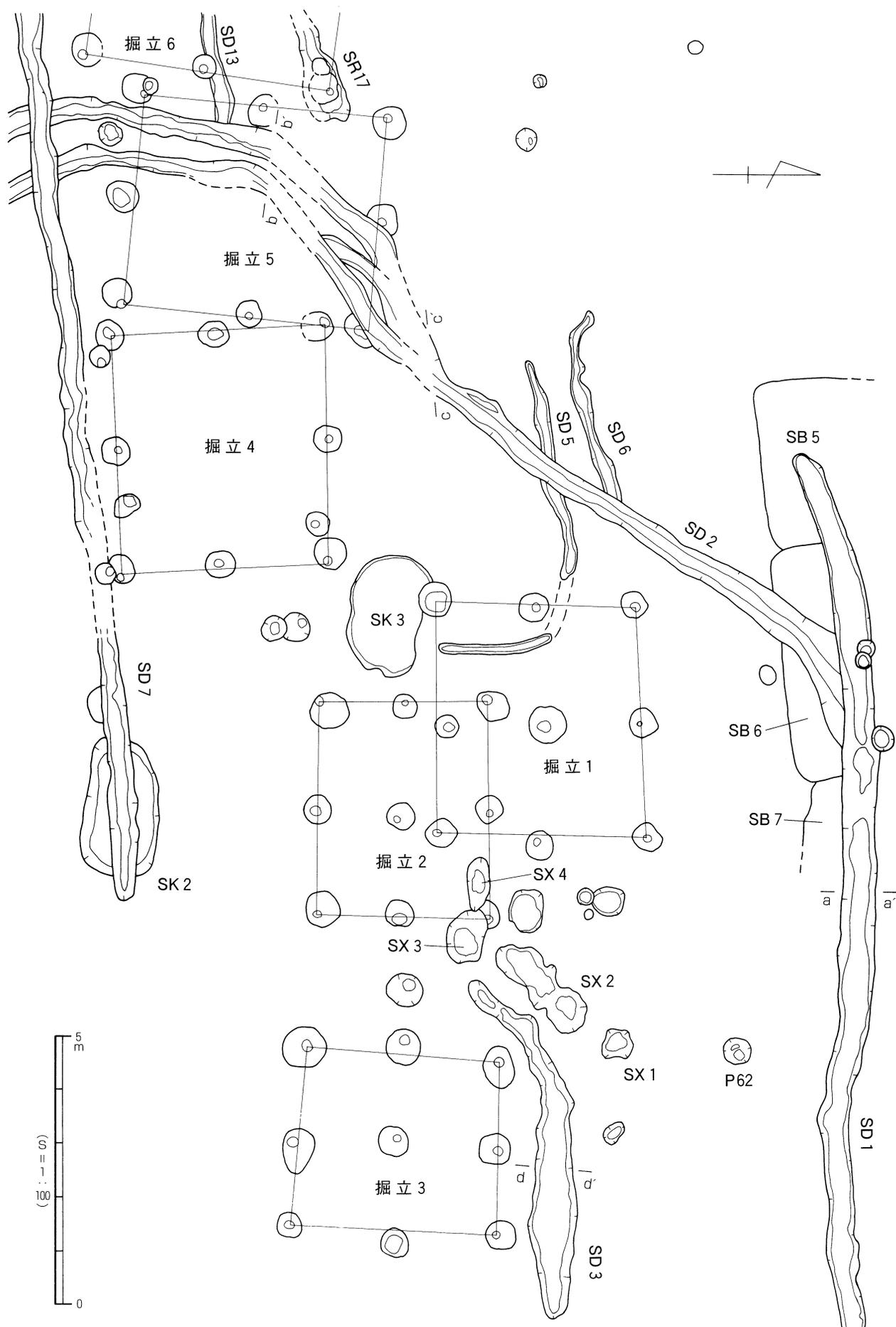
調査区南西部に位置し、東西方向に延びる。SB 5、SB 6、SB 7、水田との切り合い関係を有し、SB 5～7より新しく水田よりは古い遺構である。途中でSD 2が合流し、一連の溝として機能していることから、SD 2と同時期の遺構であると考えられる。規模は検出長16.3m、幅40～70cm、深さ3～23cmを測る。断面形態は緩やかなU字状を呈する。埋土は上層が暗褐色粘質土、中層が黒色粘土、下層が暗灰色粗砂で構成される。

出土遺物 (第56図365～373)

365～367は、SD 1 出土の土師器である。365は甕形土器の口縁部片で、緩やかに内湾する口縁部を有し、特に口縁端部を強くナデるものである。焼成良好、胎土はやや粗く、胎土中に1～2mmの長石および石英を疎らに含む。色調は外面が黄橙色、内面が橙色を呈する。

366・367は高坏の脚部である。366は古墳時代前期初頭の高坏で、器壁が比較的薄い中空の脚部を有する。器面調整は摩滅が著しく確認できない。焼成は良好で胎土は密、胎土中に1～3mm程の長石を少量混入する。色調は淡橙色～黄橙色を呈する。367は細長く伸びる中実の脚部から裾部がラップ状に広がるものである。焼成は良好で、胎土は緻密、胎土中にほとんど砂粒を混入しない。色調は内外面とも灰白色～橙色を呈し、器面調整は摩滅が著しく確認できない。

368～373は須恵器である。368～370は坏蓋で、それぞれ復元口径17.0、15.0、14.4cmを測る。共に肩部に明瞭な凹線状の段を有し、特に369は口縁端部内面に段を有する。368の焼成は良好で胎土は緻密、胎土中に1mm以下の長石をわずかに混入する。色調は灰白色～灰色を呈し、全体の約3分の1を



第54図 調査区南東部遺構測量図

残す。369は全体の約3/5を欠損するものである。焼成は良好、胎土は緻密で胎土中に微粒の長石をわずかに混入する。色調は灰色～青灰色を呈する。370の焼成は良好で胎土は緻密、胎土中に1～3mm程の長石をわずかに混入する。色調は灰白色～灰色を呈する。

371は約5/6を欠損する坏身で、復元口径約14.2cmを測る。焼成は良好で胎土は緻密、胎土中にほとんど砂粒を混入しない。色調は灰白色～灰色を呈する。

372～373は脚部に一段の透かしをもつ高坏の脚部片である。372は3方向に長方形の透かしを施し、脚部外面にカキメ痕を残す。焼成は良好で、胎土は密、胎土中に1mm程の長石をわずかに混入する。色調は灰白色～灰色を呈し、脚部外面には自然釉の付着が認められる。373は脚裾部の破片で、外器面には自然釉の付着が認められる。外器面にカキメ調整を施した後、方形の透かしを施すものである。焼成は良好で胎土は密、胎土中に1mm程度の長石を少量混入する。外面が暗灰色、内面が灰白色を呈する。372と同一個体である可能性が高い。

時期：出土遺物の特徴から、6世紀後半に属する。

S D 2 (第54図・第55図)

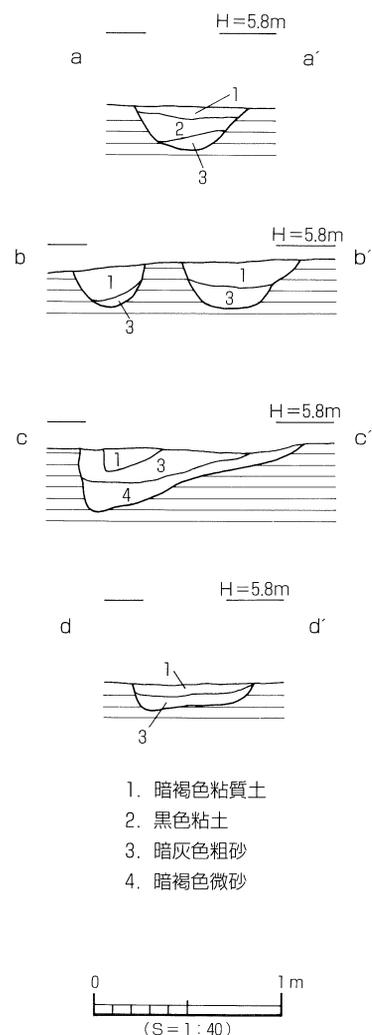
調査区南部において検出した。本来調査区南壁中央部から北東方向に続く2条の溝であるが、途中T2北側で1条に合流し、最終的にはS D 1に流れ込む。S D 1同様、実際に水が流れていたと考えられ、埋土は上層から暗褐色粘質土、暗灰色粗砂、暗褐色微砂の順である。規模は検出長約20m、幅25～65cm、深さ20～33cmを測る。断面形態は緩やかなU字状あるいはV字状を呈する。

出土遺物 (第56図374～381・第76図546)

374・375は古墳時代前期の土師器である。374は甕形土器で、やや直立気味に立上がる口縁端部内面をつまみ上げ状に肥厚させるものである。焼成は良好で胎土は密、胎土中に1mm以下の石英、長石および金雲母を多く混入する。色調は灰黄色を呈し、器面調整は口縁部にナデ調整、胴部内面に削り調整を施す。375は短く伸びる柱状部から裾部が大きく開く高坏の脚部である。器面調整は摩滅のため不明であるが、色調は橙色を呈し、裾部に焼成前穿孔を施す。焼成は良好で胎土は緻密、胎土中にほとんど砂粒を含まない。

376～381は古墳時代後期の土師器甕形土器および須恵器の坏蓋である。

376～378は内湾気味に立上がる口縁部を持つ甕形土器である。376・378は口縁部と胴部との境界が緩やかで、口縁部がやや直立気味に立上がるものである。376は焼成良好、胎土は密で胎土中に2mm



第55図 S D 1, 2, 3土層断面図

以下の石英および長石を多く混入する。色調は外面が淡黄色～灰黄色、内面が黄橙色を呈し、器面調整は胴部内面に雑なナデ調整、その他の部分にナデ調整を施す。378は焼成良好で外面が灰白色、内面が淡黄色および黄褐色を呈する。胎土は緻密で、胎土中に2mm以下の石英を疎らに混入する。器面調整は胴部内面に雑なナデ調整、その他の部分にハケ目調整の後ナデ調整を施す。377は口縁部が一度大きく外反した後、内湾しながら立上がるものである。焼成は良好で胎土は緻密、胎土中に2mm以下の長石、石英を疎らに含む。器面調整は口縁部にナデ調整、胴部内面に雑なナデ調整、胴部外面にハケ目調整の後ナデ調整を施す。色調は内外面ともに黄橙色～橙色を呈する。

379～381は須恵器の坏蓋である。それぞれ復元口径15.6cm、14.9cm、15.8cmを測り、肩部に緩やかな凹線状の段を持つ。379は全体の約1/2を欠損し、口縁端部内面に沈線を1条めぐらすものである。焼成はやや甘く、色調は内外面ともに灰白色を呈する。胎土は緻密で、胎土中にほとんど砂粒を含まない。380は全体の約1/3を欠損する復元完形品である。口縁端部内面に弱い凹線を1条施すが全周するものではない。焼成は良好で、色調は灰白色～灰色を呈し、胎土は密で胎土中に1mm以下の石英をわずかに混入する程度である。381の焼成は良好で、外面に自然釉の付着が認められる。口縁端部内面に段を有し、天井部中央内面に同心円状の当て具痕を残す。色調は外面が灰白色～緑灰色、内面が灰色を呈し、胎土は緻密で胎土中に1mm以下の石英を少量混入する。

時期：出土遺物の特徴より6世紀後半である。

S D 3 (第54図・第55図)

調査区南東部、掘立3北側に隣接する位置において検出した。規模は検出長6.8m、幅30～90cm、深さ5～15cmを測る。断面形態は皿状、または緩やかなU字状を呈する。埋土は上層が暗褐色粘質土、下層が暗灰色粗砂である。S D 1やS D 2と同機能を有する溝である可能性が高い。

出土遺物 (第56図382)

本遺構からの出土遺物は非常に少なく、図化できたのは382のみである。382は須恵器広口壺の口縁部破片である。約5分の1の残存で、内面にナデ調整、外面にカキメ調整を施す。焼成は良好で胎土は緻密、胎土中に砂粒をほとんど混入しない。色調は灰白色を呈する。

時期：382の特徴および埋土の色調より、6世紀後半に属すると考えられる。

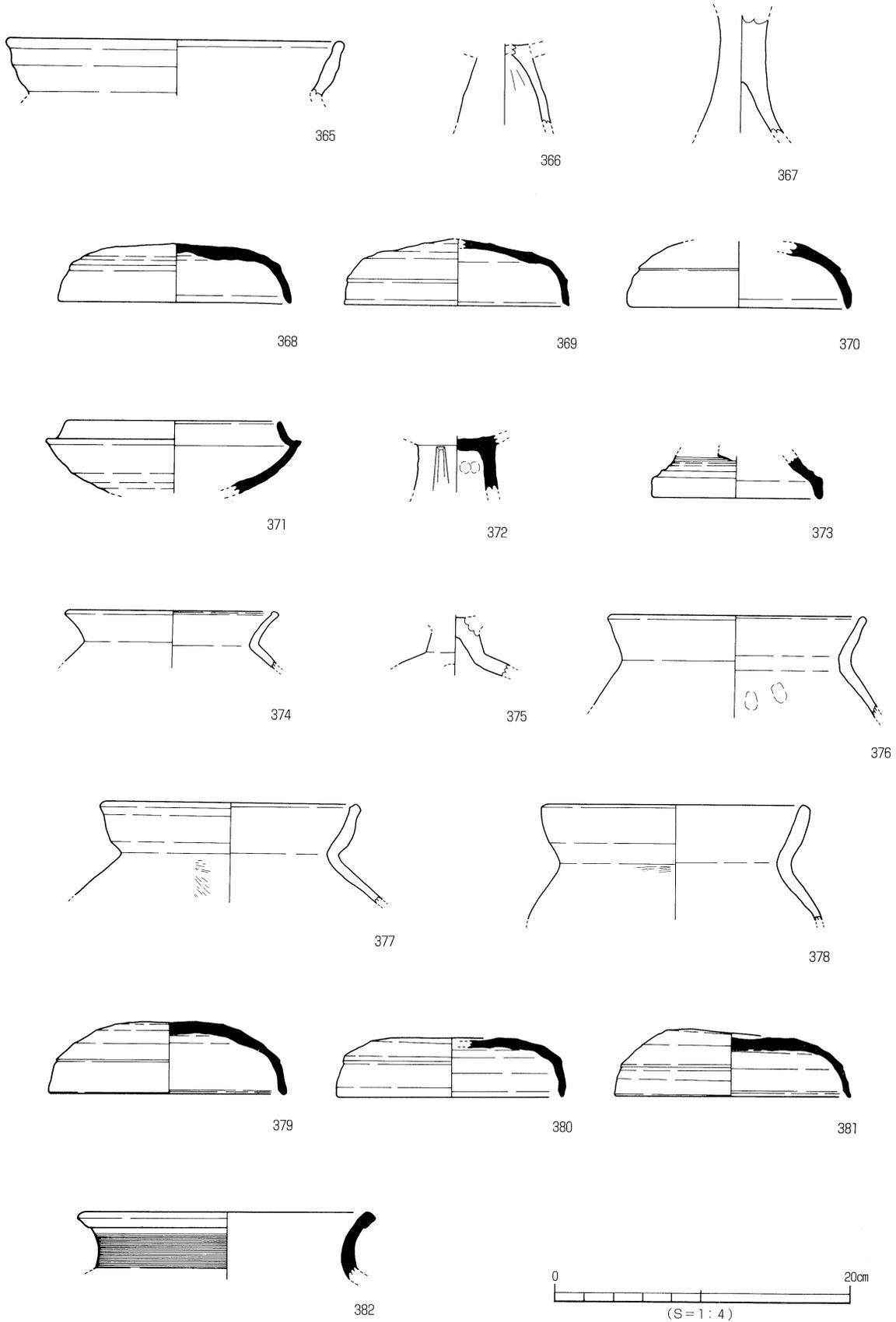
S D 8 (第57図)

調査区南西部にてS D 7・S R 2・S R 13に切られた状態で検出した。規模は検出長約10.5m、幅20～47cm、深さ5～20cmを測る。断面形態はU字状を呈する。埋土は上層が暗褐色粘質土、下層は灰色粗砂である。

出土遺物 (第58図383～388)

383・384は甕形土器である。383は口縁部の小破片である。胴部内面をヘラ削り調整、その他の部分をナデ調整するものである。焼成は良好で、色調は淡黄色～黄橙色を呈する。胎土はやや粗く、胎土中に2mm以下の長石、石英および金雲母を多く含む。384は約3/4を欠損する口縁部から胴部にかけての破片である。焼成は良好で、胎土は粗く胎土中に3mm以下の長石、石英を多く混入する。摩滅およびマンガン付着のため器面調整は不詳であるが、内外面とも胴部にハケ目調整を施した痕跡が認められる。色調は外面が橙色～明褐色、内面が淡黄色～灰黄色を呈する。

古墳時代後期



第56図 SD 1, 2, 3 出土遺物実測図

385は高坏の脚部片で3方向の焼成前穿孔を施す。焼成は良好、胎土は緻密で胎土中に2mm以下の石英をわずかに混入する。色調は淡黄色～黄橙色を呈し、器面調整は摩滅のため確認できない。

386・388は平底を呈する甕形土器の底部片である。386は焼成良好で胎土は粗く、胎土中に3mm以下の石英および長石を多く含む。色調は外面が黄橙色、内面が黄橙色～灰白色を呈し、器面調整は摩滅による表面剥落が著しく不明である。388は焼成が良好で胎土は緻密、胎土中にほとんど砂粒を含まない。色調は外面が黄橙色、内面が淡黄色を呈し、器面調整は摩滅のため不明である。

387は壺形土器の底部片で外器面にハケ目調整の後ナデ調整を施す。焼成は良好、胎土は密で胎土中に1mm以下の石英、長石を疎らに混入する。外器面が淡橙色～黄橙色、内器面が淡黄色を呈する。また、図化しなかったが下層中より須恵器坏身立上がり部の小片が出土している。

時期：埋土および出土遺物より、古墳時代後期に属すると考えられる。

S D 9 (第57図)

調査区南部において掘立6と重複する位置に検出した。切り合い関係からS D 13より新しい。規模は検出長約4m、幅30～50cm、深さ1～7cmを測り、断面形態は皿状を呈する。埋土は暗褐色粘質土である。

出土遺物 (第58図389)

389は須恵器坏身である。口縁立上がり端部内面に沈線を一条めぐらし、底部内面中央に当て具痕跡をわずかに残す。焼成は良好で胎土は緻密、胎土中に3mm以下の長石を少量含む。復元完形で、実際には全体の約2分の1が残存する。復元口径約13.1cmを測り、色調は灰白色を呈する。

時期：出土遺物より6世紀後半に属すると考えられる。

自然流路

S R 13 (第57図)

調査区南西部に位置し、切り合い関係からS D 8より新しくS D 7より古い。北西部から南東方向に向かって流れ、南壁際において2条に分岐すると考えられる。規模は検出長約15.2m、幅24cm～1m、深さ5～34cmを測る。断面形態は2段掘り状を呈する部分と緩やかなU字状の部分が存在する。埋土は上層から順に暗褐色粘質土、暗灰色細砂、灰色粗砂である。意図的に2段に掘り込まれた人工的な溝状遺構である可能性がある。

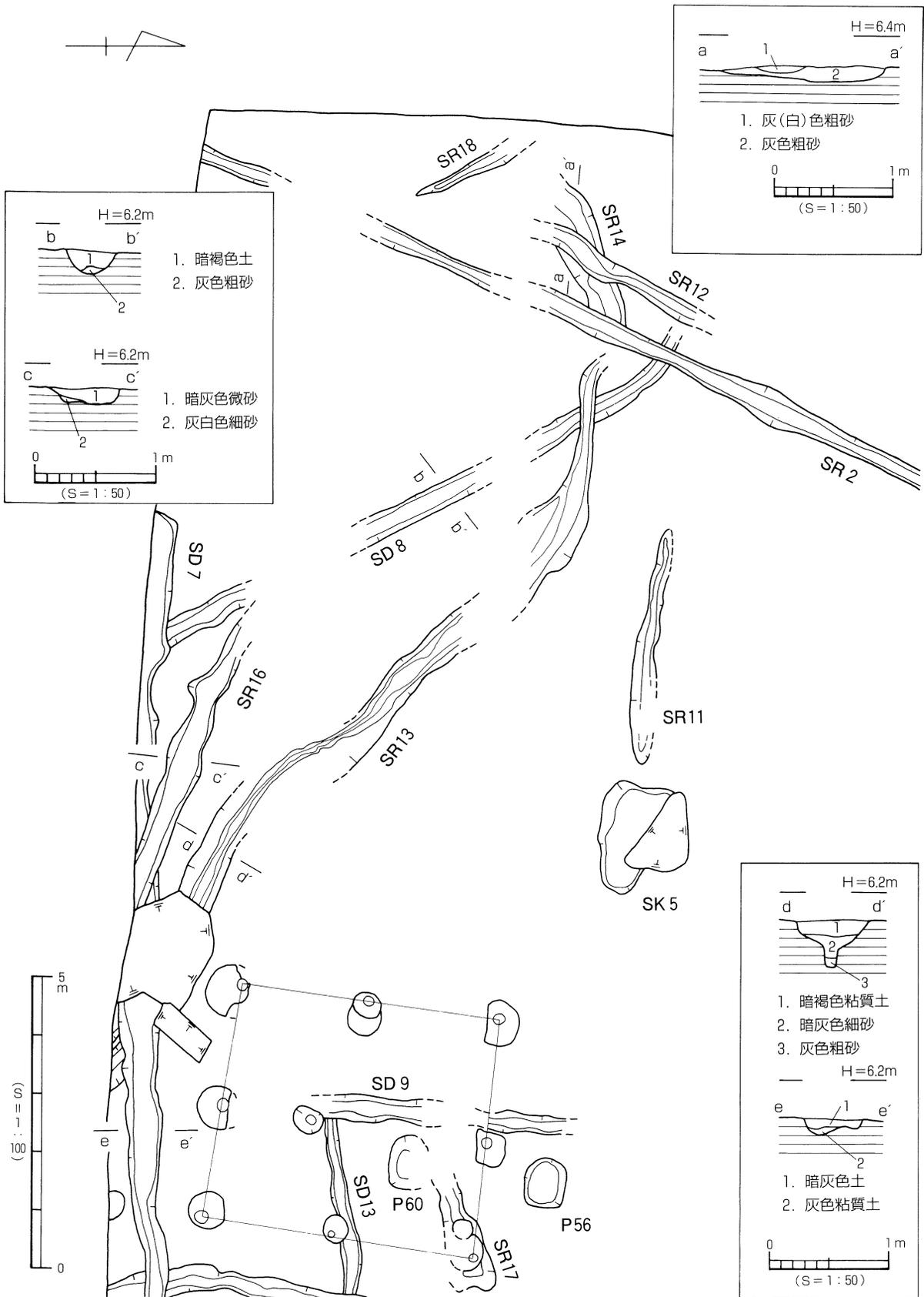
出土遺物 (第58図390～393)

390は須恵器坏身で全体の約3分の1を残存し、立上がり部のほとんどを欠損する。焼成は良好で胎土は緻密、胎土中にほとんど砂粒を混入しない。復元口径は約13cmを測り、色調は外面が灰白色～灰色、内面が青灰色～紫灰色を呈する。

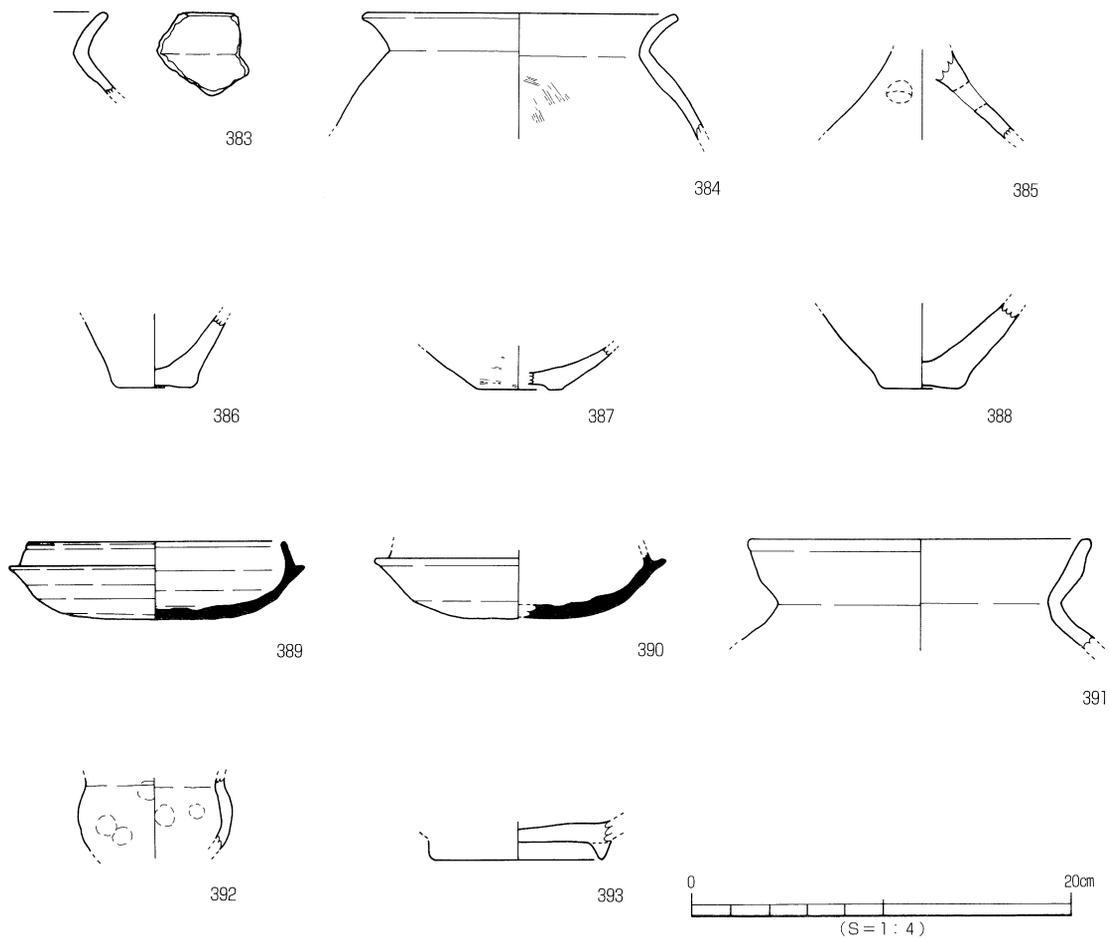
391は土師器の甕形土器で、口縁部が内湾しながら外方に開く。焼成はやや甘く、色調が橙色～明褐色を呈する。胎土は緻密で胎土中に微粒の長石を混入する。器面調整は摩滅のため確認できない。

392は小型丸底鉢の胴部片で、内器面および外器面に指頭圧痕を顕著に残す。焼成は良好で胎土は緻密、胎土中に1mm以下の長石、石英を少量含む。色調は内外面ともに黄橙色を呈する。

時期：390・391の特徴から6世紀後半に属すると考える。



第57図 調査区南西部遺構測量図



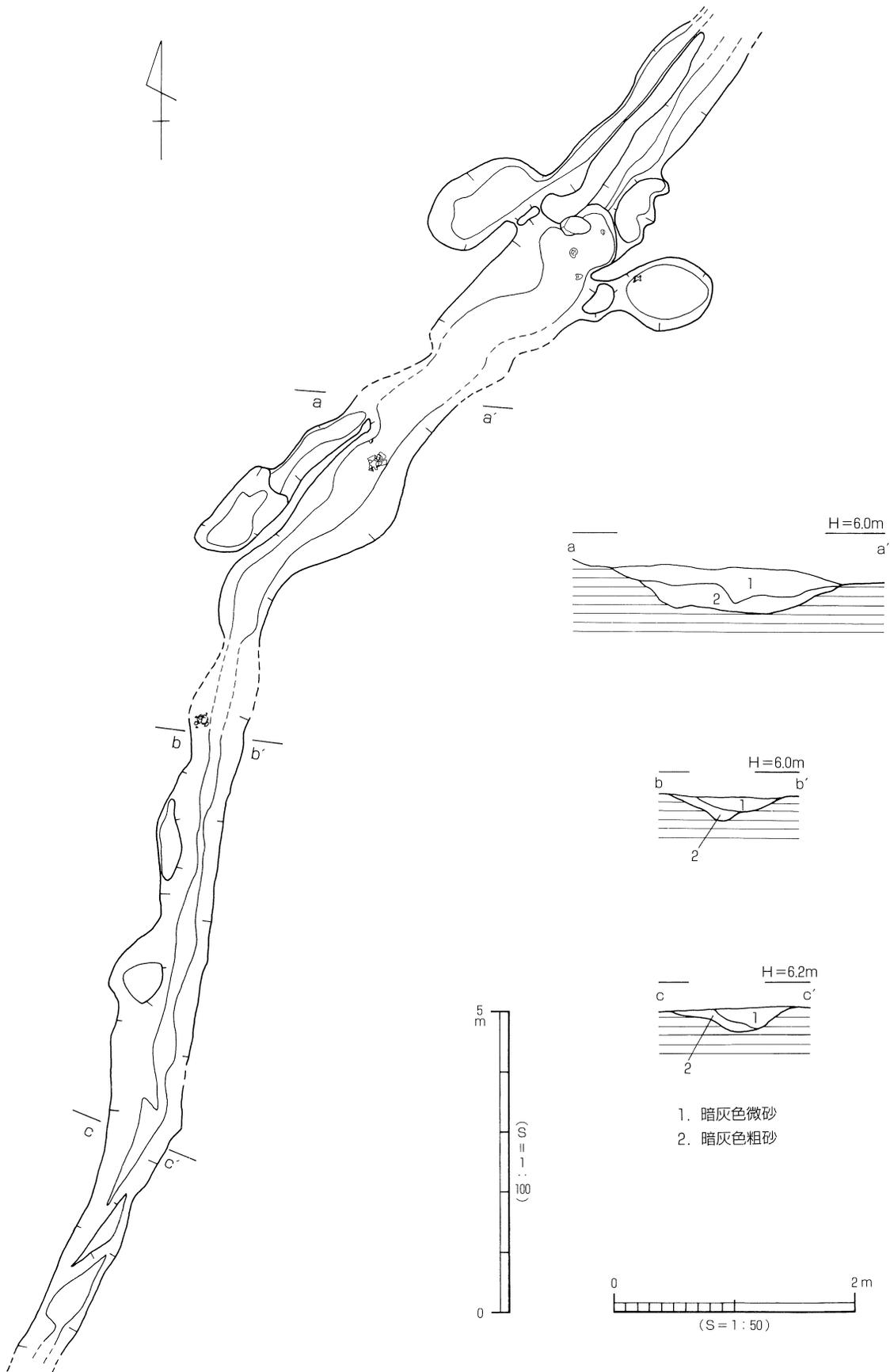
第58図 SD 8・9, SR 13, P 56出土遺物実測図

SR 15 (第59図)

調査区北西部において、SD 4 および SD 11 を切り、SR 6 および SR 21 に切られる状態で検出した。南から北側に向かって流れていたと考えられ、規模は検出長約25m、幅65cm～1.65m、深さ5～41cmを測る。断面形態は逆台形状あるいは舟底形を呈する。埋土は上層が暗灰色微砂、下層が暗灰色粗砂である。枝状に分岐する土坑状の落込み部分においても同様の堆積状況であるため同一遺構として認識した。

出土遺物 (第60図～第62図・第74図533・539)

394～407は須恵器である。394～396は甕の口縁部から頸部にかけての破片である。394は肥厚する口縁端部を上方にナデあげ、その外面に一条の凹線を施す。焼成は良好で、色調は外面が黒色、内面が灰白色を呈する。胎土は緻密で、胎土中にほとんど砂粒を含まない。外面にタタキ成形した後、カキメ調整を施す。395～396は口縁端部を外方に折り曲げた形状をする。395の焼成は良好で灰白色を呈し、胎土は緻密で胎土中にほとんど砂粒を含まない。外面にカキメ調整、内面にナデ調整を施す。396は胴部内外面をタタキ成形したのち外面にカキメ調整を施すものである。焼成は良好で胎土は緻密、胎土中に1mm程の長石をわずかに含む。色調は灰白色を呈する。397～401は坏蓋である。397および398は口縁端部内面に形骸化した凹線状の段を有する。397は肩部に明瞭に凹線状の段を有する。



第59図 S R 15測量図

胎土は密で、胎土中に1 mm以下の砂粒を疎らに含む。焼成は良好で色調は灰白色を呈する。398は焼成がやや甘く、色調は灰色を呈する。胎土は密で、胎土中に1 mm以下の微砂粒を多く含む。399・401は肩部に凹線状の形骸化した凹線状の段を有するものである。399の焼成は良好、胎土は緻密で胎土中にほとんど砂粒を混入しない。色調は灰白色～灰色を呈する。401の焼成は良好で胎土は緻密、色調は灰白色を呈する。400は口縁端部内面に明瞭な段を有するものである。胎土は緻密で焼成が非常に良く、色調は外面が暗青灰色、内面が灰白色、胎土が赤紫色を呈する。

402～407は坏身で403・406・407は口縁立上がり端部内面に沈線を有する。403の焼成は良好で、胎土は緻密、胎土中に1 mm以下の長石をわずかに含む。また、底部内面中央に同心円状のあて具痕を残す。406は立上がり部の約2/3を欠損する復元完形品である。胎土は密だが焼成は悪く、内外面とも乳白色を呈する。口縁端部内面に沈線を一条施すが全周するものではない。407は完形品で立上がり部を僅かに欠く。焼成は良いが胎土は粗く、胎土中に1～2 mm程の長石、石英を疎らに混入する。色調は灰色を呈する。402の胎土は緻密で、胎土中にほとんど砂粒を含まない。焼成は不良で、色調は内外面ともに灰白色を呈する。404は焼成不良で灰白色～明オリブ灰色を呈する。胎土は緻密で、胎土中に1 mm程の長石および石英を少量含む。405は他と比べて口縁の立上がり部分が低く、比較的新しい特徴を有する。胎土は緻密、焼成は良好で灰白色を呈する。

408～410は壺形土器の口縁部片である。408は口縁端部に平坦面を持つ単口縁壺で、黄橙色を呈する。胎土は密で、1～2 mm程の長石および石英を疎らに含む。調整は摩滅のため不明である。409・410は二重口縁壺である。408は山陰系土器で、外方に大きく反り返る二重口縁を有する。焼成は良好、胎土は密で胎土中に1 mm程の長石、石英を疎らに混入する。器面調整は内外面ともにナデ調整を施すもので、黄橙色を呈する。410は口縁部上半がほぼ垂直に立上がる二重口縁壺である。焼成は不良で、摩滅のため表面の剥落が著しい。胎土は粗く、胎土中に3 mm以下の石英および長石を多く含む。

411は緩やかに曲がるくびれ部から内湾気味に立上がる口縁を有する甕形土器である。焼成は良好で、橙色～黄橙色を呈する。胎土は密で、1～2 mm程の砂粒を含む。調整は摩滅のため不明である。

412・413は壺形土器の底部片である。413は摩滅のために器面調整が不明であるが、412の内外器面にはヘラ状(ハケ目)工具痕が放射線状に残る。412の焼成は良好で胎土はやや粗く、胎土中に1～3 mm程の石英、長石を混入する。色調は外面が淡黄色、内面が黄灰色を呈する。413は焼成良好で胎土は緻密、胎土中に2 mm以下の石英、長石および金雲母を少量含む。色調は黄橙色を呈する。

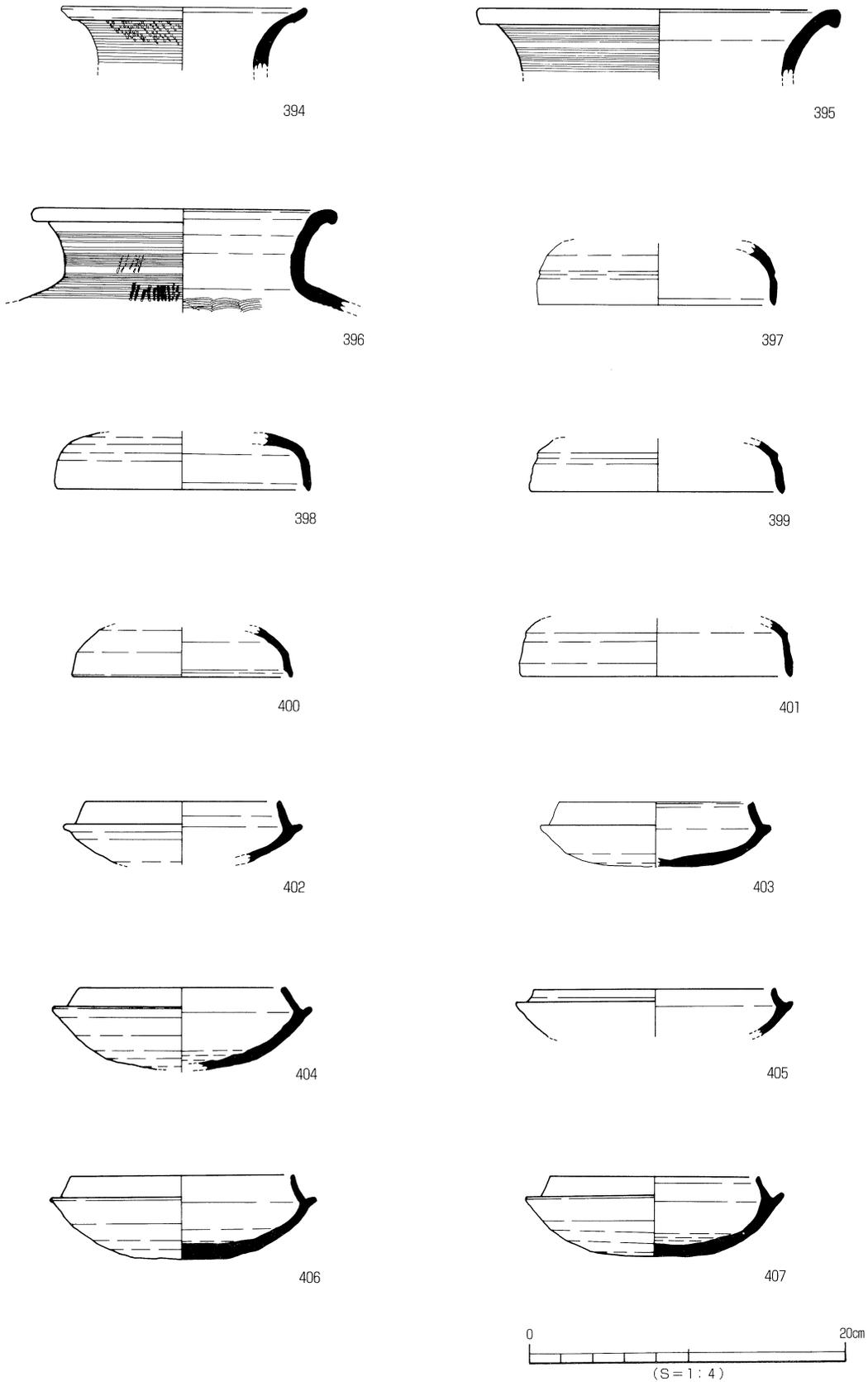
416は丸底で胴部中央より上位に最大径を有する長胴の甕形土器である。外面は縦方向のハケ目調整を行なった後、丁寧にナデ調整を施している。内面はハケ目工具により雑に削った後、指でナデつけている。焼成は良好で胎土は緻密、胎土中に1～3 mm程の長石、石英を少量含む。色調は内外面ともに黄橙色～淡黄色を呈する。おそらく411と同タイプの口縁部がつくと考えられる。

414は高坏の坏部で坏部下半が水平方向にのびる。器面調整は摩滅のため確認できない。焼成は良好、胎土は緻密で堅固、胎土中に1 mm以下の長石を少量含む。色調は内外面ともに淡黄色を呈する。

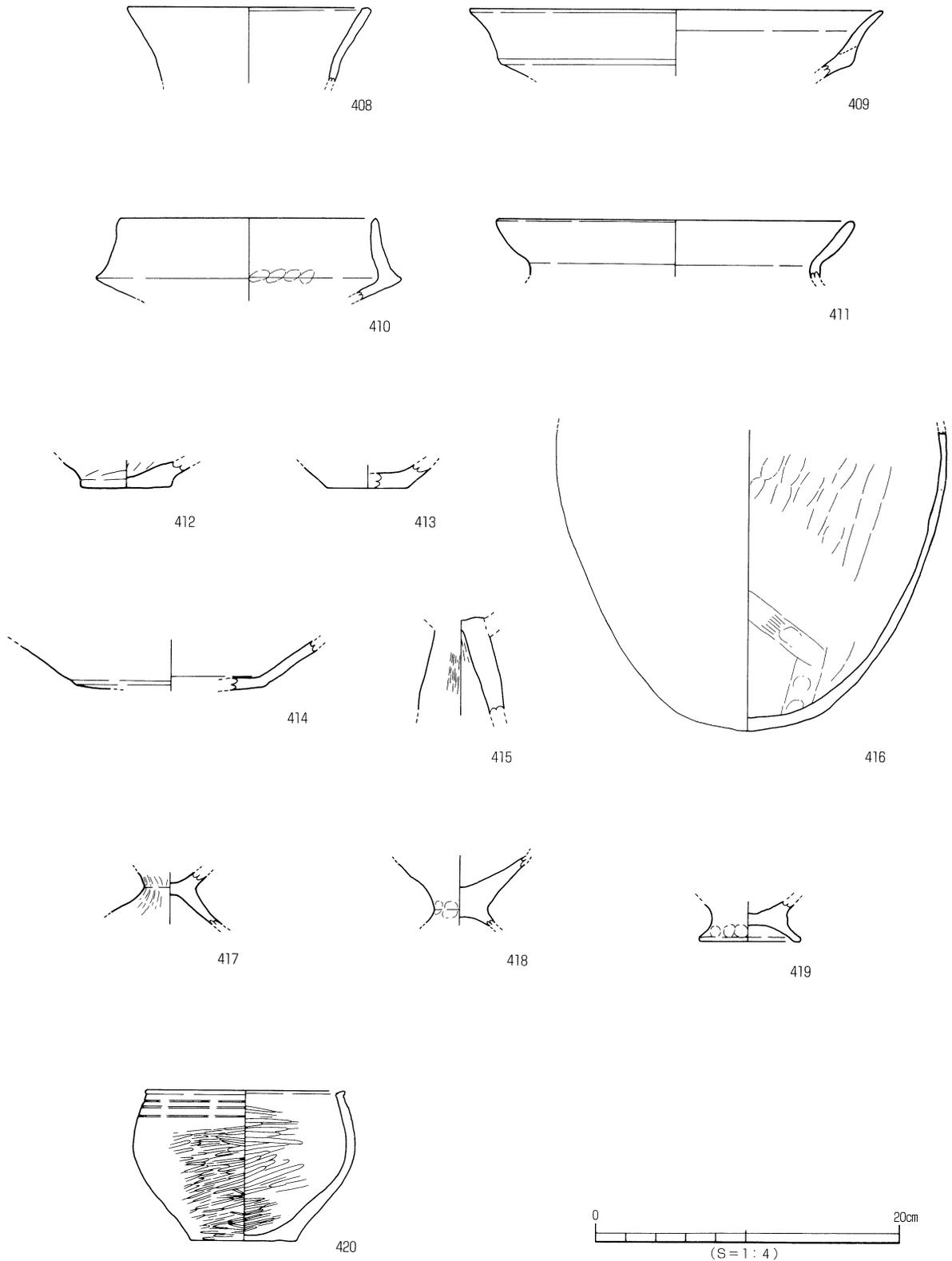
415・417は高坏の脚部片である。415は直線的に延びる中空の脚部である。外面に縦方向の細かなハケ目調整を施す。焼成は良好で胎土は緻密、色調は橙色を呈する。417は脚部が接合部から外反しながら大きく開く。器面調整は内面にナデ調整、外面にヘラミガキ調整を施す。焼成良好、胎土は緻密で胎土中に1 mm以下の長石をわずかに含む。色調は内外面ともに黄橙色～橙色を呈する。

418・419は低脚鉢である。418の器面調整は摩滅のため不詳であるが、脚部を指でつまみ出すよう

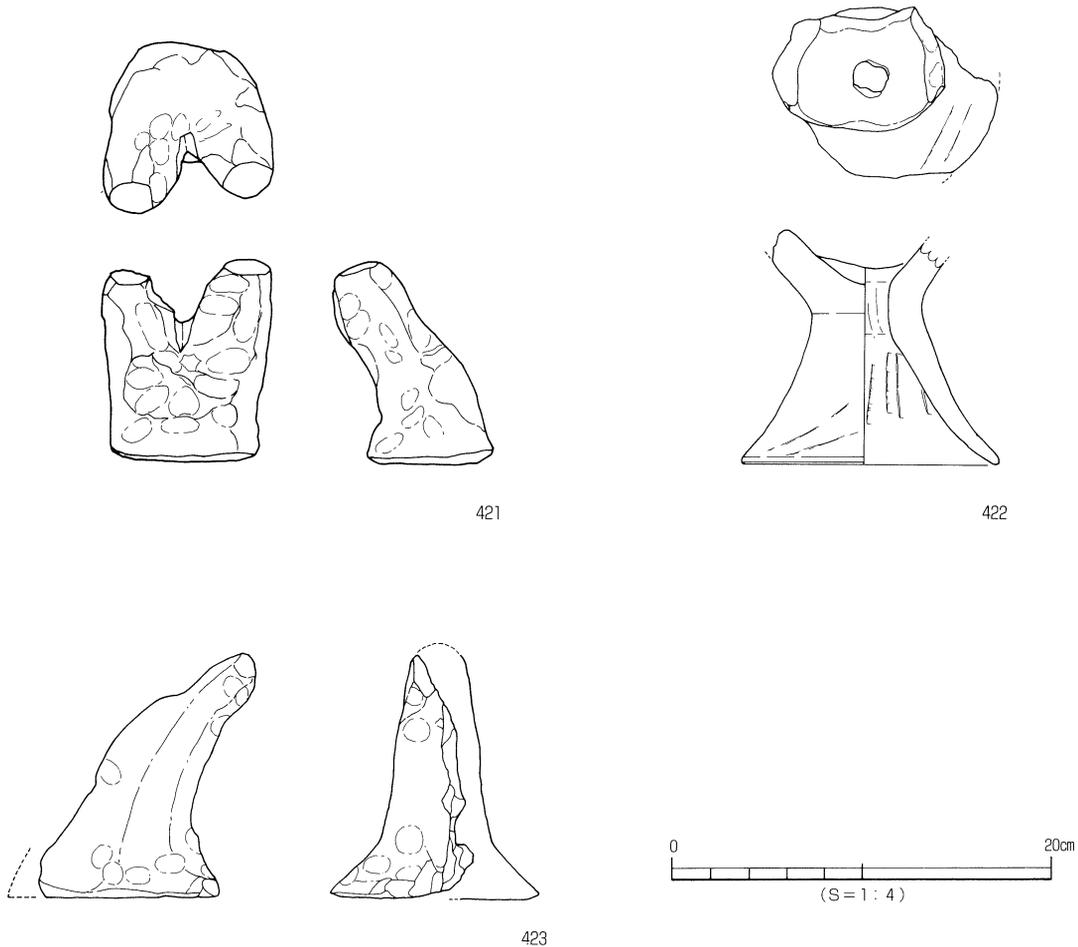
古墳時代後期



第60図 S R 15出土遺物実測図(1)



第61図 S R15出土遺物実測図(2)



第62図 S R 15出土遺物実測図(3)

に形成するものである。焼成は良好で胎土は緻密、胎土中に1mm以下の長石を少量含む。色調は黄橙色を呈する。419の焼成はやや甘く、胎土は粗い。胎土中に1~2mm程の長石および石英を多く混入し、色調は黄橙色~淡黄色を呈する。器面調整は内外面ともにナデ調整を施す。

420は鉢形土器である。全体の約1/2が遺存しており復元完形品である。しっかりとした平底を有し、張りの強い胴部からやや内傾して口縁端部に至る。口縁端部に平坦面を持ち、やや外方に突出する。内外器面ともに丁寧なヘラミガキを施し、口縁部外面に3条の凹線を巡らす。焼成は良好、胎土は密で胎土中に2mm以下の長石、石英、金雲母を混入する。色調は淡黄色~黄橙色を呈する。

421~423は支脚である。421は中実で、2本の角状突起を上方に伸ばす。手捏ね成形を施すもので、突起の先端に平坦面を有する。上面から外面にかけて黒く煤ける。焼成は良好で胎土はやや粗く、1~3mm程の長石および石英を多く含む。色調は黄橙色~淡黄色を呈する。422は両手を広げて天を仰ぐような格好をした中空の支脚である。焼成は良好で胎土は粗く、1~3mm程の長石、石英を多く含む。淡黄色~黄橙色を呈し、ハケ目工具およびヘラ状工具を用いて比較的丁寧に整形されている。423は烏帽子状の支脚で中実、手捏ね成形である。焼成は良好、胎土は緻密で胎土中に1mm前後の長石、石英を混入する。色調は淡黄色を呈する。

時期：出土遺物より、6世紀後半から6世紀末に属すると考えられる。

S R 17 (第57図)

調査区中央部南よりの位置において検出した。T 2 によって一部削平される。掘立 6 の側柱 (P 52) との切り合い関係から、掘立 6 よりは新しい時期の遺構である。規模は検出長約 1.9m、幅 32~50cm、深さ 6~11cm を測り、断面形態は皿状を呈する。埋土は暗褐色 (灰色混) 土である。

出土遺物

土師器の小片が数点出土している。

時期：埋土の色調より、掘立 2・3・4 と同時期である可能性が高い。

ピット状遺構

P 56 (第57図)

調査区南部中央、掘立 6 の北側において検出した。平面形態が隅丸の長方形を呈し長辺 83cm、短辺 72cm、深さ 18~44cm を測る。暗褐色 (灰色混) 土の埋土中に直径約 12cm の柱痕 (黒色粘土) が残る。本遺構を何らかの建物跡に付属する柱穴と考えた場合、これに対応する柱穴として P 60 が考えられる。

出土遺物 (第58図393)

埋土中より土師器片および縄文土器片が出土した。393 は縄文土器の底部片で約 3 分の 1 を欠損する。焼成は軟弱で胎土は粗く、胎土中に 1~2mm 大の長石、石英を多量に含む。底部に貼付けの輪高台を有し、器面調整は摩滅が著しいため確認できない。内外面ともに淡黄色~黄橙色を呈する。

時期：埋土の色調より 6 世紀後半~末に属する可能性が高い。

3. 古代~中世

古代から中世に属する遺構には、溝状遺構 1 条、自然流路 17 条、土坑 3 基、水田、性格不明遺構 5 基がある。

溝状遺構

S D 7 (第54図・第57図)

東西方向に直線的に延びる溝で調査区の南壁際に検出した。数多くの遺構 (S D 2・S D 8・S R 13・S K 2) と切り合い関係を有し、そのいずれよりも新しい。規模は検出長約 27.8m、幅 28~65cm、深さ 2~12cm を測る。埋土は上層が暗灰色土、下層は灰色粘質土である。

出土遺物 (第65図442~444)

442 は立上がり部の約 10 分の 1 を遺存する須恵器坏身片である。焼成は良好で胎土は緻密、色調は灰白色を呈する。443 は須恵器高坏の脚裾部片である。焼成は良好で胎土は緻密、灰色~灰白色を呈する。444 は須恵器甕である。胴部内外面をタタキ成形し、口縁部から頸部にかけてナデ調整を施す。焼成は良好で灰白色を呈し、胎土は緻密で胎土中にほとんど砂粒を含まない。

時期：6 世紀末の須恵器片を出土しているが、埋土の色調および古墳時代後期に属する遺構との位置関係などから総合的に判断するに、古代以降の遺構である可能性が高い。

自然流路

S R 1 (第5図・第68図)

調査区中央部北側において検出した。S R 10および水田と切り合い関係を有する。水田床土に掘り込まれ、水田耕作土と非常に近い埋土(灰白色微砂)にて埋まることから、水田と関係の深い流路である可能性が高い。規模は検出長約13m、幅14cm～1m、深さ2～16cmである。断面形態は緩やかなU字状を呈する。

出土遺物

須恵器片および土師器片が出土しているが図化に耐え得るものではない。

時期：水田との切り合い関係より中世後期以降に属すると考えられる。

S R 2 (第42図)

調査区南西隅から北北東に向かって直線的に続く流路である。S D 4・S D 8・S R 4・S R 7・S R 8・S R 14よりも新しく、S R 10より古い。規模は検出長約52m、幅18～72cm、深さ3～25cmを測る。埋土は上層が灰色細砂、中層が黒(褐)色粘土、下層が灰色粗砂である。断面形態は逆台形状を呈するが、残りの良い部分では浅い皿状の中央を逆台形状に掘り込んだ二段掘り状になる。ほとんど直線的に延びることから、人為的に掘られた溝である可能性がある。

出土遺物 (第65図445～450)

445・446は須恵器である。445は広口壺の口縁部小破片である。焼成は良好、胎土は緻密で灰白色を呈する。446は坏身立上がり部の小破片で、復元口径10.6cmを測る。焼成は良好で灰白色を呈し、胎土は緻密で胎土中に1mm前後の長石および石英を少量含む。

447～450は土師器である。447は甕形土器の頸部から胴部にかけての破片で、頸部外面にタタキ痕を残す。焼成は不良で灰白色～淡黄色を呈し、胎土は緻密で胎土中に1mm前後の長石、石英をわずかに含む。448は高坏の脚部片で、色調は黄橙色～淡黄色を呈する。焼成は不良で摩滅のため表面の剥落が著しい。胎土は緻密で、胎土中に1～2mm程の長石および石英を混入する。449は壺形土器の底部片である。底部の約3分の2を欠損するもので、色調は淡黄色～明褐色を呈する。胎土は密で胎土中に1～3mm程の長石、石英を疎らに含む。器面調整は摩滅が著しく不明である。450は椀形土器で、口縁部の約5分の1を欠損する復元完形品である。焼成は甘く、胎土は密で胎土中に1mm前後の長石および石英を少量含む。色調は淡黄色～明褐色を呈し、器面調整は摩滅のため確認できない。

時期：第VI 2層上面より掘り込まれることから古代以降、中世後期以前に属すると考えられる。

S R 3 (第42図)

調査区西部において検出した。南西から北東あるいは北北東に向かって延びる。S D 4・S R 7と切り合っており、いずれよりも新しい。規模は検出長約24m、幅20cm～1m、深さ2～16cmを測る。断面形態は舟底形を呈する。埋土は上層が暗灰色微砂、下層が灰色細砂である。

出土遺物

須恵器および土師器を少量出土したが、小片のため図化できなかった。

時期：S R 10と埋土が同じであることから古代以降、中世後期以前の遺構と考えられる。

S R 4 (第42図)

調査区西部においてS R 2と一部重なり合う状況で検出した。南西から北北東に向かって蛇行しながら流れ、S R 2およびS R 10よりも古い。断面形態は皿状を呈し、灰白色微砂で埋まる。規模は検出長約25.5m、幅20～65cm、深さ2～14cmを測る。

出土遺物 (第65図451)

須恵器、土師器の小片および埴輪片を出土した。451は円筒埴輪の破片である。タガは低く、断面形態がM字状を呈する。器面調整は内面にナデ調整、外面に比較的木目の細かい縦ハケが施される。焼成は良好で黄橙色を呈し、胎土は緻密で胎土中に1mm以下の長石、石英を少量含む。

時期：VI 1層およびS R 2よりも古いことより古墳時代後期以降、中世後期以前に属すると考えられる。

S R 5 (第63図)

調査区北西部において検出した。他の流路と同様、南から北北東に向かって流れていたと考えられる。規模は検出長約16m、幅55cm～1.8m、深さ4～20cmを測り、断面形態は皿状を呈する。S B 3と切り合っており、その関係からS B 3より新しい。S R 6と同様、流路中には暗灰色粗砂と共に4cm程度の小石から拳大、人頭大の礫が堆積しており、“巨大な流れ”の最下層部分である可能性が高い。特に、暗灰色粗砂で構成される第VI 2層を上層に伴うことより、S R 5は第VI 2層を伴って上流から流れてきた最下流路である可能性が最も高いといえる。従ってS R 5および第VI 2層全体を“土石流”として捉え、S R 5をその最下流路の痕跡として理解する。

出土遺物 (第64図424～430)

424は低脚を持つ鉢あるいは椀形土器の底部片である。焼成は良好で黄橙色～灰白色を呈し、胎土は密で胎土中に1mm前後の長石、石英を少量含む。器面調整は摩滅のため確認できない。

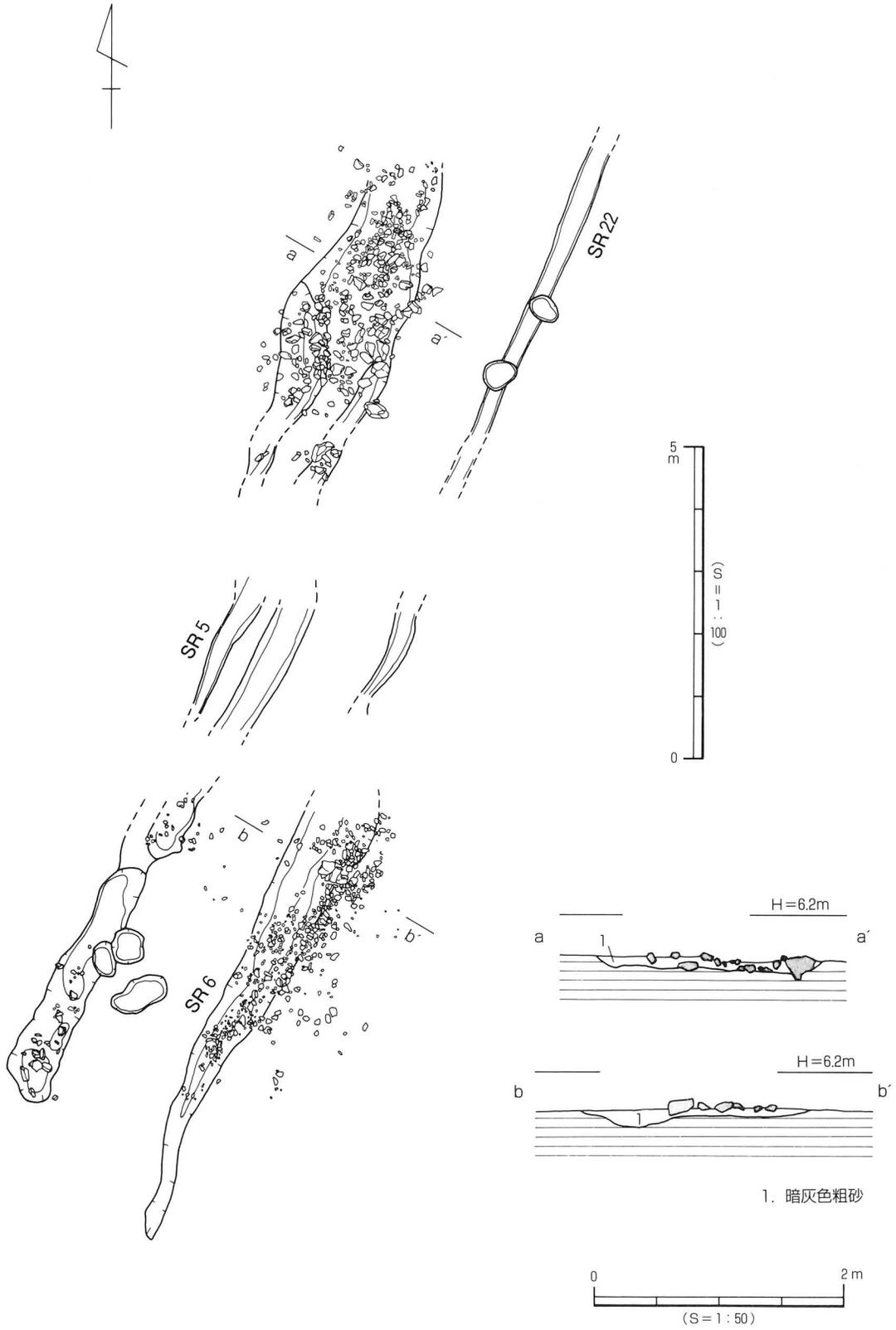
425・426は高坏の脚部である。425は焼成良好で黄橙色～明黄褐色を呈する。器面調整は摩滅のため不明であり、胎土は緻密で胎土中に1mm前後の長石および石英を少量含む。426の焼成は良好で色調は橙色を呈し、胎土は緻密で胎土中に1mm前後の長石をわずかに混入する。

427・428は甕形土器の底部から胴部に至る破片である。427は焼成不良で胎土は緻密、胎土中に1～2mm程の長石、石英および金雲母をわずかに含む。器面調整は摩滅のため不詳であるが、底部内面に指頭圧痕を顕著に残す。色調は内外面ともに淡黄色～灰黄色を呈する。428は焼成が良好で淡黄色を呈し、胎土は緻密で胎土中に1～3mm前後の長石および石英を疎らに混入する。器面調整は外面にハケ目調整、内面にハケ目調整の後ナデ調整を施す。

429は古代に属する須恵器の坏身である。灰白色を呈し、口縁部および底部内面にヨコナデ調整を施す。復元口径が約16.8cmを測り、胎土は緻密、胎土中にはほとんど砂粒を含まない。

430は縄文土器である。鉢形土器の口縁部片で、口縁部を外側に軽く折り曲げるものである。色調は黒褐色、焼成は良好で胎土は密、胎土中に1mm前後の長石および石英を多く含む。摩滅により器面調整は確認できないが、縄文時代後期に属するものであろう。

時期：429よりS R 5は古代(8～9世紀)期に発生した土石流の可能性が高い。



第63図 SR 5, SR 6, SR 22測量図

S R 6 (第63図)

調査区北西部においてS R 5の東側にほとんど並行する状態で検出した。他の流路と同様に南側から北北東方向に流れていたと考えられる。第VI 1層除去後、第VI 1層がそのまま第VI 2層および第VII層に落ち込む形で残ったものである。従って、埋土は第VI 1層と同じ暗灰色粗砂である。特に埋土中に礫を多量に混入することより流路として認識したものであるが、本来は上層に第VI 1層を伴い、第VI 2層上面あるいは第VII層上面を切り込んで流れる“土石流”の最下部である。1区においては流路の落ち込みとそれに伴う集石の関係が明瞭であったが、2区では流路の痕跡が不鮮明で、礫が平面的に広がる状況を確認するに留まった。規模は検出長約7.4m、幅20cm～1.2m、深さ2～15cmを測り、断面形態は皿状を呈する。

出土遺物 (第64図431～441)

431および439～441は土師器の甕形土器である。431は強く折れ曲がる口縁端部に面を有するものである。摩滅のため胴部外面調整は不明だが、口縁部にナデ調整、胴部内面にヘラ削り調整を施す。焼成は良好で淡黄色～黄橙色を呈し、胎土は密で胎土中に1mm前後の長石、石英を疎らに含む。439は口縁部が緩やかに内湾して立上がるものである。口縁部から胴部にかけて約3分の1を欠損する。色調は淡黄色～橙色を呈する。焼成は良好で胎土はやや粗く、1～3mm程の長石、石英を疎らに混入する。器面調整は内面に雑なナデ調整、外面にハケ目調整の後ナデ調整を施す。440は長胴の体部を有し、口縁部をわずかに外方に折り曲げる甕形土器である。焼成は良好で、淡黄色～黄橙色を呈する。胎土は密で胎土中に1mm前後の石英、長石をわずかに含む。器面調整は胴部外面に粗いハケ目調整、口縁部および胴部内面に丁寧なナデ調整を施す。441は甕形土器の底部から胴部にかけての破片で、約2分の1を欠損する。焼成は良好で淡黄色～橙色を呈し、胎土はやや粗く、胎土中に1～3mm程の長石、石英を疎らに混入する。調整は内面に雑なナデ調整、外面にハケ目調整の後ナデ調整を施す。

432・433は須恵器坏身である。432は焼成良好で灰色を呈し、復元口径約10cmを測る。胎土は緻密で胎土中にほとんど砂粒を混入しない。立上がり部周辺の約7/8を欠損する資料である。433は立上がり端部内面に沈線状の段を有するもので、復元口径約14.4cmを測る。焼成は良好で灰白色を呈し、胎土は緻密で胎土中にほとんど砂粒を混入しない。

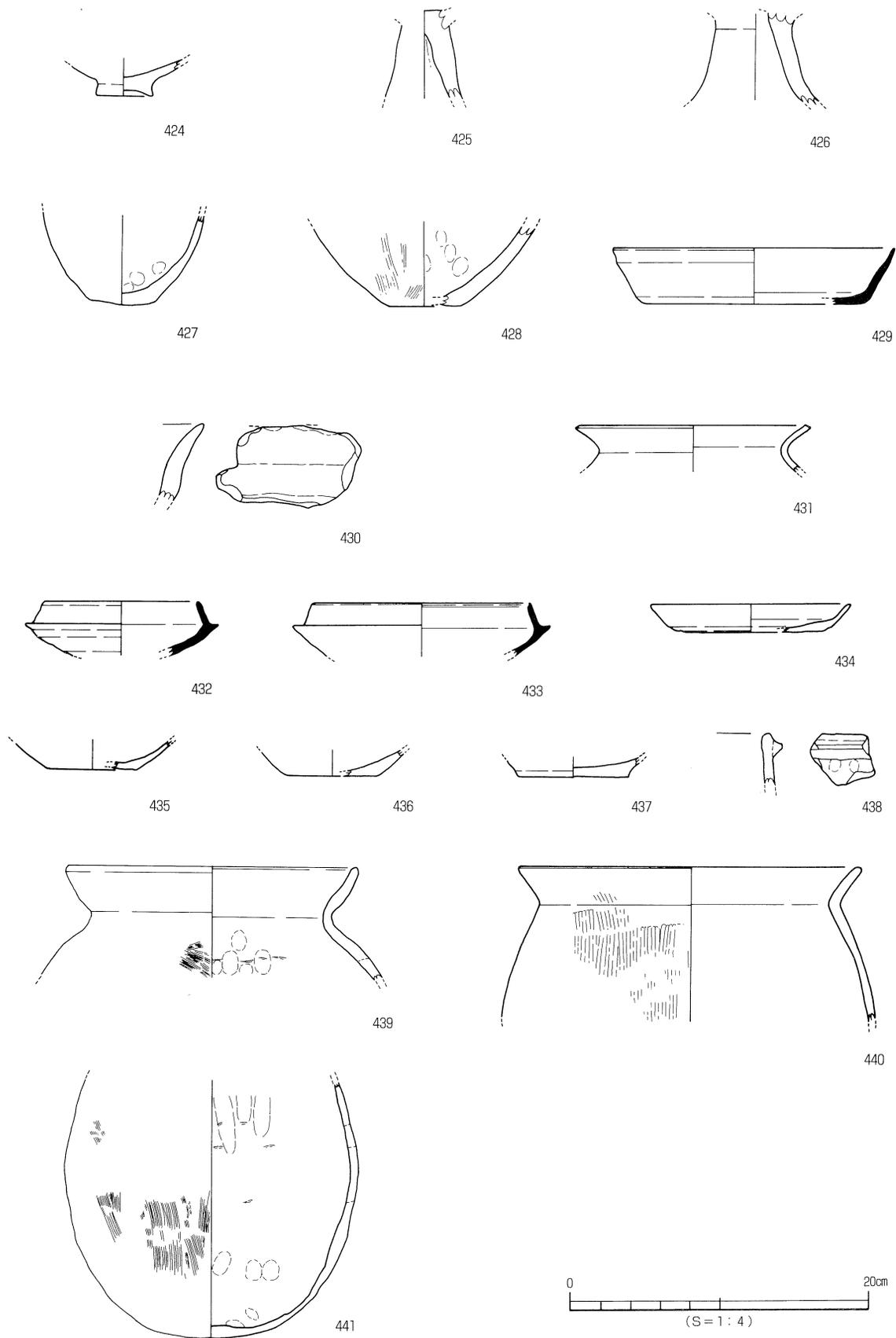
434は土師皿である。全体の約2分の1を欠損し、復元口径約13.4cm、器高1.95cmを測る。焼成は良好で淡橙色～黄橙色を呈し、胎土は緻密で胎土中にほとんど砂粒を混入しない。器面調整は内面および口縁部に回転ヨコナデを施し、底部を回転ヘラ切りによって切り離すものである。石井幼稚園S D 1出土例よりも口径がやや大きく、9世紀後半代に属するものと思われる。

435～437は内面および口縁部に回転ヨコナデを施し、底部を回転ヘラ切りによって切り離す土師器の坏である。437は435および436と比して底部と体部の境界がきつく円盤高台状を呈する。435は焼成良好で灰黄褐色～褐灰色を呈し、胎土は緻密で胎土中にほとんど砂粒を含まない。436は焼成良好で胎土は緻密、胎土中にほとんど砂粒を含まない。色調は外面が灰黄色、内面が灰白色を呈する。437の焼成は良好で灰白色を呈し、胎土は緻密で胎土中に1mm前後の砂粒をわずかに混入する。

438は土師器羽釜の口縁部小片である。焼成は良好で、外面が灰黄褐色、内面が褐灰色を呈する。胎土は密で胎土中に1mm程の長石および石英を疎らに含む。内器面の調整は摩滅のため不明だが、外面にナデ調整を施す。

時期：438よりS R 6は14～15世紀以降、中世後期に発生した土石流であると考えられる。

古代 ~ 中世



第64図 SR 5, SR 6 出土遺物実測図

S R 8 (第42図)

調査区西部中央に位置し、南北方向に延びる。規模は検出長約2.8m、幅38～46cm、深さ2～6cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は暗灰色粗砂である。S R 2より古い流路である。

出土遺物

須恵器および土師器の小片を出土した。

時期：古墳時代後期以降、中世後期以前に属する。

S R 10

調査区中央部北よりの位置において検出した。切り合い関係よりS R 2およびS R 4よりも新しく、S R 1より古い。南側に膨らんで東西方向に延びる。埋土は上層が暗灰色微砂、下層が灰色粗砂である。断面形態は皿状を呈し、規模は検出長約9.8m、幅31～60cm、深さ2～9cmを測る。

出土遺物

土師器の小片が出土したのみである。

時期：S R 2より新しいことより古代以降、中世後期以前に属する。

S R 11 (第57図)

調査区南西部に位置し、東西方向に延びる。規模は検出長約4.1m、幅22～42cm、深さ1～8cmを測る。断面形態は皿状および緩やかなU字状を呈する。埋土は灰白色粗砂である。

出土遺物

サヌカイトの剥片・6世紀末の特徴を持つ須恵器および土師器の小片などが出土している。

時期：第VI 1層より古く、古墳時代後期以降、中世後期以前に属する。

S R 12 (第57図)

調査区南西部において検出した。切り合い関係からS R 14より新しい遺構であると考えられる。南側から北北東に向かって流れていたと思われる。検出長約2.8m、幅24～38cm、深さ2～6cmを測る。埋土は灰白色粗砂、断面形態は緩やかなU字状を呈する。

出土遺物

須恵器の破片が出土しているが小片のため図化不能である。

時期：古墳時代後期以降、中世後期以前に属する。

S R 14 (第57図)

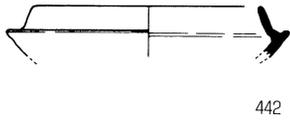
調査区南西部に位置し、S R 2およびS R 12より古い時期の遺構である。規模は検出長約2.3m、幅54～78cm、深さ4～10cmを測る。埋土は灰色粗砂で、断面形態は舟底形、皿状を呈する。

出土遺物 (第65図452～454)

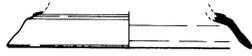
452は高坏の脚部片である。焼成不良で灰白色を呈し、摩滅および表面の剥落が著しい。胎土は密で胎土中に1mm前後の長石を疎らに含む。

453は須恵器の坏蓋である。復元口径13.0cmで口縁端部内面に強いヨコナデを施し、肩部に凹線状の段を有する。焼成は良好で灰白色～灰色を呈し、胎土は緻密で胎土中にほとんど砂粒を含まない。

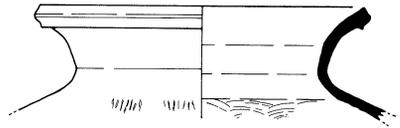
古代 ~ 中世



442



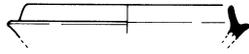
443



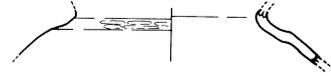
444



445



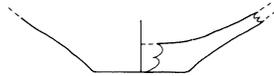
446



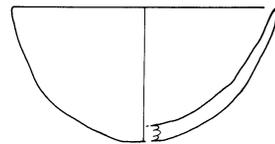
447



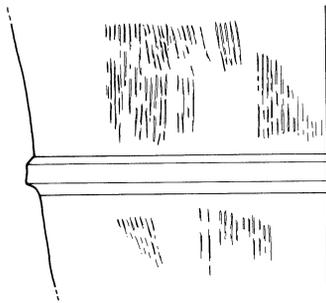
448



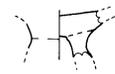
449



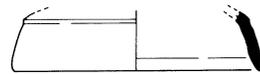
450



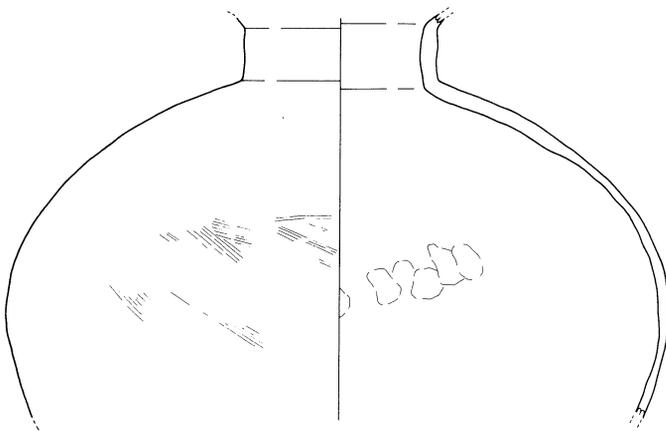
451



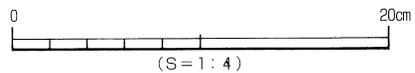
452



453



454



第65図 SD7, SR2, SR4, SR14出土遺物実測図

454はやや肩部の張った球形の体部から頸部が直立して立上がる二重口縁壺である。焼成は良好で胎土はやや粗く、胎土中に1～3mm程の石英、長石および金雲母を多く混入する。器面調整は摩滅、表面剥落が著しく不詳な点が多いが、胴部外面をハケ目調整、内面をヘラ削り調整の後ナデ調整を施すものと思われる。色調は外面が黄橙色、内面が黄橙色～黄灰色を呈する。

時期：古墳時代後期以降、中世後期以前に属する。

S R 16 (第57図)

調査区西側の南壁際に検出した。西側から東南東に向かって延び、S D 7を切る。埋土は上層が暗灰色微砂、下層が灰白色細砂である。検出長約6.2m、幅34～58cm、深さ7～14cmを測る。断面形態は皿状および逆台形状を呈する。

出土遺物

須恵器および土師器の小片を出土した。

時期：埋土の色調およびS D 7との切り合い関係より、古代以降中世後期以前に属する。

S R 18 (第57図)

調査区南西端部において検出した。規模は検出長約1.5m、幅16～28cm、深さ1～4cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は灰白色粗砂単一層である。

出土遺物

本遺構から遺物の出土は見られない。

時期：S R 11、12と埋土が同じであることから古墳時代後期以降、中世後期以前に属する。

S R 19 (第5図)

調査区北西端部においてS R 20と近接した位置にほとんど並行した状態で検出した。切り合い関係から判断するにS B 4 (S D 10)より新しい。規模は検出長約3m、幅26～34cm、深さ3～12cmを測る。断面形態は緩やかなU字状を呈する。埋土は灰白色微砂で、水田耕作土と酷似することよりS R 1同様、水田に関係のある流路の可能性が高い。

出土遺物

ヘラ切り痕の残る土師器(坏)の底部小片が出土した。

時期：埋土より中世後期以降に属すると考えられる。

S R 20 (第5図)

調査区北西端部に位置し、S R 19に近接し並んだ状態で検出した。南側から北北東に向かって延び、S B 4と切り合い関係を有する。規模は検出長約4.6m、幅30～62cm、深さ3～14cmを測り、断面形態は緩やかなU字状を呈する。埋土が灰白色微砂であることより、S R 1およびS R 19同様、水田と非常に関係の深い遺構である可能性が高い。

出土遺物

須恵器の破片が出土しているが、小片のため図化できない。

時期：埋土より中世後期以降に属する遺構である可能性が高い。

S R 21 (第5図)

調査区北西部に位置し、検出長約2.6m、幅20～36cm、深さ2～8cmを測る。S R 22よりも古く、S R 15およびS D 11よりも新しい。埋土は灰色粗砂で、断面形態は皿状を呈する。

出土遺物

本遺構から遺物は出土していない。

時期：遺構との切り合い関係より古墳時代後期以降、中世後期以前に属する。

S R 22 (第63図)

調査区北西端部において検出した。南側から北北東に向かって延びる。規模は検出長約9.5m、幅18～40cm、深さ5～15cmを測る。断面形態は緩やかなU字状を呈する。灰白色微砂で埋まることからS R 19およびS R 20と同一機能を有する遺構、水田に関わる流路である可能性が高い。

出土遺物

本遺構から遺物の出土は見られない。

時期：埋土より中世後期以降に属する遺構である可能性が高い。

土 坑

S K 4 (第66図)

調査区北部、やや東よりの位置において検出した。S R 7よりも新しく、水田よりも古い。不整形円形を呈し、長径1.35m、短径1.05mを測る。断面形態は舟底状で、深さ18～33cmを測る。埋土が水田耕作土と同質の土で構成されることから、水田造営時に掘り込まれた遺構である可能性が高い。

出土遺物 (第67図)

遺構の壁が非常に脆く、結果としてS R 7から遺物の混入が見られた。

455は壺形土器の口縁部である。山陰系の二重口縁を有する。焼成は良好で、外面が黄橙色、内面が淡黄色を呈する。摩滅およびマンガン付着が著しく器面調整は確認できない。胎土は密で、胎土中に1～3mm程の長石、石英および金雲母を疎らに含む。

456は口縁端部が内湾気味に立上がる椀形土器である。全体の約2/3を遺存し、摩滅およびマンガンの付着が著しい。焼成は良好で黄橙色を呈し、胎土は緻密で1mm前後の長石、石英を疎らに含む。

457は小型の高坏脚部である。焼成は良好で淡黄色～黄橙色を呈し、胎土は緻密だが胎土中に2～3mm程の石英、長石および金雲母を疎らに混入する。

時期：埋土より中世後期に属する可能性が高い。

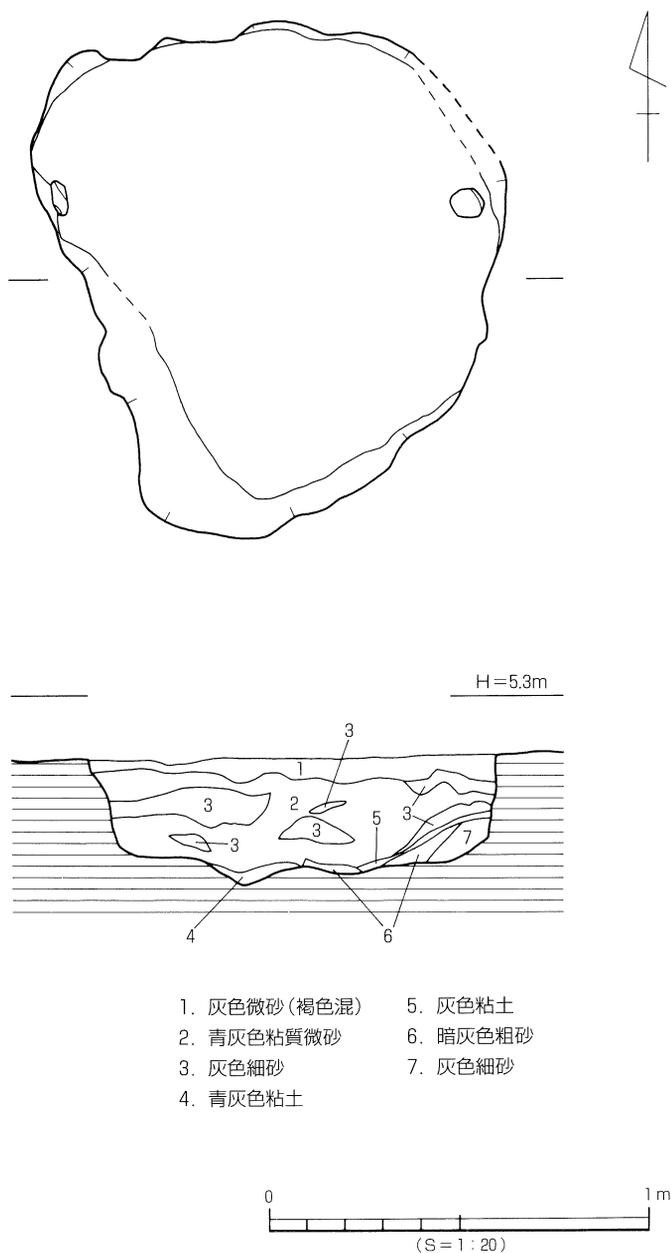
S K 5 (第57図)

調査区南西部に位置し、S R 11の東側に検出した。平面形態は不整形長方形を呈し、長辺約1.9m、短辺約1.1mを測る。断面形態は逆台形状を呈し、深さ8～17cmを測る。埋土は灰白色粗砂である。

出土遺物

数点の須恵器片が出土しているが小片のため図化できない。

時期：第Ⅵ層より古いことから古墳時代後期以降、中世後期以前に属する。



第66図 SK 4 測量図

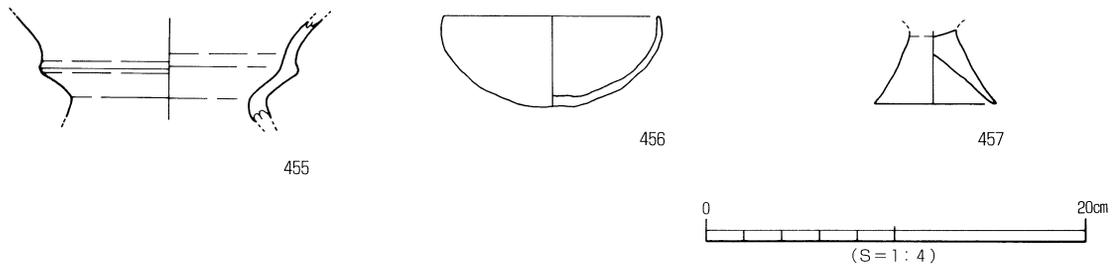
SK 6 (第68図)

2区中央南側、SR 1の東側にて検出した。平面形態は楕円形状を呈し、規模は長径1.65m×短径1mを測る。断面形態は皿状あるいは逆台形状で、東側にテラス状の段を有し西側に落ち込む形態をとる。深さはテラス部分が2～6cm、底部が約32cmである。埋土は灰白色微砂で、SK 4同様、水田造営時に掘り込まれた可能性が高い。

出土遺物

本遺構より遺物は出土していない。

時期：埋土より中世後期以降に属すると思われる。



第67図 SK4 出土遺物実測図

水田遺構 (第5図・第68図)

調査区北壁中央から北壁および東壁に添って広がり南壁に突き当たる。本来は調査区全域に広がっていたと考えられ、基本層序の第Ⅳ層是水田遺構の耕作土、第Ⅴ層は床土である。

水田区画としては、東西方向に2条、南北方向に2条の小畦畔(幅30～70cm)を検出した。地形的な制約のために西あるいは南から北東側に進むにつれて水田面を低く造っており、緩傾斜面に造られた段々畑状の水田であることが判明した。概して畦畔の内側(低い水田面側)には幅35～90cmの溝が存在する。また、溝の内側に溝と並行するように杭を打ち込んでいる部分を確認しており、本水田に伴う水利施設の痕跡である可能性が高い。

水田はある段階において一気に洪水砂(第Ⅲ層)によって埋まっており、遺存状況は比較的に良好である。特に調査区の北東端部に位置する水田面の遺存状態は良好で、数ヶ所より人間の足跡を検出した。

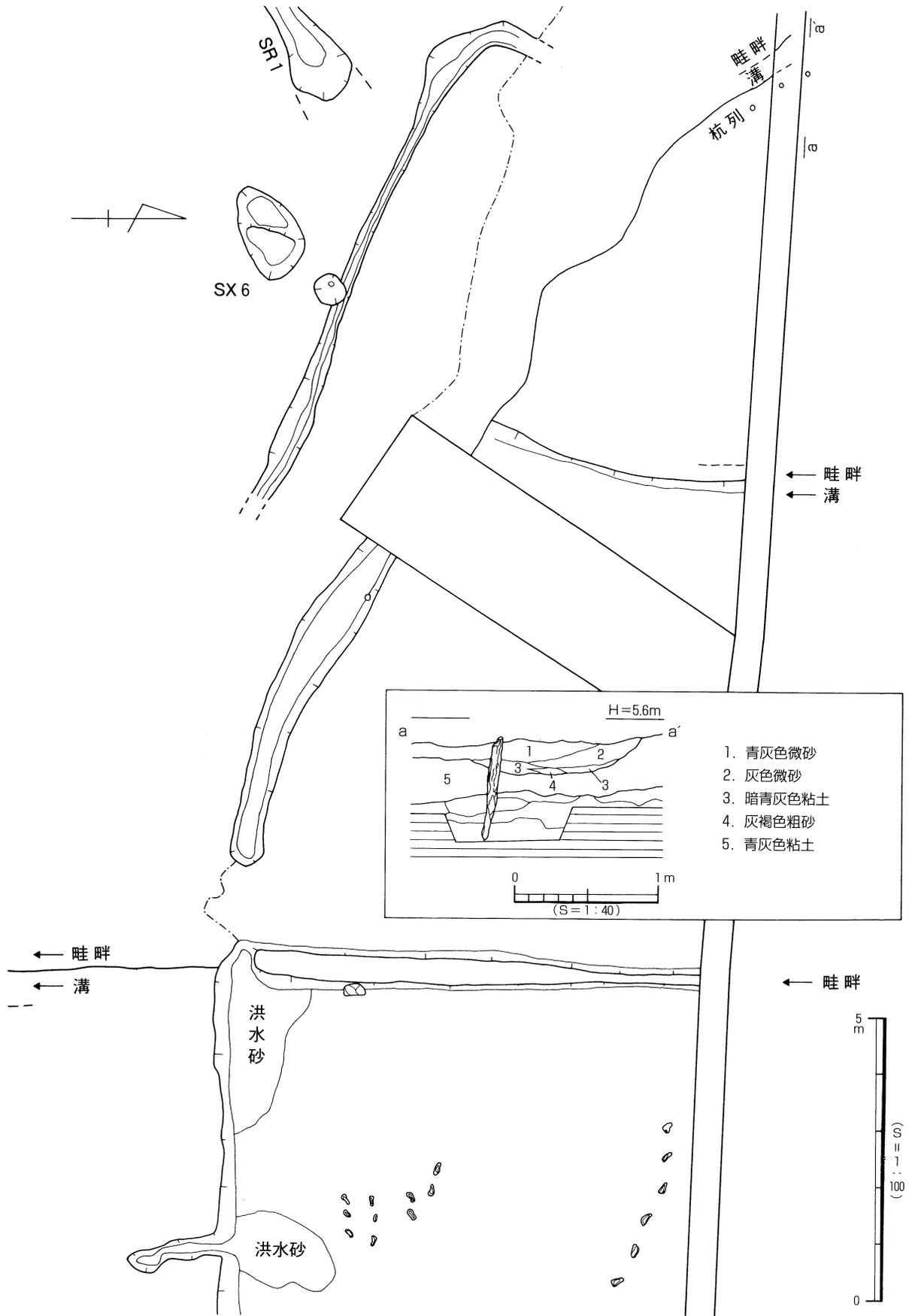
出土遺物 (第69図)

458～468は明確に平面プランを確認した水田面より出土した遺物である。458～461・463・465是水田耕作土中より出土した土器である。458～461は土師器羽釜で、14～15世紀にみられる。458は口縁端部外面に断面三角形の隆帯を貼りつける。焼成は良好で灰黄色を呈し、胎土は密で胎土中に1mm以下の石英、長石を疎らに含む。器面調整は内外面ともナデ調整を施す。459は胴部最大径位置に断面台形状の隆帯を貼りつけるものである。焼成は良好、胎土は緻密で胎土中に1mm以下の石英、長石をわずかに含む。内外面とも灰白色を呈し、器面調整は内外面ともにナデ調整を施す。460・461は土師器羽釜の足である。461は羽釜胴部との接合部付近、460は先端部付近の破片である。460の焼成は良好で堅固、胎土は密で胎土中にほとんど砂粒を含まず、色調は明黄褐色を呈する。428の焼成は良好で堅固、色調は褐色～黄橙色を呈する。胎土は密で、胎土中に2mm以下の石英および長石を疎らに含む。

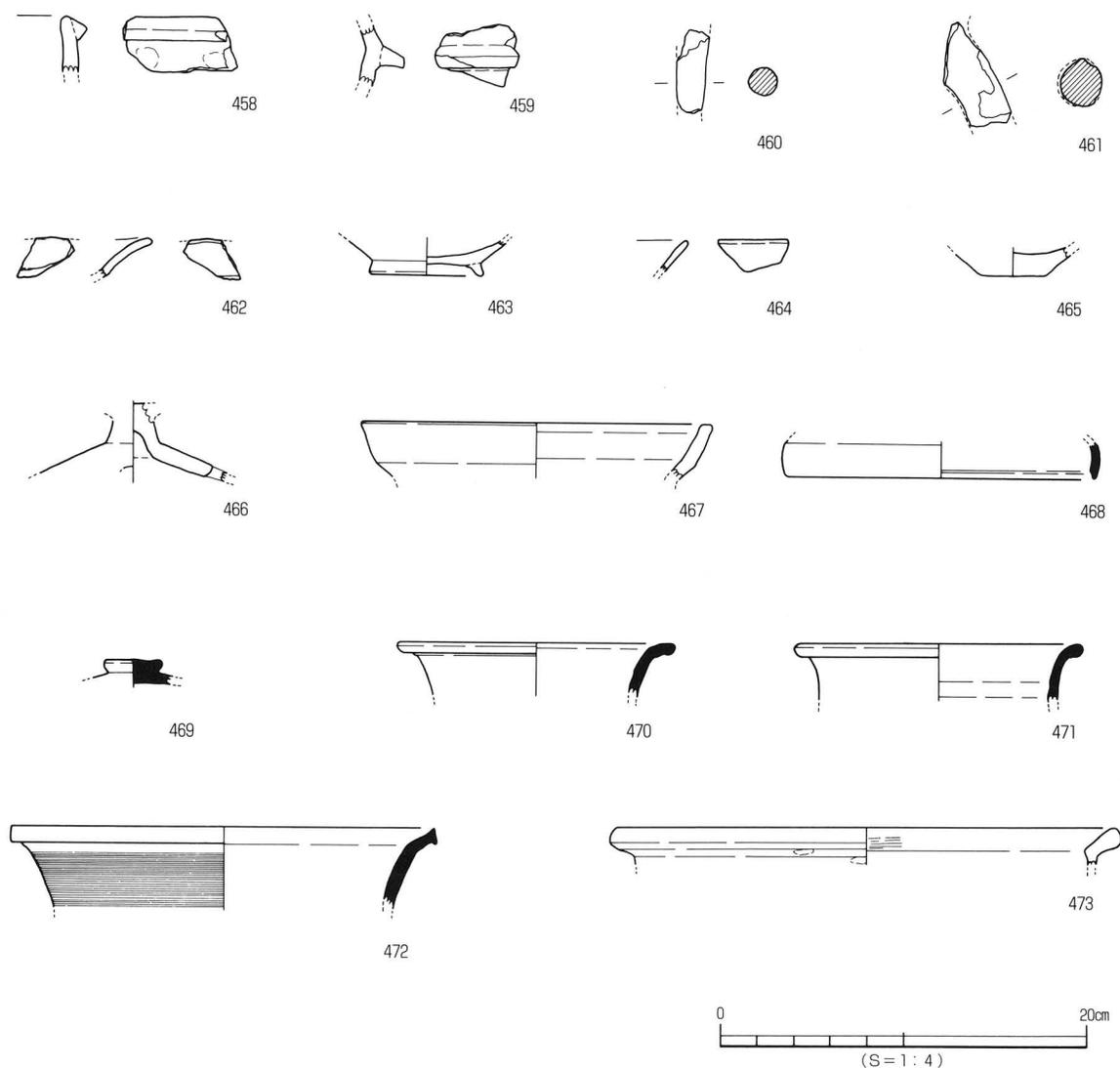
463は太めの輪高台を持つ土師器椀で、12世紀代に見られる資料である。焼成はやや甘く、摩滅により表面の剥落が著しい。色調は灰白色～明黄褐色を呈し、胎土は緻密で胎土中に2mm程の石英をわずかに含む。

465は壺形土器の底部である。焼成は良好で、色調は外面が淡黄色、内面が褐灰色を呈する。胎土は密で、胎土中に1mm以下の石英および長石を疎らに含む。器面調整は摩滅のため不明である。

462・464・466～468是水田床土中から出土した遺物である。462は貿易陶磁、青磁稜花皿の口縁部小片である。15世紀中葉から16世紀後半にかけてみられるものである。



第68図 水田測量図



第69図 水田出土遺物実測図

464は口縁端部をやや肥厚させる瓦器碗の口縁部片である。焼成は良好で胎土は緻密である。摩滅のため器面調整は不明である。

466は土師器高坏の脚部片で裾部の約3分の2を欠損する。裾部に焼成前穿孔を施し、上位に椀形の坏部が続くと考えられる。焼成は良好だが、器面調整は摩滅およびマンガンの付着が著しく確認できない。色調は外面が黄橙色、内面が淡黄色を呈し、胎土は緻密で、胎土中に2mm以下の石英、長石を少量含む。

467は土師器の甕形土器である。口縁部が緩やかに内湾しながら立上がり、口縁端部に平坦面を有する。焼成良好で淡黄色～黄橙色を呈し、胎土は密で胎土中に1mm以下の石英を疎らに含む。器面調整は内外面ともにナデ調整を施す。

468は須恵器坏蓋の小破片で、口縁端部内面に凹線状の段がめぐる。焼成は良好で胎土は緻密、胎土中にほとんど砂粒を含まない。色調は外面が暗灰色、内面が灰白色を呈する。

469～473は第V層出土遺物である。水田面の検出には至らなかったものの、土層観察より本来は水田であったことが判明している為、参考までに掲載した。

469～472は須恵器である。469は扁平なつまみの付いた坏蓋で、8世紀代に属する。焼成は良好、胎土は緻密で灰白色を呈する。470・471は広口壺の口縁部から頸部にかけての破片である。口縁端部を外方に折り曲げてやや肥厚させるもので、内外器面ともに回転ヨコナデ調整を施す。470の焼成は良好で外面が灰白色、内面が緑灰色を呈する。胎土は緻密で胎土中に1mm前後の長石をわずかに含む。471は焼成良好で灰色を呈し、胎土は緻密で胎土中にほとんど砂粒を含まない。472は甕の口縁部から頸部にかけての破片で、口縁端部を折り曲げて上下に拡張するものである。外面は灰白色、内面は自然釉の付着が著しくオリーブ灰色を呈する。焼成は良好、胎土は緻密で胎土中に1mm以下の砂粒を少量含む。

473は土師器土鍋の口縁部片である。丸みを持って内湾気味に立上がる胴部より口縁部を大きく折り曲げ、口縁端部をやや肥厚させるものである。焼成は良好で胎土は緻密、胎土中に1mm程の石英を少量混入する。色調は外面が褐色～黒褐色、内面が灰黄褐色を呈する。

時期：出土遺物(462)より、中世後期(15世紀中頃～16世紀後半)に属する。

性格不明遺構

S X 1・S X 2・S X 3・S X 4 (第54図)

調査区南東部に位置し、掘立1の東側に密集した状態で検出した。掘立2と切り合い関係を有し、掘立2よりも新しい。平面形態は不整円形あるいは不整楕円形を呈し、直径が44cmから86cmに及ぶ。断面形態は底部の凸凹が激しいため一定しておらず、深さも4cmから29cmまで様々である。遺構内にはいずれも灰白色微砂が堆積しており、水田となんらかの関わりを有する遺構である可能性が高い。

出土遺物 (第70図474)

474はS X 2の埋土中より出土した壺形土器の底部である。摩滅のため調整は不明であるが底部に線刻が施される。焼成は良好で淡黄色～黄橙色を呈し、胎土は緻密で胎土中に1mm以下の石英をわずかに含む。

時期：水田耕作土と同一埋土であることより、中世後期以降に属すると考えられる。

S X 5 (第5図)

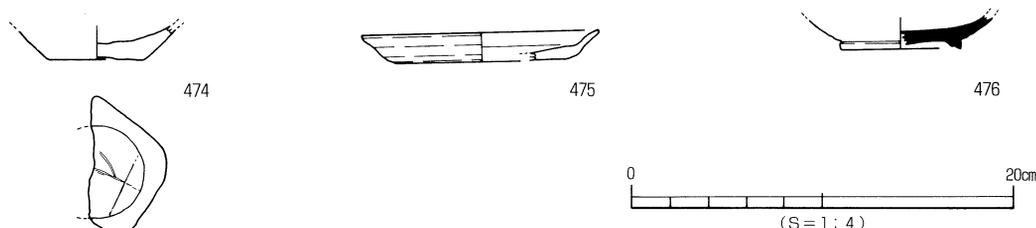
調査区北西部、S R 5とS R 22に挟まれる位置に検出した。その周囲には、埋土が等しく性格を同じくするS Xが多く存在するが、S X 5をその代表として説明を加える。

S X 1～4と同様に埋土が灰白色微砂を呈し、底部の凹凸が激しい。平面形態は瓢箪形を呈し、規模が長径1.96m、短径86cm～1.58m、深さ27～40cmを測る。埋土が水田耕作土と同質の土で構成されることから水田造営時に掘り込まれた可能性が高い。

出土遺物 (第70図475・476)

S X 5 自体から出土した遺物はないが、周辺に散在するS Xより遺物が少量出土しているので説明を加える。

475は底部を回転ヘラ切りによって切り離す土師皿の破片である。薄い口縁部をつまみ出して外反



第70図 SX出土遺物実測図

させるもので、復元口径が約12.2cm、器高が約1.58cmを測る。焼成は軟弱で、摩滅のため表面の剥落が著しい。色調は淡橙色～灰白色を呈し、胎土は緻密で胎土中にほとんど砂粒を含まない。9世紀後半～10世紀代に属すると考えられる。

476は緑釉陶器の底部片である。高台部内面に段を有する近江産の緑釉陶器で、10世紀後半以降に見られる資料である。

時期：埋土より、SX 1～4と同様、中世後期以降に属すると考えられる。

4. 第VI層出土遺物 (第71図・第72図)

SR 5およびSR 6の項において説明したように、第VI 1層および第VI 2層はそれぞれSR 6およびSR 5を最下層流路とし、調査区全体を包むように流れた土石流の痕跡である可能性が高い。しかし、調査段階においては第VI層出土遺物を層ごとに細かく分けて取り上げる事が困難であった。そのため今回、第VI層出土遺物として一括報告するものである。

477は縄文土器である。浅鉢の口縁部から胴部にかけての破片で、復元口径約24.2cmを測り、口縁部の約6分の1を遺存する。焼成は軟弱で、器面調整は摩滅のため確認できない。色調は淡黄色～明黄褐色を呈し、胎土はやや粗く胎土中に1～3mm程の石英、長石、金雲母を疎らに含む。

478・479は弥生土器である。478は壺形土器の肩部小片である。外器面にヘラ描きの直線文および波状文を交互に施文するもので、前期後半に見られるものである。焼成は良好で胎土は緻密、胎土中に2mm以下の長石および石英を疎らに含む。色調は外面が黄橙色、内面が黄灰色を呈する。479は甕形土器の口縁部で、「く」の字に強く外反する口縁部の端部を上下に肥厚させ、肥厚部外面に1条の凹線を施すものである。焼成は良好で淡黄色～灰黄色を呈し、胎土は密で胎土中に1mm以下の長石、石英を疎らに混入する。器面調整は口縁部および胴部内面にナデ調整、胴部外面にハケ目調整を施す。中期末から後期初頭に属するものである。

480～487は古墳時代前期の土師器である。480はミニチュア土器で、壺形土器の底部片であると考えられる。焼成は良好で、胎土は緻密で胎土中に1mm以下の石英、長石を少量含む。色調は外面が橙色、内面が灰黄色を呈し、器面調整は摩滅のため確認できない。481は鉢形土器で、胴部および口縁部の一部を欠損する。焼成は良好で胎土は緻密、胎土中に1mm以下の長石を疎らに含む。色調は内外面ともに灰白色～黄橙色を呈し、器面調整は摩滅およびマンガン付着の為確認できない。482・483は壺形土器である。482は山陰系の壺形土器で、口縁部から頸部にかけて約2分の1を欠損する二重口縁壺である。色調は淡黄色～黄橙色を呈し、器面調整は摩滅およびマンガン付着が著しく確認できな

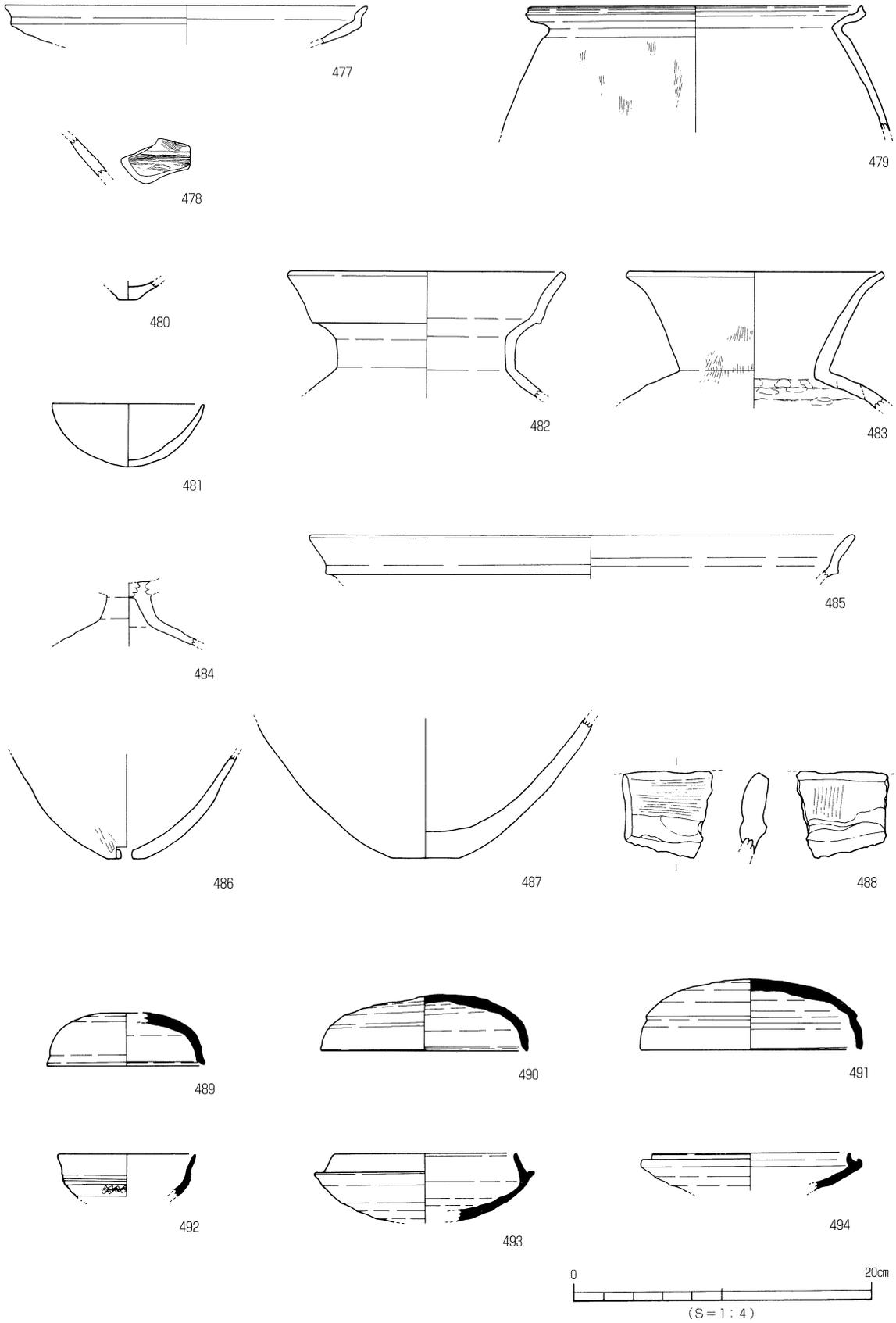
い。胎土はやや粗く、胎土中に3mm以下の石英、長石および金雲母を疎らに混入する。483は口縁端部を外反気味に折り曲げる広口壺である。焼成は良好で黄橙色を呈し、胎土は密で胎土中に2mm以下の石英および金雲母を疎らに含む。器面調整は外面にハケ目調整、内面にナデ調整を施す。484は裾部の約3分の2を欠損する高坏の脚部片である。色調は灰白色～黄橙色を呈し、器面調整は摩滅が著しく確認できない。焼成は良好、胎土は緻密で胎土中にほとんど砂粒を混入しない。上位に椀形の坏部が続くと考えられる。485は山陰系鉢(甕)形土器の口縁部片である。焼成は良好だが、摩滅およびマンガン付着が著しく器面調整は不明である。色調は内外器面ともに淡黄色～明黄褐色を呈し、胎土は黄灰色を呈する。胎土は密で、胎土中に1mm以下の長石をわずかに含む。486・487は壺形土器の底部片である。486は丸底の底部中央に直径約8mmの焼成前穿孔を施す。焼成は良好、胎土は密で胎土中に2mm以下の石英を少量含む。器面調整は摩滅のため不詳であるが、外面にミガキ調整、内面にナデ調整を施すと思われる。色調は外面が淡黄色～黄橙色、内面が淡橙色～明赤褐色を呈する。487は平底を有する器壁の厚い壺形土器で、底部周辺の約2分の1を欠損する。焼成は良好で、色調は外面が黄橙色～明黄褐色、内面が灰黄色を呈する。胎土は粗く、胎土中に4mm以下の石英および長石を多く含む。器面調整は摩滅のため確認できない。

第71図488～494および第72図514は古墳時代後期～終末に属する遺物である。488は円筒埴輪の口縁端部片である。摩滅のため表面剥落が著しくタガ本来の形状は不明である。器面調整は外面に粗い縦ハケ、内面に粗い横ハケを施す。焼成は良好で、色調は黄橙色～橙色を呈し、胎土はやや粗く胎土中に1～3mm程の長石および石英をまばらに含む。489～494は須恵器である。489は短頸壺の蓋で、口縁端部内面に段を有し全体の約5分の1を遺存する。焼成は良好で灰白色を呈し、胎土は緻密で胎土中にほとんど砂粒を混入しない。490・491は須恵器の坏蓋で、口縁端部内面に沈線状の段を有する。490は焼成良好、胎土は緻密で色調は灰白色を呈する。肩部外面に弱い沈線文を1条めぐらせる。491の焼成は良好で胎土は緻密、胎土中に1mm以下の長石をわずかに含む。色調は灰色～青灰色を呈し、肩部外面に強い凹線状の段をめぐらす。492は無蓋高坏の坏部片で、口縁端部の約10分の1を残存する。焼成は良好で灰色～暗灰色を呈し、胎土は緻密で胎土中にほとんど砂粒を混入しない。口縁端部をシャープに仕上げ、凹線文の間に櫛描き波状文を施す。493・494は坏身である。493は口縁立上がり端部に僅かながら面を有する。焼成は良好で灰白色～灰色を呈し、胎土は緻密で胎土中にほとんど砂粒を含まない。全体の約4分の3を欠損し、復元口径が約12.0cmを測る。494は立上がり部が短いもので、受部上面に一条の沈線を施す。焼成良好で灰白色を呈し、胎土は緻密で胎土中にほとんど砂粒を含まない。復元口径は約13.2cmを測る。第72図514は甕形土器である。口縁部から肩部にかけて約4分の3を欠損する。焼成は良好で灰白色およびオリーブ灰色を呈し、外器面に自然釉の付着が顕著である。胎土は密で、胎土中にほとんど砂粒を混入しない。胴部内器面および外器面をタタキ成形し、口縁部外面にカキメ調整を施す。

第72図495・496は8世紀代に属する高台付の須恵器坏身である。坏部を回転台成形したのち底部を回転ヘラ切りし、高台を貼り付けナデ調整を施す。高台底部に凹線状の段を加えるものである。495の焼成はやや甘く、色調は灰白色を呈する。胎土は緻密で胎土中に1mm以下の石英を少量含む。496は焼成良好で灰色を呈し、胎土は緻密で胎土中に1mm以下の長石を疎らに含む。

497・498は高台付須恵器壺の底部で、8世紀代に属するものである。器面調整は495・496と同様であるが、高台底部に段を持たず平らである点、高台が体部との境界ぎりぎりに位置する点、高台お

第VI層出土遺物



第71図 第VI層出土遺物実測図(1)

よび器壁が厚い点が異なる。497の焼成は良好で、色調は外面が灰白色、内面が灰白色～赤灰色を呈し、底部の約2分の1を残す。胎土は緻密で、胎土中に1mm以下の長石を少量含む。498は焼成良好で堅固、色調は外面が灰色～青灰色、内面が灰白色～緑灰色を呈する。胎土は密で、胎土中に1mm以下の石英を少量含む。底部の約4分の3を欠損する資料である。

499は器壁がかなり磨耗しているために正確な厚さが不明なものである。全体の約6分の1を残し、復元口径約13.2cm、器高約2.9cmを測る。焼成は不良で灰白色を呈し、胎土は密で胎土中に2mm以下の長石を疎らに含む。

500・501は底部を回転ヘラ切りによって切り離す土師皿で、器壁の薄い口縁部をつまみ出して外反させるものである。500は底部の約4分の3を欠損するもので、復元底径約8.6cmを測る。焼成は良好、胎土は緻密で胎土中にほとんど砂粒を混入しない。色調は内外面とも灰白色を呈し、胎土は黄橙色を呈する。501は口縁部の一部と底部の約4分の1を残すもので、復元口径が約14.8cm、器高が約1.6cmを測る。焼成は軟弱で、摩滅のため表面剥落が著しい。色調は淡橙色～黄灰色を呈し、胎土は緻密で胎土中にほとんど砂粒を含まない。9世紀後半～10世紀に属すると考えられる。

502・503は円盤高台を有する椀で、底部に回転ヘラ切り痕を残す。502は焼成良好、須恵質で色調は灰白色を呈する。胎土は緻密で胎土中に1mm以下の長石、石英をわずかに含む。503は焼成良好、土師質で灰白色～淡黄色を呈し、胎土は緻密で胎土中にほとんど砂粒を含まない。10世紀代に見られる資料である。

504は緑釉陶器である。高台部内面に段を有する近江産の緑釉陶器で、10世紀後半以降に見られる資料である。内外面ともに深緑色、胎土は灰白色を呈する。

505は土師器の坏である。内面および底部の器面調整は摩滅のため確認できないが、外面ヘラ削りによって整形するものである。焼成は良好で、色調は外面が灰黄色、内面が灰白色を呈する。胎土は緻密で胎土中にほとんど砂粒を含まない。10世紀代に属するものである。

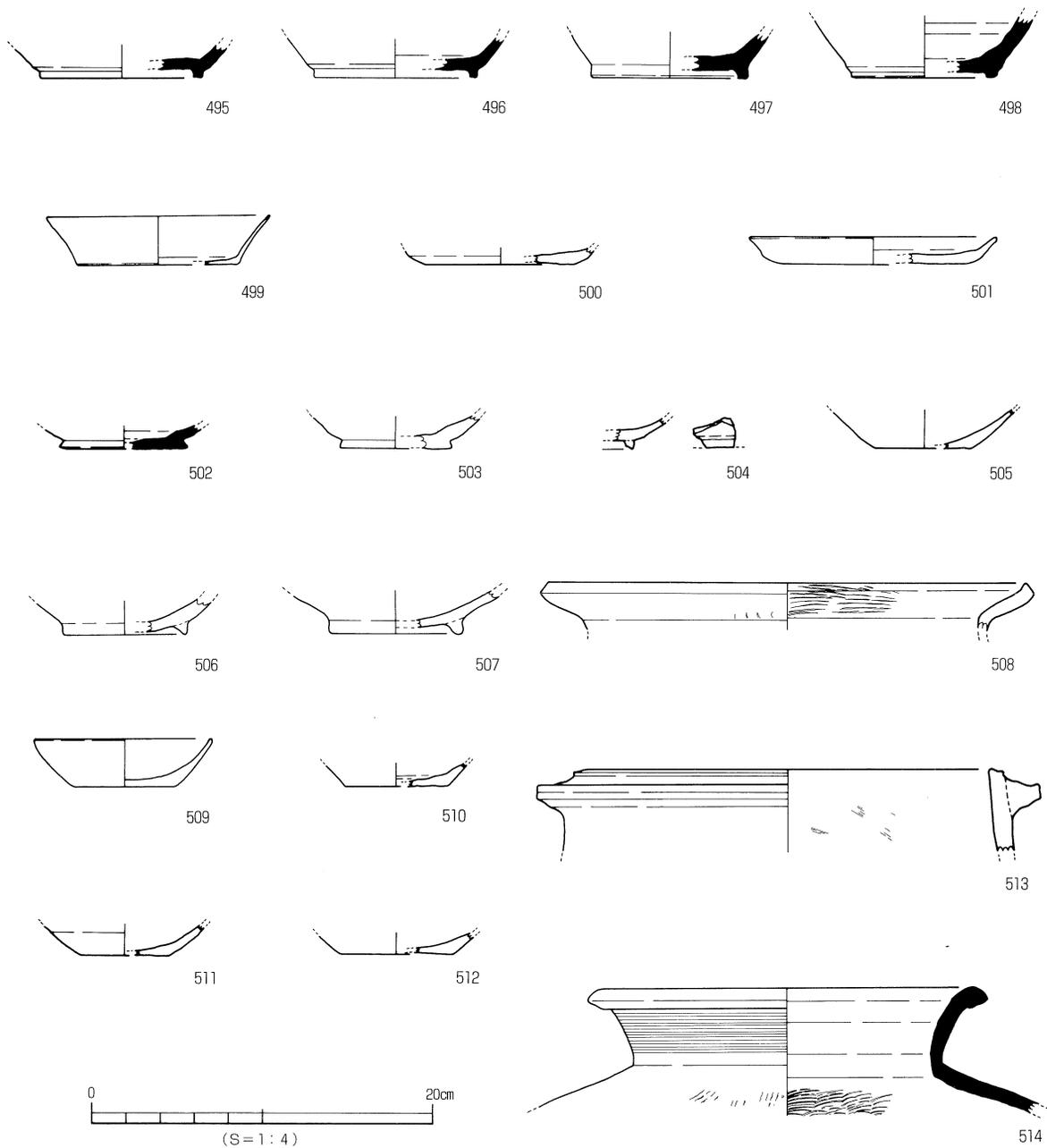
506・507は底部に太い輪高台を持つ土師器椀で、12世紀代に見られる資料である。摩滅による表面剥落およびマンガンの付着が著しく器面調整は不明である。506は焼成良好で灰白色を呈し、胎土は緻密で胎土中に1mm前後の長石を少量含む。507は焼成良好、胎土は緻密で胎土中にほとんど砂粒を含まない。色調は外面が灰白色～黄橙色、マンガン付着のため内面は黄褐色を呈する。

508は土鍋の口縁部片である。口縁部を強く外方に折り曲げ、口縁端部を上方につまみ上げ状に肥厚させるもので、9世紀後半に属するものである。色調は黄橙色～浅黄色を呈し、口縁部内面および胴部外面にハケ目調整、口縁部外面および胴部内面にナデ調整を施す。焼成は良好で、胎土は密、胎土中に1mm前後の長石、石英を疎らに含む。

509～512は土師器坏である。509は口縁部の大半を欠損し、摩滅による表面剥落が著しい。焼成は不良で灰白色～浅黄橙色を呈し、胎土は緻密で胎土中に2mm以下の長石をわずかに含む。510は焼成不良で摩滅により表面の剥落が著しい。底部の約4分の3を欠損する。胎土は緻密で、色調は灰色を呈する。511は焼成良好で黄橙色を呈し、底部の約5分の4を欠損する。胎土は緻密で胎土中にほとんど砂粒を含まない。体部外面にヘラ削り調整を施す。512は焼成良好で橙色を呈し、胎土は緻密で胎土中にほとんど砂粒を含まない。底部の約4/5を欠損し、調整は摩滅が著しく確認できない。

513は羽釜の口縁部で、口縁部の約1/8を遺存する。口縁端部から少し下がった位置に断面台形状の太い鏝をめぐらせるもので、いわゆる撰津型の羽釜である。10世紀代に属すると考えられる。

第VI層出土遺物



第72図 第VI層出土遺物実測図(2)

5. トレンチ内出土遺物 (第73図)

T 1 内出土遺物 (第73図515・516)

調査区内の土層観察および排水を兼ねて西壁沿いに約50cmの幅で掘り込んだトレンチである。

515は鉢形土器である。焼成はやや甘く、摩滅により表面の剥落が著しい。色調は外面が淡黄色～明黄褐色、内面が黄灰色を呈し、胎土は密で胎土中に1mm以下の長石を疎らに混入する。器面調整は不詳であるが、内面にハケ目調整を施した痕跡を確認できる。

516は甕形土器の口縁部片である。焼成は不良で淡黄色を呈し、摩滅により表面の剥落が著しい。胎土はやや粗く、胎土中に2mm以下の石英および長石を多く含む。

T 2 内出土遺物 (第73図517)

調査開始時に1区の南側に掘り込んだ幅約1mのトレンチである。

517は復元口径約14.0cmを測る須恵器坏身で、全体の約2分の1を欠損する。焼成は良好で灰白色を呈し、胎土は緻密で胎土中に1mm前後の長石を少量含む。

T 3 内出土遺物 (第73図518～527)

調査開始時に1区の北側に掘り込んだ幅約1mのトレンチである。

518は山陰系の二重口縁壺である。焼成は良好だが胎土は粗く、摩滅およびマンガン付着の為器面調整は確認できない。色調は淡黄色～明黄褐色を呈し、胎土中に1～3mmの石英、長石および金雲母を多く含む。

519は焼成良好で胎土は密、胎土中に1～2mm程の長石、石英を疎らに混入する。色調は灰白色～淡黄色を呈し、口縁部内外面にナデ調整、胴部内面にヘラ削り調整を施す。

520は肩が張る体部および内湾気味に短く立上がる口縁を有する甕形土器である。全体の約2分の1を欠損し、器面調整は口縁部および胴部外面にナデ調整、胴部内面にヘラ削り調整を施す。色調は外面が黄橙色～淡黄色および明褐色～褐色、内面が淡黄色～黄灰色を呈する。胎土はやや粗く、胎土中に1mm以下の石英および長石を多く含む。

521は頸部が狭く、口縁部の立上がりのきつい甕形土器である。胴部中央部に最大径を有し、丸底の底部を持つと考えられる。焼成は良好で胎土はやや粗く、胎土中に1～3mm程の長石および石英を疎らに含む。色調は灰白色～淡黄色を呈し、器面調整は胴部外面にハケ目調整、内面にヘラ削り調整を施す。

522は壺形土器の底部である。ボタン状を呈する底部から、大きく弧を描いて立上がる体部に続く。焼成は良好で、色調は外面が淡黄色～黄橙色、内面が黄灰色を呈する。胎土は密で、胎土中に1～2mm程の長石、石英を疎らに含む。内器面は摩滅のため不明であるが、外器面にハケ目調整を施す。

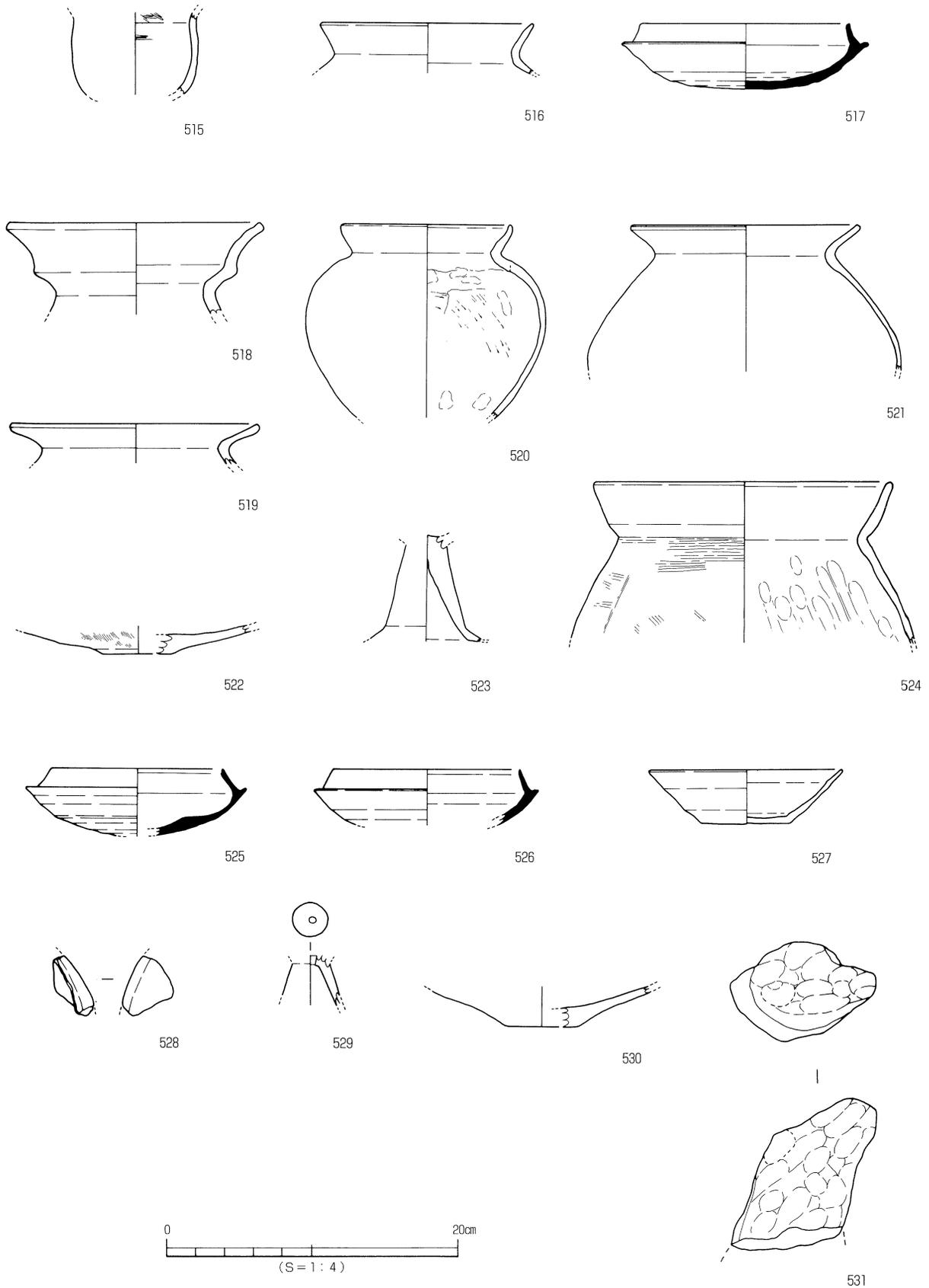
523は裾部が屈曲して大きく広がる中空の高坏脚部である。摩滅のため表面の剥落が著しく、マンガンの付着が顕著である。焼成は良好で、黄橙色～橙色を呈し、胎土は密で胎土中に1～2mm程の長石および石英を少量含む。

524は口縁部が内湾して緩やかに立上がる甕形土器で、口縁部から胴部にかけて約1/3を欠損する。焼成は良好で色調は淡橙色～黄橙色を呈し、胎土は密で胎土中に1～3mm程の長石、石英を疎らに混入する。器面調整は胴部内面に雑なナデ調整、胴部外面にハケ目調整の後ナデ調整を施す。

525および526は須恵器坏身である。525は口縁部立上がり端部内面に沈線状の段を有し、復元口径が約11.7cmを測る。焼成は良好で灰白色を呈し、胎土は緻密で胎土中に1mm以下の長石を少量含む。526は焼成良好、胎土は緻密で胎土中にほとんど砂粒を混入しない。色調は灰色を呈し、復元口径が約12.8cmを測る。

527は底部を回転ヘラ切りによって切り離す土師器坏である。回転台成形するもので、体部内外面に回転ヨコナデを施す。復元口径は約13.0cm、器高3.7cm、復元底径約6.0cmを測る。焼成は良好だが

トレンチ内出土遺物



第73図 トレンチ内出土遺物実測図

摩滅のため表面の剥落が著しい。色調は外面が褐灰色、内面が灰白色を呈し、胎土は緻密で胎土中に砂粒を混入しない。

T 5 内出土遺物 (第73図528～531)

2区拡張終了後、調査区北壁沿いに掘り込んだ幅50～80cmのトレンチである。

528は手焙形土器の覆部小片である。摩滅が著しく、施文および器面調整は確認できない。焼成は甘く淡橙色を呈し、胎土は密で胎土中に1mm以下の石英および長石を少量含む。

529は高坏の脚部小片である。焼成良好で淡黄色～黄橙色を呈し、胎土は緻密で胎土中にほとんど砂粒を混入しない。摩滅のため器面調整は不明である。

530は壺形土器の底部片である。器面調整は摩滅が著しく不詳であるが、外器面にハケ目調整の痕跡がわずかに認められる。焼成は良好で、胎土は粗く胎土中に1～3mm程の長石および石英を多く混入する。色調は外面が橙色～明黄褐色、内面が黄灰色を呈する。

531は支脚である。手捏ね成形するもので、本来は大小ふたつの角状突起を有すると思われる。焼成は良好で黄橙色～淡黄色を呈し、胎土は密で胎土中に1～3mmの長石および石英を少量含む。

6. 鉄器・石器

鉄器 (第74図532)

今回の調査において出土した鉄器は1点のみで、S R 6埋土中より出土している。

532は方形革金具である。本来は馬具に装着する革製品に打ち付ける金具であるが、土石流によって上流の古墳より流されてきた可能性が高い。

大きさは一辺が2.4cm、厚さ2.0cmを測り、重さは2.035gである。

石器 (第74図533～第76図549)

今回の調査において出土した石器には、打製石鏃7点、スクレイパー2点、石庖丁2点、磨製石斧2点、砥石1点、磨石1点、正体不明石器2点が含まれる。

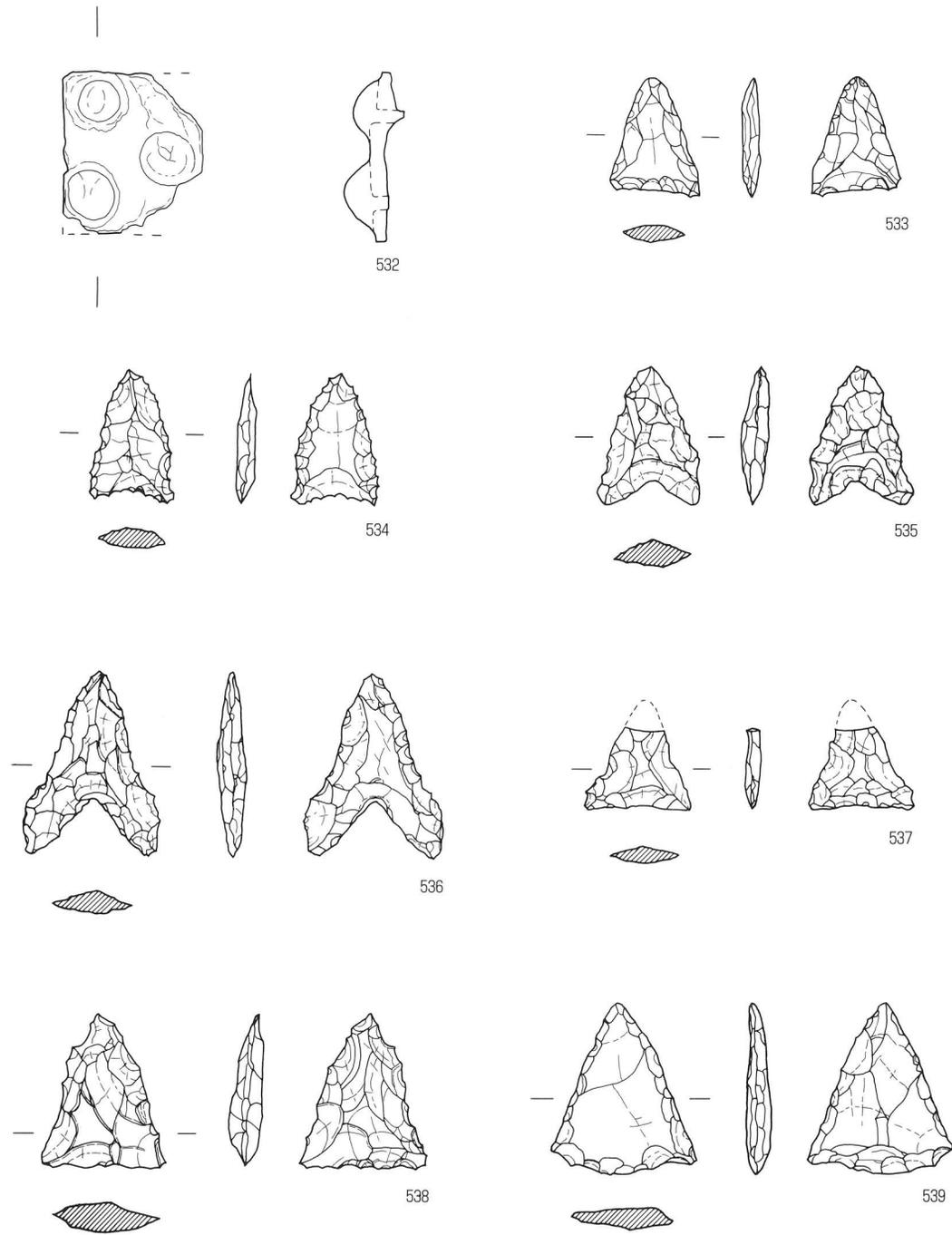
第74図533～539は打製石鏃である。533および539はS R 15の埋土中から、534および538はS R 6から、残りの3点は第VI層中より出土した。石材は主にサヌカイトを用いて製作しているが、535だけはサヌカイトとは明確に異なる安山岩系の石をその素材とする。

533～536は凹基を呈し、中でも535および536は特に抉りの深いものである。重さはそれぞれ、533=0.51g、534=0.69g、535=0.85g、536=1.04gを量る。

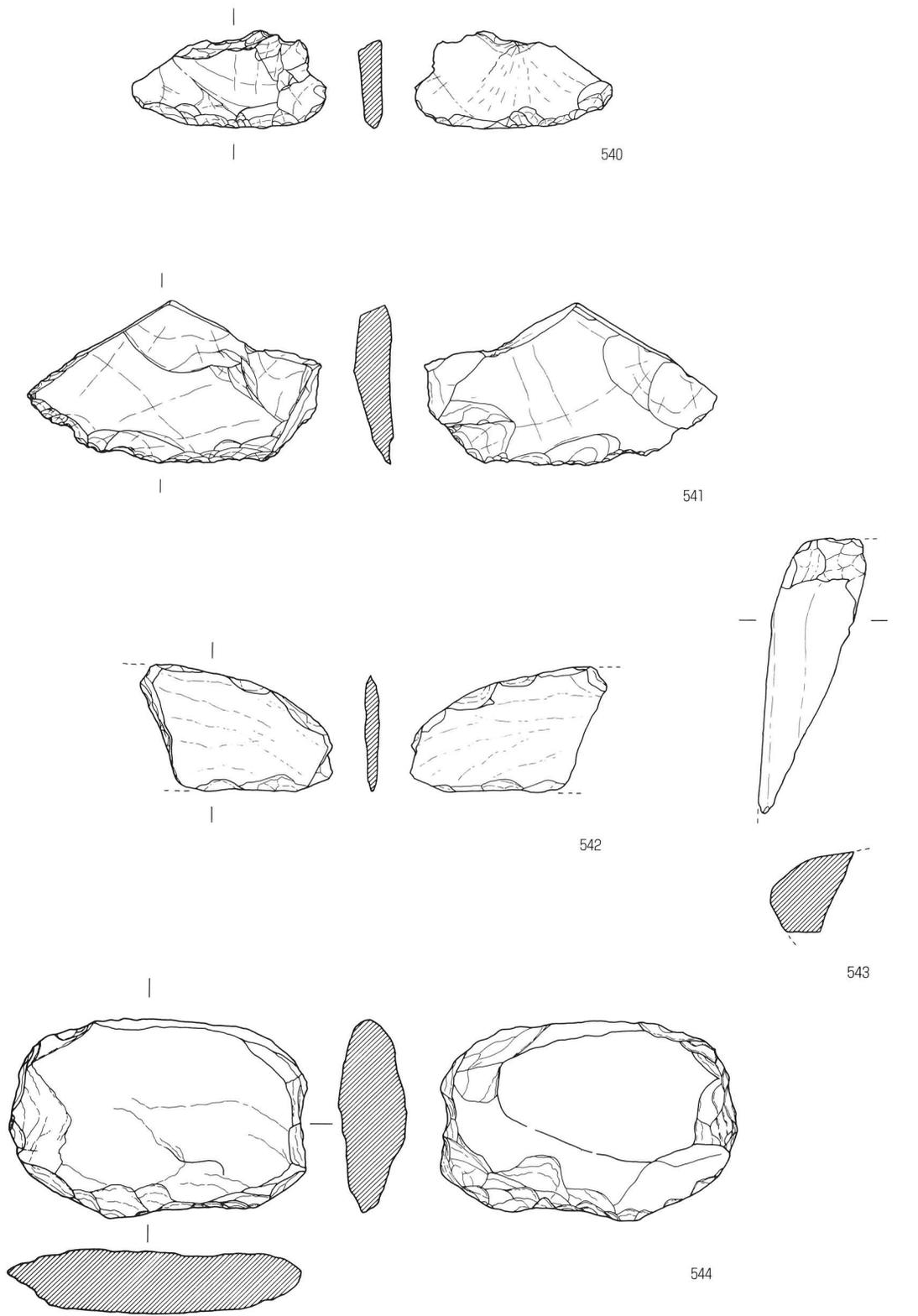
537～539は平基の打製石鏃で、なかでも539は膨らみを有しやや凸基気味のものである。重さはそれぞれ、537=0.40g、538=1.67g、539=1.53gを量る。

第75図540および541は横長剥片を用いて制作した打製石器、スクレイパーである。540は第VI層中より出土した。表面がかなり風化して灰白色を呈する。石材はサヌカイトを使用し、重さは15.02gを量る。541はS R 5より出土したものである。サヌカイト製で、重さ49.86gを量る。

542および544は第VI層中より出土した石庖丁の未製品である。542は緑色片岩製で刃部打裂段階のもので、重さ15.93gを量る。544は分厚く、原礫採集後、厚さを減らすために打裂を加えていく途中

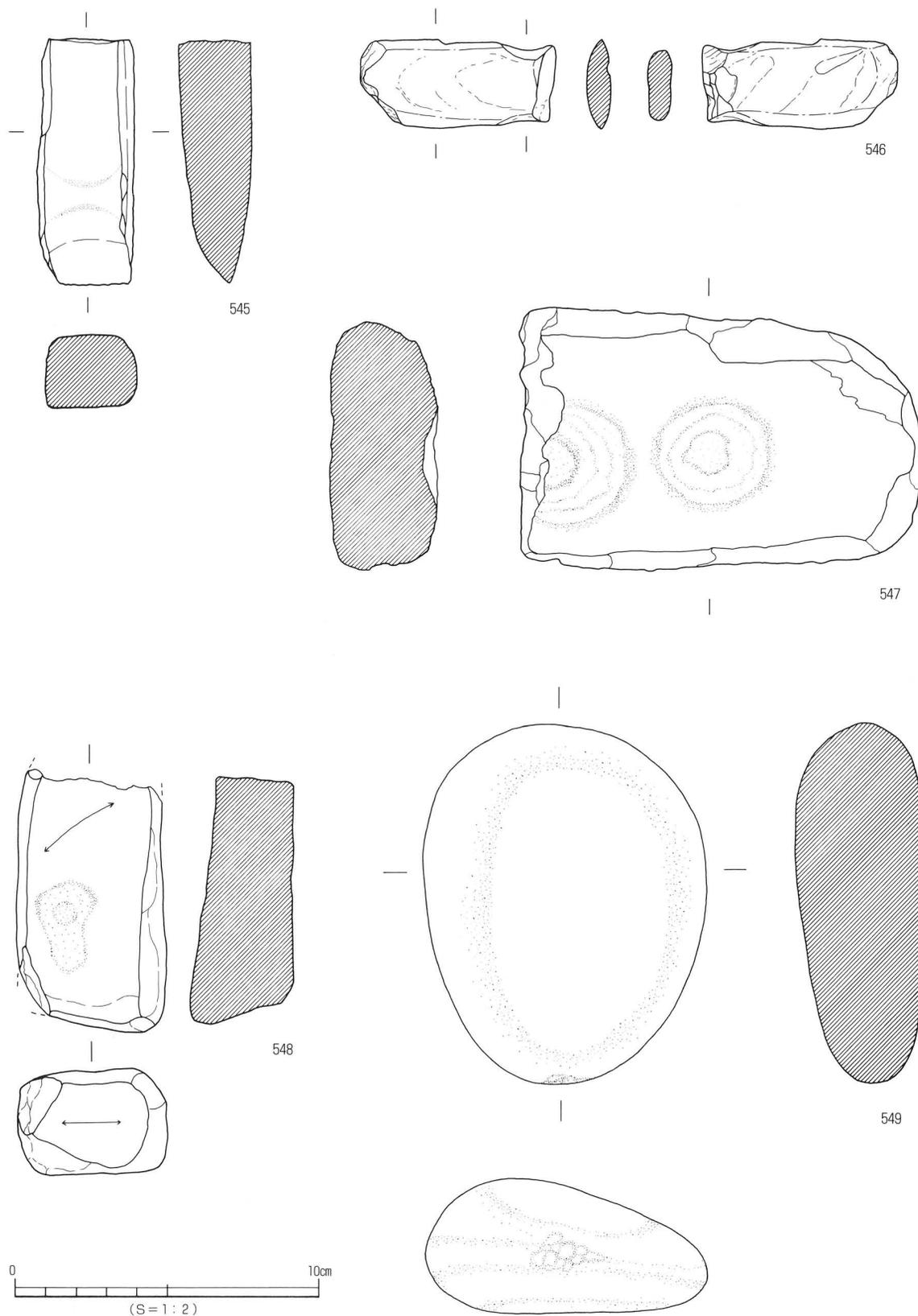


第74図 鉄器実測図・石器実測図(1)



0 10cm
(S=1:2)

第75図 石器実測図(2)



第76図 石器実測図(3)

段階のものである。原礫面を多く残し、重さ171.47gを量る。

543は磨製石斧の基部付近の破片で第Ⅵ層より出土した。緑色頁岩を使用するもので、横方向に走る摩擦痕が認められる。重さは57.99gを量る。

第76図345は柱状片刃石斧である。石材は砂岩質の結晶片岩製で、水田耕作土中より出土した。色調は緑白色を呈し、重さ115.28gを量る。

546は緑色片岩製の正体不明磨製石器である。側縁に刃部を作り出し、一部研磨によって凹めるものである。S D 2より出土しており、重さ26.00gを量る。

547は刺突敲打痕を残し、銀緑色を呈する片岩系の石材である。合計2ヵ所に刺突敲打痕が認められ、内部に直径約1cmを測る棒状工具の痕跡が認められる。S R 7第Ⅱ層より出土したもので、重さは705gを量る。

548は安山岩製の手持ち砥石である。計2面を砥石として使用しており、さらにその内の1面に一部敲打痕が認められる。重さは253.97gを量り、S R 7第Ⅱ層中より出土した。

549はS B 1より出土した安山岩製の磨石である。両面を磨石として使用する以外に、側縁部の中で最も突出する部分に敲打痕を有し、叩石としての利用も考えられる。重さは705gを量る。

第5章 大渕遺跡3次調査地出土古式土師器について

今回の調査において、古墳時代前期初頭に時期比定可能な遺構を比較的多く検出した。これまで旧和氣郡域において、古墳時代前期初頭の土器をここまで大量に出土した遺跡は確認されておらず、今後松山平野内に位置する他地域との比較検討材料として供される遺跡であることは間違いない。

そこで本章では、大渕遺跡3次調査地で出土した古式土師器の所属時期をつかむ事を第一の目的とし、さらには当時の大渕遺跡の性格について考える。

1. 自然流路 (SR7)

今回検出した遺構のなかでも自然流路(SR7)から出土した土器は群を抜いて多く、またその種類も豊富である。そこで、まず最初にSR7出土土器について検討し、その結果を用いて他の遺構の所属時期について考えることにする。

SR7を第I層～第III層に分層した結果、(第II層出土遺物が圧倒的に多く、反対に第I層および第III層出土遺物がほとんどないことがその原因であるが)調整技法の変化あるいは器種構成の変化など、時期差を示すと思われる明確な変化というものは確認できない。従って、SR7出土遺物全体を一括して捉えることとし、各器種ごとにその土器が有する特徴を検討することによってSR7の所属時期を求める。また、時期比定に関しては、同時期の遺物を多量に出土した宮前川北斎院遺跡群(松山市所在)の調査成果(作田編年)^①を主に用いる。

壺形土器

壺形土器には広口壺(2～8・12)、直口壺(9～11)、二重口縁壺(13～32)がある。二重口縁壺には二段に外反する口縁部外面に装飾を加えるもの(13～16・20)、外反する口縁部に装飾を加えないもの(17～19・303)、内傾する口縁部外面に装飾を加えるもの(22・24・25)、内傾あるいは直立する口縁部を有するもの(21・23)、山陰系の二重口縁壺(26～32)などがある。ほとんどが摩滅のため調整不明であるが、胴部外面にハケ目調整およびナデ調整、胴部内面にヘラ削り調整およびナデ調整を施す。体部の形状は、肩部が張って球形に近いもの(45)、倒卵形を呈するもの(12)が少量あるが、全体的に扁球形(31・42～44・46)を呈し、球形化しているものがほとんどない。

壺形土器に関して言えば、①口縁部が二段に外反する二重口縁壺(13～20)が存在し、②体部の球形化が顕著に見られない。以上の点より宮前川北斎院遺跡群(作田編年)のⅢ期に属すると考えられる。

甕形土器

甕形土器には、底部平底で内外面にハケ目調整を施す長胴の在地甕(52・141・159)、外面にタタキ成形痕を残し、長胴で平底あるいは丸底を有する在地甕(47・50・140・142・164・166)、胴部内面にヘラ削り調整を施し、口縁端部を肥厚させ、体部が扁球形あるいは球形を呈する布留系甕(74・115)、吉備系甕(119)などがある。

①内外面に丁寧なハケ目調整を施す長胴の在地甕(52・141・159)は、底部が突出しない平底である点より作田編年のⅡ期～Ⅲ期に属し、②外面にタタキ痕を残す長胴の在地甕(47・50・140・142・164・166)もそれと大きくずれるものではない。③布留系甕は全体を復元可能な個体が少ないが、底部丸底で扁球形の胴部中央あるいは中央部上位に最大径を有し(74・115)、④吉備系甕(119)はほとんど出土していない。以上から判断して、作田編年Ⅲ期に属すると考える。

高坏

高坏には、坏部下半部が内湾気味に伸び上半部が短く外反する弥生系高坏(174・175)、坏部下半部が内湾して伸び上半部が大きく外反する弥生系高坏(176～181・308)、坏部下半部が短く伸び上半部が直線的に大きく広がる高坏(182～192・309)、坏部に二段の屈曲を有する有段高坏(196・197)、椀形の坏部を有する椀形高坏(193～195・229・230)などがある。

弥生系高坏、有段高坏および椀形高坏などの存在より作田編年Ⅲ期に属する。

鉢・坏・椀

鉢(坏)には脚台を有する中型・小型鉢(坏)(247～253)、器高が口径の2分の1以下で口縁部が斜め上方に伸びる小型の坏(254～259)、器高が口径の2分の1以下で口縁端部が垂直気味あるいは内湾して立上がる小型の鉢(260～265・313)、丸底あるいは平底を呈し口縁端部を軽くつまみ出すように折り曲げる小型の鉢(266～275)、口縁部を「く」の字に折り曲げる小型の鉢(279～289)、内器面に段を作りだすことによって口縁部と体部を区別する鉢(278)、内外面にハケ目調整を施し口縁部を大きく「く」の字に折り曲げる大型の鉢(290～292・314)、山陰系低脚坏(246・312)、山陰系大型鉢(293～296)などがある。

①小型丸底鉢(276～289)の口縁部拡張が小さいこと、②小型有段鉢が欠落すること、③作田氏が椀形土器としたもの(254～256)の存在より作田編年のⅢ期に属すると考えられる。

以上、宮前川北斎院遺跡群の土器編年(作田編年)に準じて出土土器の特徴を各器種ごとに検討した。その結果、S R 7出土遺物はいずれの器種においても作田編年Ⅲ期(庄内Ⅳ式期)に属する可能性が高いことが判明した。

さらにこれを補強する資料として、S R 7側壁中より出土した壺形土器が挙げられる。321は今回の調査において第Ⅶ層から出土した唯一の完形土器、口縁端部が緩やかに外反する直口壺で、作田編年Ⅰ期～Ⅱ期に属するものである。従って、S R 7出土遺物の所属時期は作田編年Ⅱ期以降であることが確実で、出土遺物の特徴より作田編年Ⅲ期に属する可能性が最も高い。

しかし、Ⅲ期的属性が主体的に存在するなか、Ⅱ期的あるいはⅣ期的特徴が僅かながら存在することも事実である。内外面に丁寧なハケ目調整を施す長胴の在地甕(52・141・159)の存在、あるいは坏部下半部が内湾気味に伸び上半部が短く外反する弥生系高坏(174・175)の存在はⅡ期的な特徴が残存している証拠であるし、また、肩が張り球形に近い壺形土器(45)の存在、あるいは口径が12cm以上を測る椀(255・256)の存在はⅣ期的な特徴が出現している証拠だと言える。

すなわち、S R 7はⅡ期的属性の残存段階からⅣ期的特徴の萌芽段階に至る期間、つまり作田編年Ⅲ期(庄内Ⅳ式期)を中心とした時期に機能し、短期間で廃絶埋没した流路であると考えられる。

2. 竪穴式住居址

S B 1 および S B 2 からは S R 7 同様、外面にタタキ痕を残す甕形土器 (336・340) が出土しており、またそれぞれに丸底を有する土器 (332・341) が伴っている。

また、S B 3 からは外面にハケ目調整を施す扁球形の甕形土器 (345) およびハケ目調整の後ナデ調整を加える扁球形の壺形土器 (342) が出土しており、それと共に口縁端部をつまみ上げ状に肥厚させる布留系の甕形土器 (343) が出土している。

このことより S B 1 から S B 3 は S R 7 とほぼ同時期の遺構である可能性が高い。

その他、古墳時代前期の遺構についてもほとんど同様のことが言え、大瀨遺跡 3 次調査に於いて検出された古墳時代前期初頭の遺構は (遺物を出土していない遺構は除くが)、すべて作田編年Ⅲ期 [庄内Ⅳ式(布留 0 式)段階] の中に収まる時期のものである可能性が高い。

3. 古墳時代前期初頭段階に於ける大瀨遺跡の性格について

出土遺物を検討した結果、少なくとも今回遺物を出土した遺構はすべて、古墳時代前期初頭段階でも特に庄内Ⅳ式期という非常に限られた期間内に利用し廃絶された可能性が高いことが判明した。

S B 5～S B 7 以外の遺構は互いに切り合い関係を持たず、空間的に広がって存在している。従って、それぞれの遺構が存続時期を微妙にずらして疎らに存在していたのではなく、ほとんどの遺構が同時に存在していた可能性が高いと言える。

そう考えていくと、自然流路(S R 7)を取り囲むように竪穴式住居址が周辺に広がっていた当時の環境を復元できる。また、そのことは S R 7 の流れる方向と住居址の主軸方向がほとんど一致する事実からも指摘可能であろう。S R 7 を取り囲むように散在する竪穴式住居址群。では、S R 7 の果たす役割とは一体何であったのだろうか。

S R 7 は砂層および粘土層の互層堆積によって埋没しており、実際に水を湛え流れていた自然流路である。当時、西側の山から豊富に水を湛えて流れてくる S R 7 が、生活に決して欠くことのできない存在であったろうことは想像に難くない。その S R 7 を取り囲むように竪穴式住居が広がり、それらの住居に住む人々が水辺の祭祀を執り行った結果、S R 7 内に大量の土器が投棄されたのである。その祭祀とは渇水期に祈る雨乞いの祭祀、あるいは絶えることなく水を湛えて流れてくる小河川に対して捧げる再生、復活を願う祭祀だったのかも知れない。

つまり、様々な儀式を執り行った結果として、完形の土器、ミニチュア土器 (297～299) および破損した土器など多くの遺物が S R 7 に捧げられたのである。

しかし、S R 7 を中心として生活を続けた人々は短期間居住した後、突然姿を消してしまう。これは一体如何なる理由によるものであろうか。

本地域は谷の出口に立地しており、水を得やすいという利点があったがその反面、水による被害も大きい場所であった。そのことは古代、中世期に発生した土石流の堆積層(第Ⅵ層)や中世後期の水田を覆い尽くすように流れた洪水の堆積層(第Ⅲ層)の存在によって容易に知ることができる。

第6章 調査の成果と課題

今回の調査において縄文時代から中世までの遺構や遺物を確認することができた。

《縄文時代》

大淵遺跡および2次調査地と有機的繋がりを有する遺構の検出が期待されたが、今回の調査において縄文時代に時期比定可能な遺構は検出されなかった。しかし、土石流中よりサヌカイト製打製石鏃、スクレイパーおよび浅鉢の口縁部片、SR7より口唇部に刻目を有する鉢形土器の口縁部片、P56より底部片が出土しており、本調査地近隣に縄文時代後晩期に属する遺構が存在する可能性が高く、今後の調査に期待される。

《弥生時代》

弥生時代に属する遺物としては、前期、中期、後期に属する土器が出土した。しかし、いずれも小破片であるため外部からの流れ込みによるものと考えられる。また少量ではあるが、打製石鏃および石庖丁、柱状片刃石斧など石器類の出土も見られた。本調査において弥生時代の遺構は検出されておらず、周辺地域における今後の調査に期待される。

《古墳時代前期》

古墳時代前期に関しては、今回の調査において比較的豊富な資料を得ることができた。

自然流路(SR7)を中心として竪穴式住居址が周辺に配置される状況が確認され、古墳時代前期初頭(庄内IV式期)に属する集落構造の一端を垣間見ることができた。

遺物の出土量が多く、特に自然流路(SR7)から出土した古式土師器は、本地域における今後の土器研究の指針となるものである。**[第5章参照]**

また、集落の存続時期が短く、布留I式新段階の土器出現以前に廃絶するという特徴は宮前川北斎院遺跡群と共通しており、当時汎松山平野的に発生した自然災害の存在を予感させるものである。

《古墳時代後期》

6世紀後半代に属する集落の一部を検出した。その主要な遺構として掘立柱建物を6棟、溝状遺構を3条検出したが、これらは全てが同時に存在したわけではなく、切り合い関係および埋土の色調の違いより大きく2つの時期に分かれると考えられる。すなわち、柱穴埋土が暗褐色(褐色混)土である掘立1、掘立5および掘立6が存在した時期、そして柱穴埋土が暗褐色(灰色混)土である掘立2、掘立3および掘立4が存在した時期に分けることが可能である。また、遺構の切り合い関係より暗褐色(褐色混)土にて埋まる遺構の方が、暗褐色(灰色混)土で埋まる遺構よりも古いことが確認されている。

SD1、2、3はその位置関係から掘立柱建物群との有機的繋がりが想定される溝状遺構であるが、SD2は掘立5と切り合い関係を有し、掘立5よりも新しい遺構であることが判明している。従って、SD1、SD2およびSD3は掘立2、掘立3および掘立4と同時併存していた可能性が高い。つまり、まず最初に掘立1および掘立5あるいは掘立6で構成される集落が存在し、その後間もなくそれ

らは廃絶した。そしてその次の段階として、SD 1～3によって周囲を取り囲む集落(掘立2および掘立3、掘立4で構成される集落)が出現したと考えられるのである。

以上に見た集落の変遷は、出土遺物から判断するに6世紀後半代に収まるものであり、ある程度期間を限定して継続的に発生した出来事である可能性が高い。

では、短期間中に集落が溝状遺構によって囲まれるのは一体なぜであろうか。今回の調査において集落の北西端部を確認したに過ぎず、明確に言及することはできないが、可能性として次のようなことが考えられる。①防御的な溝 ②区画溝 ③導水・排水機能を備えた溝

しかし、溝状遺構といっても幅が平均50cm程度のもので、削平されていることを考慮しても、外部から敵の侵入を防ぐといったような機能を有する溝ではないと考えられる。また、SD 1は比較的直線的に伸びる溝である反面、SD 2は不規則に蛇行分岐しながらある程度自由に流れる溝である。このことより、集落を区画するために掘り込まれた企画的な区画溝の可能性も考えられない。よって、特別な付加機能を持たない単なる“溝”としての機能を有する遺構として捉えるのが最も良いと思われる。すなわち、南西部および西側の山々から東側に広がる低地部に流れこむ雨水、それが建物内に侵入するのを防ぐ排水溝的な機能を有する溝であった可能性が高い。

要するに古墳時代後期後半代、本調査地は水による被害の絶えない地域であった。そしてそのことは、周囲に溝状遺構を伴わない掘立柱建物群から周囲に溝状遺構によって取り囲む掘立柱建物群への変遷によって知ることが可能なのである。

以上が今回の調査によって判明したことであり、その成果として古墳時代後期における集落構造および集落の変遷を捉えることができた。しかし、SD 1、2、3以外の遺構(SR13・SR15など)と掘立柱建物群との関係が捉えられなかったことも事実である。それは周辺地域における今後の調査によって解明していくべき問題であり、今後の課題としたい。

《古代～中世》

古代から中世に属する遺構としては、古代(8～9世紀)および中世後期(14～15世紀)に発生した土石流および自然流路、中世後期(15世紀～16世紀)の水田跡および自然流路を検出した。

明確な建物跡を確認することはできなかったが、古代および中世に属する土石流の痕跡を検出し、当地域において頻発したであろう自然災害の実態および、その猛威を知ることができた。

SR 5を最下流路とする古代の土石流、SR 6を最下流路とする中世後期の土石流の最大堆積厚はそれぞれ30cmおよび40cmを測る。その堆積の厚さおよび、最下層に堆積した多量の礫より、当時その規模が大きく凄まじいものであったことが想定される。

中世後期に属する水田は、近現代の水田との区別がつきづらく大部分を未検出のまま削平してしまった。それにより中世期に属する水田の全体像を捉えられなかったことは悔やまれ、大いに反省すべき問題であった。しかし、幸いにも調査区の北東端部に検出した水田面の遺存状況は良好で、水田研究にある程度貢献できるものであろう。

さらに水田遺構は近世初期に発生した洪水砂(第Ⅲ層)によって埋没しており、当地域が古墳時代前期初頭以来幾度となく水による被害を受けた地域であることが判明したのも大きな成果である。

また、上部が削平されているためそれらが本来果たした機能は不明であるが、水田耕作土と同色同質の埋土で埋まる流路(SR 1、19、20、22)、土坑(SK 4、6)および性格不明遺構(SX 1～5)が検

出されており、水田に関連する遺構である可能性が非常に高い。今後の調査による類例の追加が期待される。

以上、各時代ごとに成果および課題を述べてきたが、最後に本遺跡の特徴を簡単に説明して終わりとしたい。

本遺跡は古墳時代前期初頭、古墳時代後期、古代、中世後期の各時期に土地利用が行なわれた。しかし、いずれの時期においても集落(遺構)の存続期間が短く、次の土地利用を開始するまでに一定の期間が空くことが特徴である。要するに、それは調査地が谷の出口付近に立地していることに関係があると思われる、水を得やすい反面、水による害を被り易く、実際にその被害を受けたために生じたものと考えられる。つまり、人々が土地利用を行ない始めてある程度期間が経過したのち水害を被り、その結果集落は消滅したのである。そして、その水害の影響によって土地が不安定となり、次の土地利用まで一定の期間が必要だったのではなかろうか。

[主要参考文献]

- (1)作田一耕 1998 『斎院・古照』 財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター
- (2)大滝雅嗣・須藤敦子 1986 『宮前川遺跡－中小河川改修事業埋蔵文化財調査報告書－』 財団法人 愛媛県埋蔵文化財調査センター
- (3)石野博伸・関川尚巧 1976 『纏向－奈良県桜井市纏向遺跡の調査－』 奈良県立橿原考古学研究所
- (4)寺沢 薫 1986 『矢部遺跡－国道24号線橿原バイパス建設に伴う遺跡調査報告(Ⅱ)－』 奈良県教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所
- (5)正岡睦夫・松本岩雄 1992 『弥生土器の様式と編年－山陽・山陰編－』 木耳社
- (6)第18回埋蔵文化財研究会運営委員会 1986 『弥生時代後期から古墳時代初頭のいわゆる山陰系土器について 発表記録』 第18回埋蔵文化財研究会事務局
- (7)牧本哲雄 1999 「第9章 第1節 古墳時代の土器について」 『長瀬高浜遺跡Ⅶ・園第6遺跡』 財団法人 鳥取県教育文化財団鳥取県埋蔵文化財センター
- (8)高橋一夫 1998 『手焙形土器の研究』 六一書房
- (9)栗田茂敏 1994 「石井幼稚園遺跡」 『石井幼稚園遺跡・南中学校構内遺跡－第2次調査－』 松山市教育委員会・財団法人 松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- (10)宮本一夫 1989 「道後平野の中世土器編年－13～15世紀を中心に」 『鷹子・樽味遺跡の調査』 愛媛大学埋蔵文化財調査室

写真図版

写真図版

1. 遺構の撮影は栗田茂敏、大西朋子が行った。巻頭航空写真は、株式会社パスコによる。

2. 遺物の撮影は、大西朋子が行った。

使用機材：

カメラ	トヨ／ビュー45G	レンズ	ジンマー S240mm
ストロボ	コメット／CA-32・CB2400 (バンク使用)		
スタンド他	トヨ／無影撮影台・ウエイトスタンド101		
フィルム	プラスXパン・エクタクロームEPP		

3. 白黒写真の現像と焼き付けは、一部を除いて大西が行った。

使用機材：

引伸機	ラッキー450MD	レンズ	エル・ニッコール135mm
	ラッキー90MD		エル・ニッコール50mm
印画紙	インフィールドマルチグレードIVRC		
フィルム現像剤	コダックHC110		

[参考]『埋文写真研究』Vol.1～10



調査前近景（南西より）



調査区完掘状況（東より）



S R 7 遺物出土状況(1) (北東より)



S R 7 遺物出土状況(2) (北より)



土器溜まり遺物出土状況（北東より）



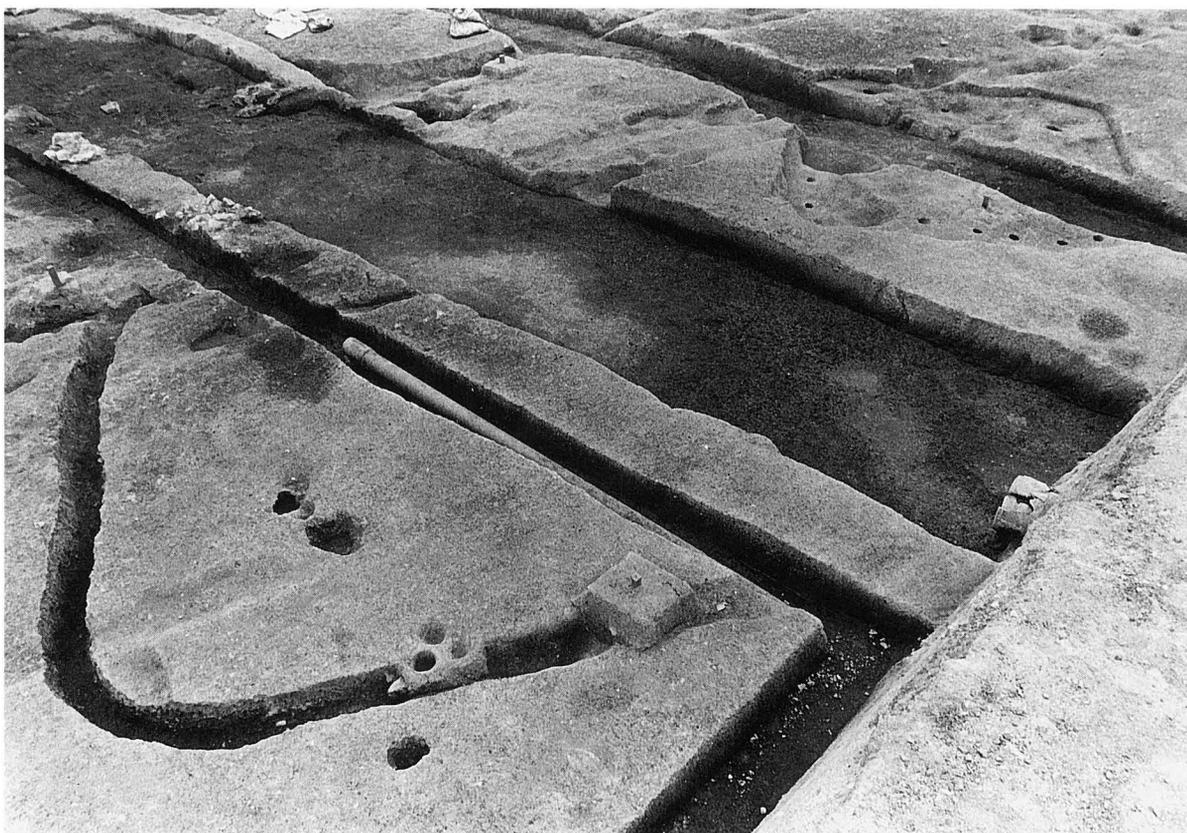
S B 1 検出状況（南より）



S B 2 遺物出土状況（北東より）



S B 3 完掘状況（西より）



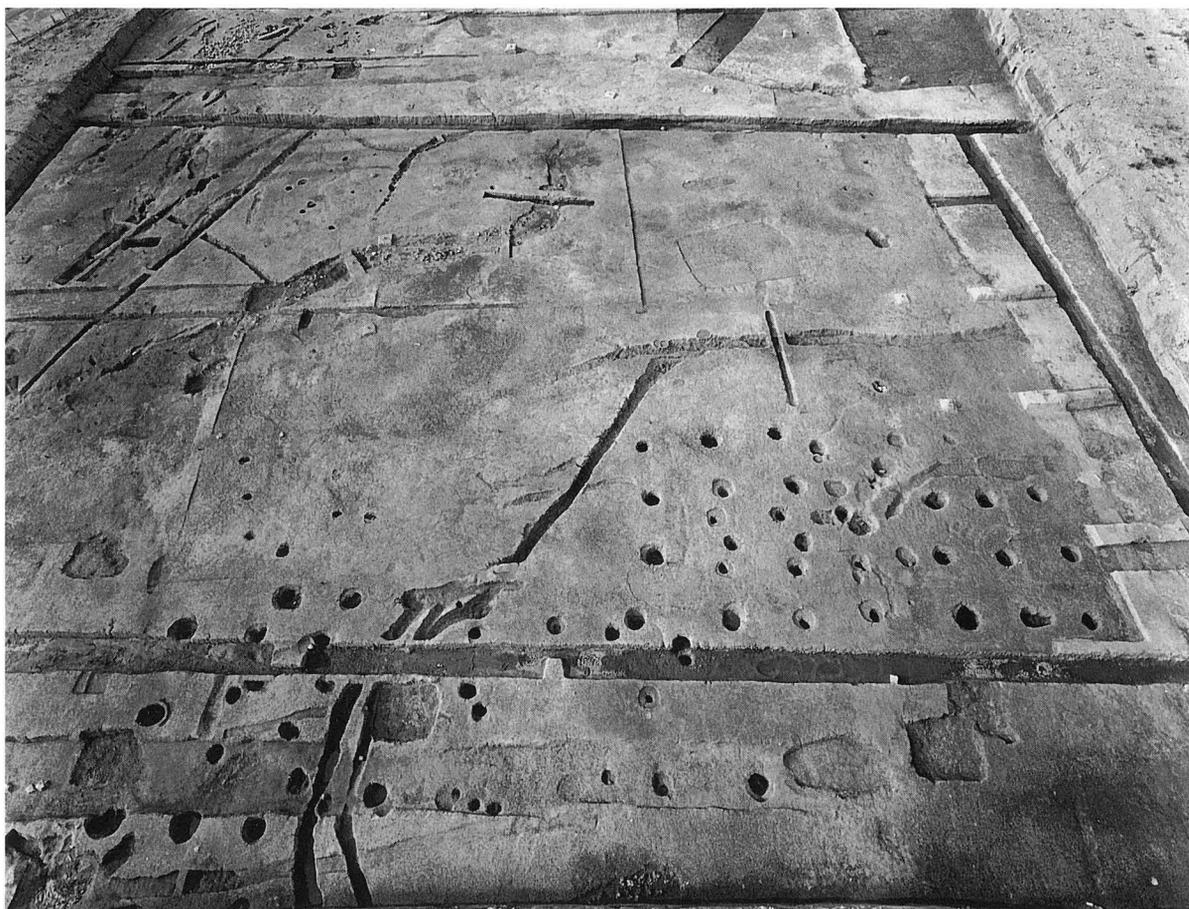
SB 4 (SD10) 完掘状況 (北西より)



SK 1 遺物出土状況 (北東より)



P62遺物出土状況（北東より）



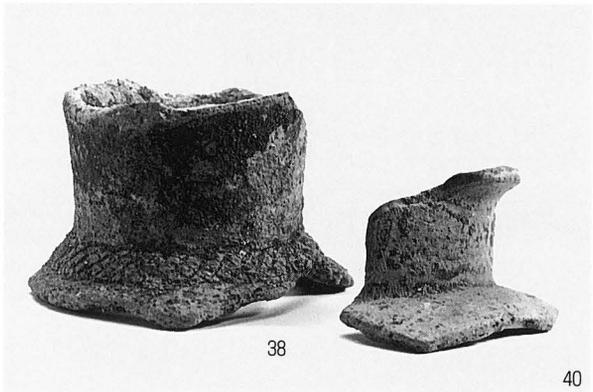
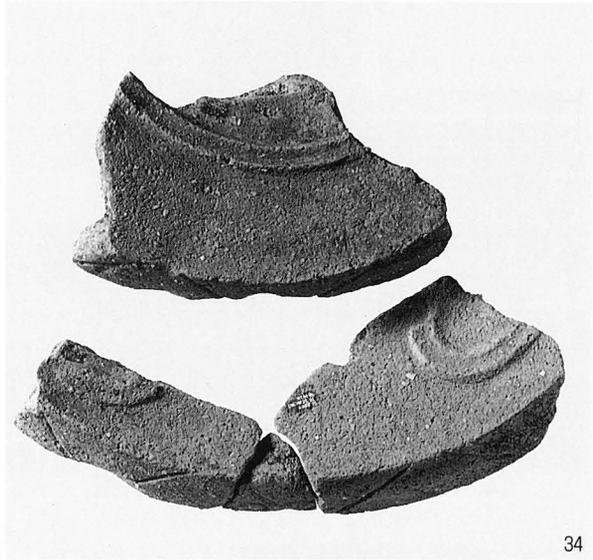
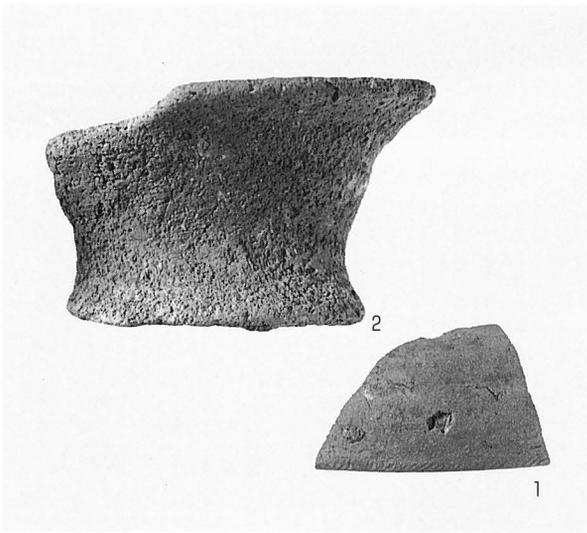
掘立柱建物群完掘状況（南より）



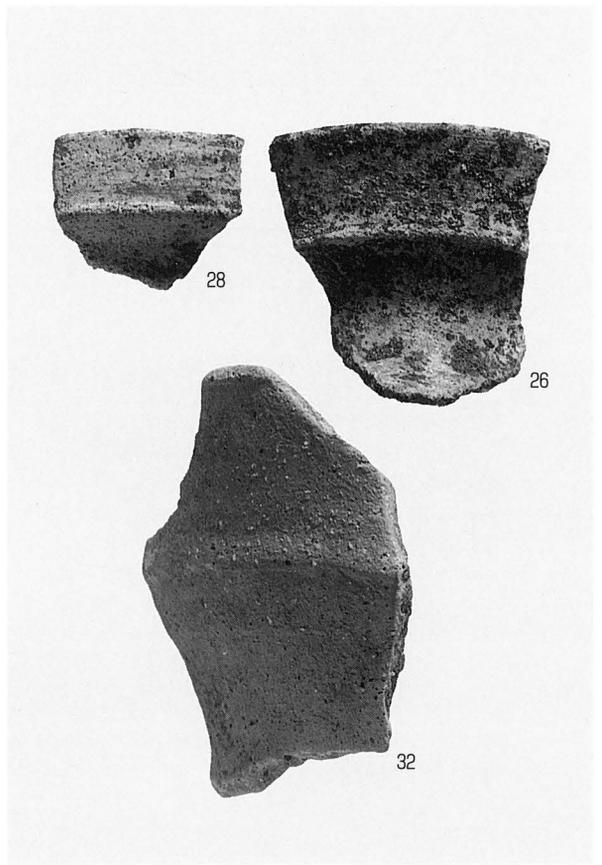
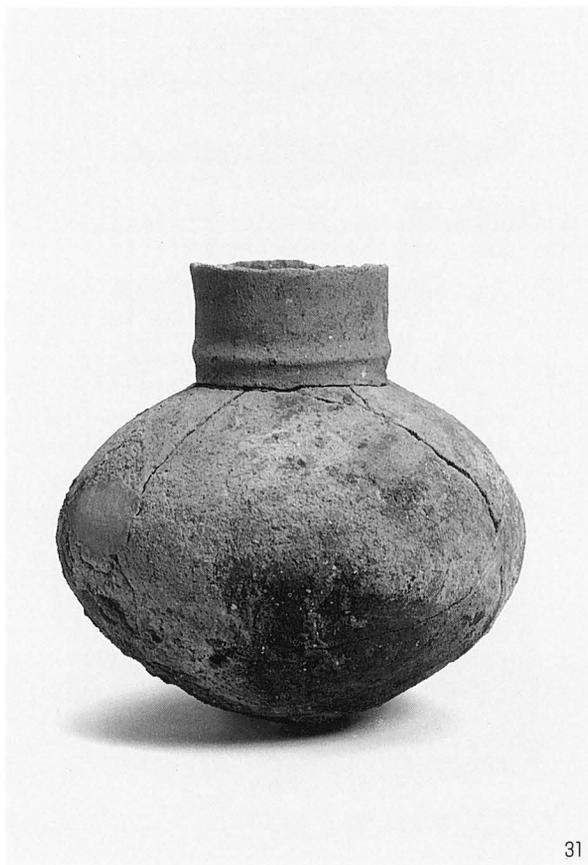
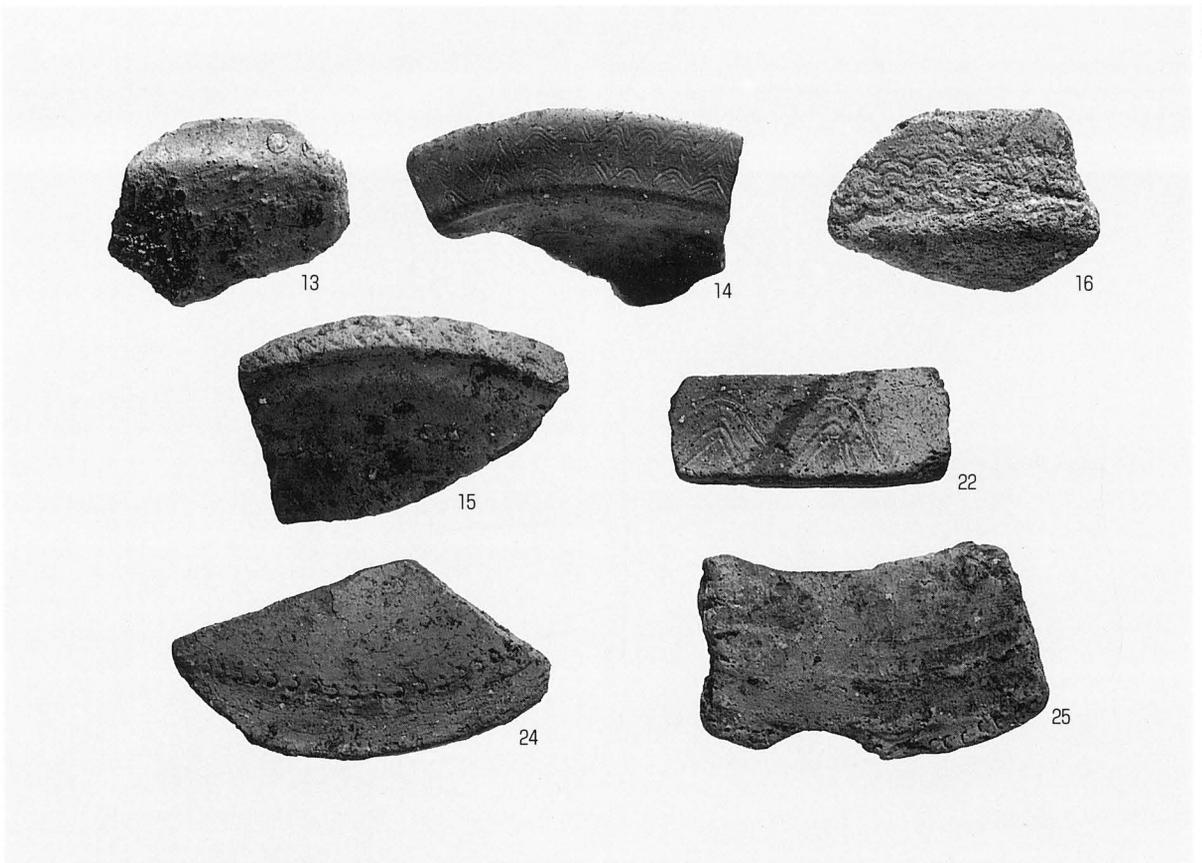
S R 5 完掘状況 (北より)



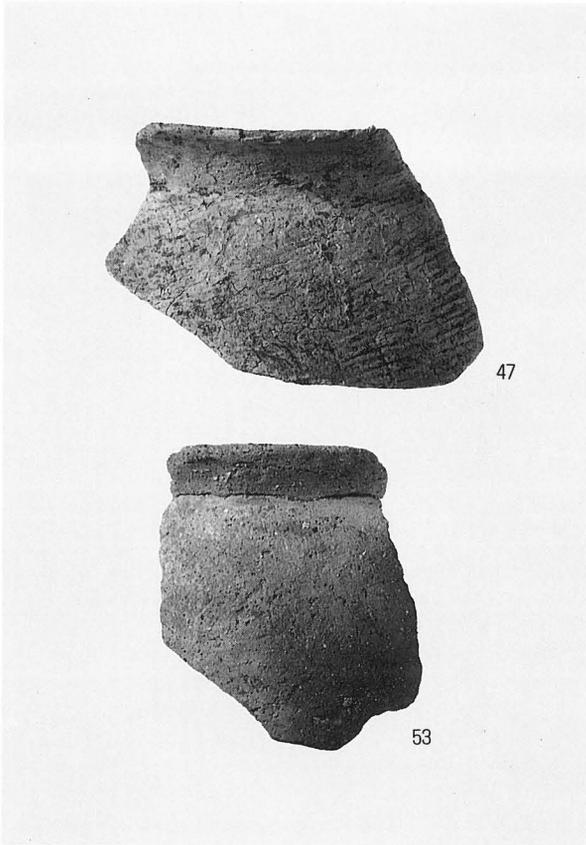
水田完掘状況 (南より)



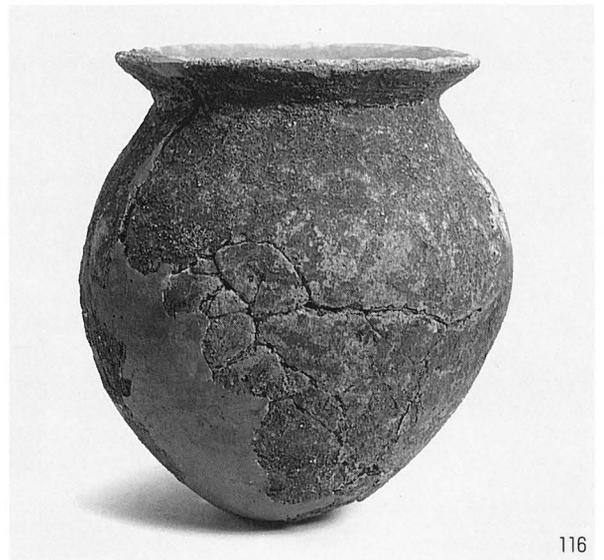
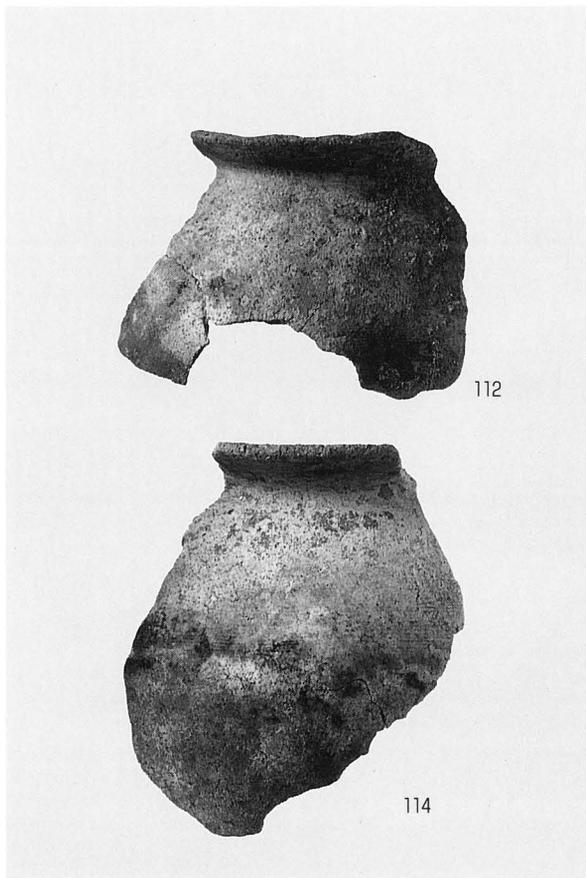
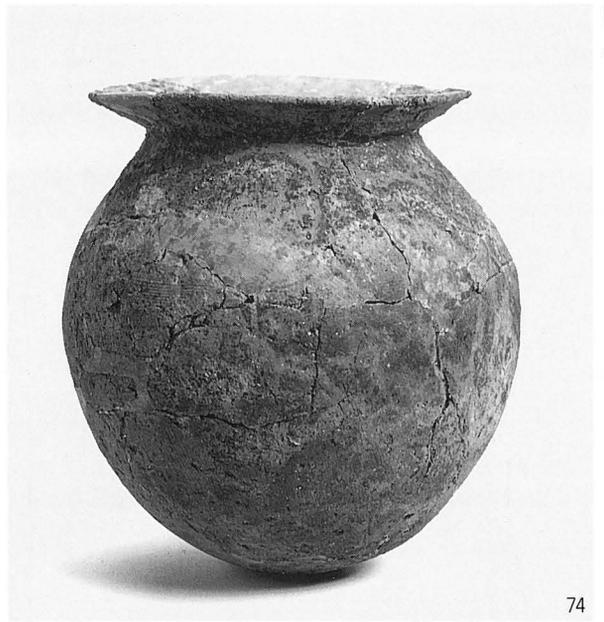
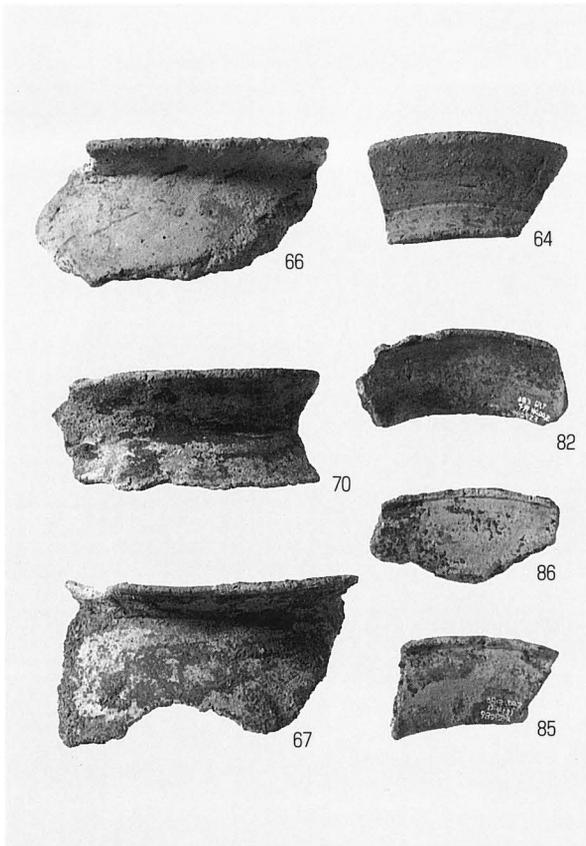
SR 7 出土遺物 (1)



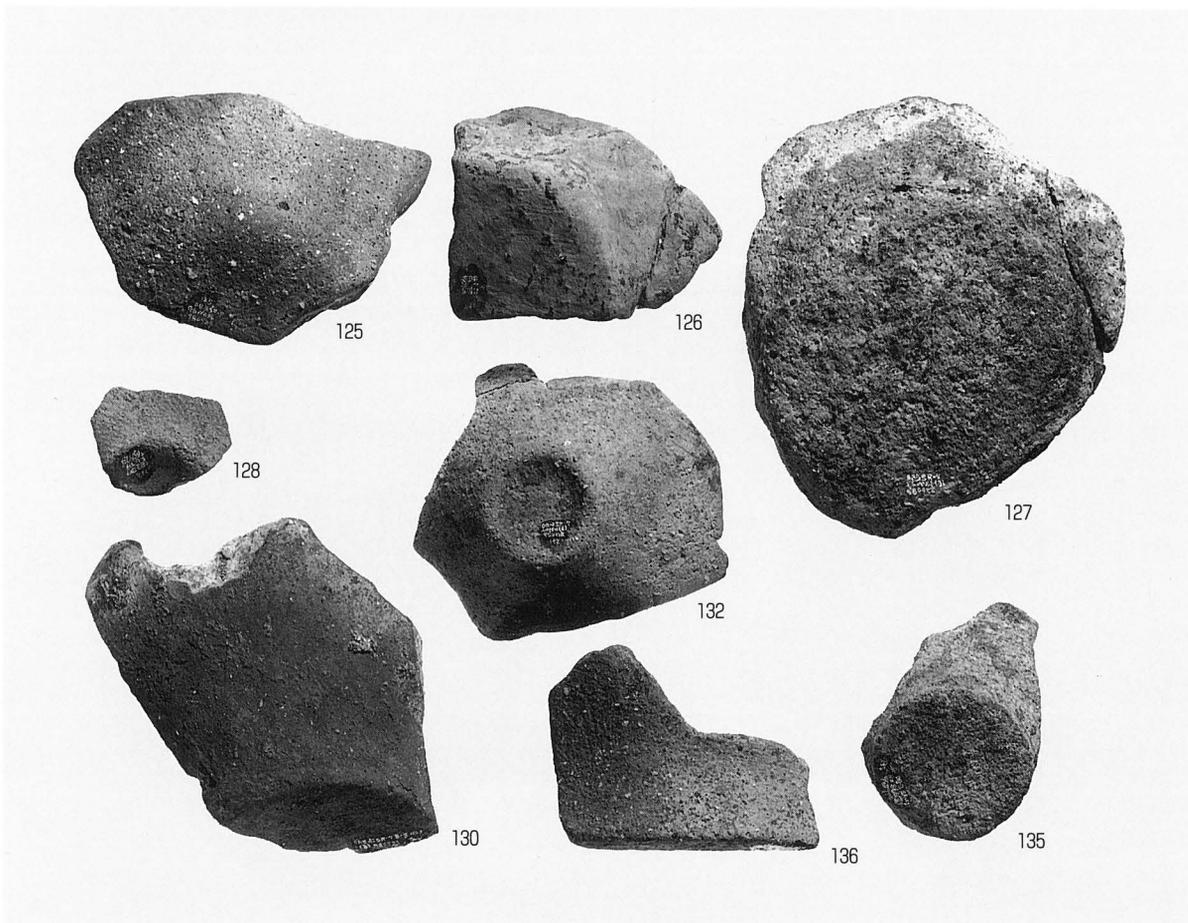
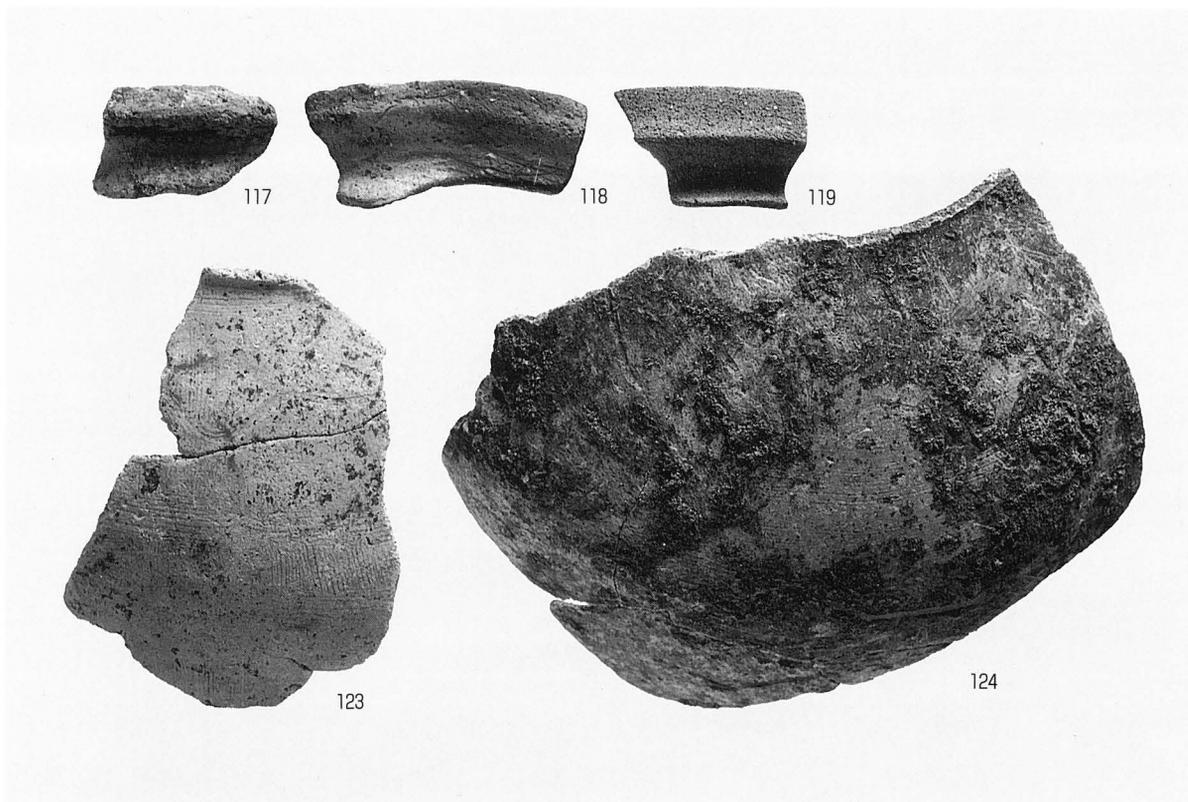
SR 7 出土遺物 (2)



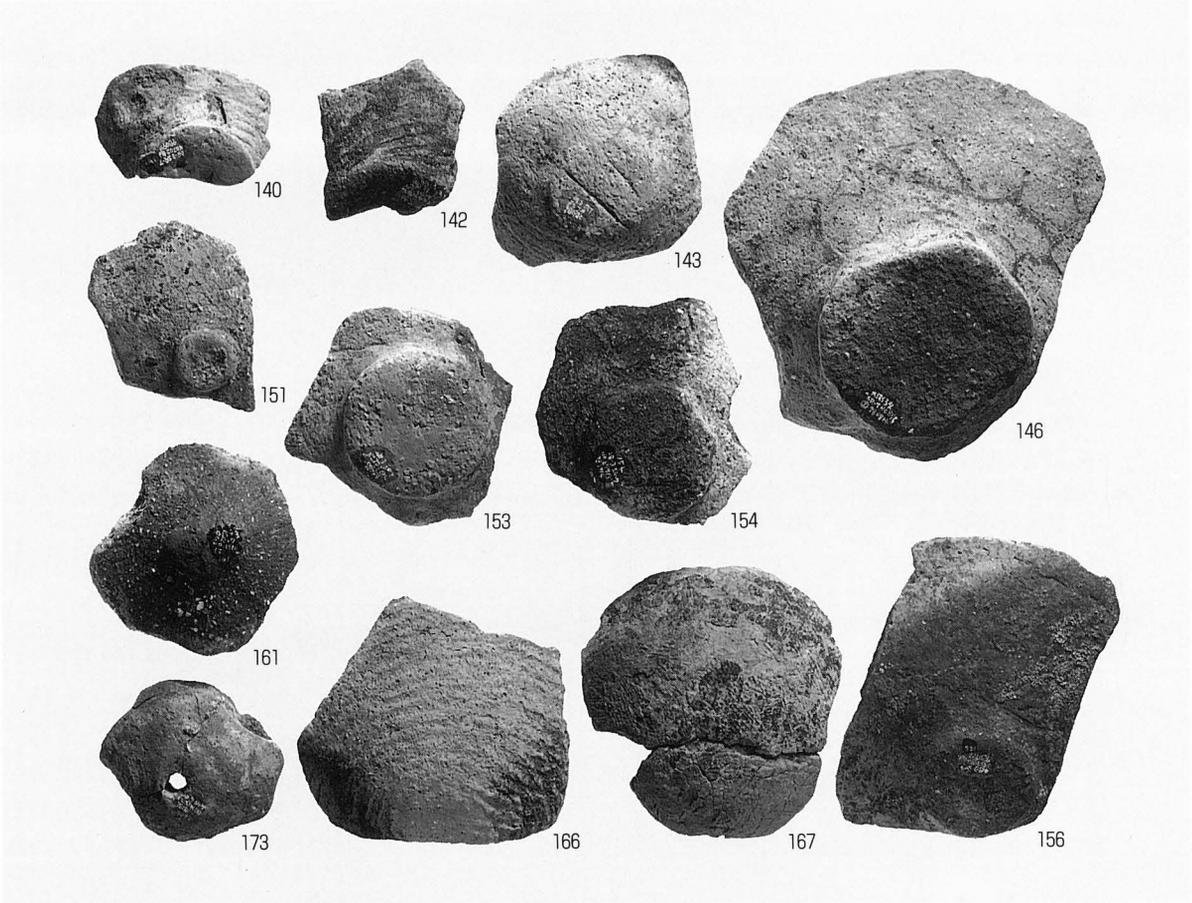
S R 7 出土遺物 (3)



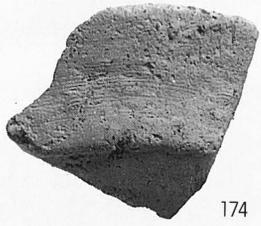
S R 7 出土遺物 (4)



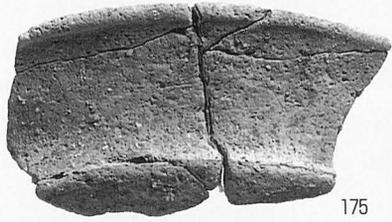
S R 7 出土遺物 (5)



S R 7 出土遺物 (6)



174



175



187



192



191



193

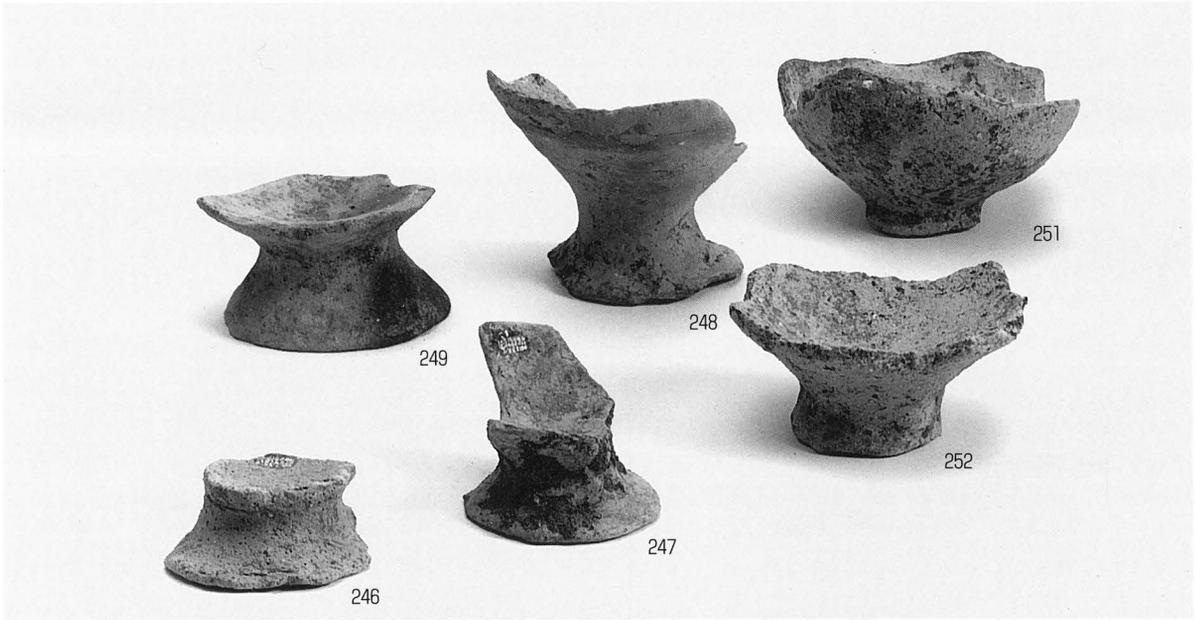


197



S R 7 出土遺物 (8)





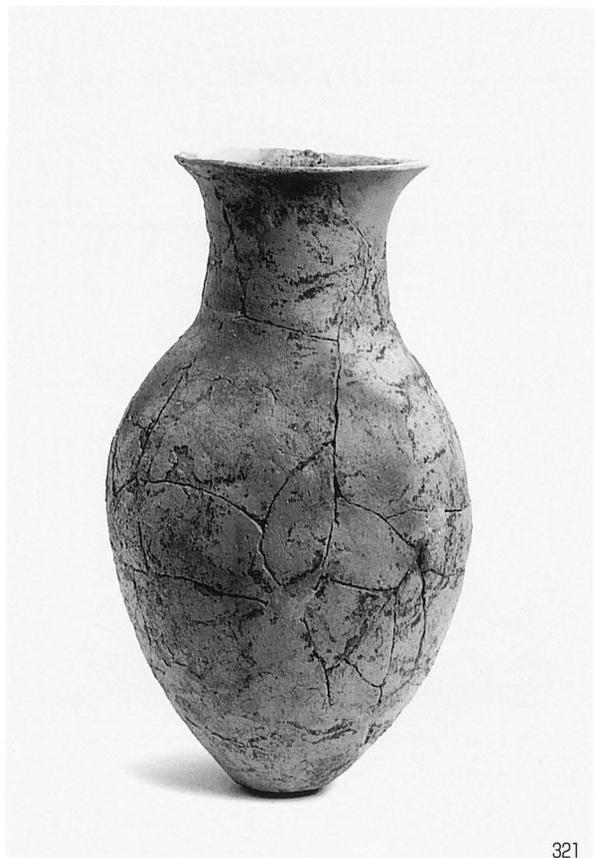
S R 7 出土遺物 (10)



300

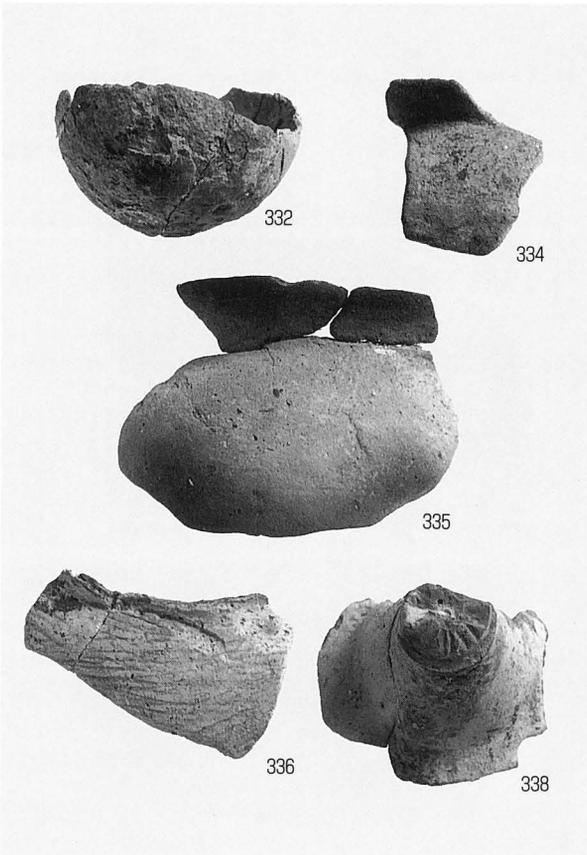


315



321

S R 7 出土遺物 (11) (300・315)・S R 7 側壁中出土遺物 (321)



土器溜まり出土遺物 (331)・S B 1 出土遺物 (332・334~338)・S B 3 出土遺物 (342・345・346)



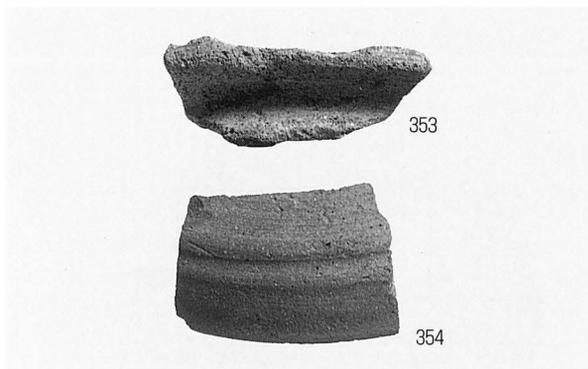
347



352



350



353

354



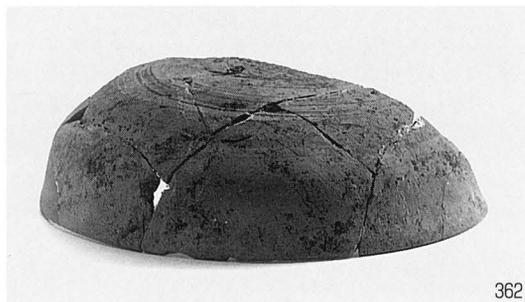
359



360



364

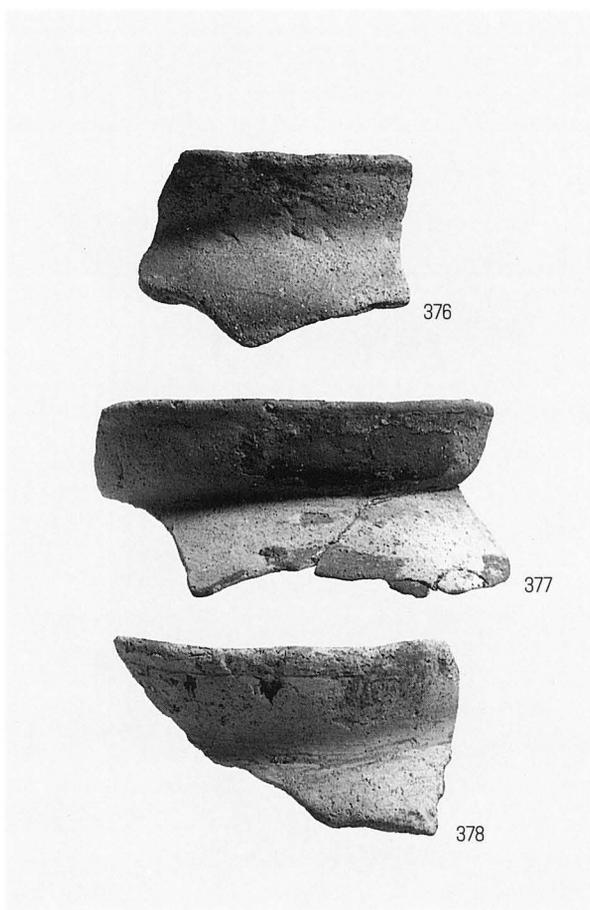


362

S D 4 出土遺物 (347)・P 62出土遺物 (352)・S K 1 出土遺物 (350)
掘立柱建物出土遺物 (353・354・359・360)・S K 2 出土遺物 (362・364)



S D 1 出土遺物

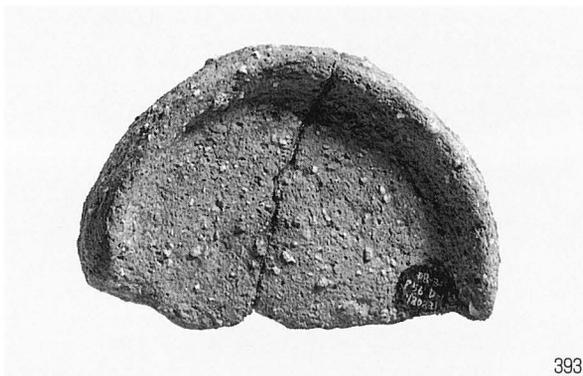


S D 2 出土遺物



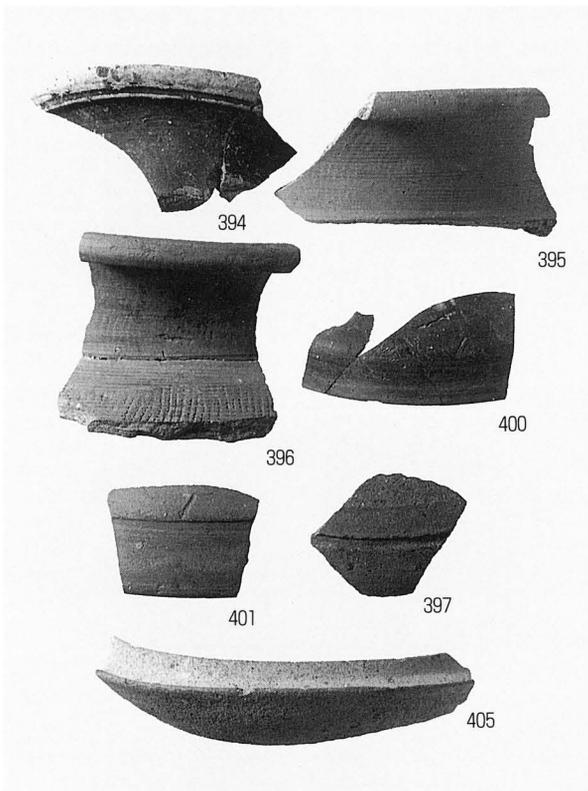
389

S D 9 出土遺物



393

P 56 出土遺物



394

395

396

400

401

397

405



406



407

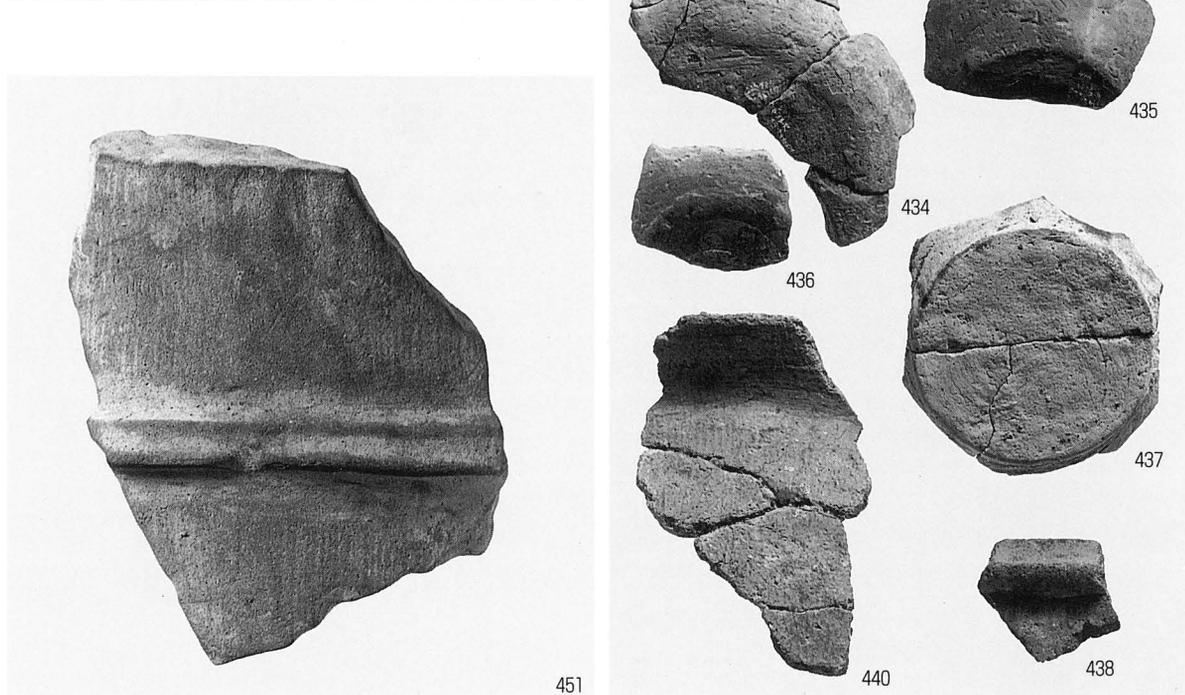
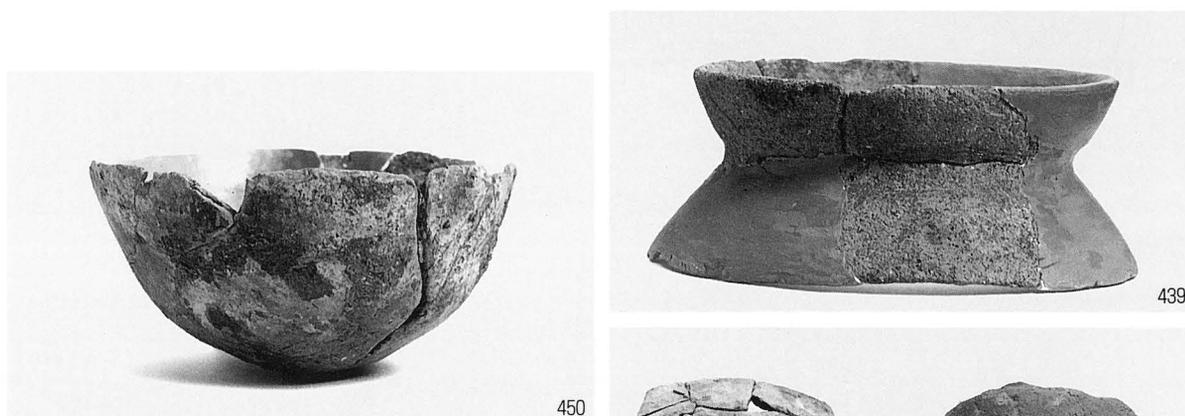
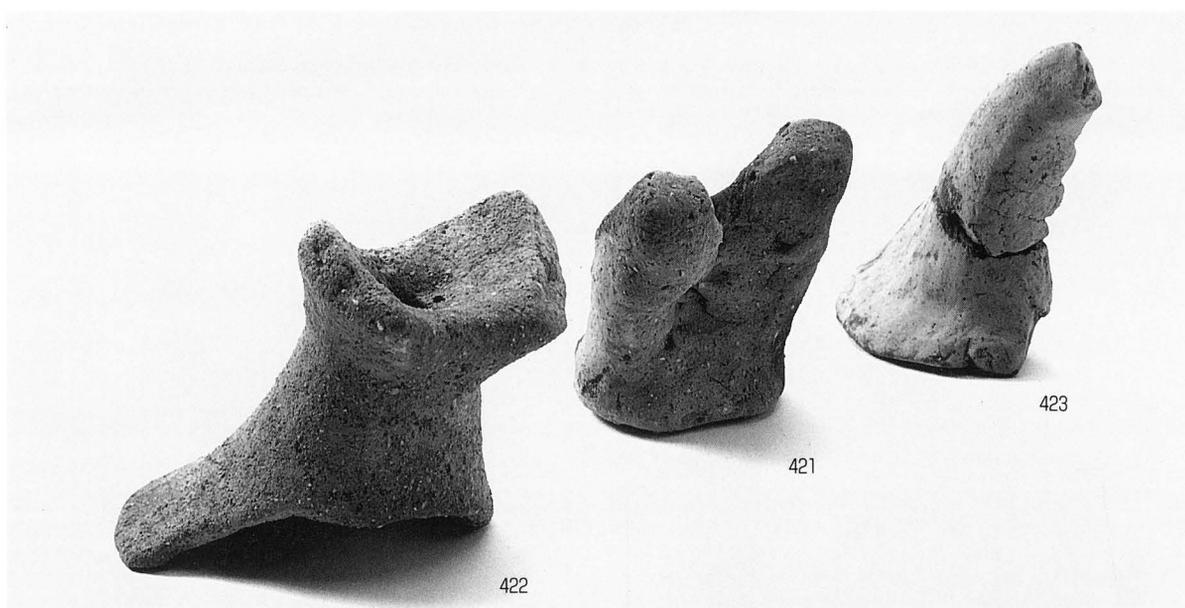


416

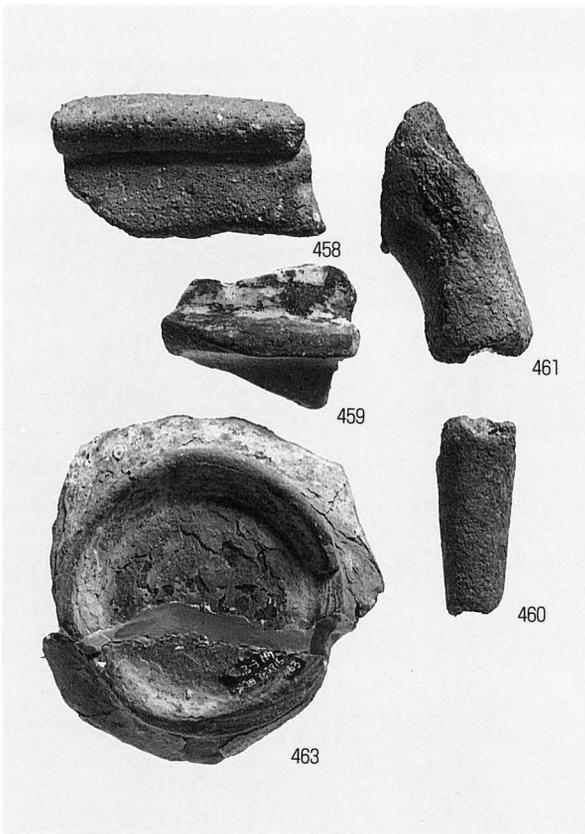
S R 15 出土遺物 (1)



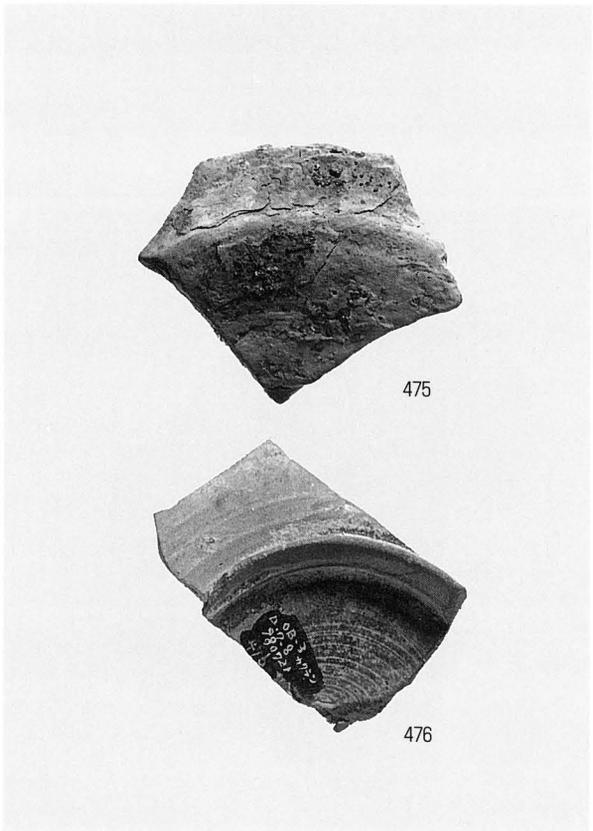
420



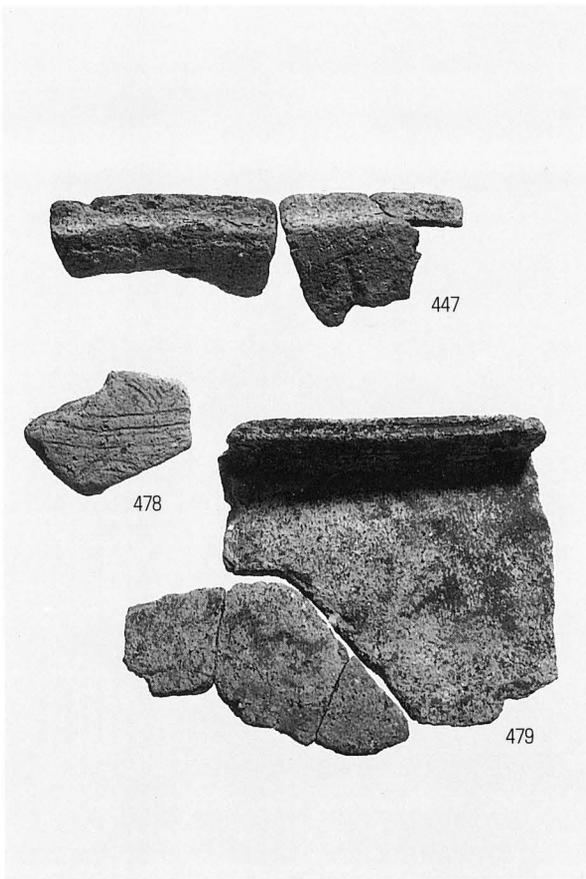
S R 15出土遺物 (2) (421~423) ・ S R 2 出土遺物 (450) ・ S R 4 出土遺物 (451)
S R 6 出土遺物 (434~440)



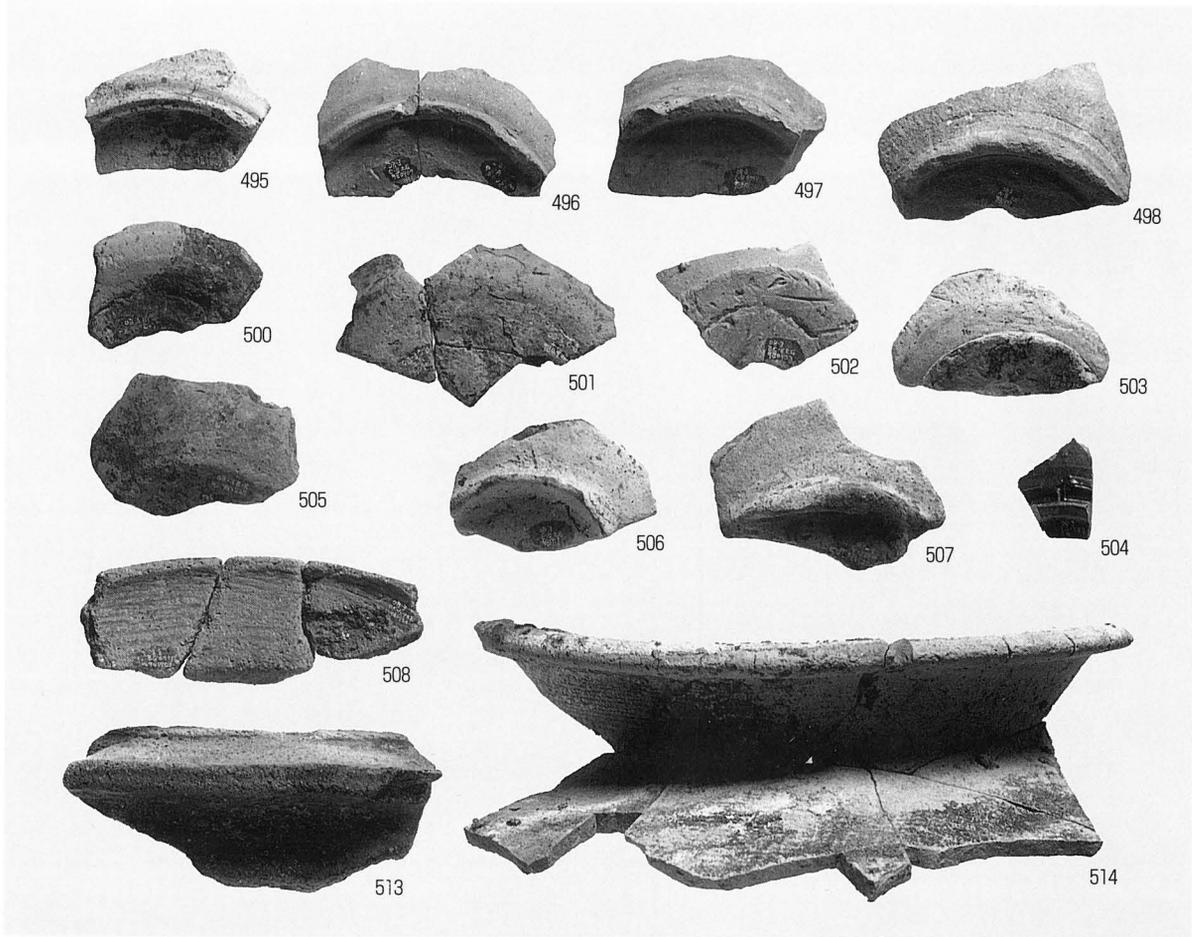
水田出土遺物



S X 出土遺物



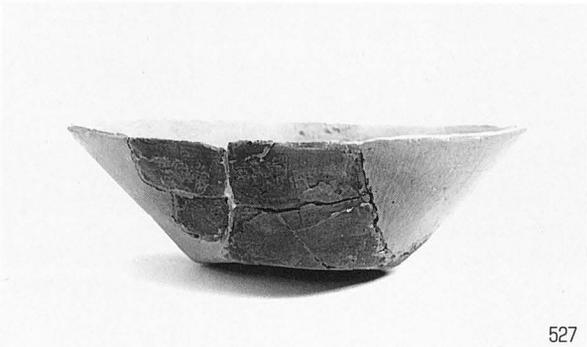
第VI層出土遺物(1)



第Ⅵ層出土遺物(2)



517

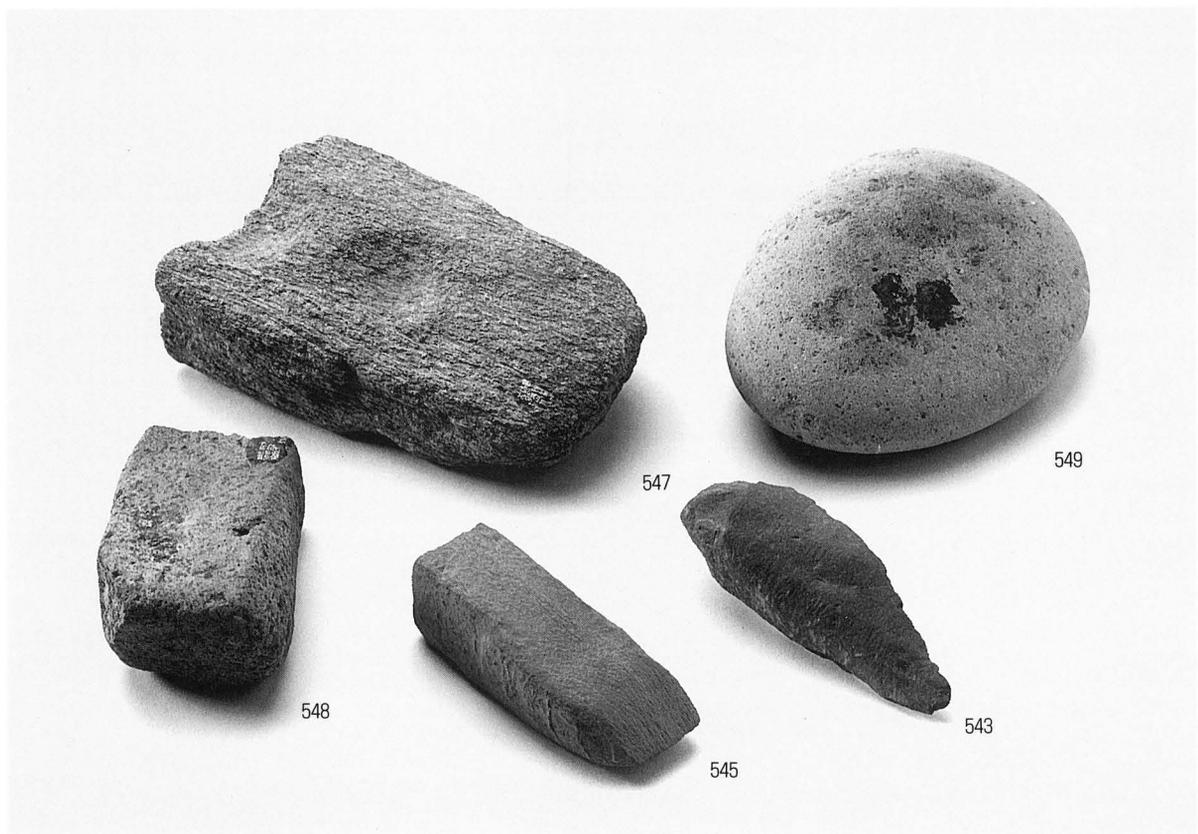
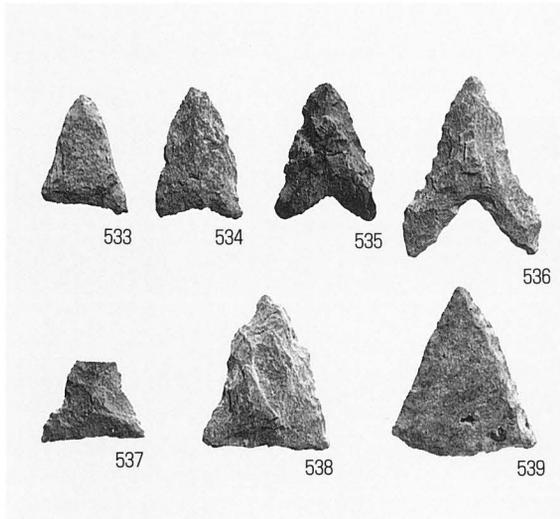
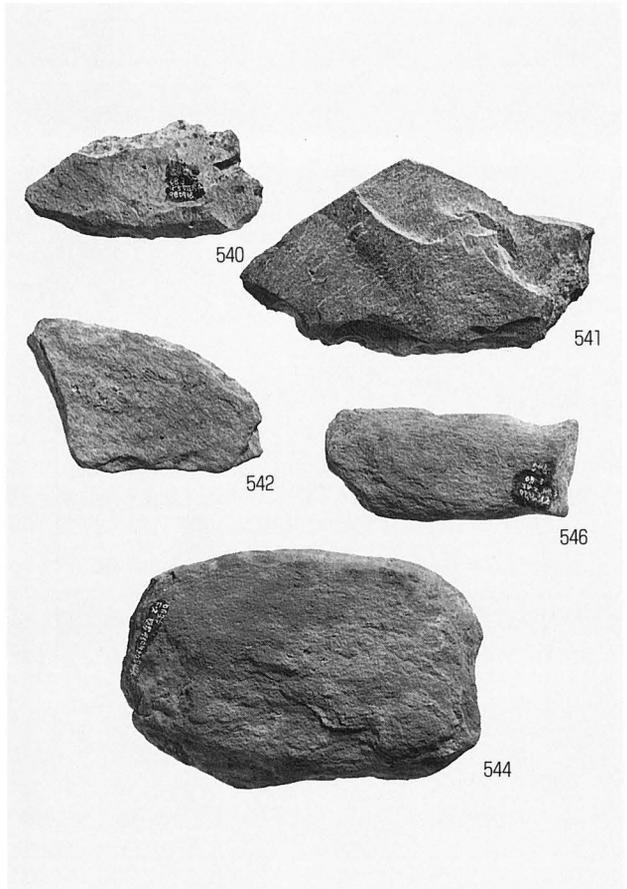


527



520

トレンチ内出土遺物



調査地出土鉄器及び出土石器

報 告 書 抄 録

ふりがな	おおぶちいせき							
書名	大 測 遺 跡 — 3 次 調 査 —							
副書名								
巻次								
シリーズ名	松山市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第78集							
編著者名	吉 岡 和 哉							
編集機関	松山市教育委員会 財団法人 松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター							
所在地	〒790-0003 松山市三番町6丁目6-1 TEL089-948-6605 〒791-8032 松山市南斎院町乙67-6 TEL089-923-6363							
発行年月日	西暦2000年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おおぶちいせき 大 測 遺 跡 3次調査	まつやましたいさんじちよう 松山市太山寺町	38201	334	33°52'31"	132°44'15"	19980401~ 19980930	34,159	市営団地 建て替え
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺溝		主な遺物		特記事項	
大 測 遺 跡 3次調査	集落関連	古墳 中世	竪穴式住居址 掘立柱建物跡 自然流路 溝 土坑 水田		土師器、須恵器 羽釜、青磁		古墳時代前期及び後期の 集落跡	

松山市文化財調査報告書 第78集

大 瀕 遺 跡 — 3次調査 —

平成12年 3月31日 発行

編 集 松 山 市 教 育 委 員 会

発 行 〒790-0003 松山市三番町 6丁目 6-1
TEL (089) 948-6605

財団法人 松山市生涯学習振興財団

埋 蔵 文 化 財 セ ン タ ー

〒791-8032 松山市南斎院町乙67番地 6
TEL (089) 923-6363

印 刷 岡 田 印 刷 株 式 会 社

〒790-0012 松山市湊町 7丁目 1-8
TEL (089) 941-9111
